みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

資料編：
家庭の食事にかんするライフ・ヒストリー調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 忠司, 熊倉, 功夫, 芳井, 敬郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003589

Ⅳ　資　　料　　編

1　家庭の食事にかんするライフ・ヒストリー調査

井上　忠司・熊倉　功夫・芳井　敬郎

調査者　No. 2 (m)	調査日　昭和58年 7 月23日(土曜日)
被調査者　M. Y.　　性別　f	出生年　明治28年(88歳)(第 5 子)
出生地　兵庫県神戸市長田区N町	
生家の職業　農業	
現住所　兵庫県神戸市長田区K町	
住所の変更とその年度　神戸市長田区N町—中央区N町(大 6)—中央区K町(大 7)—長田区K町(大12)	
最終学歴　S高等女学校	結婚　大正 6 年(23歳)
被調査者との関係　母方の祖母の兄嫁	

1．箱膳の時期（～大正 2 年〔1913〕，神戸市長田区N町）

A．めいめいに箱膳があってな，その箱膳にはふたがあって，そのふたを取って，その上にお茶わん，箸，小皿なんか出しよって食べたなぁ。でもうちが百姓やさかい，お昼は，あがり口に腰掛けてお茶漬さらさらやった。普通は箱膳なんて言わへんで，「お膳，出し」って言いよった。お膳って言うただけでわかったさかいな。そしてその箱膳は，たしか大正 2 年ぐらいまでやわ。その時分，家にいたのは，両親と，兄が二人と（一番上の姉は，私が子供の時分には，もうお嫁に行って片づいていたやろなぁ。大分，年が離れていたさかい。）そして二番目の姉と，私で計 6 人やったやろなぁ。その時期の住所は，今で言えば神戸市長田区N町で，当時はN村って言うてな，農漁村やった。

　食事の形式が箱膳からちゃぶ台にかわったのは，そうやなぁ，親の代から兄の代に代わったさかいやろか。大正 2 年に母が亡くなって，兄嫁さんが炊事をするようになったからなぁ。なんせ兄嫁さんは，しっかりしていたから。

B．食事をする部屋？　そやなあ，茶の間とは言わなんだしなぁ，やっぱり台所やなぁ。そして台所では，食事以外なんもせえへんだ。大きさはなぁ，さぁ，細長くてなぁ，畳敷きで板の間もあって，まぁ 6 畳ぐらいやろか。その部屋にはなぁ，「膳戸棚」と言って，半間ぐらいの幅の開きがあって，開きの中の棚に箱膳を入れたなぁ。その他に，土間に，どない言ったらええのかなぁ，今の茶棚みたいなものがあって，そこに他のものを入れたりしよったよ。水屋？水屋なんか，そんなものなかったでぇ。百姓の家でそんなもん買うかいなぁ。ああ，それから，へっついさんがあって，今で言うかまどやなぁ，そして漬物の樽，その裏の障子をあけて，その外に井戸があって流しがあった。田舎の，大昔の家やさかいなぁ，こんなこと言ってあんたにわかるかなぁ。

C．座席の順番はなぁ，上座の右側から，まず父，長兄，次兄とすわって，向い合わせるようにして，下座の右側から，姉，私とすわって，母が給仕をするさかい，台所に一番近いところに母がすわっていたわ。（図 1 参照）みんなそろって食べましたわ。座ぶとんねぇ……，念頭になかったなぁ，とにかく座ぶとんは，お客さんのもんやと思ってたさかい，普通はひかへんかった。

D．朝は，みそ汁。うちは百姓やったさかい，それを憶えておいてくれへんかったらあかんでぇ。そして漬もんぐらい。昼は，お茶漬けぐらいやないのぉ。晩は，この辺ならせいぜい，鰯の煮付けか，いかなごの炊いたのか，それと野菜の煮物が多いなぁ。「晩のおかずに，田んぼ行ってあれ取ってこうか」っちゅうようなもんや。また，浜の方から網を引き上げる声が，家までよう聞こえよった。そのたびに鰯やいかなごをようもらいに行ったわ。

父も兄も酒を飲まへんやったからなぁ，特別に違ったものを食べるということはなくてみんな同じものを食べよった。

E．給仕は，母がやって，ご飯が炊けたらふたを取って，まず神仏へお供えをして，それから父，長兄，次兄，姉，私，そして母とよそった。

F．お茶を飲んで，それからお茶で茶碗をゆすいで，ふたをする。出したり，片づけたりするのは，母親やなぁ。

時計は当時あったけどな，だいたい，田んぼへ行っていつ帰るということは，およそわかるわいな。長年の習慣でな。だから，あの田んぼのあの仕事なら，これぐらいに帰ると思うたらな，家のものがその時期にあうように食事をこしらえといて，そして田んぼから帰ってきて手をあろうたりしてる間に，もうちゃんとご飯が食べられるようにしとくの。それ式やったよ。

G．箱膳やったさかい，共用の食器ちゅうもんはなかったわ。箸箱はなくて，箸は箱膳の中にそのまま入っていた。

H．箸の上げ下ろしは，あまり言わなかったなぁ。もう当り前のことだから……。食べる順序は，まずお汁を一口吸って，口をしめらすわけや，それからご飯とおかずを食べたなぁ。食事中のおしゃべりは行儀悪く，「黙って食べなはれ」と言われたなぁ。食事中は正座して食べたよ。父も，兄も酒を飲まなかったさかい，あぐら組んで食べへんかったよ。全員が正座やわ。

また皿に入れてもらったものを残す，すると「なんで残すねん，行儀悪い」と言われる。そやさかい，入れてもらった時にも好き嫌いを言うたらあかんねん。私，なすび嫌いでなぁ，それがいやでなぁ，つらかったわぁ。

I．食べはじめは，何も言わず手を合わせてから食べる。「いただきます」なんて言えへんなんだ。食べ終わりは，同じく手を合わせて「ごっつぉさん」やった。

2．ちゃぶ台の時期Ⅰ（娘時代，大正2年～大正6年〔1913～1917〕，神戸市長田区N町）

A．私がおった時分にはちゃぶ台とは言わへんかったなぁ。やっぱり「お膳」って。お膳だけでわかるさかいなぁ。ちゃぶ台は，大正2年頃から，結婚して家を出ていくまであった。その時期には，戸主はもう兄貴で，父はおったけどね。息子に家を任せて隠居さんになっていたわ。そやさかい家には，父と，兄さん夫婦と……姉は病死して，二番目の兄貴は嫁さんもろうて別居したから……私とで4人やったなぁ。その頃もN町は田んぼが多くて，農村やった。ボチボチ，商店なんかも建ち始めたけどなぁ。その時期の兄貴は会社員で，当時そこは電燈会社って言うておったよ。今で言うたらなぁ，さぁ，電力会社違うの？

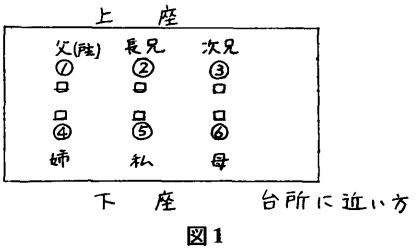


図1

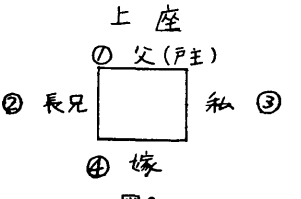


図2

B．台所は，箱膳の時期と同じ。ただ，水屋はあった。

C．上座には父か，兄か，どっちがすわったやろか。隠居していたけど，やっぱり父が上座だったと思うけどなぁ。そして次に，兄貴と私がすわって，下座に兄嫁さんがすわったわ。（図2参照）

D．食事も前と変わってないわ。

E．兄嫁さんがよそって，箱膳の時期と同じでまず神仏へのお供えをし，それから，父，兄貴，私，そして兄嫁とよそった。

F．食べ終わった後，箸はゆすいだなぁ。兄嫁が食器をさげて洗ったわ。そして洗った食器は水屋にしまいよったわ。

G．ちゃぶ台の時期になっても私の里では，おかずはめいめいの皿に入れたわ。箸箱はどないやったか？　あったなぁ。

H．代が代わっても変わらへんかったわ。おしゃべりも兄貴は，「行儀悪い」って言うてはった。

3．ちゃぶ台の時期Ⅱ（嫁時代，大正6年〔1917〕，神戸市中央区N町）

A．丸いお膳やったなぁ。ちゃぶ台もお膳って言うとった。M家に来た（嫁に来た）時からちゃぶ台やったなぁ。そして今でもちゃぶ台や。その時期の家には，舅さんと，主人と義弟と，義妹と，そして私の5人やったなぁ。この義妹が，あんたのおばあちゃんや。大正6年当時のN町は，まだ農村やったなぁ。近くには，広い，広いブドウ園があったわ。舅さんは，ある協会の常任理事をやってた人でな，もうほんとに恐かったでぇ。そして主人も貿易関係の仕事をやってたわ。

B．N町の家の食事するところ，どう言ってたかなぁ？　台所やなぁ。食事以外にはなんも使わへんかった。大きさは，6畳ぐらいで水屋はあったやろなぁ。けど，N町の方は一年ぐらいしかおらへんかったからハッキリ憶えておらんわ。

C．上座に舅がすわって，次に主人，義弟，義妹，そして下座が私やったなぁ。（図3参照）みんなそろって食べたって言うたかって五人だけやった。食べたところは畳やった。

D．食事のおかずは，朝，昼，晩とも里の家と一緒。食事を作るのは私やさかい。舅さんは，もう「食べなぁ，食べなぁ」と言うての方やったさかいなぁ，別段私と舅さんと違ったもんを食べたということはせえへんだ。そのかわり，酒の肴だけは別やったけどな。舅さんは，晩しゃくはしよっとった。

E．ご飯をよそうのは私で，まず神仏へお供えしてから舅さん，主人，義弟，義妹，そして私の順によそったわ。

F．食事を，さげたり，運んだり，また洗ったりしたのは私やったけど……。そやけどな，中央区N町にいた時は，お手伝いさんがおって，私が慣れるまでおったわ。洗った食器は，水屋へしもうた。

G．共用の食器なあ，どうやったやろか。やっぱり，それぞれの皿に取っておいて食べたんちがうか。箸箱？　それは別々にありましたわ。そして今でもあるわ，めいめいに箸箱が……。

H．食事中の作法はなぁ，里にいる時と変わらへんかった。食事中のおしゃべりはなぁ……なんせ，舅さんは恐かったもん。そりゃ，ご飯食べる時は，あの里にいる時から「黙って食え」ってよく言われたさかいなぁ。

I．食事のあいさつも，里にいる時と変われへんかったわ。食べはじめる時は，手を合わせるし，食べ終わりは，手を合わせて「ごっつぉさん」や。

4．現在の時期（昭和58年〔1983〕，神戸市長田区K町）

A．今でもちゃぶ台や。丸っこいお膳やなぁ。座席の位置は……。勝手口に近い方にお母さん（息

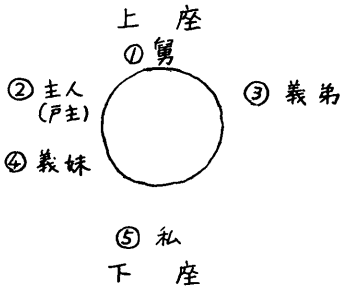


図3

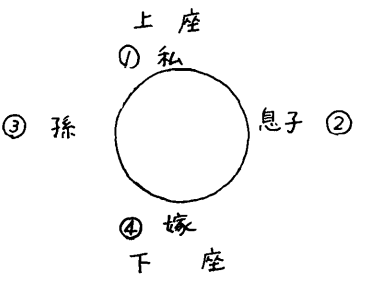


図4

子の嫁)，けっきょく下座や。それから，今のところ上座は私になっているわ。それから私の左がな，お父ちゃん（息子)。それから右がな，娘（孫)。男の子（孫）が左側（図4参照)。でも会社務めで，土曜の晩にしか帰ってこんさかいなぁ。もうここらへんは，住宅地やなぁ。息子は，会社員。

B．茶の間やなぁ。6畳の広さで，食事以外の使い方って言ったら，まぁ，多目的やなぁ。調度品は，タンスとかテレビとか，まぁよそさんと同じようなもんやわぁ。

E．お母さん（息子の嫁）がよそって……。よそう順序は，やっぱり，私，お父さん（息子)，娘（孫)，そしてお母さんや。

F．もう湯茶でゆすぐってことはないなぁ。今は，お母さんと娘で，食器をさげたり，運んだり，そして洗ったりしているわ。洗った食器は，食器戸棚へしもうとる。

H．もう娘（孫）も大きいさかいなぁ。食事中の作法については何も言わへんわ。おしゃべり？今はしゃべってもええよ。姿勢はな，正座や。お父さん（息子）はあぐらをかくけどなぁ。

I．食事のあいさつは，「いただきます」「ごっつぉさん」や。

J．やっぱり娘やなぁ。話題か？　まぁいろんなこと話しているけどなぁ。

調査者　No. 3（f）	調査日　昭和58年8月28日(日曜日)
被調査者　Y.I.　性別　f	出生年　大正2年(70歳)(第3子)
出生地　兵庫県宍粟郡Y町	
生家の職業　農業	
現住所　兵庫県姫路市K区	
住所の変更とその年度　宍粟郡Y町—姫路市K区(昭26)	
最終学歴　尋常高等小学校，裁縫学校	結婚　昭和10年(23歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期

A．使用時は上ぶたをひっくり返し，箱の中に入っている食器をそこに並べる。

これを「箱膳」と呼んでいた（図5)。Iさんが生まれた時から満10才くらいまで続いていた。家族構成は，祖父，父，母，兄2人，弟2人，Iさん，妹1人の9人家族。住所は，兵庫県宍粟郡Z村で，農村であった。戸主は農業（専業）を営んでいた。食事の形式は変化していない。

B．食事をする部屋は「ダイドコ」と呼び，食事及びその準備に使用していた。6畳間で箱膳を入れておく戸棚と，少し下がった所に「おくどさん」と「水がめ」があった。当時水道はなく，井戸の水を，夕方くんでいた。「おくどさん」とは「かまど」のことである。他には，何もな

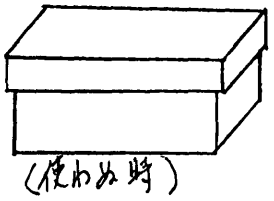


図5

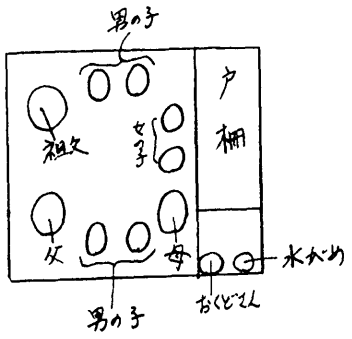


図6

かった。

C．男の子や女の子が年齢の順に座っていたかどうかは，記憶にないとのこと（図6）。食事は皆んなそろって，特に祖父が来るまでは絶対始まらなかった。タタミの間で，全員同じ種類の座ぶとんを使用していた。

D．朝，じゃがいもや玉ねぎなど畑でとれるものを具としたみそ汁に，つけ物。客のある時のみ，豆腐（おとふ）が入っていた。昼はなっぱやいもを炊いたもの。夜は昼と同じものか，ごくまれに干物があった。おかずには変化はないが，ご飯に差があった。祖父と小学校までの子供（男女差なし）には必ず白いご飯で，あとは麦ご飯を食べていた。これには理由があり，祖母が若くして亡くなり，男手で苦労して子供を育てたため，皆んなが，祖父のことを大事にしているということだ。

E．おもに母がよそっていた。だから炊事場近くに母が座っていた。よそう順は，祖父，父，男の子，女の子，最後に母の順であった。神仏へは，白いご飯のみ，1日1回，炊いた時に供えていた。酒をのまぬ祖父，父だったため，晩しゃくはなかった。

F．食べ終わった後すぐ湯で茶わんとはしをすすぎ，ふきん（各自の）でふき，箱に入れてしまった。これらの食器は，1週間に1度，母が洗っていた。みそ汁のわんや皿は母が食事後にさげて洗った。これらは戸棚の上にしまった。箱膳は戸棚の下に，これも母がしまった。

G．共用の食器は，汁わん，大皿，小皿，で，大皿には，いもやたけのこ，小皿には，つけ物が盛られていた。はし箱はなかった。

H．箸の上げ下ろしについては，厳しくしつけられていて，一般にいけないとされている「ねぶりばし」「さしばし」「さぐりばし」「寄せばし」などは勿論，汁を飲む時には箸を置くようにということまで注意されていた。食べる順は，まずご飯を食べ，次にみそ汁をのみ，おかずを食べる。とにかく間にご飯を入れるように言われていた。特に必要なこと以外のおしゃべりは禁じられていた。特に口の中に食べ物が入っている状態で，しゃべることはいけないとされていた。食事中は正座をして，背筋をのばしてという姿勢だった。その他，食事中にしてはならなかったことは，ちょうず（便所）に立ってはならない，めしつぶをこぼしてはならない，食べ物を残してはならない，ということである。

I．食べはじめは，何もあいさつはしなかった。祖父が箸をつけてから，他の者は食べたということである。食べ終わりは，「ごちそうさん」と終わった者から言って箸と茶わんをすすいだ。すすいだ後の湯は飲んだということである。

J．食事中のおしゃべりは，原則的にいけないとされていたが，必要なこと，たとえば仕事に関

すること（肥料のことや草取り）や，子供達の学校に関することは，時々話題としてのぼった。おもに話している人は特になく，それぞれが順などなしに必要な時に話していた。

この時期のことで，ひとつ抜けていることをここでつけ加えておく。ご飯のかわりに，くず米をひいて粉にし，それをこねて丸い団子にし，みそ汁に入れて食べたこともよくあったそうである。みそ汁の具として以外では，中にあんこをつめて焼いたり，よもぎを混ぜてたべたりしたそうである。ただし祖父のみは，他の皆んなが団子を食べている時にも，必ず白いご飯を食べていたということである。

2．ちゃぶ台の時期

A．これを「しっぷく台」と呼んでいた（図7）。これはIさんが満10～11才の頃から結婚するまで続いていた（とは言ってもこれはIさんにとってのことで，結婚後も実家の方では長くこれを使用していたであろうとのことだった)。この時期の家族構成は，箱膳の頃と同じで，祖父，父，母，兄2人，弟2人，Iさん，妹1人の9人である。住所は，これも全く変化なしである。あいかわらず農村で，職業も専業農家であった。変化したのは，しっぷく台の方が便利だからということであった。箱膳は，食事の度に出し入れをせねばならず，しっぷく台なら軽い食器を並べるだけですんだからだそうだ。

B．食事をする部屋はどう呼んでいたかは，はっきり覚えていないが，たぶん「茶の間」だったということである。その部屋は食事にのみ利用した。6畳間で，しっぷく台以外に何も調度はなかった。

C．食事は，お膳の時期と同じく，皆んなそろって食べ，特に祖父が来る迄は何があっても始まらなかった（図8）。タタミの間で，座ぶとんは皆が同じ種類のものを使用していた。

D．ご飯のほかに朝はみそ汁とつけ物，昼はふかしたいも，野菜をたいたもの，晩は野菜をたいたもの，ごくまれに干物があった。ご飯は祖父のみが白いご飯で，他の家族は麦ご飯を食べていた。お膳の時期もちゃぶ台の時期も，お茶というより湯を飲んでいたということである。ほぼこの時期に食べていたものは，お膳の時期と変化はなかった。

E．ご飯をよそったのは，母と女の子2人で，順は祖父，父，男の子（年齢順であったかどうかは，はっきり覚えていないとのこと），女の子，そして母である。神仏へは，白いご飯を1日1回，炊いた時に供えていた。祖父，父が酒を飲まなかった為，晩しゃくはなかった。

F．茶わんとお箸は，食べ終わったらすぐ湯ですすぎ，ふきんでふいて，しっぷく台の引き出しにしまった。ゆすいだ湯は飲んだ。この茶わんとお箸は，1週間に1度程，母が洗っていた。他の食器は，母が終わってからさげた。そして母と女の子2人が洗った。（母が食事を終える頃には，他の家族はすでに食事を終えていた）洗った食器は，「だいどこ」の戸棚にしまった。

G．共用の食器は，茶わんとお箸以外のほとんどのものが，そうであったらしい。祖父だけは，皆とちがう湯呑を使っていたらしい。食事中に共用していたものは大皿，大はちである。大皿には野菜のたいたものが盛られ，大はちには，ふかしいもが盛られていた。箸箱は，しっぷく

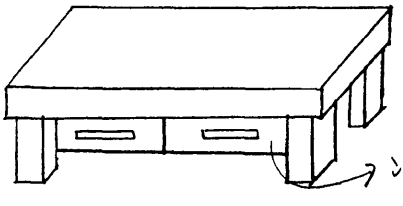


図7

台にかわってから登場し，各々，自分の箸箱をもっていた。これは今も続いているそうである。

H．箸の上げ下ろしについては，お膳の時期と同じことがいわれていた。しかしこの時期には子供もしっかり教えられたことを守っていて，それが当然と感じるようになっていたので，別に誰が注意しなくともよい状態であったそうである。食べる順はお膳の時期のように，必ずご飯を間に入れて食べるということを最低限のきまりとしていたそうである。食事中はおしゃべりをしてはいけない，という原則であったが，しっぷく台にかわってからは，お膳の時期にくらべておしゃべりが多くなった。食事中の姿勢は，もちろん正座である。その他，してはならなかったことは，しっぷく台にひじをついてはならない，ということである。

I．食べはじめは，あいさつなし。食べ終わりは，「ごちそうさん」と言った。

J．食事中の話題は子供達の学校のことが中心で，男の子が主になってしゃべっていた。担任の先生にしかられたことや，ほめられたこと，友達と今日，どこの山へ登って何をしたか，川に入って何をとったか，などが話題であったらしい。女の子はあまりしゃべらなかったということである。祖父が，田んぼや畑のこと以外に，昔のこと（祖父の若かった頃の）を話してきかせたりもした。兵隊さんが話題にのぼることもあった。食事をまずくするような話を，男の子達がした時は，祖父からたいそう怒られたそうである。

3．現在の時期

A．「テーブル」と呼び（図9），Iさんの結婚後，今までずっと続いている。家族構成は，夫，Iさん，息子2人，娘3人の7人である。住所は兵庫県姫路市で，住環境は，明治・大正の家並みを今も残している商店街である。戸主，つまり夫の職業は会社経営（建築機械リース業）である。食事の形式が変化したのは，もちろん結婚によってである。

B．食事をする部屋は，「だいどこ」と呼び，家族全員が何とはなしに集まる憩いの場であった。4畳半という狭い所ではあるが，家族7人がよくそこに集まった。部屋には，丸テーブルと食器棚，電話，ラジオ（後にテレビ），炊事場，冷蔵庫，棚，みずやなどがある。

C．座席の順は図9に示した。Iさんは炊事場に近い所にすわり，その横に夫，残りの場所に子供五人が，その時々により好き勝手にすわる。食事は皆んなそろって，というわけにもいかず，夫が仕事で遅くなるとIさんと子供達だけが早くすませたり，子供がクラブで遅くなると各自がバラバラの時間帯になったり，ということがよくあったそうである。食べる場所はタタミの間で，皆んなが同じ種類の座ぶとんを使用した。

D．ご飯の他に，朝は食パンを焼いてバターをぬって塩をふったものと，コーヒーという洋食が登場し，ご飯のおかずとしては，目玉焼き，玉子焼き，前日の夕食の残りなどがあった。昼は子供達は弁当，夫は職場で弁当もしくは外食，Iさんはありあわせのものを食べていた。夕食は，夫が魚つりを趣味としているせいもあり，魚料理がよく出された。お造りや煮魚，焼き魚などである。それに野菜をたいたものや，娘が高校生くらいになると，ホットケーキやゼリー，プリンなどのお菓子がそえられることもあった。特別にちがったものを食べていたのは夫で，

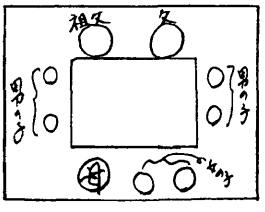


図8

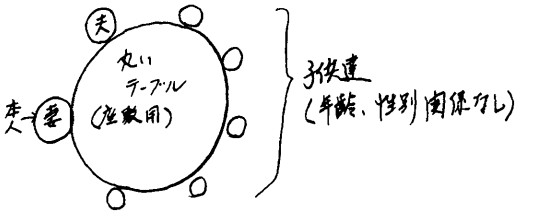


図9

晩しゃくの際に酒のさかな的なつまみを食べていた。

E．給仕はIさんと娘3人がしており，ご飯とみそ汁はIさん，お茶は娘という具合だった。夫によそった後は男女の別なく子供達によそい，Iさんの分は必ず一番最後であった。神仏へは，毎食，あるいは1日1回，家族が食べているものと全く同じメニューを供えた。晩しゃくは，1日につきビール1本で，夫のみ飲んでいた。

F．食器は全てIさんが，終わった人ごとにさげ，まとめて後で洗っておいた。食器は，かごに入れ水切りをしておいた。Iさんだけでなく，娘達も食器あらいを手伝った。

G．夫のコップと茶わん，それにIさんと夫の箸箱以外は共用であった。食事中に共用したものには，中くらいのはちがあり，主に，おつけものが入れられていた。箸箱は夫婦の分だけで，これは結婚後今日にわたって使用されている。

H．箸の上げ下ろしには夫がうるさかったらしく，一般にいけないとされている持ち方を厳しくいましめた。食べる順は別に決まっていず，自由であった。食べ物を口に入れてのおしゃべりはいけないが，それ以外なら，おしゃべりは許されていた。姿勢は正座である。その他，してはならなかったのは，食事中に便所にたつことくらいである。

I．食べはじめは，「いただきます」食べ終わりは，「ごちそうさん」であった。

J．子供達が主にしゃべっており，男女の差なく，話したいことがあればそのつど，学校でのことや，友人のこと，進学のこと，就職のことなどを話したそうである。子供達がそれぞれ所帯を持ち，夫婦2人となった今では，もっぱらテレビを見ながら，その内容について話しているそうである。

調査者　No. 9（f）	調査日　昭和58年8月18日（木曜日）
被調査者　S.H.　性別　f	出生年　明治32年（83歳）（第1子）
出生地　群馬県佐波郡T町	
生家の職業　養蚕	
現住所　兵庫県神戸市東灘区	
住所の変更とその年度　群馬—東京（大15）—名古屋（昭5）—東京（昭11）—神戸（昭19）	
最終学歴　尋常高等小学校	結婚　大正15年（27歳）
被調査者との関係　友人の母方の祖母	

1．箱膳の時代

A．箱膳（だいたい35×35×15cmぐらいの大きさ）を使っていた。中に一人分ずつのお茶わん，お椀，お箸などを入れてあった。食事の時には，ふたをひっくり返して，ふたのちょっと出っ張った所と箱とをきっちり合わせてずれないようにして，お膳にした。家が養蚕の種付けをやっていたので，“野良男”と呼ばれる奉公人がいて，彼らは懐石膳を使っており，彼らのお茶碗などはその上にふせてかたづけた。彼ら以外の者（家族や女中さん，年間を通じて家にいる番頭さん）は，すべて箱膳で，野良男など季節だけしか家にいない者は懐石膳だった。但し，お客さんがいらした時は飯台で食事をした。箱膳のことは“お膳”と呼んでいた。生まれた頃から，お嫁に行ってその家を出るまで，ずっとお膳で食事をしていた。私は，父が都会に働きに出てしまい，母もなかったので，祖父母を父母のようにして育った。家族は，祖父母，おじ夫婦，いとこ，私と女中さん，番頭さん，野良男だった。その頃は，群馬県佐波郡T町に住んでいて，付近は，お百姓さんのおうちばかりだった。祖父は，養蚕の種付けをやっており，季節になると，茶の間や寝間を除いた家中の部屋の畳を全部あげて，家の中でお蚕さんを飼っていた（図10）。（大正5年以降には養鶏に変わった。）

B＆C．食事の時は，祖父（戸主）が2段高い東向きの席，おじさんが次の段，家族と女中さん・

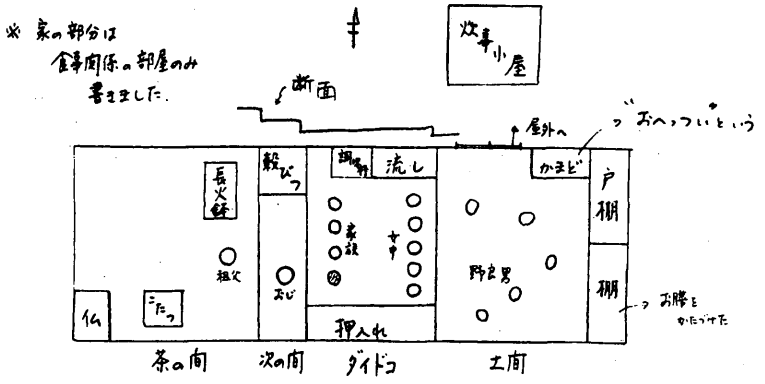


図10

番頭さんはダイドコ，野良男たちは土間の好き勝手な位置で食べた。祖父の席は，茶の間で畳敷に座ぶとんを敷いてあり，次の間とダイドコは段差があるがどちらも板の間で，おじさんも私達も座ぶとんなしだった。茶の間は，北向きの10畳間で，仏壇・箱火ばち・こたつがあった。ダイドコは，炊事場となっていたが，夏場は外の炊事小屋で炊事をしていた。土間にはおへっつい（かまど）や戸棚などがあった。戸棚には，漬物や調味料が置いてあった。だいたいは，みんなそろって食事をしていた。

D．メニューはご飯の他に，朝はおみおつけと漬物，梅干ぐらい。昼は，朝のおかずに煮物（芋や大根のごった煮）が加わり，晩は朝と同じ……という感じだった。その頃，ご飯は，米7に対して麦3の割で混ぜて炊いていた。但し，祖父の分とお弁当の分だけは，麦の混ざらない白いご飯だった。お弁当箱は「めんば」と呼ばれるうす木で，できているもので，おかずは漬物と梅干ぐらいだった（図11）。

E．食事の給仕は各自で，自分の食べたい分だけよそった。但し，夫や子供の分は奥さんがよそった。よそう順序は別になかった。仏壇へのお供えは，祖母が朝と晩にしていた。晩しゃくは祖父だけで，毎晩1合ずつだった。祖父は酒好きで，たくさんあると，ある分だけみんな飲んでしまうので，毎日1合ずつ，私が，酒屋へ買いに行った。

F．あとかたづけも各自で，洗うのも各自だった。夫や子供の分は奥さんが洗って，お膳の中にしまい，棚にかたづけた。野良男の中には，3日に1度ぐらいしか洗わず，それ以外の日は汚れた食器をそのままお膳にふせて棚にかたづけてしまう者もいた。

G．共用の食器や，箸箱などはなかった。

H．食事中にしてはいけないことで，群馬の方の風習として，ご飯におみおつけをかけたり，お茶づけをすることは，ダメであった。その他は，どこの家でも言われるようなことで，二度箸（渡り箸）やねじり箸をしない，口をあけたまま，べちゃべちゃ音をたてて食べない，食器の音をたてない，背中をのばして食べる，食事中に席をたってはいけない，ひじをついたまま食べない，左手を台の上に出しておく……など，いろいろあるが，それほど厳しくは言われなかった。食事中のおしゃべりは，してもよいが，むだ口をしないようにと言われた。

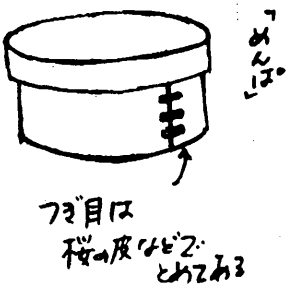


図11

I．食べはじめと終わりのあいさつは，言いたい人だけでよく，みんなで言ったりしなかった。仕事が季節には特に忙しくて，時間がなかったせいである。

J．食事中の話題は，人のうわさ話ぐらいであった。とにかく，利根川の関所近くの孤立した村だったので，話題がとても乏しかったのである。

2．ちゃぶ台の時代

A．結婚後，ちゃぶ台での食事となった。ちゃぶ台のことは，お膳と呼んでいた。家族は夫とおしゅうとさん（「お父さん」と呼んでいた。）と私の3人で，その後，子供が5人生まれた。結婚当時は，東京の大森に住んでおり，名古屋，東京，神戸と引越した（ここでは東京の頃の話を中心にお話を聞いた）。いずれも静かな住宅地だった。夫は，しょうのう会社に勤めるサラリーマンで，お父さんは，隠居生活で働いていなかった。

B＆C．食事はいつも茶の間でしていた。茶の間は6畳間で畳敷，茶ダンスやタンスが置いてあった。座ぶとんは，みんな敷いていた。座席は，お父さんが上座で，台所に近い所に私が座り，私のむかいに夫が座っていた（図12）。

D．食事のメニューは，ご飯と，朝はおみおつけ，漬物，佃煮ぐらい，昼は前の日の残りもので，晩は酒のさかなになるような酢のものと刺身，煮物などといったものだった。朝食は3人そろって，昼はお父さんと私の2人で，晩は夫の帰宅前にお父さんが1人で先に済ませて，夫の帰宅後に夫婦2人で食事をした。晩だけ，お父さんが先に食事を済ましてしまうのは，お父さんも夫もお酒が大好きで2人一緒に飲み出すと，酒は毎晩一人お銚子一本ずつと決めているのに，どうしてもそれを超えてしまう。毎晩の刺身やお酒だけでもかなりお金がかかるのにそれ以上負担を増やしてはいけないと，お父さん自らが言って，こういうことになっていた。

E．ご飯の給仕は，すべて私がやった。よそう順序は，お父さん，夫，私の順で，お父さんの分は，「ご飯を山盛りに。」という要望に答えて，いつでも山盛りによそった。仏様へのお供えは毎朝，お茶はお父さん，ご飯は私が供えた。お父さんは，早起きで，朝起きると一人でお湯を沸かして，お茶を飲んでいたので，お茶を供えておいてくれた。

F．食べ終わって，食器をさげたり，洗ったりするのは，私一人でやっていた。洗い終わった食器は，食器棚にかたづけていた。

G．共用の食器はなかった。箸箱も使っておらず，箸たてに箸をしまっていた。

H．食事中にしてはいけないことは，特別に厳しく言ったりしなかった（と，被調査者は言っておられたが，私の友人のお母さま，つまり被調査者の娘さんは「そんなことありませんよ。お箸のこととか，おしゃべりとか，ずい分うるさかったじゃないの。」と言われた。この方も，東京にいる頃はお茶づけを食べたことはなかったそうで，被調査者が群馬でしつけられたことを，同じように子供たちにもしつけておられたようだ）。

I．食事のはじめと終わりには，「いただきます。」と「ごちそうさま。」は，きちんと言っていた。但し，「いただきます。」は，みんな一斉に言っていたが，「ごちそうさま。」は食べ終わった者から各自バラバラに言って，席を立っていた。

J．食事中に話していたのは，主に子供で，自分のこと（学校であったことなど）を話題として，他人のうわさなどは，あまりしなかった。

3．現在

A．現在は，ほりごたつで食事をしている。寒い時期以外は，ふとんをかけずにこたつの台だけをちゃぶ台の代わりにして使っており，寒くなってくると，ふとんと毛布をかけて普通のこたつ型式にして，そこで食事をしている。季節により，お膳とかこたつとか呼んでいる（神戸に住むようになってから，ずっとこの型式であるが，ここでは比較的最近のことだけを聞いた）。

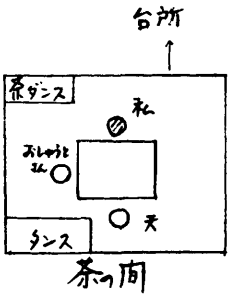


図12

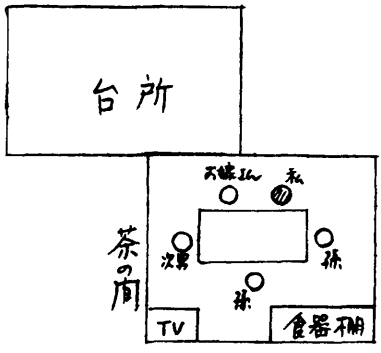


図13

現在の家族構成は，私と次男夫婦とその息子2人の五人である。住所は神戸市東灘区M町で，近くに大学や小学校など学校が多い住宅地である（K大学にも非常に近い）。戸主である次男とお嫁さん（「お母さん」と呼んでいる）は，共に学校の先生をして，共働きである。私は，昼間，家で留守番をしている。

B＆C．食事に使っている部屋は茶の間で，6畳間である。大きな茶ダンス兼食器棚と，テレビが置いてあり，部屋のまん中ぐらいに細長いほりごたつがある。座席は図13のようになっていて，お台所ぎわにお母さんと私が並んで座っている。朝食と夕食はみんなそろって食事している。座ぶとんは，みんな敷いている。

D．食事のメニューは，朝はパン食で，牛乳と目玉焼と生野菜ぐらい。昼は留守番の私一人で済ますので余りものを食べることが多くそれ以外ではうどんなどをよく食べている。晩は肉料理が主である（孫が肉好きで，よく食べるので）が，私自身は肉食を控えめにしている。特別なおかずなどは，別にない。

E．ご飯の給仕は，お母さんがしている。よそう順序は，だいたい私，孫，お母さんという順で，次男は晩しゃくをするので，晩しゃくの後によそう。晩しゃくは，毎晩ビール1本である。仏様へのお供えは私がやっているが，ご飯は晩に炊くのでお仏飯は晩に供え，お茶は昼に供える。

F．食事のあとかたづけは，全部お母さんがやっている。しかし，2年前ぐらいまでは，お給仕もかたづけも，私がやっていた。また，晩ご飯の支度も，現在ではお母さんが仕事から帰る途中に買い物をしてきて支度しているが，以前は買い物から支度からみんな私がやっていた。今でもお昼は自分で作ってかたづけしている。

G．共用の食器は，大皿や深鉢などで，揚げものや煮ものなどを盛っている。箸箱は使っていない。

H．食事中にしてはいけないことは，前に述べたこととほとんど同じようなことであるが孫も大きくなっているし，それほど厳しく言ったりしていない。言わなくてもだいたい守られているようだ。

I．食べはじめには「いただきます。」，食べ終わりには「ごちそうさま。」と一応，言っている。

J．食事中にしゃべるのは，たいてい孫の一人の方で，学校での話や友人の話など，よくしゃべっている。

調査者　No. 19（f）	調査日　昭和58年8月16日（火曜日）
被調査者　S.S.　　性別　f	出生年　明治45年（71歳）（第1子）
出生地　兵庫県氷上郡K町	
生家の職業　農業	
現住所　兵庫県西脇市K町	
住所の変更とその年度　氷上郡K町—西脇市K町（昭6）	
最終学歴　兵庫県立K高等女子学校	結婚　昭和6年（21歳）
被調査者との関係　父方の祖母	

＊2．ちゃぶ台の時期が，現在も続いているので，3．現在の時期は，省略します。また，お膳の時期については，結婚後一年ほど続いていたが，時期が短いので，主に生家（結婚前）について，話を聞きました。

1．お膳（箱膳など）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

—どの様な形式で食事がなされていたか。

箱膳の形だった。（図14参照）塗りのお椀，瀬戸物の茶碗と湯のみ，皿，そして木の箸を使ってたね。下男下女は，別に食事をしていたと思う。

—それを実際には何と呼んでいたか。

“お膳”って言うてた。“早よ，御飯やからお膳だしよ”言うて……。形としてはね，箱膳って言って，一人一人，四角い箱があって，その蓋がつまり，銘々のお膳になるんよ。食事の時間になると，ざーっと，そのお膳を，お父さん，お母さんっていう風に順に並べていって，そして，蓋を裏返しにすると，それが飯台の代わりみたいやね。その上へ，箱の中にしまってあった食器を出して，のせるんよ。

—いつ頃から始まり，いつ頃終わったか。

私が生まれた時（明治45年）は，もう既にあったね。結婚後，1年位してなくなったやろか（昭和7年）。姑さんは，その翌年まで使ってはった。やっぱり，昔が忘れられんでね……。

—その時期の家族構成は……（生家）。

曽祖父母，祖父母，父母，叔父母，それに，私と二人の弟。下男一人，下女一人。

—その時期の住所は……。

兵庫県氷上郡K町。

—その時期の住環境と戸主の職業。

山奥の農業地でね，代々百姓やったよ。

—食事の形式が変化したとすれば，なぜか，①まず，飯台が普及してきたこと。②それに，食品の多種・多様化によっておかずが複雑になったからね。③皿の数も増えて，箱膳にはのらんようになったし……。④それに，油物が増えて，その度，食器を洗う必要ができた。

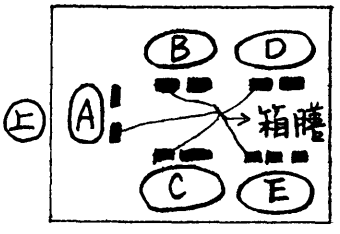


図14

B．食事をする部屋について

—食事の部屋を何と呼んでいたか。

台所（だいどこ）やね。近所では，納戸なんか言いよってやったけど……。

—食事以外でその部屋を何かに利用したか。

食事の後の団らんも，そこでしよったねえ。床につくまで，ほとんどそこで，火鉢囲んで皆で話をしたり

してたね。

―その部屋の情景は……。

大きさは，本間の畳の八畳の部屋。箱膳をしまっておく大きな戸棚があったね。

C．どの様なすわり方で食べたか。

―座席の順番は……。

上(かみ)に一番年令の高い曽祖父母が座って，あとは，向い合わせで年の順に。子供達は，場合に応じて適当に……ね。図14参照で，A―曽祖父母，B―祖父母，C―父母，D―叔父母，E―子供達……という感じやね。

―皆そろって食べたか。また，座布団の有無。

家内は，皆そろって食べたね。それで，下女は皆のお給仕しーもち（しながら）食べて，下男は，その間，牛の草刈りにいってたね。

もちろん，畳の部屋で，座布団も皆使ってたよ。

D．ご飯の他には，何を食べ，飲んでいたか。

昔は，本当に食べる物がなかったからねえ。朝昼晩って，区別した料理なんてなかったんよ。それに，ご飯にしたって，白米ばっかりなんて……めったになかったんよ。今はやりの“大根めし”なんてよう食べた。小芋を入れたりしてー。お揚げなんか入ってたら，もう上等やね。卵なんか，特別になにかないとよばれんかった。それに，鰯(いわし)なんかでも，遠い所から持ってこんなんさかいに，塩鰯いうてね。焼いたら塩まみれになってしまうんよ。だから，新聞紙を四角く切って，それを，お皿に敷いてから食べたんよ。そしたら，洗う手間が省けるでしょう。おかずといってもあり合わせで，畑でとれる野菜が主やったねえ。大根とか芋類，野菜（なす・ねぎ・白菜等）それに干物（丸干しやさくら干し）なんかよう食べたなあ。おすましやみそ汁も，大根が実の時が多くて，豆腐なんかはめったに食べられなかったよ。でも，さのぼり（田植えの後の村の大休み）や，盆・正月になると白米を炊いてくれたね。

―誰か特別にちがったものを食べていたか。

そんな事はなかったけど，まあ幾分か，魚の切り目が，お父さんやおじいさんが大きくて，女の人は小さいとかいうことはあったね。それに，下男下女は，やっぱり，家の者よりも一段悪くて，魚なんかは，正月とかお盆にしかつかなかったね。

E．食事の時のご飯の給仕について

―誰がよそったか，また，その順序は……。

やっぱり，その家の嫁やね。つまり，生家では私のお母さん。お年寄りから先に，それで主人，子供，自分……の順によそう。でも，お嫁さんは，それは大変やったよ。皆のお給仕をしながら，一緒に自分も食べて，それでだいたい人より後にならんように食事を済まさないかんかったんやから……。

―神仏へのお供えは。

ご飯を炊いてさえ，神さんには，おへぎ（おへん）に南天の葉を敷いて，その上にご飯をのせて，仏さんには，お皿にご飯を直によそってお供えするんよ。ご飯を炊かん時は，米粒（洗い米）を供えたね。

―晩酌の有無は。

勝手やったね。好きな人や，気の向いた日には飲んではったけどー。

F．食事のあとかたずけについて

―いつ，誰が食器をさげた（運んだ）か。

膳を出してくるのは，家の者やった。お年寄りやったら別やけど，まあ，子供が大きかった

ら，その子供が戸棚からお膳を出してきて，順番に並べていくんよ。食事が終ると，そのお膳は皆自分でお茶碗とか箸とかを中に入れて，ふせて，蓋をして，それでまた銘々が戸棚にしまうわけよね。

—いつ，誰が食器を洗ったか。

そんな，食事毎に洗ったりはせんかったね。なかなか，今みたいにきれいには，皆してなかったなあ。“ごちそうさま”いうたら，ちょいちょいとそのお茶碗を箱の中に伏せて，蓋をして戸棚にしまう。洗うのは，そうやね，一日に一度位かなあ。昔は皆そうやったんよ。おかずのお椀なんかは，汁などで汚れてたら洗ってたけど，茶碗やお箸は，そのまま自分の箱に納めてたよ……。

—洗った食器を，どこへしまったのか。

大勢家内やったから，戸棚みたいな台が1つあった。ここは誰，ここは誰って，決まった場所へ入れる様になってたわ。だけど，大きな戸棚やから，奥行きが深うて，子供の頃は，奥の方へなんか押しこまれてたら，背が届かんでね。ぼいっと飛びついて，ひっぱり出したもんやわ。

G．食器の共用について

—共用の食器はあったか。

煮しめなどを作ると，大きな皿にそれを盛って出すことはあったけど，それ以外の普段は，それぞれの専用のお膳と食器だけの事が多かったと思う。

—箸箱はあったか。

箱膳の時には，使用してなかったね。皆，木の箸をお膳に入れておいたから……。

H．食事中にしてはならないことについて

特別に注意されるという事はなかったね。当たり前の行儀作法はしつけられたけど。でも，昔のご飯は麦が入ってたりしてたからねえ。よくこぼれるんよ。それでよう叱られたね。“きちんと拾いなさい！”って……。何だか両親も忙しくてそれどころじゃなかったから，私たちも，自分の事は自分で気を付けるっていう感じだったんよ。

I．食事中の挨拶について　J．話題について

それは，今と変わらないね。“いただきます”って食べ始めて，最後に“ごっつおさん”って言うてたよ。おしゃべりも自由やったよ。家族皆で，その日あった事や，いろんな世間話をした……。楽しかったねえ。百姓やったから，やっぱり田んぼや畑・山の話も多くて，他には，村の話や学校の話なんか……ね。

——という訳で，お膳についての祖母の話はこれまでです。途中，食事以外の話もたくさん聞かせてもらいました。

2．ちゃぶ台（飯台）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

—どの様な形式で食事がなされていたか。

結婚当初は，丸い小さな台で，子供が増えてから，丸い少し大き目の台に変えたね。あとの方のは，まん中ですきやきができる様になってね。子供が結婚してから，今の四角い大きな台を買ったんよ。（略図は図15参照）

—実際にはそれを何と呼んでいたか。

「飯台」いうてたねえ。今もそれは同じ。

—いつ頃から始り，いつ終ったか。

昭和7年頃に買って，いろいろ買い替えたけど，飯台としては，今も続いて使うてるわね。

―その時期の家族構成は……。

嫁いだ時は，夫と姑との三人。その後，四人の男の子と一人の女の子が生まれて，現在は，その娘と夫との三人暮らし。使用人は，いなかったね。

―その時期の住所と住環境と戸主の職業……。

兵庫県西脇市K町。西脇市自身は，織物中心の工業地で有名やけど，多くの家が，農業との兼業家やね。私の所も，家は農業やったけど，夫が，小学校や中学校の教師をしてたから，まあ兼業かな。

B．食事をする部屋について

―食事の部屋を何と呼び，また，食事以外で何かに利用したか。

やっぱり，台所って呼んでたね。食事の後の団欒も，やっぱりその部屋やったね。何せその頃は，今みたいに電気（電燈）が，いくつもないから，台所でランプを使ってると，簡単に持ち運びができないんよ。だから，皆ずっとそこでくつろいだもんやわ。私は，そこで縫い物をしたりなあ。

―その部屋の情景は……。

四畳やけど，本間畳だから，わりあいに広いねえ。土間から上がる様になってて，戸棚が二つ隅においてあるわけ……。

C．どの様な座り方で食べたか。

―座席の順番は……。（図15）

皆そろって食べたね。畳の部屋で座布団を全員しいてたのも同じ，昔と一緒やね。

D．ご飯の他には，何を食べ，飲んでいたか

終戦前後の頃は，麦ご飯や大豆ご飯，それにご飯の代わりに，さつまいものふかしたものなんかを食べとった……。その頃は，本当に日本全国が皆食べる物がなかったからねえ。麦飯は，ほとんど食べなかったかなあ……。それでも，おから団子やおかゆ・雑炊もよく作ってたんよ。だんだんと食糧事情がよくなってくると，白米ばっかり食べる様になったけどねえ。おかずは，やっぱり畑で取れた野菜が主やねえ。豆類・芋類・玉ねぎ・南瓜なんかを煮いた物・炒めた物，それに，さつまいものつるを煮きこんだのも食べてたよ。あとは，魚の煮付けや生酢，こんにゃくやこうや豆腐なんかも煮いて食べよったね。肉類を食べ始めたのは，もうちょっとあとだったと思うなあ。漬物は，いつも自家製のを添えてたね。特別に誰かが違う物を食べてたということは，まずなかったね。病気になった時ぐらいやねえ。卵がついたりして……。

E．食事の時のご飯の給仕について

―誰がよそったか，またその順序は……。

やっぱり嫁やね。つまり，その時は私。他に，娘が大きくなってくるにつれて，手伝ってくれたけど……。よそう順序は，姑が最初でその次は夫。子供たちは，適当に……ね。

―神仏へのお供えと晩酌の有無については，箱膳の時期と，全く同様なので，省略します。

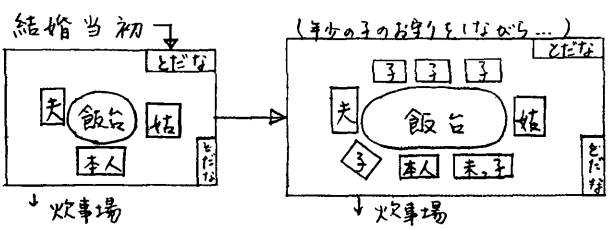


図15

F．食事のあとかたずけについて

―いつ，誰が，食器をさげ（運び），洗ったのか，また，湯茶でゆすいだか。

女手が少ないので，やっぱり私が，食事の用意もあとかたずけも全部やったんよ。皆が食べ終ったらすぐに，土間の炊事場の方へ，食器を下げて，洗ってしもた……。湯茶でゆすいだりはせんかったよ。何もかも一人でせんならんかったけど，どこの家でも同じやさかいね。娘が大きくなってからは，よく手伝ってくれて助かったね。なんせ，今みたいに家が狭くないでしょう。だから，食器を運ぶのでも時間がかかって……。

―洗った食器をどこへしまったか。

食器は，炊事場と台所の両方に戸棚があったから，そこへ分けてしまっておいた。今みたいに，ポットやジャーみたいな電気製品がなかったからね，ご飯は，おひつに取っておいたんよ。冬は，ジャーの代わりに，“あぐり”（蓋付きの，わらで編んだ筒の様なもの）の中におひつを入れて，その中にご飯を入れておいたわけよ。そうしたら，なかなか冷めないでしょう。保温してたわけやねえ。

G．食器の共用について

―共用の食器にはどんなものがあったか。また，何が盛られていたか。

やっぱり，ちょっと大きい，深いお皿やね。煮つけ物が主に，他には，漬物なんかも。

―箸箱は，いつ頃からいつ頃まであったか。

使い始めたのは，昭和７年頃やわ。最初は，夫婦箸箱で，二膳入りになってるのを使ってたんよ。子供が増えると同時に，どんどん増えていって，何度か買い替えた覚えはあるけど……。使わなくなったのは，昭和三十三年頃だと思うわ。今は，塗りのお箸で，箸立てにたくさん立ててあって，共用になってるね。

H．食事中にしてはならないことについて

男の子が多かったからね，あんまり細かいことは言わなかったけど，小さい子には，“おっちん（座って）して食べなさい”とか“正座しなさい”とか“お箸同士で，食べ物の渡し合いをしてはいけません！”とかって，言う様なことは，まあ言うてたね。

―食事中の挨拶・話題について

挨拶は箱膳の頃と同じ。おしゃべりについては，子供が学校に行ってた頃は，もう，一人一人の学校での話が多かったね。あとは，仕事の話。（山の話や田畑の事等）それに，長男などは，よく食事の時に，成績の話をされてたねえ。やっぱり，父親が先生だから，一番気になるんやろうね。今みたいに，テレビが普及してない時やから，皆，その団らんの時間が，一番楽しい時だったみたい…。

調査者　No. 27（f）	調査日　昭和58年７月14・20日（木・水曜日）
被調査者　A.S.　　性別　f	出生年　明治41年（75歳）（第２子）
出生地　兵庫県神戸市兵庫区N町	
生家の職業　船員	
現住所　兵庫県神戸市中央区K町	
住所の変更とその年度　神戸市兵庫区N町―中央区K町（大14）	
最終学歴　旧制女学校	結婚　大正14年（18歳）
被調査者との関係　父方の祖母	

１．お膳の時期

被調査者は「箱膳」は使用したことがない。ただし，子供の頃，子供用のお膳といって，引き出し付きの，箱膳よりは背の高い膳が売られていたのは覚えているそうだ。その引き出しの中に

茶碗や箸を入れて使った。

嫁ぎ先は建築の仕事をしていたため，職人にご飯を出す時は箱膳を使っていたが，家族の食事の時には使わなかった。

2．ちゃぶ台の時期

A．食事の形式と家庭環境について

被調査者の父親は船員であったため，ほとんど家に居なかった。帰ってくると，いつもの食事をする部屋ではなく，座敷で子供達をまわりに集めてにぎやかにいろいろな話をしながら食事をしたそうである。父親がいない時は，台所や水屋（食器棚）の近くに母親が座り，祖母や子供は奥側，図16によると玄関に近い方に座った。

ご飯を食べる台は長方形で，「お膳」とよんだ。お膳というよび方は今でも変わっていない。3年前にダイニング・キッチンに改造するまで，お膳を使っていた。

結婚するまでの家族構成は，父，母，祖母，姉，弟，妹，被調査者の7人家族であった。住所は神戸市兵庫区N町で，まわりは住宅地だった。戸主は船員をしていたため，航海で家にいないことが多かった。食事の形式が変化したことはないが，大正になってからは生活が大きく変わったそうだ。たとえば被調査者が小学校4年生の時（大正4，5年），靴がはやり，靴を履いて学校に通うようになった。それまでは着物を着て，麻裏ぞうりをはいて通っていたそうだ。

結婚後の家族構成は夫，養父，子供3人で住所は神戸市（現在は中央区）K町の夫の家に住んでいた。まわりはおもに住宅地だった。戸主は建築業をしていた。

結婚後の食事時の座り方は，給仕をする被調査者が台所と水屋の近くに座り，晩酌をする養父は長火鉢の横に座った。昭和13年に新居を建てるまでこの形式は変わらなかった。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋には特に名称はついていなかった。「ご飯を食べるとこ」と言っていた。食事以外には使わなかった。広さは3畳で，水屋（食器棚）とお膳があり，電気がついていた。部屋の隣は炊事場（棚本（たなもと）といった）で土間になっており暗かった。炊事場には電気がなく天窓とろうそくで明かりを採っていた。

C．座り方について

銘々の座る所は決まっていたが，食事をする部屋での上座，下座は意識していない。給仕をする主婦が台所に近い場所に座り，男は台所と反対の場所に座っていた。正月など座敷で食べる時は，戸主は仏壇の前に座り，ここが上座になる。食事する部屋は畳敷きで，みな座ぶとんの上に正座をしてご飯を食べた。朝と夕食は家族そろって食べたそうだ。

D．ご飯のほかに食べていたもの

朝は豆腐の味噌汁と昨夜のおかずの残りを食べたり，塩昆布で茶漬けをして食べた。昼も味

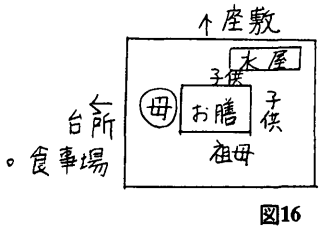


図16

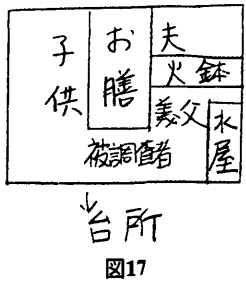


図17

噌汁と残り物を食べたが，お弁当の場合は竹の皮におむすび，塩昆布，梅干し，めざしを包んで持っていった。いりこ（煮干し）をおかずに持ってくる人がいたそうだ。いりこを頭から丸ごと食べることはなかったそうである。晩は1汁2菜くらいで，味噌汁と，旬の野菜や魚を食べていた。野菜の煮物，焼き魚，香の物が主だった。食事中は番茶を飲んだ。養父は晩酌をしたので，肴がついた。家で副食を作っていたが，行商や，市場で売っている惣菜も利用したそうだ。煮豆，昆布巻，どじょう汁，煮しめなどの惣菜や，ぜんざい，パンなどおやつも売りに来ていた。子供のために牛肉を使った料理も作ったが，大人はあまり食べなかったそうだ。大人用には野菜の炒めものを多くつけたりした。冬になると，すき焼きや湯豆腐，おでん（田楽）をよくした。戦時中はすべて配給制だったので，粥やだんご汁をよく食べた。米の代用としてサツマイモやカボチャも多かった。その頃は三食同じようなものばかり食べていたそうだ。

E．食事の時の給仕について

給仕は主婦がおこなった。結婚前は被調査者の祖母が一番はじめによそってもらい，次に子供がよそってもらった。父親が家に帰っている時は父親のご飯からはじめによそった。子供のよそう順序ははっきり覚えていないが，小さい頃は年の順によそっていたようで，長男がいつも先ということはなかったそうだが，大きくなってからは長男が先だった。

結婚してからは，まず養父，夫，子供，最後に自分のご飯をよそった。子供は長男からよそっていたが，小さい弟や妹がほしがる時はそちらを先にしたそうである。朝，ご飯を炊いて，それを神仏に供えた。燈明をあげるのは戸主である夫がした。神棚は食事をする部屋にあったが，それは神棚の上下を踏んだり通ったりしない所というのでそこに設けていたのだそうだ。だから神棚と食事室の上座，下座とは別に関係はなかったという話だった。

晩酌は養父だけあった。養父はよく自分で肴をこしらえていた。夫は仕事がら酒を飲むことがあったが，家ではあまり飲まなかった。

F．食事のあとかたずけについて

食べ終わると主婦が茶碗をさげた。箸は各自が湯茶でゆすいで箸箱に直す。茶碗や皿などは台所で洗う。食事がすむとすぐ片付けていたそうで，食事をする場所で食後くつろぐということはしなかった。洗った食器はふきんで拭いて水屋に直す。箸箱も水屋に直す。主婦がこれらの仕事をするが，娘にも手伝わせた。男は手伝わなかったし，させなかった。食後は食事室ではなく，座敷でくつろいだ。その座敷は夜夫婦が寝る所であり，客が来たら招じ入れる部屋である。

G．食器の共用について

おかずを盛る器や汁椀，小皿などは共用で使い，茶碗，湯のみ茶碗，箸は個人の専用である。煮物，あえ物，香の物は器に大盛りにして出し，それぞれ皿に食べる量だけ取り分けていた。あまったものは次の日の朝や昼に食べる。一人ずつにわけるときに盛る皿も共用で使っていた。箸は箸箱に入れていた。箸箱は被調査者が子供の頃から使っていたし，今も被調査者と夫，つまり私の祖父母は使っている。

H．食事中にしてはならない事

特に厳しくしつけたのは，箸の持ち方である。正しくない箸の持ち方をすると何度も注意した。食事中はきちんと正座してなくてはいけなかった。足もくずせなかった。食事中子供がふざけたり，食べ終わらないのに立ったりすると「じっとして，はよ食べてしまいなさい。」と叱ったが，ご飯を食べながら話もしたそうである。さわぐことはいけないが，なごやかに食事をしていたようだ。お米をとても大切に扱った。茶碗の中のご飯粒は全部きれいに食べたし，こぼしたご飯粒も必ず拾って食べた。ご飯粒を踏むと目がつぶれると言っていたそうである。

おかずやご飯を食べ残すことはいけなかった。子供が食べ残した分は母親が食べた。

Ⅰ．食事中のあいさつについて

家族みんなそろって食事となるが，銘々が「いただきます。」と言って食べる。ことばで唱えなくても，いつもお百姓さんに感謝をして食べるように心がけたそうだ。食事がすむとまたそれぞれが「ごちそうさま。」を言って，終わった人から食事室から出てよかった。

Ｊ．食事中の話題について

食事は話をしながら食べていたが，誰かが主だって話をすることはない。今日一日どんな事があったとか，今日のご飯はおいしい，おいしくないということ，仕事がうまく進んでいるかどうか，学校での話，世間話をしながらの夕食だった。食事の時は，子供を注意したりしてしつける時間でもあったが，家族全員の様子をみて，いたわりのことばを交わす時間でもあると思われる。

3．現在の時期

チャック項目では椅子式テーブルの時期となっているが，うちではお膳（ちゃぶ台）の時期が長かったので，ここでは戦後の様子を書くことにする。

Ａ．食事の形式と家庭環境

空襲で家を焼かれて，近所の焼けなかった家の2階を貸りて住んでいた。あたり一面は焼け野が原だった。もと家を建てていた場所に6畳ほどのバラックと焼け残った風呂場を建て，畑を作った。建築の仕事道具は焼かれてしまい，仕事ができなかった。借家は焼け残っていたが，非戦災税を高くとられたので楽ではなかった。戦時中は配給がきちんとあったが，戦後は悪くなり，食べるものが少なかった。畑になす，トマト，いも，かぼちゃ，らっかせいなどを作り，たくさんできると近所の人に分けたり，他のものと交換してもらっていた。家が建ったのは昭和23年で，この頃から夫婦でうどん屋をはじめた。子供は学校を卒業してから働きに行った。子供は3人いたが，病気で亡くなり，夫婦と長男である私の父の3人だけになった。昭和25年頃になると，ものが出回るようになり，お金さえ出せば手に入るようになった。

食卓がお膳（ちゃぶ台）からテーブルに代わったのは3年前の昭和55年である。テーブルに代わってからも呼び慣れているせいか，「お膳」とよんでいるし，配膳をすることも「お膳を出す」と言っている。祖父母とも年をとって店を閉めたので，今まで土間だった台所を改造して板敷きのダイニングキッチンにした。

Ｂ．食事をする部屋について

食事をする部屋は畳敷き3畳の部屋で，台所を上がったところになり，玄関の間の奥にあった。室内になったものはお膳，水屋，神棚，吊り棚の上には古新聞，柱時計等があった。食事以外にはほとんど利用せず，勝手口に出る通路のようなものであった。

Ｃ．座り方について

D.K．に代える前の座り方である（図18）。私（調査者）が小学校3年生くらいまではみなそろって食事をしていたが，テレビを入れたので，わかれて食べるようになったと思う。被調査者（祖母）と私の母が台所の近くに座っていた。上座，下座の感覚はなかったが，祖父母とわかれて食事をする時は，父が祖父の席にすわっていた。座敷では必ず祖父が仏壇の前に座り，次に父が座ったが，座敷で食事をするのは正月くらいだった。

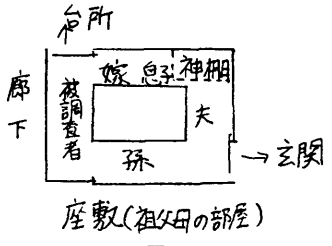


図18

Ｄ．ご飯のほかに食べていたもの

戦後は食べるものがなかった。配給の米や野菜を長くもたせるために苦労したそうだ。調味料や酒も配給で，どうにか足りていた。米のかわりに砂糖をバケツ一杯配給されたこともあるそうで，それを売って米とかえた。栄養をつけるために牛乳とも交換した。

食事が自由に手に入るようになると，もとの食生活にもどった。朝昼は昨夜の残りや茶漬，夜に惣菜をつくる。パン食は，配給で味つけパンがあった時はご飯の代用に食べたが，家で作ったこともあるらしい。パンには砂糖をつけて食べていた。バターは終戦後5，6年しないとなかったらしい。三食のうち一食をパンですませることはなかった。最近10年くらいは昼食はパンと牛乳である。戦前と戦後とをくらべて変わったところは，食べ物が贅沢になったことだと言う。おかずの量，種類ともに多くなったし，油を使った料理が多くなった。現在は魚も野菜も肉もまんべんなく調理するようにしている。祖母は朝は納豆を食べることに決めているようだ。

E，Fについて

食事の給仕は現在は私の母がする。順序は祖父，祖母，父，子の順である。食後はくつろいでから茶碗を洗っているが，祖父母は箸は茶湯でゆすいで箸箱に直す。晩酌はしない。あとかたずけは母がして，食器は食器棚に直す。

J．食事中の話題について

祖父母だけで食事をしている時は主に祖父が話している。新聞のニュースやテレビの話，昔の思い出などを大きな声で話し，祖母は聞いている。今は食事をする時にテレビをかけているので，そのことを話題にしていることが多い。家族みんなで食事をする時は世間話をするが，やはり自慢話や昔の思い出話が多く，楽しそうである。

食事の行儀作法は昔にくらべると厳しくなくなったのかもしれないが，現在でも昔から伝わってきたことは変わっていない。

調査者　No. 29(f)	調査日　昭和58年7月
被調査者　T.K.　性別　f	出生年　明治44年(71歳)(第1子)
出生地　大阪府大阪市北区	
生家の職業　地主・貸家業	
現住所　兵庫県神戸市東灘区	
住所の変更とその年度　大阪市北区―神戸市東灘区(昭10)	
最終学歴　大阪市立O高等女学校	結婚　昭和10年(23歳)
被調査者との関係　母の知人	

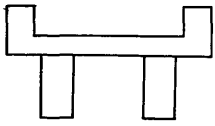
1．お膳（箱膳など）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

図19のように，お膳には男膳と女膳の2種類があり，家の主である父親だけが男膳を使って，あとの家族，祖母，母親，子供達，女中達はみな女膳で食べていました。そのお膳の呼び方は特になく，普通に「お膳」と言っていました。そのお膳は，大正10年頃から使われるようなり，次にちゃぶ台で食べるようになる昭和初期まで使われました。その時期の家族構成は，祖母，父親，母親，娘2人（内1人，本人），女中2人の計7人家族でした。その時期の住所は，出生地と同じで，大阪市北区でした。住環境は，まわりに，たくさん家が建ちならんでいる住宅地でした。その時期に，戸主である父親は，地主で貸家をやっていました。それでずっと家に父親がいたので，小さい頃は父親は何もやっていないのかと思っていました。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は「台所」と呼んでいました。この部屋は台所専用で他の事には使いません



男膳

図19

女膳

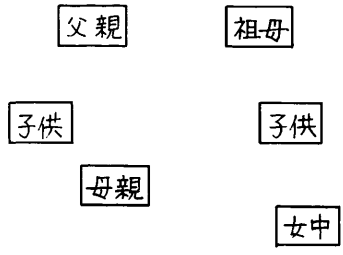


図20

でした。台所は八帖で，水屋や膳棚，それに長火鉢もありました。食事専用と言いましたが，ちょっとした話はできる場所です。

C．どのようなすわり方で食べたか

図20のような座席の順番で食事をしました。そして，女中さんだけは，お上（カミ）の食事の後食べましたが，そのほかは，そろって食べました。食べる場所は，たたみの上で座ぶとんは女中さん以外みんな使っていました。女中さんも，ふかふかの座ぶとんではないかもしれませんが，何かそれらしき物を敷いていたような気もします。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝は，ご飯，みそ汁，漬物，佃煮類といったすごく簡単なものです。

昼は，ご飯，野菜煮物，漬物，ちょっとした魚の干物，すまし汁など。

晩は，ご飯，魚の煮付か焼魚，貝類，野菜，肉類（かしわやかもが多かった）などです。それで父親には，一品ぐらいちがうものが付いたり，同じ料理でも，量を多くつけたりしていました。

E．食事のときのご飯の給仕について

よそうのは，ほとんど女中さんか母親でしたが，たまには娘がよそうこともありました。よそう順序は，お膳の順位にもあるように，父親，祖母，子供，母親の順です。神仏へのお供えは，母親か娘がしました。晩しゃくも父親だけですがしていました。

F．食事のあとかたずけについて

食べおわったあとすぐ，茶わんを湯茶でゆすいでいました。これは母親がそうするので見てまねをしたのです。でもしない時もあり，その時はそのまま洗いました。家族全員の食事が終わってから，女中さんが食器をお膳ごとさげて洗いました。洗った食器は水屋の中にしまいます。

G．食器の共用について

共用の食器には，大皿や大鉢があり，天ぷらや和物やそうめんや煮しめなどが盛られました。箸箱は，各自にあり，お膳の時期はずっと使っていました。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の上げ下ろしについて言われることはありませんでした。食べる順序は，決められてませんでしたが，ごはんを食べたらおかずそしてまたごはんを食べるというように自然になっていました。食事中にはおしゃべりもしましたが，口の中に物がはいっている時にしゃべるとしかられました。姿勢は，正座で，今の人みたいにくずして坐ることもなかったのでしかられることもなかったです。その他には，子供たちが遊びながら，例えばお人形を抱いたままとか，子供たち2人でやりあいながら食事をするのはだめでした。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめには，「いただきます。」

食べおわりには，「ごちそうさん。」

J．食事中の話題について

父親がおもに話して，それについて全員が何かを言うといった感じでした。その話の内容は，当時のその日の出来事がほとんどだったと思います。

2．ちゃぶ台（しっぽく台，飯台など）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

図21のような円形の台で食べていました。これは，折りたたみ式なので部屋のすみに置けるので場所をとらず非常に便利です。この台のことは「ちゃぶ台」とよんでいました。これは，昭和初期から使われるようになり，次に椅子式のテーブルにかわる昭和30年頃まで使っていました。この時期の家族も結婚する昭和10年までは，前と同じ，祖母，父親，母親，娘2人（本人を含む），女中2人の7人でした。住んでいたのも前と同じ大阪市北区で，住宅地です。その頃も父親は地主で貸家，つまり不動産業をやってました。そして，食事の形式がかわったのは，だんだんとわずらわしさをさけて簡単になったからだと思います。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は台所とよんでいました。それで，台所にあるものも前とまったく同じで，水屋，長火鉢などです。

C．どのようなすわり方で食べていたか

図22のようにすわって，みんなそろって食べました。女中さん2人は，あとから食べていたようでした。食べる場所は，タタミの上で座ぶとんを敷いていました。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

お膳で食べていた時とほとんど同じで，朝は，ご飯，みそ汁，漬物，佃煮類などです。昼は，ご飯，すまし汁，漬物，野菜の煮物，ちょっとした魚の干物など。晩は，ご飯，魚の煮付か焼いたもの，貝類，野菜，かしわ，肉，くじらなど。

それで父親はいつも量が多めにつけられてました。

E．食事のときのご飯の給仕について

ご飯をよそうのは，だいたい女中さんですがたまに，母や娘たちもやりました。その順序は，父，祖母，子供，母でした。神仏へのお供えは，ほとんど母ですが，いない時や病気で寝ているという時は娘がしました。必ず女の役目でした。晩しゃくは父だけがしていました。

F．食事のあとかたずけについて

食べおわったあとすぐにお茶わんの中にお湯を入れてゆすぐということはなかったですけど，すぐに流しで洗っていました。それをさげるのは女中さんたちで，食器も洗っていました。

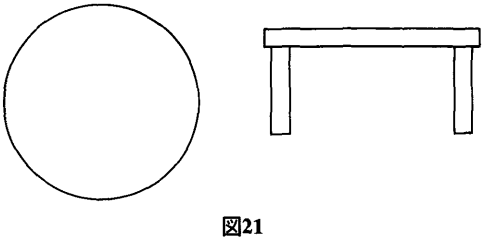


図21

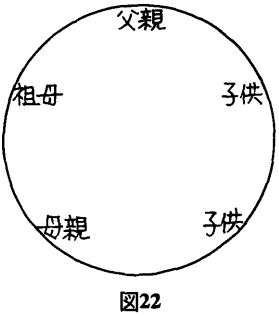


図22

食器は，台所の水屋の中にしまいました。

G．食器の共用について

共用の食器には，大皿・大鉢などがあって天ぷらやそーめんや煮メなどを盛って，みんなで好きなだけ取って食べてました。箸箱は，各自きまったものを使っていました。だからぜったいに他人のお箸を使うというのは考えられません。

H．食事中にしてはならないことについて

食事中にしてはいけないとしかられたことがないのでよくわかりませんが，食べる時の姿勢は，足をくずさずちゃんと正座していました。それに，箸の持ち方で左手をそえて持つように気を付けていたように思います。それから，口に物がはいっている時はおしゃべりはしませんでした。口の中のものが見えたらきたないですからね。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは，「いただきます。」

食べおわりは，「ごちそうさん。」

と言っていました。

J．食事中の話題について

やっぱり，話の中心となっていたのは父で，話題は子供のその日にあった事が多かったと思います。たまに，むずかしい事を父が話すので他が相手をしなかったりすると気げんが悪くなったりしました。

3．現在（椅子式テーブルなど）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

昭和30年頃よりボツボツ椅子にすわってテーブルで食べるようになりました。これは「テーブル」と呼んでいました。このころには私も結婚して，子供が1人いましたので3人家族でした。現在は，娘もお嫁に行きましたので，夫と2人です。住んでいる所は現在神戸市東灘区で住宅地に暮らしております。夫の職業は，銀行員でした。現在は，家をもっていますのでそれを貸してのんびりとしています。食事の形式が変化したのは，外国の様式がどんどんはいってきて，正座するよりも椅子にすわって食べる方が足が疲れなくていいからだと思います。それにこの頃になるとだんだんと人を使うのがむずかしくなり簡単になったと思います。今となると，昔のように形式ばって食事していたのがうそのようです。

B．食事をする部屋について

食事をする所は，台所と呼んでいて，お友達が来た時に話したりしていますし，テレビが置いてあるので，食事のあとそのまま見ている時もあります。台所は8帖で，食器棚，テーブル，椅子，冷蔵庫，テレビ，流し，などがあります。

C．どのようなすわり方で食べたか

図23のようなすわり方で食事をしました。3人家族なので，そろわないと味けないということからなるべくそろって食べるようにしましたが，そろわない時もありました。台所は板間になっていて，椅子の上に座ぶとんを敷いて座わっています。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝は，ごはん，みそ汁，漬物，玉子焼など，それか，パン，サラダ，オムレツ，紅茶などの時もあります。現在はパン食の方が簡単なのでよく食べます。

昼は，ごはん，野菜の煮物，漬物，ちょっとした魚といったように昔から変わりありませんが，サンドイッチ，ホットドッグ，うどん，そば，スパゲッティなどのパン類やめん類を食べるようになりました。それから，ごはんを油でいためる焼めしなども，残り物でできるのでよ

くします。

夜は，ごはん，肉類か魚類，付け合わせの野菜などです。肉類でも牛・豚・かしわといろいろ食べ，ハム・ソーセージ・チルドビーフ・ミンチなども使います。それから主なおかずに，コロッケやフライなど油で揚げたものが多くなっています。味つけが昔よりこってりした洋風のものもたまに食べます。特別にちがったものは，お酒の肴などをたまに夫のために作ったりします。

E．食事のときのご飯の給仕について

よそうのは，妻の私で，夫から先によそいます。仏さんへのお供えも私がします。晩しゃくは，量は少ないですが有りまして，妻や娘も大人になりましてからはするようになりました。

F．食事のあとかたずけについて

食器は，食べ終わるとすぐに，流しの水の中につけておき，しばらくしてから妻の私が洗います。洗った食器はちゃんと食器棚にしまいます。

G．食器の共用について

共用の食器には，大皿・大鉢などがあり，天ぷら，そうめん，から揚げ，中華料理などを盛ります。今までの時期にもそうだったのですが，お正月の重箱も共用の食器にはいるでしょうか。この中には，現在でも入れるおせち料理，煮メ，かまぼこ，その他いろいろあります。箸箱は，椅子式のテーブルで食事するようになってからは，なくなりました。しかし，各自のものはきまっていて，そのつど洗って使います。

H．食事中にしてはならないことについて

これについては特にありませんが，口の中に物がはいっている時はしゃべらないとか，足をくんだりせず，きちんとすわって食べるといった常識的なことは，守られています。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは，「いただきます。」

食べおわりは，「ごちそうさん。」といいます。

J．食事中の話題について

特にだれがおもにということなく，みんなで，子供の事や学校の事や世間にあった事について話します。

(註)

これ（図24）は，箱膳で男女の使用人が使うものです。上のふたを裏返すとぜんになり，使わない時には，中に茶わん，箸箱，お皿などを入れておきました。

これ（図25）は女膳です。

①ふたの様になっていてそれを裏返すと，お茶碗などがのるおぜんになります。

②箸箱などをなおす中棚になっています。

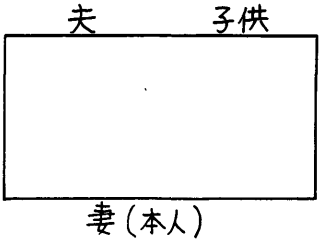


図23

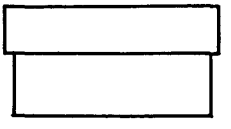


図24

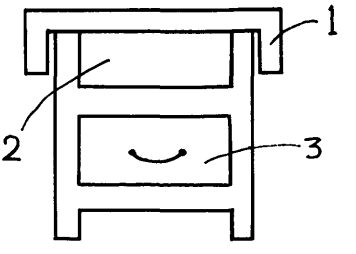


図25

③引き出しになっていて，中には，お茶碗，お皿くらいは入る。

調査者　No. 35(f)	調査日　昭和58年 8・9月14・16日(日・金曜日)
被調査者　S.F.　性別　f	出生年　明治37年(80歳)(第1子)
出生地　徳島県三好郡M町	
生家の職業　農業	
現住所　大阪府大阪市西淀川区O町	
住所の変更とその年度　徳島—大阪(大12)	
最終学歴　K尋常高等小学校	結婚　大正12年(19歳)
被調査者との関係　母方の祖母	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

どのような形式で食事がなされていたかというと箱膳であり，食器の配置は図26のようであった。ただしおかずは，お祭りの時など何かある時だけである。この箱膳のことを祖母の家庭では「飯台」と呼んでいた。男の人が使用しているものの方が女の人や子供が使用しているものより大きかった。祖母の知っている限りでは，祖母が生まれた時から結婚するまで続いていたが，結婚して徳島を離れてからのことははっきりしないが，しばらくは続いていたということである。その時期の家族構成は祖母から見て父方の祖父と両親，弟，弟，妹という順の兄弟で，祖母が小さい頃に遠くの親類がかった子守りがいた。この時期の住所は徳島県三好郡M町で，この時期の住環境は農業養蚕地区で駅前ぐらいに商店があっただけであった。この時期の戸主は祖母の父であり，職業は国鉄の職員であった。もちろん農家ではあったが土地が少なかったため兼業農家であった。祖母の祖父と母親が農作業をやり，父親は朝出勤する前と夕方帰ってからに農作業をした。祖母の知っている限りでは，食事の形式が変化していないため，変化したとする理由はわからない。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋のことは「土間」と呼んでおり，食事以外に利用したとすると，養蚕のちょうどまゆの時期にかいこ棚を作っていた。部屋の大きさは10畳ぐらいで，半分より少し多めの広さのゆかが少し高くなっており，食事をする部屋の横に一般に土間とよばれるところがあり，そこにかまどがあった。祖母はそれを「くんど」といい，「おくどさん」とよんでいた。かまどには「大がま」といってお豆腐，お味噌，お醤油を作る時に使用したものがあった。祖母の娘時代には，れんが作りの「西洋くど」といったかまど以外に水を入れておくとお湯が自然に沸く装置がついたものがあった。そして部屋の片すみの神棚に「三寶荒神」さんが祭ってあった。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席の順をあらわすために部屋全体の図をかくと，図27のようになる。朝，晩は全員そろって食事するが，昼は仕事や学校のためまちまちである。祖母の祖父は隠居するまでは家族みんなと食事を共にとるが，隠居してからは1人で食べた。節句や祭りなどの祭日，これを祖母らは「もんび」とよんでいたが，この時には一緒に食事をとっていた。祖父，父親が食べるところは一段高くなっていて，畳があり，祖母らが食べるところは板敷きであった。座布団の有無については祖母の記憶があまりはっきりしていないので断定はできないが，祖父，父親，子供である祖母らが使用していて，母親が使用していたかどうかはわからない。

D．ご飯のほかには何を食べ，何を飲んでいたか。

まず「ご飯」には麦が混じっていた。朝は味噌汁や野菜をたいたお汁，そして漬けもので，

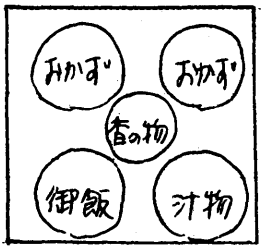


図26

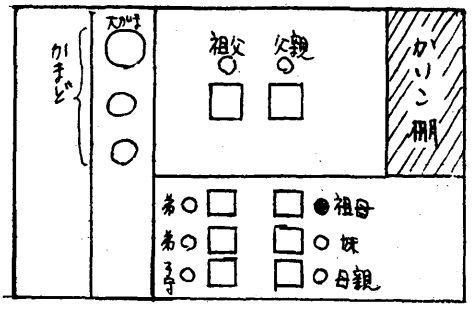


図27

昼も家にいれば同様のもので，晩も同様でおかずは特にないが，あるとすれば例えば家でとれたおいもをたいたものなどである。魚，豆腐は「もんび」に食べた。農村なのでそのお魚でも塩サバ，めざしのようなものであった。特に誰も違ったものは食べていなかったようである。

E．食事のときのご飯の給仕について

母親が必ずご飯をよそっていて，よそう順序は祖父，父親，そして子供であったが，子供の中での順序は特に記憶にないそうで，最後は母親であった。神仏へのお供えは，ご飯を新しくたいた時，一番最初に母親がよそっていた。晩酌は祖父のみがおこなっていた。

F．食事のあとかたずけについて

食べ終わったあと，すぐに茶わんや箸をお茶でゆすぐだけであった。そして毎月1日，これを祖母は「おついたち」とよぶが，この日に茶わんなどを洗っていた。他に「もんび」にも洗っていた。洗うのはその家庭の長女がすることであったので，ある程度大きくなってから祖母がやっていた。祖母は結婚後，祖父の茶わんを洗うのを祖父と仲の良い2番目の弟に頼んではきたがしばらく心配だったといっている。食器はさげるのではなく箱にしまうだけで，食器をしまった箱膳は座敷の片はしに重ねておいてあった。

G．食器の共用について

ふだんは共用の食器はなく，多くの漬け物や，正月や祭りのとき盛られてでてくるお煮しめぐらいがあっただけである。箸箱に関しての祖母の記憶はあやふやではっきりしないが，父親だけが持っていたようで，時期などもはっきりしない。

H．食事中にしてはならないことについて

常識であると祖母は思っていたので，注意された内容ははっきり残っていないらしいが，肘が高すぎると祖父によく言われたようだ。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは「いただきます」，食べおわりは「ごちそうさま」といっており，現在と変わりがないが，変わったこととして，「おついたち」には，祖母ら子供たちは，祖父のところに「おめでとうございます」とあいさつにいったと言っている。

J．食事中の話題について

祖母には話題に関しての記憶がまるっきりないということであるが，農家であるためにおもに父親が母親とその日の田畑での仕事の内容を暦を見ながら話をしていたという記憶だけがある。季節ごとの仕事の進み具合，農作物につく虫の話などであった。

以上が祖母が結婚するまでのことである。次は子供であった祖母が「主婦」「母親」となってからのことである。

2．ちゃぶ台の時期

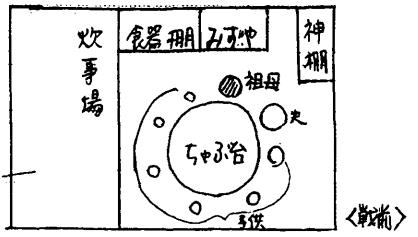


図28

A．食事の形式と家族環境について

丸いちゃぶ台に，食器の配置は箱膳の時期と変わらないように並べてあった。これは，「ちゃぶ台」と呼んでおり，祖母が結婚してからはじまり，現在でも続いている。祖母が主婦として主導権のある間の家族構成は，祖母の夫，子供6人であった。昭和23年に長男が結婚し，夫が亡くなり，子供のそれぞれが独立していったあと，徐々に主婦の主導権は長男の嫁にうつり，その頃の家族構成は祖母，長男夫婦，孫3人となり，現在は孫2人が独立したので，家族は4人である。この時期の住所はずっと大阪市西淀川区O町内であるが，結婚後，戦後しばらく，それ以降と3か所に住んでいる。この時期の環境は商業，工業で，それに従事する人々の住宅があったが団地はなかった。この時期は長いので戸主が祖母の夫から長男への変わるが，両方とも職業は化学工業に属する石けん製造である。食事の形式は特に変化していないが，食事の内容として戦後にパン食，うどんがあらわれてきた。戦前はパンといってもむしパンであった。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は「台所」と呼ばれており，この部屋は食事以外には特に利用しなかった。部屋の情景は，ちゃぶ台があり，壁にそってみずや，食器棚などがあり，台所のすみに神棚があり現在も三寶荒神が祭ってある。戦前すんでいた家には土間である炊事場があり，かまどがあった。現在は普通の流しとコンロである。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席の順番は丸いちゃぶ台であるので特に順番はないが図28のようになる。朝，晩はそろって食べたが，昼はバラバラで家にいる者だけでそろって食事をしていた。食べる場所は畳で，座布団は祖母の夫が戸主であった間は夫だけで，現在は家族すべてが使用している。（図は戦前の座わり方だが，戦後は座わる人が変化するだけことである。）

D．ご飯の他には何を食べ，何を飲んでいたか

朝はお味噌汁とお漬け物，昼も同様で朝ののこりものがあり，晩もほぼ同様でおかずとしては魚がでた。しかし祖母の調理としてこの魚はほとんどたいたもので，焼くということはあまりなかった。特別に違ったものを食べていたのは祖母の夫だけで，毎晩ではないがお造りを食べていた。

E．食事の時のご飯の給仕について

ご飯は祖母がよそったが，長男が結婚すると徐々に長男の嫁がよそうようになる。よそう順序は祖母から見て夫，子供6人，最後に自分で，神仏のお供えは箱膳の時期と同様に新しくご飯を炊いた時最初によそった。結婚した当時は晩酌はあまりなかったが，しばらくして回数は少々増えた。

F．食事のあとかたずけについて

食べたあと茶わんや箸を湯茶でゆすぐことはせず，子供や祖母が食器をすぐ下げて，毎食後祖母が洗っていた。洗った食器はそのままおいておくのではなく，台所の食器棚にしまっておいた。

G．食器の共用について

共用の食器にはどんぶりや料理のもり皿などがあり，それぞれのためにつくられたおかずの

ほかに，いる人だけがとり，いらない人はとらないですむように共用の食器におかずを盛っていた。それにはお煮しめ，コロッケ，天ぷらなどがあった。箸箱は誰も使用しなかった。

H．食事中にしてはならないことについて

これも箱膳の時期と同様に注意するような行動は祖母にとって常識でわかるようなことであるから，特に記憶はないようである。この調査には私の母親も一緒に祖母の家に来たが，母は幼い頃，食べ物を残したり，一つの物ばかり食べてまんべんなく食べなかったり，好き嫌いを少しでもいうと，厳しく怒られたと言っている。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは「いただきます」，食べ終わりは「ごちそうさま」と家族のそれぞれが言った。これは現在も同じである。

J．食事中の話題について

H．でも話したように厳しく怒られるので子供らは恐くて急におとなしくなってしゃべらなくなってしまうので，おもに話をするのは祖母とその夫であった。話題は特に何が多かったということはないが，父親と子供である母らの間にはあまり会話がなかった。しかし少ししか話さない父親の言ったことは印象に残っているらしい。

以上が現在を含んだちゃぶ台の時期である。このちゃぶ台の時期に，主婦は祖母から長男の嫁へと変わるが，おこなっていることはそう違いがないので祖母のをおもに結果とした。

調査者　No. 52(f)	調査日　昭和58年9月15日(木曜日)
被調査者　O.I.　性別　m	出生年　明治37年(79歳)(第3子)
出生地　兵庫県川辺郡I町	
生家の職業　農業	
現住所　兵庫県尼崎市K町	
住所の変更とその年度　川辺郡I町—尼崎市K町(昭28)	
最終学歴　兵庫県立M師範学校	結婚　昭和28年(49歳)，初めの結婚は昭和4年(25歳のとき)
被調査者との関係　祖父	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

食事の時はお膳と呼んでいたものが，各自にあった。お膳を使っていた時期は，本人（被調査者）が生まれた時から，15才（大正7年）の頃まで。その時期の家族構成は，父，母，兄，兄嫁，兄の娘，姉，本人，女中，男衆で住所は兵庫県川辺郡I町でそこは農業地であり，戸主（父）の職業は農業であった。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は台所と呼ばれており，食事以外には，みんながあつまって雑談などをする所でもあった。その部屋の大きさは，だいたい20畳ぐらいあって，部屋の中には，大きな囲炉裏があり，そなえつけの戸棚や，食事にはえや，ごみがかからないように，あみでできたつりだながあり，1m以上もある大きなぶんぶん時計（振り時計のこと）や，ちょうちんなどがあった。

C．どのようなすわり方で食べたか

食事は，たたみの上で，女中，男衆以外の家族の者がざぶとんをひいて，みんなそろってたべていた（図29）。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝食は，ごはん，みそ汁，つけもの。昼食は，ごはん，みそ汁，まるぼし，つけものなど。夕食は，ごはん，みそ汁，まるぼし，野菜料理，魚料理，つけものなどをたべていて，父親（戸主）だけが，特別に違ったごちそうを食べていた。

E．食事のときのご飯の給仕について

ごはんをよそうのは，兄嫁がしていて，よそう順序は，父親・母親・兄・本人・長女という順序。神仏へのお供えは，毎朝，炊きたてのご飯とお茶をしていた。晩しゃくは，皆，お酒がきらいだったのでなかった。

F．食事のあとのかたづけについて

食べおわったあと，すぐに，各自が，お茶わんと箸を湯茶でゆすいで，それをはじめのようにお膳の中にふせて，箸は箸箱にいれて，そしてお膳のふたをしめてそれを戸棚にしまっていたので，食器は，湯茶でゆすぐだけで洗っていなかった。

G．食器の共用について

共用の食器には，お茶のコップ（湯のみ），大きなお皿，こばちなどがあり，お茶のコップには，お茶をいれ，それをおぼんにのせて，みんながすわっている所の真ん中においてそれぞれにくばっていた。大きなお皿には，ごぼうの煮たものなどその日たくさんつくった料理をいれており，小ばちには，おつけものをいれていた。箸箱は，本人が生まれた時からあって，14，5才ぐらいの時まであった。

H．食事中にしてはならないことについて

食事中，してはいけないことは，はなをかんだり，トイレにいくなど中座をしてはいけなかった。食事中のおしゃべりは注意されなくて，むしろみんなでたのしく話をしながらたべていた。食事中の姿勢は，必ず正座でいなければならなかった。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは，主人の命令でいただきますといってからたべ，食べおわりは，ごちそうさまといっていた。

J．食事中の話題について

食事中の話題は，世間話，その日一日にあったことをそれぞれが話をしていたが，よくしゃべるのは父であった。

2．ちゃぶ台の時期

A．食事の形式と家庭環境について

食事をする時は，ちゃぶ台と呼ぶ丸い台のまわりにみんながすわっていた。それは，本人が14，5才（大正8年）ぐらいからはじまった。（いつ頃までかは，はっきりしない。）その時期の家族構成は，父，母，兄，兄嫁，兄の娘，本人であった。住所は，兵庫県川辺郡I町で農業地であった。その時期の戸主（兄）の職業は，小学校教員。お膳からちゃぶ台へうつった理由は，お膳は，食器も洗わず，ゆすぐだけだったので，不潔なため。

B．食事をする部屋について

その部屋のことを，台所とよんでおり，食事以外は，みんなが集まって，よもやま話をしたりしていた。その部屋の大きさは，広くてだいたい20畳ぐらいあり，そこには囲炉裏があり，そなえつけの戸棚があり，大きな振り子のついた時計，ちょうちんなどがおいてあった。

C．どのようなすわり方で食べたか

食事はみんなそろって食べており，食べる所はたたみの上で，みんなざぶとんを使ってたべていた。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

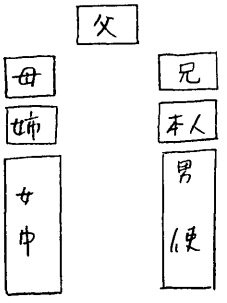


図29

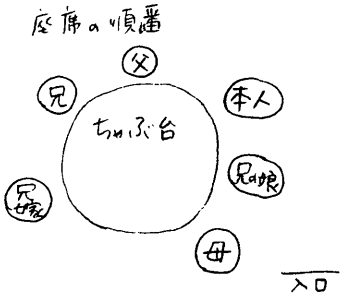


図30

朝食は，ごはん・みそ汁・つけもの。昼食は，ごはん・みそ汁・まるぼし・つけもの。夕食は，ごはん・みそ汁・野菜料理・魚料理・つけもの。食事は，みんなが同じものを食べていて，だれも特別なものは食べていなかった。

E．食事のときのご飯の給仕について

ごはんをよそうのは，兄嫁がしており，よそう順序は特別になかった。神仏へのお供えは毎朝，炊きたてのご飯と，お茶をしていた。晩しゃくの有無は，皆お酒が嫌いだったのでなかった。

F．食事のあとかたずけについて

食べおわったあと，茶わんやおはしを湯茶でゆすいだりしていなかった。食後すぐに，兄嫁が食器をさげて，さげてすぐに食器を洗っていた。そして洗った食器は，台所にそなえつけてある戸棚にしまっていた。

G．食器の共用について

共用の食器には，湯のみ，大きなお皿，小ばちなどがあり，小ばちにはおつけものをいれ，大きなお皿には，多くたいた副食物をいれてちゃぶ台の真ん中においていた。箸箱は，もうなくなっており，お箸は，はし立てにいれてだしていた。

H．食事中にしてはならないことについて

食事中の姿勢は，必ず正座をしていた。食べる順序などはきまっていなかった。おしゃべりは，全くかまわなくて，みんなで話しをしながら食べていた。食事にしてはならないことは，途中でトイレに行くなど中座をしてはいけなかった。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは，いただきますをいって食べ，食べおわりは，ごちそうさまや，うまかったわ，といっておわっていた。

J．食事中の話題について

食事中は，おもに話しをしていたのは父で，兄は無口だった。食事中の話題は，世間話やその日にあったできごとなどをみんなで話していた。

3．現在の時期

A．食事の形式と家庭環境について

食事をする時は，テーブルで，いすにすわって食べている。テーブルで食べはじめたのは，昭和28年頃から現在も続いている。その時期の家族は，本人（戸主）・妻・娘2人（現在は本人と妻のみ）で，住所は兵庫県尼崎市で，住宅地であり，戸主の職業は会社員だったが，現在は退職し，マンション経営と下宿業をやっている。ちゃぶ台からテーブルにかわった理由は，

ちゃぶ台だと正座するため足がいたくなっていたためと，テーブルだと下は板間のため，何かこぼしても，ふくときれいになるため清潔なので。

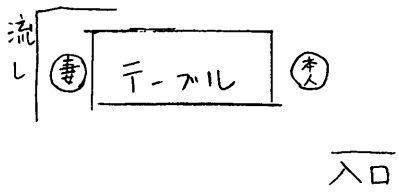


図31

B．食事をする部屋について

食事をする部屋を台所と呼んでおり，食事以外では，雑談などをする所でもある。その部屋の大きさは，だいたい8畳くらいで，水屋，冷蔵庫，テレビなどがおいてある。

C．どのようなすわり方で食べたか

食事は，時々いっしょに食べており，食べる所は板の間で，いすにすわっているのでざぶとんは使っていない（図31）。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝食は，ごはんをたべずに，パンとコーヒーと卵にサラダを食べている。昼食は，ごはんとみそ汁とさかなどを食べている。夕食はごはん，みそ汁，魚料理，野菜料理，つけものなどを食べている。だれかが特別にちがったものは，たべていない。

E．食事のときのご飯の給仕について

ごはんをよそうのは，妻で，よそう順序はなく，神仏へのお供はしておらず，晩しゃくもしていない。

F．食事のあとかたずけについて

食べおわったあとすぐに，茶わんなどを湯茶でゆすいだりはしない。食べおわるとすぐに妻が食器をかたづけて，すぐに食器を洗い，その食器を水屋にしまう。

G．食器の共用について

共用の食器は，みそ汁のおわんや，小皿，大皿，小ばち，ガラスのコップなどがあり，茶わんと，湯のみ以外はほとんどすべて共用である。お皿には，その日のおかずがいれられ小ばちなどには，つけものなどがいれられている。箸箱は，なくて，箸立てにお箸がいれられている。

H．食事中にしてはならないことについて

食事中にしてはならないことは，たばこをすわないこと，みだりに席をたたないことなどであり，その他は別にない。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめも，食べおわりも，何もいわずに食べはじめ，食べおわる。

J．食事中の話題について

食事中の話題は，家の商売のことや，子供のはなしや，世間話などをして，本人と妻が同じくらい話しをしている。

調査者　No. 55（f）	調査日　昭和58年9月8日（木曜日）
被調査者　M.S.　性別　f	出生年　明治35年（82歳）（第7子）
出生地　徳島県服嘉郡I村	
生家の職業　農業	
現住所　兵庫県神戸市兵庫区A町	
住所の変更とその年度　徳島—神戸市（大12）	
最終学歴　尋常小学校	結婚　大正12年（22歳）
被調査者との関係　祖母	

1．お膳（箱膳など）の時期

A．もの心のついた時から，お膳で食べていた。皆，1人1人別々にお膳を持っていた。そのお膳は，ややこしい名などついてなくて，単に「お膳」と呼んでいた（図32）。

お膳を使ったごはんは生まれた時から，こっち（神戸）へ嫁いで少しの間，続いた。

家族構成は，父・母・祖母・兄弟姉妹7人（男4人，女3人）→私は末っ子だった。

その時期の住所は，出生地と同じで徳島県那嘉郡I村。

生家は，お米を作ったり野菜を作ったりして，食べた余った分は売って肥やしや農具を買った。借りていた土地からできた米は年貢として納めていた。借りていた土地もあったし自分の家の土地もあった。家じゅうの者みんなが百姓だった。だからお父さんの職業というと農業になる。

食事の形式は変化なし。変わることなくみんな，お膳を使ったごはんだった。

B．食事をする部屋は，茶の間と呼んでいた。茶の間は，ごはんを食べる時に使うだけで，寝たりするのは奥の部屋とか表の部屋を使った。茶の間は，8畳あって，水屋や膳棚（みんなのお膳をしまってある）を置いていた。はき出しの戸があったので明るかった。家じゅうで一番明るい所（図33）。

C．家屋のうちわけ

座席の順番は父母の席はだいたい決まっていた。後は自由（図34）。

仕事の都合でそろわへん時もあったし，みんなそろって食べる事もある。まちまちだった。

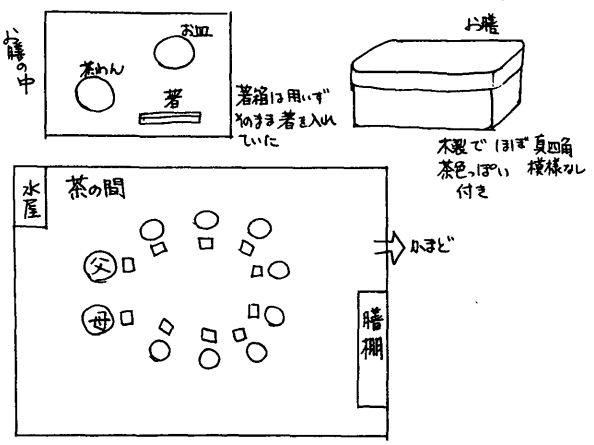


図32

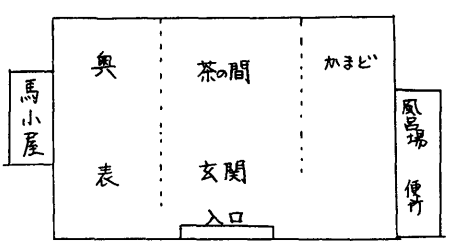


図33

平屋建て

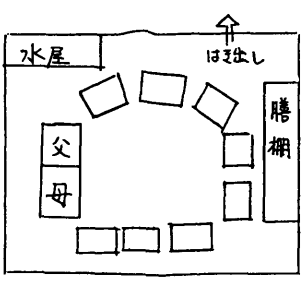


図34

食べる場所は，畳敷きの部屋だった。奥の部屋も表の部屋も畳敷き，座ぶとんもみんな，たいてい使った。

D．朝→おみそ汁・佃煮
昼→煮物
晩→煮物・おつゆ
皆いっしょのものを食べていた。

E．おひつは，みんなのまん中に置いとうので各自でつぎいく，時たま母が父のごはんをつぐ。順番など無くて食べてお茶わんが空になった者が各自でついだり，手のすいた者がよそう，仏さんへは，ごはんをたいたらすぐにお供えする。母とか私ら兄弟姉妹，祖母が供える。晩酌は無かった。

F．食べたらすぐにお水でゆすいだ。お母さんや兄弟姉妹がごはんの用意をする。食器を洗うのはお母さんで私ら女兄弟3人が手伝う。洗った食器は，お膳にしまってお膳は膳棚に置いておく。

G．共用の食器→お汁茶わん，お皿，お茶わん，お鉢などで，お漬物や煮物を盛っていた。箸箱は使った事がない。

H．箸の上げ下ろしについては何もいわれへなんだし，その他，何もいわれたこともなかったような気がするけど，お茶わんに，ごはん粒をつけていたままにしとくと蛇が出て来て，そのごはん粒を食べに来るといわれた。
食事中はあまりしゃべらなかった。ごはん時にしゃべらんでも他にようけしゃべれる，男しゅうは，あぐらをかいて女しゅうは正座だった。

I．「いただきます」
「ごちそうさん」

J．誰がしゃべるという事もなかった。ほとんどみんな黙々と食べていたけど，仕事の段取りや作業の手順，ああしよう，こうしようという話はしていたかもしれへん。

2．ちゃぶ台（しっぽく台，飯台など）の時期

A．神戸に嫁いでから，お店を持った。おもち，饅頭，生菓子を造って売った。食事は“丸の食卓”という台を使っていた（図35）。
嫁いでからお店を閉めるまでの間ずっとこんな食事やった。22歳から44年間，お店をしていた。その時期の家族構成は，初め，使用人を含めて主人，私と手伝ってくれる人2人の計4人だった。その後，息子や嫁や孫みんな合わせて8人になった。その時期の住所は神戸市兵庫区A町で，戸主の職業というと製菓業になる。
こっち（神戸）に来て，お店を持つことになったし，お膳は段々使うこともなくなった。そういう時機だった。

B．食事する部屋には，これといった呼び名は無かった。食事以外でも，ちょっとした仕事（お菓子の型抜きなど）で使っていた。そこは，1個の独立した部屋というのではなくて中座敷からかまど湯へ張り出した板の間の空間という感じだった。ちょっとした食器棚は置いてあった。

C．座席の順番は別に決まっていなかったし，仕事の関係で，そろったりそろわなかったりしたが，晩ごはんはみんないっしょに食べていた。座ぶとんは，みんな使った。わりに広い板の間だった（図36）。

D．朝—おみそ汁，漬け物，ちょっとしたおかず
昼—漬け物，みそ
晩—いろいろなおかず

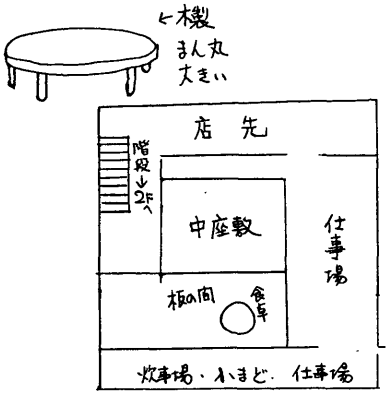


図35

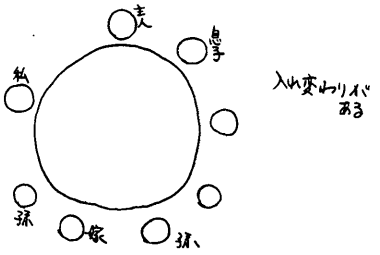


図36

特別にちがうものを食べるということもなかった。

E．だれがよそうという事もなかったが，だいたいは，女手の私や嫁がよそっていた。食事のことは女がやっていた。よそう順序は，男しゅうから女しゅうへという風についでいきその場その場で順序は変わったが，主人，息子，手伝ってくれる人たち，それから女，子供という風だった。神仏へのお供えは，私ら女がやった。晩しゃくは無く特別な日にお酒を飲む程度だった。

F．食べ終わるとみんなの食べた食器を嫁といっしょに洗った。洗い場はすぐの所にあったので楽だった。洗った食器は，食器棚にしまった。食器棚は，板の間の端の方にあった。

G．共用の食器というか，お茶わんとお箸は各自銘々自分のものが決められていたが，その他，お皿やお汁わんや鉢その他の食器はみんなで使っていた。箸箱はなく，お箸はひとまとめにして，箸入れに入れて置いた。

H．食事中にしてはならないことは別になかったが，ただ，ごはんを残したりするのはもったいない，ばちがあたるとはいってきた。姿勢は，やっぱり男はあぐらで女は正座，けっこう，いろいろとしゃべっていた。

I．「いただきます」

「ごちそうさん」又は「ごちそうさまでした」。

J．みんな，それぞれ，しゃべっていた。仕事のことや，世間話，家族の健康状態や，学校の話，話題の中心は孫たちだった。

3．現在（椅子式テーブルなど）の時期

A．台所にある食卓で食事をしている。一家4人で椅子式テーブルで，たいてい食事をとっているが，気のむいた時や鍋物などの時は，居間で，ふつうのテーブルを出して日本すわりをして食べることもある（図37）。

ふつうに，テーブルとか食卓と呼んでいる。

お店を立ち退きでこわして，こちらの家（同じ町内）を新築してから，家屋の造りが違うので形式も違ってきた。

家族構成は，私，息子，嫁，孫1人（もう1人の孫は独立して家にはいない）。

住所は神戸市兵庫区A町（前の店のあった同じ町内）で戸主の職業は，公務員である。食事の形式の変化した理由として家屋の造りの変化，時代様式の変化，嫁の代への移行ということが，挙げられる。それとやっぱり職業の変化という所か。

B．台所と呼んでいる。又は食卓，時々は，台所でなくて居間で食べることもある。椅子よりも，ちゃんとお膳で食べた方が食べた気がする。

台所は，流し，コンロ，冷蔵庫，食器棚，食卓，その他炊事用品一般，置かれていて，板敷きの6畳である。

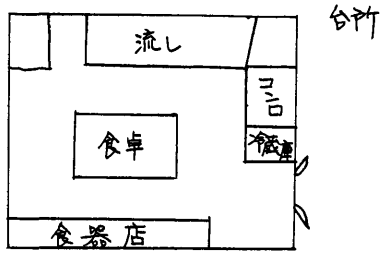


図37

C．だいたい，家族みんな，そろって食べることが多いがそうでない日もある（図38）。

台所は板敷きで椅子，居間で食べる時は座ぶとんを使う。

D．朝―ご飯食，パン食

昼―何か，そこらへんにあるおかず

晩―種々多様なおかず

別に違ったものは食べていないが量は違う。

E．息子は自分ではよそわないが，その他の者は各自でよそう。息子が一番，あとは順不同。神仏へのお供えは，仏様へは，毎晩供えている。神様には何か特別な事があった日にお供えをしている。

晩しゃくは，時々。

F．嫁と孫でかたづけている。

箸は，自分のものは湯茶ですすいで箸箱に入れている。洗った食器は，食器棚へ。

G．共用の食器というとほとんどが，そうである。各自の食器は，お茶わんと箸と湯のみであるから，それ以外は共用。箸箱は，使っていない。

H．食事中にしてはならないことは別にない。この頃では食事中に，テレビをつけている事が多くなった。食事中に話すことも多くなったし，昔よりもよほどにぎやかだ。

I．「いただきます」

「ごちそうさまでした」

J．息子，嫁，孫。

その日あった事とか相談事など。

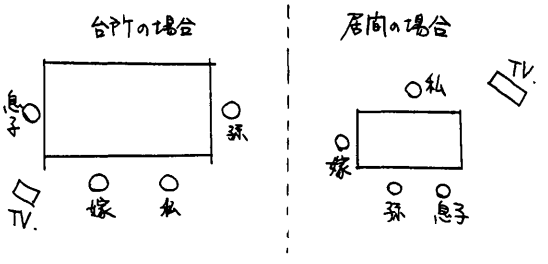


図38

調査者　No. 61(m)	調査日　昭和58年8月5日(金曜日)
被調査者　Y.S.　性別　f	出生年　明治39年(77歳)(第1子)
出生地　京都府天田郡S村	
生家の職業　官吏	
現住所　京都府舞鶴市K町	
住所の変更とその年度　天田郡S村—京都市上京区T町(大8)—東京市蒲田区O町(昭4)—京都府綾部市I町(昭20)—舞鶴市K町(昭40)	
最終学歴　D女子専門学校	結婚　昭和3年(22歳)
被調査者との関係　祖母	

1．箱膳の時期

A．箱膳は私の生まれた時（明45)から，小学校に入る頃（大正初期）まで続いてな，「お膳」て呼んでたんやけど（図39)。その頃は，おばあちゃんとお父さんとお母さんと私の四人がおって，お父さんは郡役所の首席書記やった。

住所…京都府天田郡S村

町がとなりにある村でな，みんな農家やったけど，一家に一人は町の郵便局や警察や役所に勤めとってやから，町から文明が入ってくるんや。私が小学校に入った頃に電気（ランプ）が付いて，世の中が新式になってきたんや。それから近くに軍隊（連隊）があって，将校や大隊長みたいに，外から来る人がようけおってな，日露戦争後やったから尊敬されとった。そんな風に軍隊がおったせいで割と進歩的な環境で，上下の差も大きかったんや。

そのうち，世の中は経済的変動が激しくなって，うちも郡政がなくなるらしいと聞いて，京都の方へ移ったんや。ほんでその家では，お膳は使わんようになったんや。

B．ごはんを食べてた，部屋は「女座（おなござ)」いうてな，ごはんの時以外には，手仕事に使(つこ)とった（図40)。針仕事とか，子供の勉強なんかに。電気が付いてからは，一部屋に明かり（ランプ）が一つ付いとった。大きさは，だいたい八畳くらいで，縁側と，つくりつけの戸だながあってな，戸だなの中にはお膳とか食器が入れたった。お茶碗は食べた後，お茶でちょこちょこっと洗(あろ)て，そのお茶は飲んでしまうんや。他に板の間が一畳くらいあってな，そこに料理を入れたおなべとかを置いとったなァ。

C．食事の時はみんなそろって，タタミに座って食べた。使用人のいてる家は，その使用人は，二畳位の土間の座敷（庭座敷）で食べとった。私らは座ぶとんは使わんかったけど，お父さんは勤め帰りやからということで晩に使(つこ)たけど，それでもめったに使わんかったわ。

D．朝…みそ汁，漬物，つくだ煮，茶

昼…茶づけ，漬物，つくだ煮

晩…おかず（例，豆腐，あげ等を入れた野菜料理など）

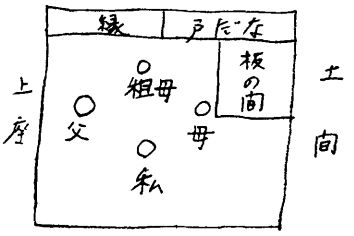


図39

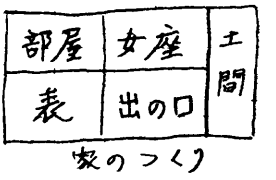


図40

朝は弁当作るから，ごはんをたいたんや。お漬物や，つくだ煮は，ぎょうさん作ってあって，いつも家にあったんや。豆腐なんかは，よそから買うてきたけど，野菜はうちで作った物やし，魚類は塩ますなんかを大量に買うて土間に半月程つるしとくんや。それをなべでたいたり，弁当にも入れた。飲み物はお茶やったけど，お父さんは晩にお酒を一杯飲んで川魚の焼いたんをサカナにしてた。

E．ごはんはお母さんがよそって，父，祖母，子供（私），母の順やった。仏様のお供えは飯をたいた時（朝）に，人間より先によそってお供えをした。晩しゃくは，お父さんが，少しだけ飲んどった。

F．食べたら，すぐ茶わんや箸をお茶でゆすいで，お母さんとおばあちゃんが，ご飯が終った時にそれらを運んだわ。食器は食後にお母さんが洗(あら)て，流しの横においておくんや。ほんで一日の終わりに，それを戸だなの中にしまうんや。

G．茶わんとか箸は各自の物を使うてたけど，漬物とかみそ汁を入れる。皿やおわん，どんぶり，はちなんかは，みんなで一緒に使うてたわ。箸箱は生まれた時から，戦争が終わる頃まであった。自分の箸箱は自分で洗うんや。たまにやけどな。

H．お箸の持ち方。共有の物は自分の箸でとったらあかんかった。食べる時はまず汁に箸をつけて，ごはんを一口食べて，おかずを食べて，またごはんを一口。自分の小皿には共有の食べ物を食べられるだけ取って，子供は残したらしかられた。親は残ったらお膳にしまってたけど。それから，口にものを入れてしゃべるとしかられた。なるべく静かにしゃべるように言われたし。食事中は背筋を伸ばして正座してた。他に，自分の箸で共有のものを取って，そのまま直接口に入れるのは，つっこみ箸といってしかられたし，ひじをついたり，こぼしたりしてもしかられた。しゃべる時は，手のものを置いてしゃべらなあかんかったし，ご飯をこぼすと目がつぶれるっていうてやった。

I．食前…いただきます　食後…ごちそうさま（手を合わせて）

J．食事中は，おばあちゃんが，お父さんに話しかけてやった。お母さんは受け答えだけしとった。話題は，だいたい親類の事とか世間話くらいやったわ。

2．ちゃぶ台の時期 Part 1（結婚前）

A．京都へ移ってからは，家も昔と比べてだいぶ小さなってな，その家に住むようになる頃から，飯台を使い始めたんや（図41）。そやから大正中期頃からやな。家族は昔と変わらんかった。周りは住宅地やった。

住所…京都市上京区T町

B．食事をする部屋は，特に名前はなかったんとちゃうかな。ごはんの部屋，とくらいいうてたかもしれん。その部屋は食事以外には使わんかった。四畳半の広さで，戸だなと火ばちくらいがあった。

C．みんなそろって，タタミに座ぶとんひいて食べとったわ。

D．朝…みそ汁，卵焼き，漬物，のり

昼…うどん・そばなど

晩…いろいろなおかず

いなかにおった頃と比べると程度が高なってぜいたくになってな，なんせお金を出したら何でも買えるし，おかずも一品だけやなく二品や三品になった。昼はみんな働きに出ていたから何でも好きなものを食べとったわ。

E．ごはんの給仕はお母さんやったけど，私もたまにやったわ。よそう順序はいなかの時と同じで，お父さん，おばあちゃん，私，お母さんの順，仏様へのお供えもまだやってたし，晩しゃ

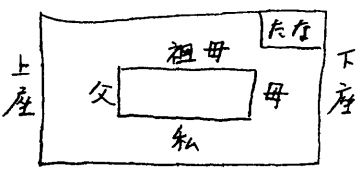


図41

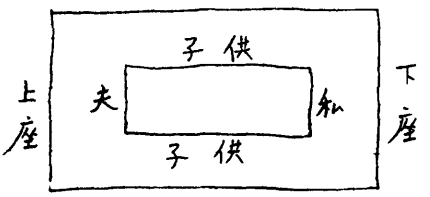


図42

くも，お父さんが少し飲んでやった。

F．この頃は，もうお茶でゆすいだりはせんようになった。ごはんがすんだら，私がみんなの食器をはこんで洗うて，戸だなにしまってたで。

G．H．I．J．は箱膳の時期と同じ。

2．ちゃぶ台の時期 Part 2（結婚後）

A．結婚してから，東京の方へ移ったんや。相変わらず，「飯台」って呼んでたわ（図42）。昭和50年頃まで続いた。その頃は，私と夫と子供が五人おった。あと店の者が三人おったけど，この人らは食事は別やった。

住所…東京市蒲田区O町

おじいちゃん（夫）は本屋さんをしとってな，周りはお店ばっかりの商業地や。ずっと飯台で食べてたけど，おじいちゃんと二人で暮らすようになると，テーブルで食べるようになったんや。

B．食事の部屋の事は特に何とも呼んでへんかった。なんせ食事以外に，何にでも使うたから。大きさは半間で，食器だなは台所の板の間においてあった。他にラジオが置いてあったわ。

C．座わる順番は，はっきりとは決まってへんかったけど，年上の子供は上座の方へ座っとったかなァ。商売の関係で，食事の時間が決まってへんかったから，みんなでそろって食べたことは，めったになかった。手の空いてる順にバラバラに食べとったわ。タタミにすわって，みんな座ぶとんはしいとった。

D．朝…パンなど好きなもの

昼…ごはんをたいて，ライスカレーなど

晩…てんやものが多い

この頃は家は民主的になったし，食べるもんもえらいハイカラになったんや。

E．なんせみんなバラバラに食べとったけど，ふだんは私がよそってたわ。それから，よそう順番は，子供が先で，親は後やった。この頃は，仏様へのお供えは，たまにするくらいで，ほとんどせんかった。おじいちゃんが，お酒の好きな人やったから，晩しゃくは毎晩やっとってやった。

F．食べ終わってから，私が，みんなの食器をはこんで，洗(あろ)た。洗った食器は流しに置いといて，一日の終わりに，戸だなへしまった。

G．共用の食器は，漬物みたいな常備食を入れとく鉢くらいやった。箸箱は，この頃は使うてへんかったわ。

H．食事中の作法については，そんなにきびしくはせえへんかった。お箸の持ち方とか姿勢をよくすることくらいで，食べる順序もどうでもよかったし，食事中は，みんなおしゃべりしてたし。

I．食前はいただきます。食後はごちそうさま（手を合わせて）。

J．食事中は誰でもがしゃべってた。話題もいろいろあった。世間話の時もあれば，政治の話の時もあるし，教育の話や，商売の話の時もあった。

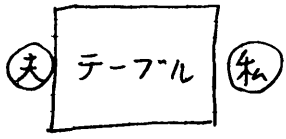


図43

3．現在の時期（椅子式テーブル）

A．今のように，二人だけで食べるようになったのは，昭和50年頃からや。テーブルの事は，食卓って呼んでる。家族構成は，おじいちゃんと私。周りは住宅地やな。現在は無職です。なぜ食事の形式が変わったかというと，二人で食べるようになったからやろな。

住所…京都府舞鶴市K町

（長男宅のはなれ。戸主はおじいさん）

B．食事をする部屋のことは，特に何とも呼んでへんわ。部屋は，仕事とか，何にでも利用してるで。大きさが六畳のはなれで，本だなとテレビが置いてある。

C．食べる時は，おじいちゃんと向かい合って食べてます。もちろん，そろって一緒に食べてる。下にはタタミがしいてあって，座ぶとんは，いすの上にしいている。

D．朝…パン，コーヒー，ミルク

昼…ごはん，おかずを2，3種

晩…昼と同じ

おじいちゃんが，お酒を飲めんようになったので，お酒は飲んでへんわ。

E．ごはんは私がよそってる。まず，おじいちゃんの方を先に入れる。仏様のお供えもする。晩しゃくは，おじいちゃんが飲まれへんようになったので，無し。

F．食べ終わったら，私が二人の食器をはこんで，洗（あら）てます。食器類は，戸だなにしまってる。

G．共用の食器は，漬物やつくだ煮のような，常備食を入れる入れ物。箸箱はまた復活して，今も使ってる。

H．食事中にしてはならないことは，一切無し。もう大しゃべりしてるで。

I．食前…いただきます

食後…ごちそうさま

J．二人でおしゃべりばっかりしてるんや。話題は，ありとあらゆること。

調査者　No. 69（f）	調査日　昭和58年8月30日（火曜日）
被調査者　A.K.　　性別　f	出生年　明治31年（85歳）（第1子）
出生地　大阪府大阪市南区O町	
生家の職業　米問屋	
現住所　奈良県生駒市I町	
住所の変更とその年度　大阪市南区O町—南区K町（大1）—南区N町（大5）—奈良市S町（大14）—大阪市東区N町（昭30）—奈良県生駒市I町（昭38）	
最終学歴　高等小学校	結婚　大正5年（19歳）
被調査者との関係　母方の祖母	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

食事どんなかてか。これに蓋がついたあんねんな，これお膳やったら足ついたあって，ほんでからここにまた何があるわ，引き出しがあるわ，まん中あたりに引き出しがついてあるねん。そしてここ蓋したあんねんな，上，お膳あけて食べんねん，上のせて。こんなんあるうちないかいな，今。今ちょっと見えへんな（図44）。

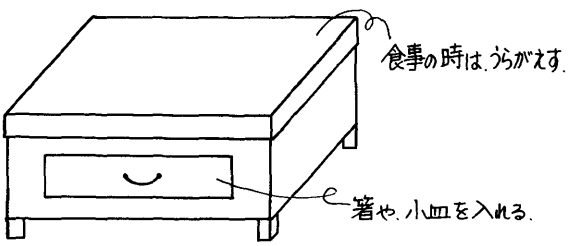


図44

ここい，3人か4人は向いどうしになって食べんねん。主人の嫁さん，それから，ここ子供二人やったら，そして食べたもんや。一つの部屋でな，一人の前にお膳があんねんな。

蓋あけるやろ，ほいでこの下に引き出しちょっとついたあるとこへ箸やとかなんじゃかなおすねや。お茶わんでもな。はあ。何どそれがあったらな，見たら得心するけえも，口で言うてたらややこしいなあ。昔のあのお膳，長いあいだあってんけぇ，うちらでも，ずっとあってんよ。ほんでおいたもんはな，よう映画でもしはるやろ，映画で若い人食べるなあ，お膳があんねん。こないして置いて，わがのお膳持って行って，御飯食べはんねん。蓋あけてひっくり返したら，ふちがついたあんねん。ほで，だれもいないで，自分一人食べるときやったらな，冬やったら火鉢あんねん。ぐるり木で，木のお膳みたいな形のようなな，その上にこんなな，へりみたいなのがあんねん，四方がへりやねんな，ほんでこの中が，火入れたあんねん。長火鉢やな。その上でな，一人やったらもう，あのその上になお茶わんおいて，ここへお茶かけといて，火鉢やはかい，寒い時やったら，そないして食べた。一人や二人やったらな，火鉢のへりで食べる。おばあちゃんの若い時分はな，自分1人遅うに起きたりして，一人食べる時やったらこの火鉢のへりのこんだけずうっとあんねん。そこへ置いてな，お土びんとかなんやここへかけたあるやろ，お湯，それを何や，お茶わんに入れて食べるねやわ。御飯な。

お膳言うたら，これ出すねん（箱膳を指さす）。一つ一つの呼び方ナァー。それは聞いてへんわ。何とも思わんと，お膳をぱっと持って来たらぱっと，ひっくり返して置くようにするわな，お茶わんひき出しから出して。そや，生まれたころから，ずっとこれで食べてた。私あんたもう，このなにや十九の歳に嫁入りした時，まだそれ食べてたわ。西大寺でも食べてたで。長いあいだ食べてたで。戦時中も食べてたで。戦争終わってから，小さい机みたいなな，机の大きいようなあんなとこへ置いて，座って食べてた。座ってやで，腰かけてやないんや。そらうちによったら，早うからしたはったうちもあるで，そらいろいろやさかいにわからへんけど，われわれは田舎へ来てからのことやはかいに，相変らずそんなんで食べてたわ。

昔のなには，ここみたいにこんなんと違うねん。ここに，あのな，店があって表があってここで商売してるわな，奥へ入る時にな，奥へ入るとこにな，こんな入り口がついたあんねん。中へ入る時に，この何から，店から入る時に，ここに，入り口がついたあんねん。「なかのま」や，御飯食べるの。

食事する時はもう，たいがいここやな。子供はここ，つとめてる人は，二階でちゃんと寝るようにしてある。食事はいっしょや。主人やみな食べてるとこあるやろ，その下のとこで食べてる。なんしもう，庭からちょっと上った所で食べてる。たたみ一枚ぐらいのところでせわしのう，かわりばんこに食べてた。さあはかいに，あんまり広ういらへん。

うちはな，弟と，妹がいてたけど，十七の時に妹がでけてな，お父さんとお母さんと，女中が1人，もりさん（子もり）と店の子が五人いてた。その時，（大阪市南区の）K町にいたん

や。商売してるうちばっかりでな，となりは下駄屋，片側はくぎやとか，金物屋やったんや。うちはずっとお米を扱こうた商売してて ん。

ちゃぶ台には，いつやめたか忘れてしもたけえも，自然にやめたな。みなこのお膳で食べへんようになってん。そやから戦争すんでな，お膳なしになってしもてん。ほんで机の大きいようなんで，みんなまるう座って食べるようになってん。はじめまるかったで，黒でぬったあって丸いのやった。

B．食事をする部屋について

「なかのま」言うてた。食事する以外はえろう使用せえへんかったな。お客さんは座敷通すやろ。お茶飲んだりしたけど，そうたびたび使わへんかった。長火鉢おいたりなんじゃか置いてあった。みずやがあったなあ。はじめは，お茶わんかってお膳にしてたけぇども，それすんでからお茶わんやみな，なにに入れるやろう，そんで買うたもんやろ。片側のおし入れ（庭に面したほう）には炊事の道具が入ったあってんな。なかのまは，六畳やった。寝たりなんじゃかいは，二階や（図45）。

C．どのようなすわり方で食べたか。

みんなそろうては食べへん。そろて食べんのは夕飯だけや。昼はもう忙しいさかいに遅う帰ったりなんじゃかするさかい。朝も食べたら，すぐ出て行くやろ，晩だけや，そろて食べたんわ。8時ごろみんなそろうやろ，そしたら家内中で食べたもんや。座ぶとんはあった。下はな，畳ひいてその上から「とみしろ」言うの長いのんで太いなにで，あれをひいてん。丈夫やねん。六畳の間いっぱいにひいてん。そしたらつめたいやろ。冬かて夏かてひいててん。女中さんらは，板の間に腰かけて（足をブラブラさせて）二人，食べてんねん。お座ぶひいてな（図46）。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝はみそ汁とだいこのおつけ物あるやろ，あれや。年がら年中ある。そのかわり裏でつけたある。お昼はなんなとこしらえるけど，だいこたいたり，なんじゃかするやろ。ほんで晩に，ごっつおがあんねん，お魚やとか。お昼はおつけものだけや，晩にだけや，魚とか肉とか少しづつ付ける。昼はようめざし焼いたりしたわ。晩は冬やったらよう，水菜とくじらたいたりな。くじらそのまま焼いて食べたりな。お魚かて，さばもあるし，いろいろや。晩でもそんなごっつおいうて，あれへん。店のもんはな，お魚とみそ汁かおつけもんぐらいや。そやけど，うちのもんはな，ちょっとましなようにな，肉なんか付けるようにしたけど。たまには，店のもんにも肉つけたりする。

酒飲む時には，ほかのものいるけぇども，そやけどお酒飲まへん時はみなと同じような。お酒飲む時は，ちょっとごっつおするしな。お祭りは，わかったある。大阪は，ハモか，いさきや。たいがい，ハモつけるな。天神祭りやなんや言うて，わがところのお祭りやったらな。や

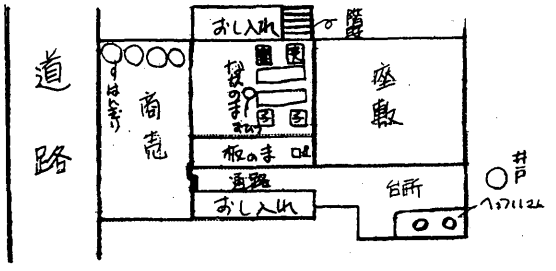


図45

っぱしそれは，店のもんも，うちのもんも一緒や。

E．食事のときのご飯の給仕について

女中が御飯入れたり，なんじゃかした。

一番に主人，奥さん，子供は，座ったもん順や。毎日，御飯炊いたら，おうっぱんあげんねん。朝，おひかりあげてな，晩にはお経となえる。晩しゃくは，飲むの一合や。今までよう，カンビン，ガラスのやつを使うたわ。火鉢の中に銅壷が入ったあるさかい，お湯入ったあるさかい，燗ができるやろ。

F．食事のあとのかたずけについて。

お盆の上へのせて，はしり（台所の流し）へ持って行って洗うねん。女中さんが運んだりしてくれはる。洗うのも女中さんや。そやさかい，いつも一番最後にしか食べられへん。洗った食器は，炊事場に棚があんねん。その棚に網（金網）の箱みたいなんこしらえたあるさかい，洗うてそこに入れとくねん。おおかた乾いてから拭いてなおすねん。お膳の中に入れてな，おし入れの中に入れてん。箸は白湯でゆすいだわ。

G．食器の共用について

そんなんは，あれへん。一人ひとりにちゃんと，入れたあるさかい。一人ずつ箸箱にお箸入れて，お膳の引き出しの中に入れるようになったあんねん。

H．食事中にしてはならないこと。

御飯の最中に便所行くとかあんなんしたら，おこられるわな。箸の上げ下ろしは，言われたことはない。自分の好いたもんから食べたらよかったし。あんまりしゃべらへん。食べるの遅なるから。しゃべっておこられたことあらへん。食べしなに，バァーっと（犬食い）食べたら，こぼすさかい，そんな食べ方したらあかんとは言われたな。そんでもう，御飯食べ終るまでに，おつけもんでお茶漬けすんのんがええ言われてそうしたな。もうついしまい言うときに，必ずお茶漬すんねん。そのかわり，そのころはな，一膳（いっつぇん）御飯やあらへん。二膳か三膳食べるわ。便所途中で行くいうことだけ，おこられた。

I．食事中のあいさつについて

いただきます，ごちそうさん，やった。

J．食事中の話題について

フミさんが，年いってからの子やさかい（妹のこと），そのあいだ二人やさかい，男の子と女の子やさかい，何にも言わへんな。あんまりしゃべれへん。主人が他の人が来はって，お酒飲みながらしゃべってはったけぇど，うちのもんは，しゃべらへんかったなあ。

2．ちゃぶ台の時期

A．食事の形式と家庭環境について

ここがこうこう広いさかい，ここい2人か3人向いあわせで座るわなあ。やっぱり，「ちゃ

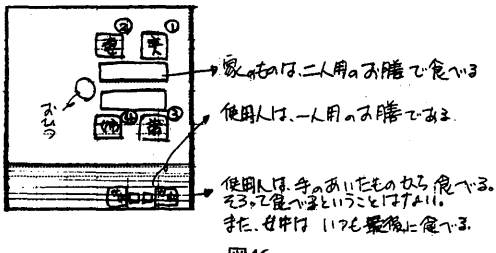


図46

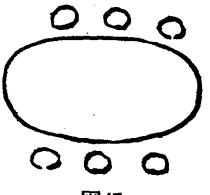


図47

ぶ台」て呼んでたなあ（図47）。

これは，お膳がすんでやっとしてから，戦争前やったなあ。奈良行ってしばらくしてやから，昭和になってからやな。ずっとつかってたわ。この子ら（母のこと）が，所帯もってから，今のテーブルにかわってんから。大人は，わたしだけ，あとは男3人，女2人やったなあ（しかし，その時期まだ彼女の夫は生きている）。

あこは，奈良県…（忘れたらしい。奈良市S町）もう百姓屋さんのうちが多かった。畑や田んぼは他にあるけぇども，家だけそこに集まってたんや。お父さんと主人はその時，家賃（大家さん）で食べてた。ちゃぶ台にかえたんはな，百貨店で見て買うてきたはかい。みんなで車座になって食事できるさかい，買うてきてん。

B．食事をする部屋について

大きい板の間や，「台所」いうてた。板の間でかたっぽには大きいへっついさんがついたあって，板の間が3畳か4畳ついたあった（母の話しだと，板の間はもっと大きかったらしい）。板の間は食事だけにつこてた。みずやだけおいたあった。

C．どのようなすわり方で食べたか。

食事するときには，ちゃぶ台出して，御飯食べるもんだけが座るだけや。別に決まるいうこともなかったわ。居るときはみんな一緒に食べたけぇど，遅いときもあるし，はっきり言われへん。座ぶとんはある。常ひく座ぶとん。でもだいたいそろて食べたな。

D．ご飯の他に何を食べ，何を飲んだか

たいがいお漬けもんな。たくあんぎょうさんつけてあったはかいな，きゅうりやなすびのあさ漬けすることもある。どないやすると，みそ汁たく日もある。お昼はみな学校行ってたら，お弁当や。わたしらそのままめだし（めざし）やったらめだし焼いて食べるとか，ありあわせのもの食べる。晩御飯はお魚売りに来るさかいな，お魚買うて焼くとか，たくとか。また肉買いに行って肉する時もあるしなあ。お父さんだけが病気やったはかいに，毎日肉，あさは味噌漬け，らっきょやみながええ言うて，よう食べた。それから昼からはお魚，その時新しいもんもってきてもろて。晩には，肉食（にくしょく）や，お父さんだけは。はたは，肉にする時もあるし，またお魚にする。お父さんだけ病気やさかい決めてた。もろこをよう買うてたいた。お父さんは，はじめはちゃぶ台で一緒に食べてたけぇど，病気やいうことわかってから，別に食べはった。部屋は最後の時はお父さんの部屋だけやったけど，ずっと一緒やった（夫の食事だけは，お膳だった）。

E．食事のときのご飯の給仕について

私がよそた。お父さんに一番によそて，あとは座ったもん順やった。お供えもした。お酒は飲みはらへん。病気やさかい。

F．食事のあとかたずけについて

お白湯でゆすいだ。私が食事おわってから食器さげて，私が洗ろた。みんな子供やもの。洗ろたのんは，みずやに入れた。

G．食器の共用

そんなんせえへん。一人ずつ，おはちやなんじゃかに入れて出した。箸箱は，はじめはつこてたけぇども，ちゃぶ台使いはじめてちょっとしたころから，使わんようになった。

H．食事中してはならないこと

そう言うこともあらへんかった。好きなもんから食べたらええんやし，しゃべってもよかったし。姿勢も何にも言わへんかった。口の中に，もの入れてしゃべんなさんな，言うたぐらいや。ほんで下にもの落したらあかんことぐらいかな。

I．食事中のあいさつ

いただきますと，ごちそうさん，でしたやな。

J．食事中の話題について

子供どうしで，しゃべってたけど，そないしゃべってへんかったわ。みんな，学校でどんな事があったかを，しゃべってたわ。

3．テーブルの時期

わてが主婦をしたのは，ちゃぶ台のころまでで，今は，子供らになって，かわってんはかい，わてにはようわかりまへん。あんたのお母さんに，聞きなはれ（祖母に聞いても，現在のことは，わからないので，一緒に暮らしている，母に聞きました)。

A．テーブル

- 昭和38年からはじめる（図48)。
- 家族は，父，母，祖母，兄，私（しかし兄は今，東京にいるので一緒に暮らしてはいない)。
- 奈良県生駒市
- 会社重役
- 子供の体は，イスのほうが大きくなり，歩く姿が美しくなると聞いたため。

B．食事をする部屋

- 食堂
- 接客（心やすい方)，テレビを見る。
- 12畳，食器棚，料理用の木箱，冷蔵庫，電話，クーラー。

C．食器棚

- 日曜日しか，そろって食べない（図49)。
- 木のタイルに，カーペットがひいてある。
- イスの上に，イス用の座ぶとんをのせている。

D．何を食べたか

- みそ汁，ちりめんじゃこ，塩こぶ，とろろ，漬けもの，牛乳。
- 前の日ののこりもの。
- 魚，サラダ，つけもの（どちらかといえば洋風)。
- 同じものを食べている。

E．ご飯の給仕

- 気のついた人。
- 男の人から，年寄りから。
- おうっぱん。

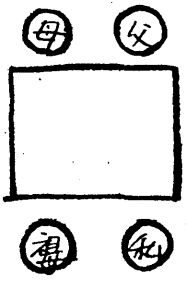


図48

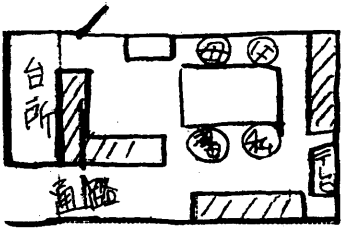


図49

・ある。

F．あとかたずけ

・ゆすがない。
・女三人でする。
・女三人でする。
・食器乾燥器にかけて食器棚になおす。

G．食器の共用

・おはち。大きな西洋皿。
・煮物，フライ，中華料理。
・ずっと使っていたが，昭和45年ぐらいから使わなくなった。

H．食事中してはならないこと

・まよい箸，箸をなめる。右手でもち上げて，右手でもつ。
・別にない。
・テレビをつけずに，今日のでき事を話したりする。
・背すじをのばし，犬食いをしない。
・途中で席をたつ。ひじをつく。左手を，テーブルの下におく。

I．食事中のあいさつ

・いただきます。
・ごちそうさまでした。

J．食事中の話題

・母と，私。
・学校，ニュース。

調査者　No. 90(f)	調査日　昭和59年8月10日(金曜日)
被調査者　S.H.　　性別　f	出生年　明治45年(72歳)(第4子)
出生地　茨城県稲敷郡E町	
生家の職業　公務員	
現住所　茨城県日立市N町	
住所の変更とその年度　稲敷郡E町—日立市H町(昭5)—日立市N町(昭26)	
最終学歴　T女学校	結婚　昭和5年(18歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期（生家）

A．食事の形式は図50のとおりである。これは「猫足膳」と呼ばれた。生まれたときから（既に使われていた），大正12年頃まで使っていた。そのときの家は，茨城県稲敷郡E町にあり，まわりは田畑ばかりで，農村とでもいうべきところであった。家族は父・母・兄3人・弟1人とわたしの7人であった。父は教員を辞め，水戸の裁判所に務めていた。

なお，図50にあった，「おやわん」はご飯を盛る食器，「おひら」はがんもどき・しいたけ・あぶらげなどを煮たもの，「つぼ」は豆を煮たものをいう。

B．食事をする部屋は，残念ながら何と呼んだかは思い出せないが，食事以外には利用しなかった。部屋の大きさは6畳くらいで，（猫足膳を入れておく）大きな戸棚と大きな長火ばちがあった。

C．食事の際の座席の順番は図51のとおりである。みんなそろって食べた。食べる場所はタタミで，座ぶとんは，父は必ず敷いたが，他の者は冬の寒い時期を除くと敷かなかった。

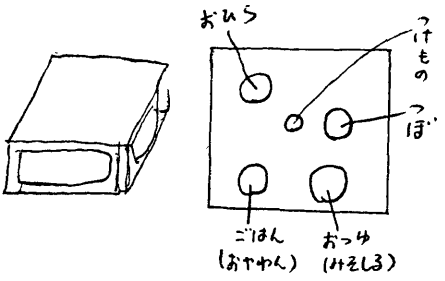


図50

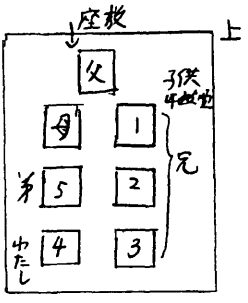


図51

D．ご飯以外に食べたものとして，朝におつゆ（みそしる），おこうこう（つけもの），煮ものや卵，昼におこうこうや魚，夜はおつゆ・煮ものなどがあった。おつゆは，朝と夜に食べ，昼は食べなかった。特別な食事をする人はなく，だれも同じものを食べた。

E．ご飯は母がよそい，父，次に子供の年齢の大きい順に長兄からよそっていった。毎朝，神仏にお供えをし，また父には晩しゃくがあった。

F．食事が終わった後，食器に湯茶を入れて飲むことはあったが，それでゆすぐ意味はあまりなかったようである。みんなが食べ終わった後そのたびに（日に3度）母が食器をさげて流しで洗った。そして，洗った食器は銘々のお膳の上にかぶせておき，戸棚の中に入れた。

G．銘々膳なので共用の食器はなかった。箸立は使用した。

H．食事中してはいけないということはあまりなかった。食べはじめのあいさつの後，皆一斉に食べた。ただ，おしゃべりは食事中しなかった。また，食事中は足をくずさずにきちんと正座していた。

I．食べはじめは「いただきます」，食べおわりは「ごちそうさま」というあいさつをした。

J．食事中は話をしないので省略する。

2．ちゃぶ台の時期

この時期は（1)結婚前（生家。大正12年～昭和5年頃），(2)結婚して夫の実家にいた時期（昭和5年頃～20年頃），(3)夫とともに現在の家を建てて住んだ時期（昭和26年～30年代）の3期に分けて述べていきたい。また，現在のちゃぶ台については，3．で述べる。

(1) 結婚前（生家）

A．食事の形式は図52のとおりである。これは「ちゃぶ台」と呼び，大正12年頃に，「お膳で食べるのは（出し入れや配膳に）面倒だから」という理由で使われだした。この時期には，他の家ではほとんどちゃぶ台を使っていた。家はE町の農村にあり，家族は父・母・兄3人・弟1人とわたしであった。父は裁判所に務めていた。なお，この時からご飯を盛るのに茶わんを使った。

B．食事をする部屋は1．で述べたように，6畳で戸棚や長火ばちがあり，食事以外には利用しなかった。

C．座席の順番は図53のとおりである。わたしが母の隣にいるのは，女の子であったためだろう。みんなそろって食べた。食べる場所はタタミで，寒いときだけざぶとんを敷いた。

D．ご飯のほかには，朝におつゆとおこうこう，昼にお煮しめや魚とおこうこう，夜におつゆとおこうこう，魚や煮ものを食べていた。みんな同じものを食べ，特別なものを食べる人はいなかった。

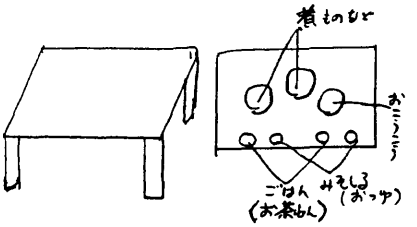


図52

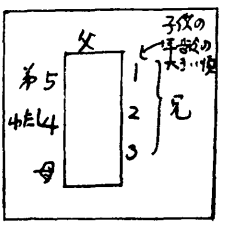


図53

E．ご飯は母がよそい，まず父に，そして子供の年の大きい順によそっていった。毎朝，神仏にお供えをし，また晩しゃくはあった。

　食べおわったあとすぐに食器をゆすぐことはなかった。みんなが食べおわった後，母が食器をさげて洗った。洗った食器はふいて戸棚にしまった。

G．共用の食器は皿やどんぶりで，皿にはお煮しめなどの煮もの，どんぶりにはおこうこうなどを入れた。箸たてを使用した。

H．箸の上げ下ろしや食べる順序の注意はなかったが，おしゃべりはしてはならなかった。食事中の姿勢は正座であった。

I．食べはじめは「いただきます」，食べおわりは「ごちそうさま」とあいさつした。

J．食事中に話をしなかったので省略。

(2) 結婚して夫の実家にいた時期

わたしは昭和5年に結婚して，夫の実家に住んだ。

A．食事の形式は図54のとおりで，「ちゃぶ台」と呼んだ。夫の家は，茨城県日立市H町にあり，家のまわりは田畑のある住宅地であった。家庭では，わたしが来る前から，ちゃぶ台を使っていた。家族は，夫の父と母・夫・甥・わたしの5人であった。夫はH製作所の海岸工場で事務員をしていた。

B．食事をする部屋は「お勝手」と呼んだ（寝るところは「へや」と呼んだ）。食事以外には使用しなかった。部屋の大きさは6畳で，たんすや戸棚があった。

C．座席の順序は図55のとおりで，食事はみんなそろって食べた。食べる場所はタタミで，座ぶとんは冬の寒いときだけみんな使った。

D．ご飯のほかに，朝はおつゆとおこうこう，昼はお煮しめや魚とおこうこう，夜はおつゆとおこうこう，煮ものなどを食べた。ご飯は米に麦を加えたものを食べた。特別な食事をする人はいなかった。

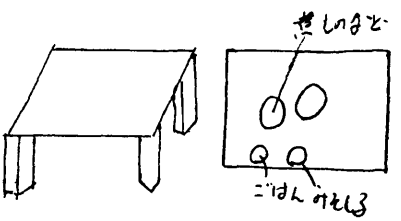


図54

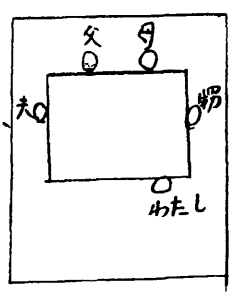


図55

E．ご飯はわたしがよそった。よそうのは父・母・夫・甥の順序であった。毎朝，神仏へお供えをし，また晩しゃくはした。

F．ご飯を食べた後，湯茶を茶わんに入れて飲んだりしたが，ゆすぐ意味はなかったようである。みんなが食べ終わった後，わたしが食器をさげて洗った。洗った食器はふいた後，お勝手の戸棚に入れておいた。

G．共用の食器はどんぶりで，だいこんやにんじん，こんにゃくなどの煮ものを入れておいた。箸たては使用した。

H．箸の上げ下ろしや食べる順序については，してはならないことは特になかった。ただ，食事中のおしゃべりは禁じられており，また姿勢はきちんと正座をさせられた。

I．食べはじめに「いただきます」，食べおわりに「ごちそうさま」のあいさつをした。

J．食事中おしゃべりをしなかったので省略。

(3) 現在の家を建てた後

現在の家は昭和26年に建てた。ここでは，3．とのかねあいもあり，昭和30年代くらいまでを想定したい。

A．食事の形式は図56のとおりで，「ちゃぶ台」と呼んでいた。これは昭和26年から現在（テーブルと併用）も使用している。家は，茨城県日立市N町にあり，家のまわりは田畑のある住宅地であった。家族構成は夫と子供2人（長男・長女）とわたしの4人であった。夫は前述したとおり，海岸工場の事務員をしていた。

B．食事をする部屋は「茶の間」と呼んだ。部屋は，炭火のこたつが置けるようになっており，団らんにも使用した。6畳の部屋で戸棚が置いてあった。

C．座席の順番は図57のとおりで，みんなそろって食べた。食べる場所はタタミで，座ぶとんはみんな1年じゅう使用した。

D．ご飯のほかには，朝におつゆ・おこうこう・卵，昼にお煮しめや魚・おこうこう，夜におつゆ・おこうこう・煮ものなどを食べた。みんな同じものを食べ，特別に違ったものを食べる人はいなかった。

E．ご飯はわたしがよそい，夫・長男・長女の順序でよそった。毎朝，神仏へお供えをした。また，晩しゃくはあった。

F．食べおわった後，食器を湯茶でゆすぐことはしなかった。みんなが食べ終わった後，そのたびごとに（日に3度），わたしが食器をさげて洗った。洗った茶わんは，茶わんかごに入れた。

G．共用の食器は皿やどんぶりで，煮ものなどを入れた。箸たては使用した。

H．箸の上げ下ろしや食べる順序については特になかった。食事中おしゃべりをするのは固く禁じられ，また正座の姿勢で食事をした。

I．食べはじめは「いただきます」，食べおわりは「ごちそうさま」とあいさつした。

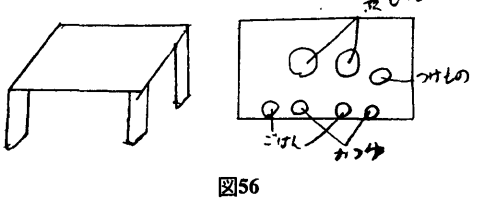


図56

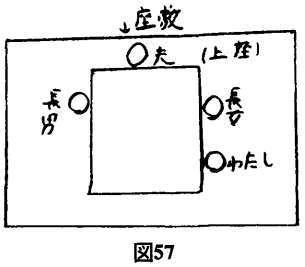


図57

J．食事中話をしなかったので省略。

3．現在（テーブルの時期）

現在，わが家ではテーブルとちゃぶ台を併用しているが，食生活の上で2．の（3)で記した内容と若干変化がみられるので，「テーブルの時期」として一括して扱うことにしたい。

A．テーブルを使っての食事は図58のとおりである。これは台所を増改築した昭和48年から使用している。わが家は茨城県日立市N町（町名変更）にあり，若干の畑がまわり（我家も含めて）にある住宅地にある。家族構成はわたし・長男・長男の嫁・孫4人（長男・長女・次男・次女）の7人である。長男の職業は，中学校の教員である。

B．ちゃぶ台を置いてある部屋は「茶の間」，テーブルを置いている部屋は「お勝手」と呼んでいる（2つの部屋は隣接している)。茶の間は，テレビを見たり，団らんに使用している。お勝手は台所で，食事の準備やあとかたづけをしている。茶の間にはテレビ・戸棚・たんす（冬にはこたつ）があり，お勝手には冷蔵庫・流し・ガスコンロ・戸棚などがある。

C．座席の順序はちゃぶ台で長男の嫁，テーブルで長男と長男の嫁が大体図59のとおりに決まっている（テーブルを使う方が多い。)。わたしは，Aの位置にくることが比較的多いが，ちゃぶ台を使って食べる方が多い。各自の時間の都合にあわせて食べ，みんなそろって食べるのは夕食のときくらいであろう。茶の間はタタミ，お勝手は板の間で，茶の間では座ぶとんを使用する。

D．ご飯のほかには，三食ともみそしるやつけものを食べ，夜には煮ものや焼いたもの（朝・昼はその残り物）を食べる。特別に違ったものを食べる人はいない。

E．ご飯をよそうのは主に長男の嫁で，よそう順序は長男を一応最初にすることが多いが，必ずしも決まっているわけではない。神仏へは毎朝お供えをし，また長男は毎晩，晩しゃくする。

F．食べおわった後，食器を湯茶でゆすぐことはない。食器は食べ終わったごとに各自が流しに持っていき，共用の食器は長男の嫁が片づける。（ちゃぶ台で食べたときは孫の女の子たちが片づける。）片づけた食器は長男の嫁が洗い，食器かごに入れておく。

G．共用の食器は皿やどんぶりで，煮ものや焼いたものなどのおかず，つけものを盛っている。箸たては使用している。

H．食事中してはいけないということはあまりないが，ひじをついて食べないことや，ながらで食事をしないことくらいだろうか。食事中はちゃぶ台などでも足をくずしてすわっている。

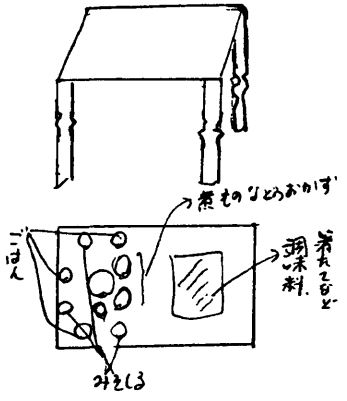


図58

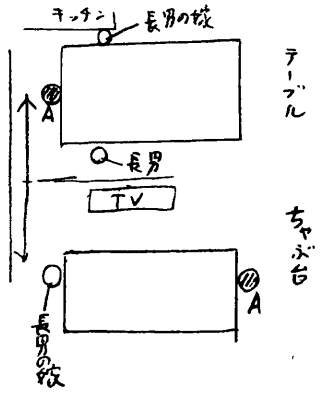


図59

I．食べはじめは「いただきます」，食べおわりは「ごちそうさま」だが，いつも言うわけではない。

J．食事中は長男を中心にみんなよくしゃべる。話題は長男や孫たちの学校での出来事やテレビの話題，世間話などである。

調査者　No. 93(m)	調査日　昭和59年 8 月30日(木曜日)
被調査者　O.T.　　性別　m	出生年　明治41年(77歳)(第 3 子)
出生地　長野県下伊那郡M町	
生家の職業　農業	
現住所　長野県下伊那郡M町	
住所の変更とその年度　分家(昭 9)	
最終学歴　高等科	結婚　昭和 9 年(27歳)
被調査者との関係　母方の祖父	

1．お膳（箱膳）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

食事の形式は一般にいう箱膳というものであり（図60参照），それを単に「お膳」と呼んでいた。祖父が生まれた時から高等科を卒業するぐらいまでこの「お膳」であった。また，その当時付近のたいていの家も，このような箱膳であり，どの家でも「お膳」と呼んでいたそうだ。その当時は祖父から見て，祖父，両親，兄弟 5 人の家族であった。その時期には，現在と同じ長野県下伊那郡M町に住んでおり，その当時は一面桑畑であり，戸主も農業に従事していたが，まわりもほとんどが農家であった。

高等科卒頃，お膳から飯台にかわったが，その理由は，お膳だと，家族のお膳が戸棚におさまりきらず，また，お膳の出し入れがめんどうだったことと，付近でも飯台に変える所が多かったためである。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は台所と呼んでおり，その部屋は食事以外には利用しなかったそうである。部屋の情景は図61のようであり台所にはお膳をしまう戸棚以外には何も調度はなかった。

C．どのような座り方で食べたか

座席の順番は図62のように父，祖父，母は決まっていたが，それ以外，つまり子供は別に決まってなかった。食事は必ず家族そろって食べたそうで，小さい時は，たとえ遊んでいても一度家で食事をとってからまた遊びにいくというぐらいだった。食べるところは土間だったが座ぶとんなどつかわず，“むしろ”を使った。その当時は，どこも貧しかったので座ぶとんは，大事なお客が来た時しか用いなかった。

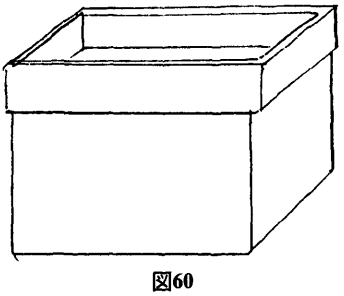


図60

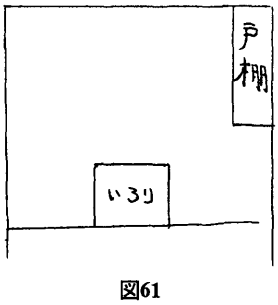


図61

D．ご飯のほかには，何を食べ何を飲んでいたか

朝は，みそ汁と漬け物，昼は漬け物，夜はご飯ではなくめん類の方が多かったのでみそ汁よりもおつゆの時の方が多く，たまに野菜の煮ものがついたそうだ。当時，祖父の実家は養蚕を中心にやっており，米は作ってなかったため，夕飯はほとんどめん類だったそうだ。父親が毎晩・晩酌をした以外は皆同じものを食べていたそうだ。

E．食事のときのご飯の給仕について

給仕は全て主婦がやったが，よそう順序は別に決まってなかった。神仏へのお供えは，何か特別な事があった時だけで，普段はしなかった。このようなお供えをする時は，お供えするのを一番兄によそった。晩酌は毎晩，父親がした。

F．食事のあとかたずけについて

食べ終えた後，茶わんや箸を湯茶でゆすぎ，その後，すぐ自分の箱膳の中へ入れ，子供は自分で戸棚の中へしまい，祖父と父親は，母親が戸棚の中へしまったそうである。食器は，たまに母親がまとめて洗う程度で毎日洗ったというわけではなかった。

G．食器の共用について

共用の食器としては中ぐらいのと大きいはちがあり，中ぐらいのはちは漬け物，大きいものには野菜の煮物などを盛っていた。

箸箱は，ずっと使ってなかったそうだ。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の上げおろし，食べる順序等は別に厳しくなかったが，食事中のおしゃべりはやはりいけないといわれていたそうだ。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめ，食べおわりとも特別にあいさつなどせず，皆がそろったら適当に食べ始めたそうだ。

J．食事中の話題について

食事はあまり話をしなかったが，話すとしたら，その日の仕事に関する事や，昔，軍隊にいた時の話を父親がしたそうである。祖父の父親は日露戦争の時，陸軍にいたそうであり，その時作った鉄製の箸で御飯をいつも食べていたそうである。

2．ちゃぶ台（飯台）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

食事の形式は飯台で図63のようなものであった。特に変わった呼び名はなく単に「飯台」と，どこでも呼んでいたそうである。飯台は，祖父が高等科を卒業してから，終戦後少しの間まで続いたそうである。その時の家族構成は，結婚前は両親と兄弟は他に5人，結婚後は妻と，最

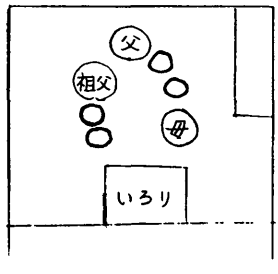


図62

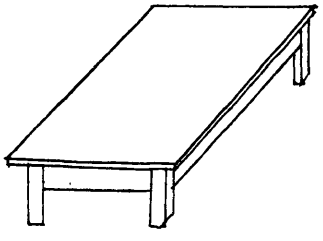


図63

終的には子供6人となった。結婚して分家しても終戦後までは飯台だったそうだ。この時期は，本家も分家もさほど離れてなくともに長野県下伊那郡M町にある。その時期は，やはり農村には変わりなかったが，養蚕から果樹に以降する時期で付近には果樹，桑園，田んぼがあったそうだ。祖父の実家はずっと農業を営んでおり，祖父もまた分家してから果樹園を中心とした農業を営んでいる。

食事の形式は終戦後少したってから現在の椅子式テーブルに変わったが，その理由は，仕事を終えて昼食に帰ってきた時，足はよごれているし，また，地下たび等をはきかえるのもめんどうなので，椅子式テーブルにして，足は汚れたままでも食事ができるようにしたそうである。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は，相変わらず台所と呼んでいたそうである。食事をする部屋はやはり食事以外には使わなかった。台所の情景も結婚後分家してからもほとんど変わらず戸棚がおいてあるだけだった。

C．どのようなすわり方で食べたか

分家となる前は飯台となった後も食事のときの座り方は同じであったそうだ。結婚して分家してからは妻の座席は決まっていたが，当人（祖父）や子供の座る所は別に決まってなかった。本家のときも分家のときも主婦はいつもお勝手に近い所に座っていたそうである。食事は，やはり皆そろって食べたそうだ（図64）。

食べる場所は板の間で，その上に，“むしろ”をしいて食事をし，座ぶとんは，使わなかったようだ。

D．ご飯の他には何を食べ，何を飲んでいたか

高等科を卒業して結婚する前も，結婚してからも，さほど以前（お膳の時）とは変わらなかったそうだ。

E．食事のときのご飯の給仕について

ご飯はやはりいつでも主婦がよそおったそうだ。よそう順序は結婚前・後も別に決ってなかった。神仏へのお供えは，何か特別な事があった時だけで，普段は別にお供えをしなかったそうだ。

晩酌は結婚前は，祖父の父親と兄（長男）が，お酒が好きだったので毎晩のようにしていたが，結婚後，分家してからは，祖父は酒が好きでないので，晩酌はしなかったそうである。

F．食事のあとかたずけについて

食後，すぐ茶わんを湯茶でゆすぎ，主婦がみんなの茶わんをかたずけた。そして食器は毎日ではなく時々，主婦が洗ったそうだ。洗った食器はやはり戸棚にしまったそうだ。

G．食器の共用について

共用の食器も，飯台に変わる前とさほど変わらなかった。その食器にはやはり，漬け物とか野菜の煮物等が盛られている事が多かったが，一概には何が盛られていたかは言えないそうだ。

箸箱はあい変わらず使わなかったそうだ。

H．食事中にしてはならないことについて

結婚前は，「お膳」の時期とかわらず，食事中のおしゃべりについて厳しかったが，結婚後は特別になかった。

I．食事中のあいさつについて

食事中のあいさつは特別になかったそうだ。

J．食事中の話題について

結婚前はやはりお膳の時とあまり変わらなかったが，結婚後は，祖父や祖母（妻）が，どち

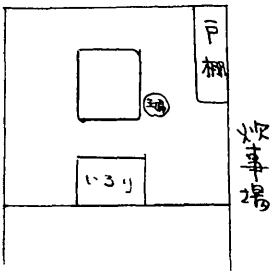


図64

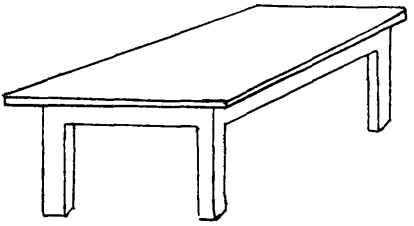


図65

らということもなく仕事の事や世間話をしたそうだ。

3．現在（椅子式テーブル）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

図65のような椅子式テーブルで，単にテーブルと呼んでいる。これは終戦後，少したってから現在に至るまで続いている。

家族は変動が激しく一概に言えないが，最初は妻と子供6人。子供が結婚してからは，妻と長男とその嫁，そして孫が2人で現在に至っている（祖母は今年4月に他界した）。

住所は分家してから変わらず，ずっと農業を続けている。付近は最近，住宅が違ってきたが，それでも一面果樹園である。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は，やはり台所と呼んでいる。その部屋には，事務机や，電話，戸棚が置いてあり，身近なお客が来た時にはそこでお茶を飲んだりする。

C．どのようなすわり方で食べたか

主婦は，やはり炊事場に近い所に座り，あとは，特別に座る所は決ってなかった。食事は大抵みんなで一緒に食べるが，果樹の最盛期になると朝などは，みなバラバラになる事が多いそうだ（図66）。

食べる場所は，土間の上にかるく板をはったものでみんな土足であがって椅子に座るか，居間の方から椅子に座るというようになっている。これだと仕事のあい間にきてもいちいち靴を脱がなくてすむからだ。座ぶとんは，椅子なので別に使ってない。

D．ご飯のほかには，何を食べ何を飲んでいたか

朝・昼・晩とご飯以外のものは特別には決まっていない。みそ汁なども朝はほとんど出るが昼・晩は適当で，おかずも，毎回つくが昔に比べたら肉類が多くなりバラエティに富んできたそうだ。食事は皆同じものを食べ，誰かが特別に違ったものを食べるという事はない。

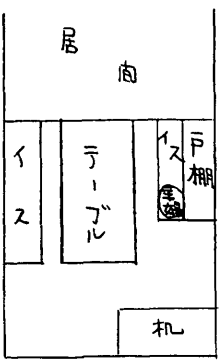


図66

E．食事のときのご飯の給仕について

ご飯は主婦がよそい，その順序は別に決まってなかった。神仏のお供えは，やはり何か特別な事があった時のみで普段はしない。

晩酌は祖父が一時した事もあったが，病気（ぜんそく）をしてからはほとんどやってないそうだ。

F．食事のあとのかたずけについて

祖父と長男は食後，茶わんを湯茶でゆすぐが他はしない。食器は

祖父以外は自分で洗い場まで持っていき，祖父の分は主婦が持っていき，全部，主婦が洗い，容器に入れて水を切っている。あまり使わない食器は戸棚にしまうが，よく使うものはそのままである。

G．食器の共用について

共用の食器には，大・中のハチや皿がさまざまあり，盛る物と量によって使いわけているようだ。箸箱はあい変わらず誰も使ってない。

H．食事中にしてはならないことについて

食事中にしてはならないことは特別になく食事中のおしゃべりもよくしている。

I．食事中のあいさつについて

食前，食後も特別にあいさつはない。

J．食事中の話題について

食事中の話題としては，仕事の事や，子供の学校での事，世間話などさまざまで，話すのも家族の誰ということもなく皆で話している。

調査者　No. 102(f)	調査日　昭和59年8月4日(土曜日)
被調査者　Y.S.　性別　f	出生年　大正2年(71歳)(第5子)
出生地　長野県北安曇郡M村	
生家の職業　農業	
現住所　長野県北安曇郡I町	
住所の変更とその年度　北安曇郡M村―東京市本所区O町(昭7)―北安曇郡I町(昭15)	
最終学歴　尋常高等小学校	結婚　昭和15年(28歳)
被調査者との関係　友人の祖母	

1．お膳の時期

A．ア…お膳で食べていたそうです。

イ…「箱膳」て呼んでましたの（図67)。

ウ…わたしはね，大正2年生まれで，生まれた時から使っておりました。あの，ただし小学校へあがる頃に買ってくれて，わたしのはね，うちの者はもう昔から使っていたそうです。わたしね，20才までうちにいましてね，その頃まで使ってました。うちの人たちはまだ使っていたと思います。〔A．クも含む〕

エ…祖父母が2人，母と父が2人で，それにわたしに弟2人で，姉や兄もありましたけど，もうその頃はわたしが6年生の頃によそへ出て，働いておりました。

オ…長野県北安曇郡M村って所です。

カ…たんぼもありますし，畑もありました。農村地帯です。

キ…農業でございます。

B．ア…「おかって」って言ってました。

イとウ…お茶の間とその炊事するとこといっしょくらいです。おかってでも食事はこっちのハジで，こっちはお流しがついて，土間にはなっていませんでしたけど，ハジの方に流しをつけて，そして昔は川の水を利用しましたの。ほいで全部かめがありまして。きれいな川でしたから，いつも川の水をつかっておりましたの。

C．ア…あのね，いろりを囲みましてね，いろりの1番まん中っていいましょうか，もしこっちが土間だとしましたら，玄関があいて土間がありますね，そいで土間から上がった場所が，父が座っておりました。そいでここが一番いい上座っていいましてね，祖父が座っておりました。そしてこちらの方へは私の父が座っておりました。そいでこの回りの所へ，おかまをここへ下

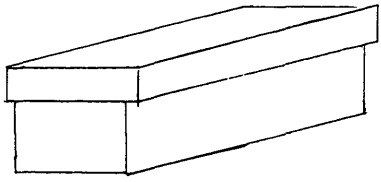


図67

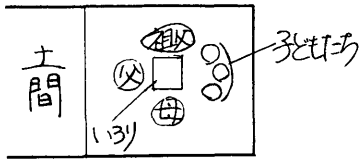


図68

してありますので私や弟が座りました（図68）。

イ…はい，いっしょです，食事は。

ウ…畳じゃございません。あの昔「ネゴ」と言いましたの。昔の人は「ゴザ」って言うけれどね，ゴザよりまだ，わらで編んだので，今，ここで田んぼで,もみこく時に田んぼに持ってって広げるの，あるでしょう。ああいうのの厚いのをね，そういうぶ厚いのでね，大きなばんののをひいて，そこへ座って。

エ…うちの家族はひきません。お客さまを入れるとざぶとんひきましたけど。

D．ア…おみそ汁にお漬け物に，佃煮みたいなものがついてました。そんな程度です。

イ…お昼はお野菜をね，油でちょっといためたりして，作って，それでおみそ汁なしで食事です。

ウ…晩はね，おうどんなんか作ったり，お粉で，手で作ったり，それからおそうめんもゆでたりして。

エ…みんな同じです。うち中。

E．アとイ…それは母です。それであのよそう順序もあって，祖父を先によそって父を2番めによそって，こんど生まれた順によそってきます。母は子どものまでよそってしまうと母が自分のを。

ウ…朝ね，仏様にあげます。神棚へもあげます。そいであの月の始めの一日（ついたち）って時は必ず，神棚へおみきといってお酒をあげます。

エ…晩しゃくはほとんどいたしません。あのね，お祭りとかお正月以外はお酒って飲みませんでした。

F．自分自分で入れます，箱膳ですから。最後にお茶を飲んで，ほいであの，夜しか洗わないんです。朝，昼はほんと，夜だけ洗ってね，そしてしまいましたの。それで大きい戸棚があって，済んだ人から順に戸棚にもってってみんな入れます。重ねてずっと。

G．アとイ…それはないです。みんな一人一人のお皿によそっちゃうから。お漬け物だけね，あの，どんぶりへ出すだけですから。

ウ…箱膳といっしょです。

H．それはね，父が厳しくってちゃんと正座しなくちゃいけなかったし，それからあの，右の方へおみそ汁，左の方へご飯の茶わん，そして前の方へお皿を置いてね，で食事してる間もご飯とおみおつけの茶わんをいっしょに持つってことは禁じられてました。それから足を曲げて座ることも許されなかったです。しゃーんと終わるまで座ってないと許されないの。それで箸を持ったらね，箸を持ったままどんぶり取り寄せるとか，いろいろなことはいけないって，そういうことも厳しく言われました。で，茶わんを持つ時にね，ふちへ手をかけることもいけないって言われましたの。それから鼻すすってるとうんと叱られましたし，あの不細工に「おトイレ行きたくなった。」なんて，それも許されなかった，それが一番許されなかったです。しゃべっていけないって事はなかったけれども。食べる順序は，おみそ汁先食べてご飯に移ります。

I．ア…わたし行儀悪かったから，黙って食べ始めました。もううちはね，いただきますは言わなかった。だけどあの私の父はお箸だけこうやって頭の方まで持ち上げてね，頂くって印をしましたね。

イ…食べ終わりにもやっぱりお箸でね。

J．ア…祖父でした。

イ…食事中の話題はお仕事することっきりでしたね，私のうちは。養蚕もやりましたし，麻も作ったし，田んぼもありましたし，畑もありましたので忙しいので，「きょうは誰と誰はどこの畑へ行ってやって」とか「誰はおかいこの方を手伝って」とかって命令されていただけで，そうですね，話題っていうとそんなことでしたね。

——その他，お祭りとかお月様のお祭り，十五夜，十かん夜，十三夜には必ずおもちをついたとか，魚はたまで肉はほとんど食べなかったとか，年一回のお祭りをうち中こぞって楽しんだことなどを話して下さいました。

2．ちゃぶ台の時期

A．ア…図69参照

イ…飯台っていいましたね。いらなくなると足を折りたたんで，立てておくように。

ウ…（20才（昭和7年）の時から）私は東京に8年いましたの。東京へはミシンを習いに行きました。

エ…小さい子どもが1人で，お父さん，お母さんの3人家族でした。そいでミシン習いに通ってくる人が8人程いましたね。私は住み込んでました。

オ…東京市本所区O町ってところです。

カ…えー，工場があってね，メリヤスを主にやってましたね。大阪みたいに工業地帯じゃないけれども，あの辺は亀井戸の方へ近い所で，まあ下町ですね。

キ…メリヤスをやってましたね。「コットン」ていう大きな機械で，手でもって織ってました。

ク…（戦争のために。おばあさんは「大東亜戦争」と言ってました。）

B．ア…お茶の間ですね。

イとウ…やっぱりああいう職人の人達を食べさせるっていうことでしたから，まあ押し入れはありましたけど，あとは何もありませんね。ただ食事するだけの部屋になってましたから。

C．ア…いくらか多くいる人には敬まってご飯よそってあげたりはしていましたけど，あまり上下っていわなかったような気がします。決まっていなかったです。

イ…はい，そろってね。

ウ…畳でした。

エ…座ぶとんもありました。

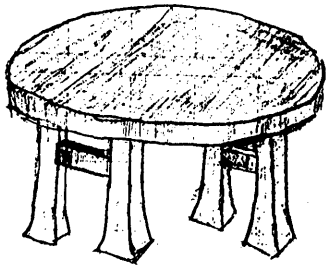


図69

D．ア～ウ…朝もお魚だったり，お昼もお魚，晩に肉って多くとりましたね。野菜の方が少なかったですね。野菜っていうと漬け物くらいでしたから。ええ，おみそ汁もありましたけど，朝だけでしたね。

エ…そういうことなかったです。

E．アとイ…年数の浅い人が，長年いる人にご飯よそったり，おみそ汁よそったりしてあげてました。順番は特になかったと思います。

ウ…あそこは，あげてませんでしたね。

エ…主人が時折，お酒を飲むぐらいでしたね。毎晩ではなかったです。お酒とかは，一番なんかぜいたく品っていうでしょうか。

F．イ…それ私が手伝わされました。片付けてからミシンをやるようにしてね。それでそこの奥さんもやりましたけど。

ウ…2人でやりました。奥さんと私と。

エ…お茶わんや食器ものを入れるざるがありまして，それに伏せておいて，そしてこんだあの棚へ挙げといて，そしてこんど食事の時に改めてふいて飯台へ出して使いました。

G．みんな付け合わせで1人1人のお皿につけたものしかあとは他に出しません。お漬け物だすとしたら小さなお皿へ（台の）まん中へちょこっと出しとく位で。〔箸箱ナシ。〕

H．主人がね，おしゃべりしてると，「静かに食べろよ。」なんて注意するくらいで，別になかったです。

I．ア…「いただきまーす。」って，みんな声をかけあって。

イ…「いただきました。」って。

J．別に話し合うこともあまりなく，静かに食べてましたね。

——東京で8年間過ごした後，おばあさんはこちらに戻ってきて，結婚しました。戦争中や戦後は食べる物がなくて，とても苦労されたそうです。以下は抜き出したお話です。

……食事がなくなってね，ひどかったですよ。もうね，お米がなくなってね，供出，供出ってね，三たんぶ（田んぼを）作ってるとね，あの何俵供出しろっていう上からの命令で，自分のうちで食べるお米がなくても，供出だけは済ませなけりゃいけないって，うちで食べるお米には不自由しました。お米のない時にはね，配給を受けましたの。その配給がひどいですヨ。とう豆の粉とかいってね，まっ黄色い，そうとうもろこしの粉ですけど，あれ，日本でできた物じゃないでしょうね，そういう粉が配給されてね，それでお米と混ぜて食べなさいって。ほんとにね，戦争で苦しみましたよ。田んぼをつくるのに肥料がないんです。本当に不足して，そいであの自分で草をみんな積み重ねて，腐らせて，それを田んぼへ使うように工面したけど，ところが私一人きりで手間がないものですから，そいで肥料に不自由して，たくさん取れないで苦しい思いしました。ほんとに必死で生きました。主人が兵隊から帰ってきたのは昭和21年の7月6日ですけど，ほんと助かりました。

それで不自由しましたけれども，いろいろ工面してどうやら秋までつなぎました。お粉をひいたり，じゃがいもをね，細かに切ってね，そしてあのふかして食べて。飯台で食べていました。

3．現在

A．ア…ちゃぶ台（図70）。

イ…やっぱり飯台で食べてます。ええ，あの，「ちゃぼ台」っていいますね。

エ…祖父母（おばあさん達夫婦のことです。）が2人，父母が2人，孫が一人で5人家族です。

オ…長野県北安曇郡I町です。

カ…町はずれですね，南の。I町の南はずれってことですね。

キ…農業です。

B．ア…お茶の間って言ってます。

イ…テレビみたりしております，今。

ウ…6畳にちょっと廊下がついてます。テレビ置いてありますし。

C．ア…どこでもいいってことですけど，いったん座ったとこはみんなきまってその場所へ座り

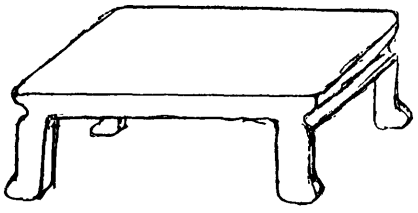


図70

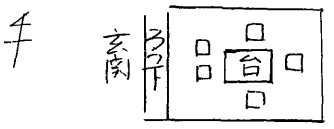


図71

ます。えーと，はいりロの方にわたしとE子さん（お孫さんで私の友人です。）が，並んでます。土間（玄関）から上がった側のとこですけど。で南側の方へE子さんのお母さんが座って，東側へお父さんが，北側へおじいちゃんがね（図71）。

イ…いいえ，別々です。朝はあのみんな，時間で勤めに間に合うように起きて食事しますから。

ウ…畳です。

エ…みんなひきます。

D．ア～ウ…えー，朝はみんな1人1人に大きいお皿にね，お野菜と肉かお魚つけたり，それから果物つけあわせたりいたします。でお昼はみんな出た先で食事しますので，朝と晩だけがうちなんですけど。で，晩も，朝肉だったから晩はお魚にしましょうかってことで，それにお野菜のたき合わせと，それから果物かまたはトマトとか，そういうものをつけ合わせて一人一人大皿へ付けます。

エ…みんな，たいてい同じです。

E．ア…うちは自分自分でよそっております。

ウ…朝はね，神様とお仏だんにあげております。朝は必ずお茶とね，おあげします。

エ…ええ，やります。じいちゃんが毎晩，ビール飲みます。もうかかしたことなく。

F．イとウ…わたしとE子の母ちゃんとで，食事が済むとね。

エ…全部ふいて，所定の場所へしまいます。

G．共同のお皿も，お皿へ付けた以外のもので作ったものは3つか4つくらい，どんぶりで，まん中へ置きます。

H．今は何も言いません。

I．ないです。

J．時々，少しお話する位で，あんまり。晩にいっしょになるくらいで，朝はみんな別々に食べてますし，お昼は出ていったりするので。テレビを見てますし。

調査者　No. 118(f)	調査日　昭和59年8月19日(日曜日)
被調査者　K.T.　　性別　f	出生年　大正元年(72歳)(第1子)
出生地　撫順	
生家の職業　会社員	
現住所　福岡県柳川市D町	
住所の変更とその年度　撫順―奉天(昭12)―福岡県柳川市D町(戦後)	
最終学歴　B高女	結婚　昭和12年(25歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期

箱膳などのお膳は使ったことがないということでした。

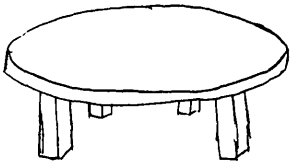


図72

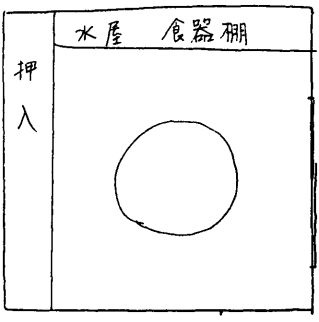


図73

2．ちゃぶ台の時期

A．食事の形式と家庭環境について

図72のようなものに家族全員がついて，食事をしていた。これを「飯台」と呼び，小さい頃から昭和40年頃まで，人間は変化したが，ずっと使用していたそうです。結婚前は，両親と弟妹6人の9人家族で，結婚後は，配偶者と子供4人（女子のみ）の6人家族であった。しかし，昭和20年に，夫を亡くし，5人となった。

結婚前の住所―撫順，結婚後の住所―奉天市Y町

どちらも会社の社宅であるので，住環境は住宅地である。

結婚後の戸主の職業は，満州火薬工業所の製管工場長だった。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋のことは，食事部屋と呼んでいた（図73）。茶の間のようなものだったが，そこで食後少し話をしたりもした。部屋の大きさは，6畳の畳の部屋で，窓は，北向きだった。押し入れ，食器棚，水屋で2つの側面をうめ，部屋の中心に，飯台を置いていた。部屋の隣に台所があった。

C．どのようなすわり方で食べたか

小さい頃（結婚前）は，ほとんどみんなそろって食べた。しかし昼は，仕事に出る父親や学校に通うものは弁当を持って行っていた。食べる場所は，タタミ敷きで，座ぶとんは，父親だけがつかい，全員正座をしていた。並び方は，父親と母親が並び，父親の横から，年の順に7人の子供がすわった。この時には，男女のわけへだてはなかった（図74）。

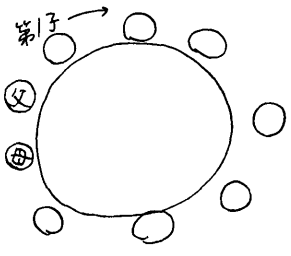


図74

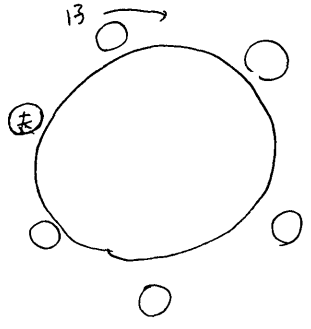


図75

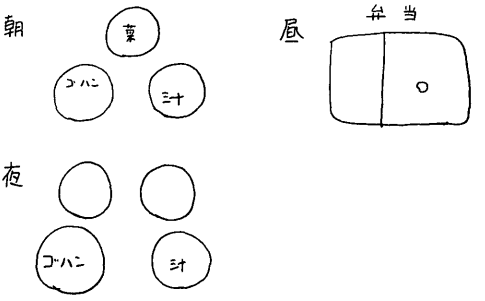


図76

結婚後も似たようなもので，タタミの部屋で，夫と自分が並んで，夫の横から四人の子供がならんですわり，飯台をかこんだ（図75)。夫は，仕事から帰ってくるのが午後10時頃で遅く，また昼食は，弁当を持って行っていたので，家族そろって食べるのは，朝食だけで，昼，晩は，自分と子供の5人だったそうです。座ぶとんは，夫一人だけが使い，やはり全員，正座をして食べた。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝は，ゴハンに汁，それに，おかずが一品ぐらいがふつうで，おかずには，子供がいたので，なるだけ卵などのたんぱく質を含むものをということを心がけていたそうです。夜はだいたい一汁二菜という感じで，汁ものは，みそ汁よりもすまし汁のことが多く，これは特に理由はなく，ただ家族の好みに合わせてやっていたようです（図76)。第2次世界大戦が終わるまでの旧満州では，食料事情がよく，米などは，大人ひとりにつき 15 kg，小人ひとりにつき 7.5 kg，一ヶ月の間に配給があったので不自由はしなかったそうです。また小麦や大豆も配給され，時には，特配といって，小豆なども配給されたので，子供のおやつにビスケットやパンを焼くこともたまにあったといいます。また父親だから，男の子だからというので，特別にちがったものを食べるなどということはなかった。しかし終戦後，日本に引きあげてきてから，しばらくの間は，食料を集めることが大変だったようですが，その頃のことはあまり話してもらえませんでした。

E．食事のときのご飯の給仕について

ご飯をよそったりするのは，もっぱら自分で，結婚前は，母親と自分でやっていた。娘達が大きくなってくると，少しは手伝うようになった。よそう順番は，父親に最初によそい，あとは，小さい子供から大きいほうに順によそっていき，自分のものに一番最後によそった。神仏の拝礼はすべて父親が行った。結婚前，自分の父親は，酒がすきでほとんど毎晩，飲んでいた。その時の量はだいたい2～3合程度だった。結婚後，夫は昔飲んでいたらしいが，結婚を期に禁酒したので，晩しゃくは一回もしなかった。

F．食事のあとかたずけについて

食べおわったあとに，すぐ茶わんや箸を湯茶でゆすいだりすることはなく，食べおわったらすぐ流し場まで自分が持っていった。またこれもよそうのと同じように，子供たちがある程度大きくなると，手伝うようになってきた。洗った食器は，少しそのままかわかした後に，食器棚におさめた。

G．食器の共用について

共用の食器には，浅い少し大きめの鉢のようなものぐらいで，それには，漬物などをおもに盛っていた。他のものは，それぞれひとり分ずつにつぎわけていた。

その頃には，箸箱などはつかわず，食事をする時ごとに，飯台の上に直接箸を並べていた。

H．食事中にしてはならないこと

食べる順序については別に注意したりはしなかった。食事中のおしゃべりについては，特に子供がしゃべることは良しとした。なぜならば，子供がしゃべることによって，健康状態など

がわかるから。

食事中には，全員，タタミの上で正座の姿勢をとった。

その他，食事中にしてはならなかったこととして，うつり箸をとてもきらっていた。

I．食事中のあいさつについて

あいさつは，普通に，食べはじめには，「いただきます。」，また，食べ終わりには，「ごちそうさま。」と言っていた。

J．食事中の話題について

食事中にはなすときは，もっぱら夕飯のときで，自分から話すことが多かった。話題はそのときどきで，いろいろあった。

3．現在の時期

A．食事の形式と家庭環境について

現在は，小さな応接三点セットの椅子とテーブルを使って食事をしている（図77）。

これは，娘の家族と同居（離れにひとりいる）するようになった昭和50年ぐらいから今もずっと続いている。現在の家族構成は，娘夫婦とその子供（男女各1人）2人の5人家族である。

住所 福岡県柳川市D町

住環境は，近くに商店街がある住宅地である。戸主の職業は，運送会社に勤める会社員である。

同居するまでは，しばらく病院に入院していたのでその時は，ベットの上で食事をとっていた。したがって食事形式の変化は，退院し，離れにひとり住むようになったからである。また椅子にしたのは足がおもうようにならないためである。

B．食事をする部屋について

離れは6畳一部屋で，食事だけでなく，すべての生活の場となっている（図78）。

C．どのようなすわり方で食べたか

普段はひとりで食べるが，正月だけは家族全員がそろって食べる。その時の坐り方は，図79のようにすわる。このときはカーペットの敷いてある部屋で，飯台である。全員に座ぶとんがある。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝と晩は，娘がつくったものを部屋まで運んでもらう。朝は，ご飯に汁，それに軽いおかずが，一品か，2品つく。晩は，ご飯に汁もの，それに，2皿分おかずがある。汁ものは，みそ汁がほとんどである。

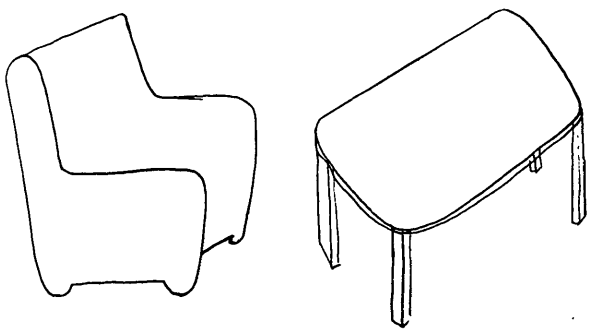


図77

昼は自分でつくる。パンを焼いたり，めん類等，簡単な料理を自分の部屋でする。その他，くだ物を食べたりする。また毎日牛乳を1本 (180 cc) を飲むことにしている。朝，晩は，家族と同じものを食べ，特別にちがったものを食べたりはしない。

E．食事のときのご飯の給仕について

娘か孫がよそったものを，お盆にのせて，部屋まで運んでくる。順序は，自分のものを一番最初によそって持ってきている。晩しゃくなどはやらない。

F．食事のあとかたずけについて

食べおわったあとは，すぐに茶わんや，箸を湯茶でゆすぐなどということはしない。食べたあと，部屋の近くにある水道のところで，食器を洗う。すぐ洗うこともあるし，しばらく水につけとくこともある。洗ったあとは，しばらくそのままかわかして，お盆の上にのせ，お盆を置いておく位置が決まっているので，そこに置いておく。

そのお盆は，次の食事のときに，娘か，孫がとりにくる。

G．食器の共用について

いつもひとりで食べるので，家族と食器を共用して使うことはなく，すべてひとり分ずつつぎ分けてある。

昔は，箸箱など使わなかったが，今は，箸はいつも部屋の中においておくので，洗ったあとは，他の食器は，お盆にのせるが，箸は箸箱にしまう。

H．食事中にしてはならないことについて

食事をするときは，ひとりなので，しゃべりはしないが，テレビかラジオをつけている。ただ，食事を運んでもらったときに，少しはなすくらいである。

食事中の姿勢は，タタミの上の椅子にすわって，テーブルの上にお盆をのせて食べる。テーブルは，頂度，ひざのあたりにくる。また，椅子にはざぶとんを敷いている。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめも，食べ終わりも，特にあいさつはしなくなった。

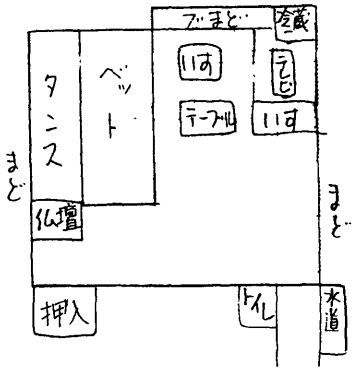


図78

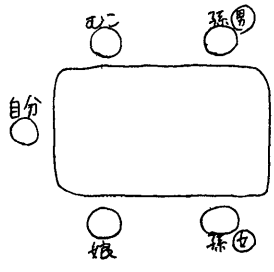


図79

調査者　No. 120(m)	調査日　昭和59年8月15日(水曜日)
被調査者　N.H.　　性別　f	出生年　明治40年(76歳)(第3子)
出生地　神奈川県鎌倉市O町	
生家の職業　商家	
現住所　神奈川県横浜市保土ヶ谷区	
住所の変更とその年度　鎌倉市—横浜市(昭8)	
最終学歴	結婚　昭和8年(25歳)
被調査者との関係　友人の祖母	

1．お膳の時期

明治40年の10月31日に生まれたN.H.さんの記憶にはお膳の時期はなく，すでにちゃぶ台の時期からなのでお膳の時期については調査ができなかった。

2．ちゃぶ台の時期

A．食事の形式と家庭環境について

・どのような形式で食事がなされていたか

——そりゃあ，あまり立派なものではありませんでしたねえ。四角いちゃぶ台を父と母と8人の兄弟でかこんで食べました（図80)。

・それを実際には何と呼んでいたか

——はい，ちゃぶ台のことは「お膳」といっていましたねえ。

・いつ頃から始まり，いつ頃におわったか

——そうですねえ，わたしが覚えている時からずっとですから……。明治40年か45年ぐらいかしらねえ。で，おわりはねえ，わたしが嫁に来るまでずっとそうだったから，えっとわたしがここに嫁に来たのは昭和8年ですから，そのくらいまでですねえ。（ということで結局，明治40年代の前半ぐらいから昭和8年ぐらいまでのようだ）

・その時期の家族構成は

——わたしの父と母と8人の兄弟です。

・兄弟のうちわけは？

——ええと，まず長男（兄）ですねえ。でも長男は東京に奉公に行ってましたから，家にはいませんでした。あとは，姉（長女）で次が私で私の下に妹が三人と弟が二人ですねえ（要するに長男，長女，次女（本人)，三女，四女，次男，三男，五女となっていた)。使用人なんてものはおけませんでしたよ。

・その時期の住所は

——鎌倉郡(ごおり)O で番地なんてものはありませんでしたよ。

・鎌倉郡(ぐん)とはいわなかったのですか

——そうですねえ「ごおり」といってましたよ。うん，「ぐん」とはいわなかったです。みんな「鎌倉ごおり」と言ってました。

・その時期の住環境は

——農業地ですよ。田んぼでしたね。畑はなかったですねえ。

・その時期の戸主の職業は

——「ばいすけ」の卸しをしてました。まわりの農家に機械を貸して，それで作ってもらうわけです。それを買い取るわけ。そう，農家の人は食糧は手に入るけどお金をあまり持ってなかったから，副業にしてみんな作ってましたねえ。で，それをわたしたちは馬力って言ってたんだけど，まあ馬でひく荷車みたいのにちょうちんをつけて父が東京まで卸しに行ってましたよ。

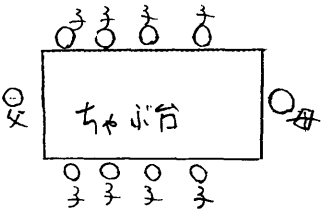


図80

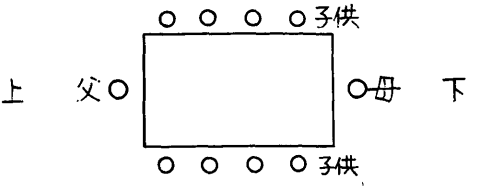


図81

・食事の形式が変化したとすればなぜか

――それはやっぱりまわりの生活がよくなったからでしょうねえ。そうじゃあないんですか。

B．食事をする部屋について

・食事をする部屋のことを何と呼んでいたか

――やっぱ「台所」って言ってましたねえ。

・その部屋は食事以外にも何か利用したか

――いえ，狭かったから食事だけでしたねえ。なんたって板の間だったから。

・その部屋の情景は

――ええ，部屋の隅に「ねずみいらず」がおいてありましたねえ。そのくらいですよ。大きさは四畳半くらいでしたねえ。(「ねずみいらず」とは食器棚のこと)

C．どのような座り方で食べたか。

・座席の順番は図81参照

・みんなそろって食べたか

――はい，みんなそろって食べてましたねえ。

・食べる場所は

――板の間でしたよ。

・座ぶとんの有無

――そんないいものありゃしませんでしたよ。

D．ご飯の他に何を飲み，食べていたか

・朝

――みそ汁とつけものでしたね。つけものは「おこおこ」と言ってましたねえ。

・昼

――おこおこだけですね。

・晩

――野菜の煮たものを食べてました。

・だれか特別にちがったものを食べていたか

――いいえ。皆同じでしたよ。父も一緒です。

E．食事のときのご飯の給仕について

・だれがよそったか

――母でした。

・よそう順番は

――父が一番はじめですね。それは，いてもいなくても必ず父が初めでした。

・神仏へのお供えは

——だれよりもはじめに仏様にご飯のはじめのところよそってお供えしましたねえ。神様は毎月一日と十五日でした。

・晩しゃくの有無

——ありませんでしたよ。

F．食事の後片付けについて

・すぐに湯茶でゆすいだか

——いいえ，そんなことはしませんでした。

・いつ，だれが食器をさげたか

——各自のものは各自でさげました。

・いつ，だれが食器を洗ったか

——母でしたねえ。食後すぐです。

・洗った食器をどこに置いたか，しまったか

——ねずみいらずにおさめました。

G．食器の共用について

・共用の食器にはどんなものがあったか

——家族が多かったので共用のものを使うとおかずのとりあいになるから，ぜんぶ一人一人のお皿にもってましたねえ。

・箸箱について

——箸箱はそれぞれ家族の名前が書いてあって一人一人決まってました。えーとだいたいそれが明治の45年～昭和の７年ぐらいですかねえ。

H．食事中してはならないことについて

・箸の上げ下ろしは

——箸の持ち方は母がうるさくいってました。

・食べる順番は

——特にありませんでした。

・食事中のおしゃべりは

——してはいけませんでしたねえ。

・食事中の姿勢は

——かしこまって食べてましたねえ。

・そのほかは

——特にありませんでしたけど，母が大変しつけにきびしい人だったのでいわれなくてもみんなちゃんとやってましたよ。

I．食事中のあいさつについて

・食べはじめは

——いただきます。

・食べおわりは

——ごちそうさま。

J．食事中の話題について

・だれがおもに話したか

——母がさっさと食べなさいというほかは特に話はしなかったですねえ。

・何の話題が多かったか

——特にありませんねえ。

3．テーブルの時期

A．食事の形式と家庭環境について

・形式はどうか

――テーブルがあっていすにかけて食べました（図82）。

・何と呼んだか

――やっぱテーブルといってましたよねえ。

・いつ頃はじまったか。

――ええと昭和25年か30年ぐらいからですか。

・家族構成は

――娘と夫と私の三人だけでしたねえ。

・その時期の住所は

――横浜市保土ヶ谷区ですね。

・その時期の住環境は

――住宅地です。

・戸主の職業は

――第一銀行，合併するまえのですけどそこに勤めてました。

・食事の形式が変化したとすればなぜか。

――やっぱ生活のレベルがあがったからでしょうねえ。それに戦後落ち着いてものが出回ったしねえ。

B．食事をする部屋について

・何と呼んでいたか

――台所っていってましたねえ。

・食事以外にも利用したか

――別に利用しませんでした。

・その部屋の情景は

――食器棚が置いてあったぐらいですよ。二畳ぐらいでしたから。

C．どのような座り方で食べたか。

・座席の順番は図83参照。

・みんなそろって食べたか。

――はい，みんなそろって食べました。

・食べる場所は

――板の間でしたねえ。

・座ぶとんの有無

――みんなのいすの上にざぶとんつけておきましたけどねえ。

D．ご飯のほかには

・朝

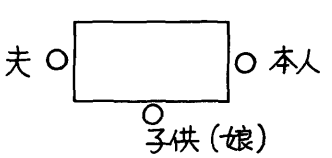


図82

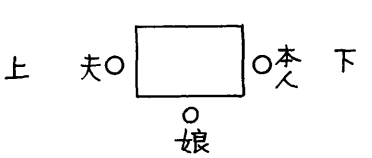


図83

——パンと牛乳ですねえ。ご飯は食べませんでしたねえ。

・昼

——つけものですねえ。

・晩

——日によって，野菜，魚，肉，みそ汁などを食べました。

・だれかちがったものを食べたか

——いいえ，皆同じでした。

E．ご飯の給仕

・だれがよそったか

——母，ようするに私です。

・よそう順番は

——夫から娘で最後に私です。

・神仏へのお供えは

——仏様はあったのでちゃぶ台の時のようにお供えしました。

・晩しゃくの有無

——しませんでしたねえ。

F．食事のあとかたづけについて

・食後すぐ湯茶でゆすいだか

——いいえ，しませんよ。

・いつ，だれが食器を下げたか

——食後すぐに，私がやってましたねえ。

・いつ，だれが食器を洗ったか

——食後すぐに，私が流しで洗いましたよ。

G．食器の共用について

・どんなものがあったか

——私の小さいころからの習慣で，やっぱ，こん時も共用のものはありませんでしたねえ。

・箸箱は

——もうありませんでしたねえ。

H．食事中してはならないことについて

・箸の上げ下ろし

——まあ，私も娘には箸の持ち方はちゃんと教えましたねえ。

・食べる順番は

——かるく教えましたけど，それほどうるさくいいませんでした。

・食事中のおしゃべりは

——許してましたねえ。

・食事中の姿勢は

——きちんとはじめからできてましたのでね，特にいいませんでした。

・そのほかは

——まあ特にありませんでしたけど，こぼすなというくらいでしたかねえ。でも昔に比べればきびしくなくなりましたよ。

I．食事中のあいさつについて

・はじめ

——いただきます。

・おわり

——ごちそうさま。

J．食事中の話題について

・だれがおもに話したか

——やっぱ私でしたねえ。

・何の話題が多かったか。

——まあ，私が話すんですから，やっぱ世間話が中心ですねえ。それから娘に学校のことを聞いたりとかですかね。

調査者　No. 122(f)	調査日　昭和59年8月12日(日曜日)
被調査者　O.T.　性別　f	出生年　大正5年(68歳)(第1子)
出生地　奈良県橿原市I町	
生家の職業　元荒物商，現在会社員	
現住所　奈良県橿原市I町	
住所の変更とその年度	
最終学歴　旧制県立高等女学校	結婚　昭和10年(20歳)
被調査者との関係　知人	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

いわゆる箱膳の形のもので食事がなされていたが，単に「オゼン」と呼ばれていた。家族皆，「オゼン」の形は同じだが，中に入っている食器の大きさは違った。「オゼン」にはふたがついていた（図84参照）。又，食事も次のように配列が決まっていた（図85参照）。この「オゼン」の形式は，明治から大正にかけて用いられ，昭和になってからいわゆるちゃぶ台に移行したということだが，その原因は明らかでない。

この時期の家族構成は，祖父，両親，子供（7～8人）というのが一般的なケースだったということだが，Oさんの場合は，大正11年に祖父を亡くし，子供もOさん1人だった。

住所は，やはりI町で，住環境は，いわゆる寺内町であるため，住宅地でもあり，また各種産業も町に根づいて発達していた。O家は，荒物屋をしていたということだ。

B．食事をする部屋について

食事をする場所は，「ダイドコロ」（台所）と呼ばれ半分板の間，半分畳であった。畳部分には，戸主が座った。家族皆が，店で働き子供は学校に行っていて家に人がいる機会が少なかったせいか，特に別の用途に利用されることはなかった。ちなみに，炊事場は，別に「タナモト」（棚元）と呼ばれていた。

C．どのようなすわり方で食べたか

座敷に面した畳部分に戸主，その向いの「タナモト」に一番近い場所に母，左右に祖母と子供が座った（図86参照）。座ぶとんは，全員が使用した。また，朝晩は，家族全員がそろって食事をしたが，昼は，父母は仕事，子供は学校，ということで，ばらばらに済ませたということだ。

D．ご飯のほかに，何を食べ，何を飲んでいたか

朝は，「チャガユ」（茶粥）と決まっていたが，中に具を入れることもあり，季節によっていろいろと中味をかえて「おばあさんが，ようつくってくれた」そうだ。その中味は，そら豆，さつまいもなどが多く，他に干して日もちのする「オカキ」が，夏によく使われ，正月になる

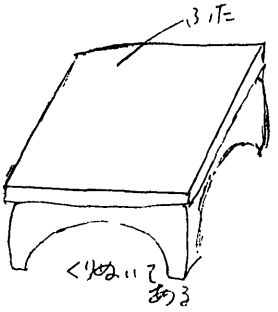


図84

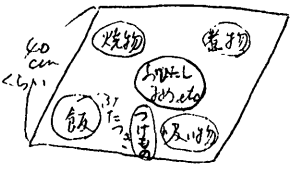


図85

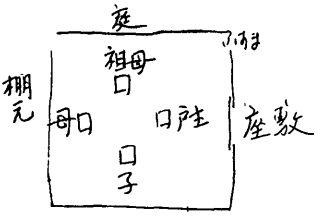


図86

と，ついた「オモチ」を焼いて，茶粥の上にのせて食べたという。1年を通じて，茶粥の他に特におかずはないが，自家製のつけものが必ず添えられた。

昼は，ご飯，豆腐や菜っぱの炊いたものなどで，その他に町内を巡って売りにくる「コブマキ」（昆布巻）や「ニマメ」（煮豆）などが，添えられた。

晩は，焼物，煮物，おひたし，吸い物，飯つけもの，と品数もそろえられ，三食のうちで最も手間がかけられた。ただし，この夕食では「オトウサン」（父）が，晩酌をするために，特別に酒の肴が用意された。酒の肴には，魚，さしみ，ひもの，その他嗜好品が用いられ，普段は別のお鉢に盛られるだけだったが，「メデタイゴト」などがあると「ワキゼン」として，他の家族よりお膳が一膳多くなったという。

E．食事のときのご飯の給仕について

ご飯は，「オカアサン」（被調査者の母親，家庭内では娘の位置にある人）がよそった。「オトウサン」（被調査者の父親，祖父は当時すでに死亡していたため戸主の位置にあった人）は，晩酌をしていたので，ご飯は，初めにはよそわれず，祖母，子（Oさんの場合は1人子だったが，普通は子の中でも長男，次男…長女，次女といった順序が定められていたらしい。）の順によそわれ，最後に母は，自分の分をよそった。Oさんは，「お母さんも忙しかったでっしゃろな。みんなのお給仕せんならんしねぇ。ほやから一番後からねぇ。」と当時の様子を思い出しながら語ってくれた。

神仏へのお供えは，ご飯が炊きあがると，おひつにうつす前に「オブッパン」として，まず誰よりも先にお供えされた。

F．食事のあとかたづけについて

食べ終わると，食器は「タナモト」（棚元）の方へ運ばれ，母親が，家族全員の食器を洗って，それぞれの「オゼン」に分配し直してふたをし，お膳ごと「ゼンダナ」（膳棚）にしまわれた。

G．食器の共用について

共用の食器には，つけものを入れる大きな鉢があった。寒い時分になると，まん中に「カンテキ」を置いて，冷めないように「オシル」（お汁）をかけておき，そこから，皆が，おかわりをした。

箸箱は，ふたつきの木製のものが使われていた。箸は，使うたびに他の食器とともに洗われ，母親によって，またそれぞれの箱に納められた。この箸箱は，Oさんが，子供の頃からすでに使われていたということだが，戦争（第2次世界大戦）が始まると，物資の不足などが理由となって，使われなくなったという。

H．食事中にしてはならないことについて

食事中に特にしてはならないと注意されたことはないそうだが，箸の持ち方は，やかましく言われたようだ。その他は，「お行儀よくよばれ」れば，なごやかに話をしながら，食事をした。

I．食事のあいさつについて

現在と同じように食事の始めに「イタダキマス」，終わりには「ゴチソウサマ」というあいさつが為された。

J．食事中の話題について

食事中には，その日あったことなどがなごやかによく話されたという。その中でも，特に「オトウサン」（父）や「オバアサン」（祖母）がよく話していた。

2．ちゃぶ台の時期

ほとんどの項目において，お膳の時期と同じ様式が継続されたので，必要な項目においてのみ述べることにしよう。

いわゆる“ちゃぶ台”は，O家では「ショクダイ」と呼ばれ，ちょうど“シナ事変”の頃，「オゼン」から「ショクダイ」に変わったということだが，その原因は，はっきりしない。その頃になると，Oさんも結婚し，養子をもらったため，上座には，Oさんの父親と夫が，2人並んで座った。

食事の内容に，大正の終わり頃から，やっと肉が加わるようになった。祭りの日には，たこを食べたりしたが，肉を食べるのは，1週間に1度のすきやきの機会だけであった。Oさんは，「わりやいにごちそうと思てましたよって……」と語ってくれた。しかし，嘉永生まれの彼女の祖母は，浄土真宗の信者で，肉を一切食べなかったという。皆が，すきやきをする日には，自分だけ別のものをつくって食べていたそうだ。

また，「ショクダイ」は，折りたたみの物を使う家もあったそうだが，O家では常置され，食事以外の時には，お裁縫や，勉強机に，使われることもあったという。

3．椅子式テーブルなどの時期

いわゆる椅子式テーブルが，導入されたのは，昭和34～35年頃であった。38年に，Oさんの息子が嫁をもらってからは，食事も嫁が作るようになり，食生活も現在と変わらないものとなった。（つまり，洋食や和食がとり混ぜられ，献立も多くなった。）

現在，戸主は，会社員である。が，住所は変わっておらず，町並みもほとんどかわらずいぜん住宅地でありながら，地元産業も発達している（現在の地元産業は繊維産業）。

食事をする部屋は，8畳ほどのダイニングキッチン（ソフトタイル敷き）になっており「台所」と呼ばれるが，必ずしもそこで，食事が行われるとは限らず，隣の「居間」（以前，台所と呼ばれ，ちゃぶ台が置かれ，食事が行われていた部屋）で，いぜん「ショクダイ」を囲んでテレビを視ながら食べることもしばしばだという。

座席の順序は，「台所」では，最も流しに近い位置に嫁が座り，「居間」では，以前と変わらず，かってOさんの母親が座って給仕した位置に嫁が座って給仕する。が，他の者の位置は，必ずしも一定ではない。食事も，朝昼晩とも必ず家族全員で食事をするというわけではなく，「主人」の帰りが遅かったり，娘が，アルバイトで遅くなったりで，ばらばらに食事をとることも多い。（ちなみに，現在の家族構成は，祖母（Oさん自身），主人（Oさんの息子），嫁，娘2人である。）

神仏へのお供えは，以前と同じように行われ，今でも「オブッパン」と呼ばれる。

また，食事のかたずけは，嫁が行い，流しに運ぶ人もその時々によって違う。食器は，洗い終わると，「食器棚」に収納される。

食事中の行儀なども，とりたてて言われるものはない。また，食事中の話題も，その日あったでき事の会話などが，自然と交わされる。

主人の晩酌は，現在も毎日行われ，そのために，昔と同じように特別に酒の肴が用意される。

調査者　No. 125(f)	調査日　昭和58年7月12日(火曜日)
被調査者　K.S.　性別　f	出生年　明治39年(78歳)(第3子)
出生地　島根県簸川郡S町	
生家の職業　小学校教員	
現住所　鳥取県境港市S町	
住所の変更とその年度　島根県簸川郡S町—鳥取県境港市S町(昭56)	
最終学歴　技芸学校	結婚　昭和9年(29歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期，2．ちゃぶ台の時期

A．食事の形式と家庭環境について

箱膳とはやっぱし昔からおんなし（同じ）箱膳だったな（図87)。始まったのはわからないけど，私のおじいさんとおばあさん（68年前に50歳位の人）は使ってた。けど，私らはもう使わんかったよ。他の人は茶ぶ台で食べてた。あの当時は使用人もいたのよねえ。その人らは下で別にお膳で食べてたよねえ。箱膳ではないけれど，小さなお膳でねぇ。だから家族はおじいちゃんとおばあちゃんと，おとうさんとおかあさんと子供がいて，あと使用人だった。そのときの住所は島根県簸川郡S町，昔はS村だったけどね。そのころは農家っていってもねえ，養蚕，かいこを飼ってたんだ。田んぼは作ってなかったからねえ。そいでうちでは，目下養蚕をね，人をたのんだりしてやってたよ。戸主の職業はね，教員。小学校のね。ずーっと校長だった。それで家族が養蚕してた。あの当時，生活がやれんからね。形式が変わったっていっても，結局おじいさんやおばあさんは昔からそのままでやってきとうなさるから，私らのおとうさんやおかあさんや子供たちは，まあ食事は一緒だし，食べるものも一緒だけれども，飯台っていうか食台で食べたの。で，おじいさんとおばあさんは，おんなしところで，一段高い所だわね。一段高い所で食べて，家族は低いところで食べたんだよ。食事する部屋は，台所と呼んでた。昔はねえ，台所っていったってねえ，「しはん」っていっとったけどねえ，みな流し台とかがねえ，土間にあるんだよねえ。コンクリートなんかじゃなくてね，おっきな石みたいなもんを並べて，その上に流し台とか立っとって，それからその横に水がめがあって水とかは上（部屋のこと）からも汲めるけど，炊事なんかはみんな下に降りてやるんだよ，石の上でね。そこを使用っていっても，食事以外にはあんまし利用しなかったねえ。そこの大きさはだいたい四畳半ぐらいかなあ。食器棚とかは外にあるわけ。だから部屋は八畳くらいあったのかなあ，一間半から二間もあるようなおっきな据え付けの食器棚だったから。ずーっとまわりに置いてあって，そこから食器とかを出して，使ったから。そうしてみると箱膳なんかその中に入れてあったんだな。ちょっとした縁側もあったりしたよ。そこでふきんとかを干したりしてたんだ。

C．どのようなすわり方で食べたか

八畳の部屋で，おじいさんとおばあさんは一段高い所にすわって，それから他の家族は飯台で食べたんだよ。すわる所は，やっぱしお父さんが上手で，お母さんは一番下手だったネ。子供は適当に座ってた。使用人は時間は一緒だけど，飯台でなく，畳の上にお膳でといってもこのお膳は箱膳ではなくて，平たいもんだったよ。そのお膳で食べたんだよ（図88)。

みんないっしょに食べてたよ。食べた場所はね，むしろだった。だけどね，むしろの上に，畳をはずしたようなござが敷いてあったんだよ。板の間でね，その上にむしろとござが敷いて

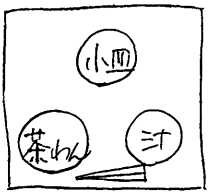


図87

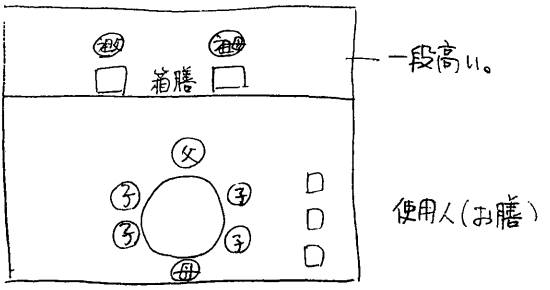


図88

あったんだよ。座ぶとんなんかなかったよ。

D．ご飯のほかには，何を食べたか

それこそキャベツとかレタスとかいうものはなかったけど，まあ大根とか菜っ葉とか作ってたからねえ，白菜はなかったかな，大根とか人参とかかぶとかごぼうとか，そんなもんを食べてたねえ。朝ごはんはねえ，ごはんじゃねえの。おかゆ。茶がゆってって（言って）ねえ，番茶を煎じてねえ，それとかいもがある時はいもがゆ，ないときはふつうのおかゆだった。みそ汁なんかはないから，煮しめと漬け物ぐらいだったんだろうねえ。お昼はお弁当だった。晩はごはんだった。それとみそ汁と煮しめぐらいで，あと漬け物がついたかな。お魚は，ほんと年に何回かぐらいしか売りに来んかったからねえ，ほとんど食べんかった。おかずとかはみんな一緒だったよ。だれも特別なものは食べなかった。

E．食事のときのご飯の給仕について

よそったのはお母さん。順序はね，まずおじいさん，おばあさんで，お父さんとが決まってて，あとは適当だったね。仏さんにお供えするのは朝。だけど，ごはんがないと供えられんけんねえ，炊いた時に供えてたねえ。番茶は朝，必ず供えてたねえ。晩しゃくは，うちがだれも飲まなかったから，なかったよ。

F．食事のあとかたずけについて

箱膳の時のことはようわからんねえ。洗うのはおばあさんの仕事だったからねえ。他のものは全部まとめて一日一回ぐらい，たぶん晩に洗ったんだろうねえ。だけどはっきりとは覚えてないねえ。まだ小さかったから。食器は毎食後，さげたよ。晩は子供も手伝うけど，朝は忙しいからお母さんがさげてた。だけど，よそのうちではね，飯台の上におかずとか茶わんとかが全部並べてあって，その上にふきんかなんかがかけてあることもあったねえ。で，お母さんが毎回洗ってたよ。洗った食器は竹で編んだかごに入れてね，上にふきんをかけて水を切っておくのね。それから食器棚にしまったよ。

G．食器の共用について

あのね，煮しめなんか三日分ぐらいを一度に作るから，こねばちっていいよったけど，大きなおはちに入れてたんだ。お盆なんかにおだんごをこねる時に使うおはちだよ。それを少し小さめのおはちに移して，飯台に並べて，自由に取って食べるん。ふつうのお皿はだいたいだれが使うかは決まってるよ。お箸箱は昔からあったんでしょ。うちのおじいさんが作りよんなさったけんね。竹の細いのがあるのよ。あれを，節を抜いたり，節と節の間を使ったりして作ってもらってたよ。明治の30年頃にはずうっともう1人1人箸箱を持ってたよ。その竹の箸箱がなくなったのが，大正の頃だねえ。それから後はね，木をくった（くりぬいた）ようなのとか，

ふたをするようなのを作って持ってたよ。

H．食事中にしてはならないことについて

まあこの頃の子は食事中にお手洗いに立つ事があるけど，あんな事はできんねえ。おしゃべりはそんなにきびしくなかったけどねえ，あんまりよけいはできなかった。作法もそれほど厳しくはなかったけど，飯台に出ている丼に自分の箸をつけるなんてことはできんかったね。おさいばしがついとって，それで取ってね。食べる順序も，そんなに細かくはなかったけど，最初にごはんを一口食べて，それからお汁を飲んでっていうふうだった。食事中に，無作法になるような事はせんかったから，あまりおこられた記憶はないねえ。この頃の子供みたいに行儀が悪くないからねえ。ちゃんと座って，足を崩すような事もなくてね，「いただきます」「ごちそうさま」はきっちり言ってたよ。礼儀作法とかは厳しくしつけられたね。ごはんやおかずを残したりしたら，ものすごく後でおこられたよ。

J．食事中の話題について

話しかけるのは，そうだねえ，お父さんは黙っとったからねえ，おばあさんぐらいかなあ。それとお母さんぐらいだね。話題っていっても，まあ世間話ぐらいじゃないかな。学校の事とかねえ。まあごはんの後でちょっと話すぐらいの事だったと思うよ。

3．現在（椅子式テーブル）

A．食事の形式と家庭環境について

つけものとか，煮しめとかは，各自が取って食べるから小皿がついてるくらいだね（図89）。

普段はテーブルで食べるけど，お客様がある時なんかは，座敷で食べるよ。おばあちゃんがテーブルで食べるようになったのは，昭和48年頃からだ。家族は私と，私のお母さんだね。住所は島根県簸川郡S町だよ。まわりは農業地だけど，うちは店をやってたからね。よろず屋だよ。テーブルで食べるようになったのは，私の足が痛くなったのと，改築したからだ。それまでは飯台で食べてたんだけどね。

B．食事をする部屋について

私がお母さんと二人で暮らすようになってからは台所で食事をしていたし，店番もしなくちゃならんかったから，しっかりと食事っていう感じで食べることはほとんどなくなったね。台所のすぐ横の部屋で食べることもあるけど，たまにテレビを見たい時ぐらいなもんだった。いつも食べる部屋は二畳か三畳でまわりに食器棚があって，となりは流しとかの調理場だ。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席といっても一人ずつ交代で食べてたからまあ向かい合わせだったよ（図90）。

あの部屋は狭かったけど，畳が入ってた。座ぶとんは，私の母が足が悪くなってから使いだしたけど，椅子に座る時は使わないよ。

D．ご飯のほかに……

朝はおみおつけ（みそ汁）とごはんと，煮たものやら前の日にたいたものやらをね，食べてたし，梅干とからっきょうとかの保存食も食べた。昼は朝と一緒のものを食べた。晩に何か作って食べるよ。だけどごはんが主で保存食をたくさん作っておかんと，商売やってるから，手が足りんときにやれんでしょ（仕方がない）。

E．食事のときのごはんの給仕について

よそうのは私がよそったし，順序もないよ。仏さんへは朝お茶をあげて，ごはんは炊いた時に供える。晩しゃくはしないよ。

F．食事のあとのかたずけについて

食べ終わったらすぐに流しへ持っていって私が洗って水切りにおくんだよ。それから食器棚

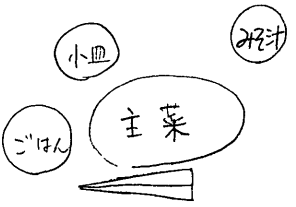


図89

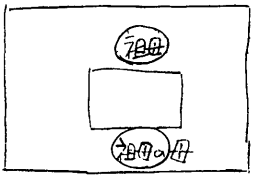


図90

にしまっておくんだ。

G．食器の共用について

お茶わんと汁わん以外は全部共用してた。

箸箱は使ってたけど，こっち（息子夫婦と二年前から同居）にきてからは使ってない。

H．食事中にしてはならないことについて

今は小さな子がいるしねえ，そういうしつけはほとんどしてないねえ。あいさつはきちんと「いただきます」「ごちそうさま」って言ってるけどね。それに対する返事は，することもあるけど，あんまり決まってないねえ。

J．食事中の話題について

子供が好きなことをしゃべってるねえ，学校であったこととか。にぎやかなもんだよ。

調査者　No. 130(f)	調査日　昭和58年7月22日(金曜日)
被調査者　Y.Y.　性別　f	出生年　明治40年(76歳)(第1子)
出生地　高知県土佐清水市N郷	
生家の職業　雑貨店	
現住所　高知県土佐清水市N村	
住所の変更とその年度　なし	
最終学歴　小学校	結婚　(21歳)
被調査者との関係　祖父の姉	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

食事の形式は，お膳で，そのお膳にはいろいろな種類（形）があり，下に引き出しがついているものもあったそうで，「今思うとすごく不衛生だった。」とのこと（図91）。実際には，「お膳箱（オゼンバコ）」と呼んでいた。お膳箱がいつ頃からはじまり，いつ頃におわったかと質問すると「私らは明治の人間じゃけん，生まれた時から使いよった。やめたがはねぇ，まあやめりゃあせんけど，便利やからおじいさんらまだしばらく使いよったけど自然とみんな上品になってきたけん，使わなくなった。それに冷蔵庫らぁなかった時やし，腐るような物も食べてなくて，この中に（箱膳の中に）入れてすぐ出して食べよったのが，冷蔵庫に入れんとだめなものを食べだして自然とちゃぶ台になってきた。」と答えてくれ，食事の形式の変化の一因も答えてくれた。

その時期の家族構成は「おじいさん，おばあさん，父，母，妹1人と弟1人。」で，住所は「高知県土佐清水市」で，これは生まれてから現在まで変わっていない。住環境は小さな漁村で，「皆，海で魚取って，畑や田んぼでいろいろ作って自給自足だった。家は雑貨店やったけど，みんな似たりよったりでその日ぐらしだった。米と魚などを交換したりして，そういう部落だった。」そうだ。戸主の職業は「雑貨店」で，村で唯一の雑貨店だったとのこと。

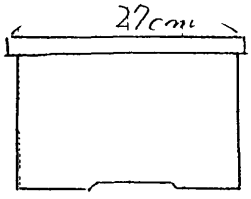


図91

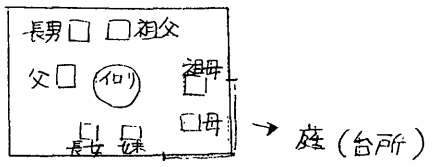


図92

B．食事をする部屋について

食事をする部屋について尋ねると，そういう部屋は別に決めてはおらず，いろりを作ってそこでまきを燃やして明かりと暖をとり，そこで食事をしたということで，食事の時以外もほとんどそこにおり，家族だんらんの場所であったそうだ。呼び方も決まっていず，「二畳の間」とか，そう言っていたとのこと。その部屋の情景は，「どれだけ広くても三畳から広いことはなかった。台所は庭じゃったし，まあそこに近い部屋やけど，上から“自在”というものをつってそこにナベをかけて食べた。食器棚とかそういう家具はなかった。部屋のすみにマキをつんであった。あと，膳箱を置く棚があった。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席の順番は決まっており，父親（戸主）は「上座」にすわって，女は「下座」（ゲザ）にすわって食べた（図92）。

朝，晩は皆そろって食事したが，昼は父母は畑へ行き，一緒に食べなかった。床はタタミであった。ザブトンはなかった。

D．ご飯のほかには何を食べ，何を飲んでいたか

朝：「ここらは白ゴハンら失かったけん，冬はおイモのごはん，夏は麦ゴハン，切りぼしのゴハンだった。おミソ汁なんてめったになかった。ありあわせのものを食べた。要はミソをよく食べた。ミソは腐らんけん。」

昼：「ミソとじゃことをまぜたものや，おしんことか，そういうものやった。」

晩：「おかずを煮た。ダイコン，メアカ，なんかを煮た。あとおつけもの。夏はキュウリとかナスをつけて，冬はダイコンをつけた。ヤサイは全部，家で作った。そうしなけりゃいけなかった。」

だれか特別にちがったものを食べていたかと尋ねると，「長男というものは始終いいものを食べらせた。」とのことで，「兄の子」にはどこ親もそうであって，たとえば白いお米などや，サシミは父，祖父，長男が食べたとのこと。

E．食事のときのご飯の給仕について

だれがよそったかについては，「お母さんがついでくれた。」。よそう順序は，「まず，おじいさん，お父さん，おばあさん，子供たちで，女（なご）らは後から。」だったそうだ。

神仏へのお供えは，「確かにした。」そうで，「朝は必ずごはん炊いたら仏様にお供えして，神様を拝んで，おそなえは，神様には祭りの日ぐらいやったけど，仏様にはごはんとお茶を必らずまつった。」そうだ。

晩しゃくだが，酒を飲む人がいなかったので，やらなかったとのこと。

F．食事のあとのかたずけについて

食べた後はすぐ運んで，水につけた。夜なべの仕事など，次々に仕事があるので，テキパキとやらないといけなかったのである。茶わんや箸を湯茶でゆすいだだけなどということはなか

ったが，2日に一度しか洗わなかったという家庭もあったらしい。「お膳さげるがも女(なご)の仕事やった。」そうで，「洗わん茶わんをお膳箱の中に入れるなんてことはなかった。けど洗わんとそのまま入れとくとこもあった。それでお膳箱にしちょったがよ。やかましい家やったけん，うちは洗ったけどね。」「洗った食器は，『メンゴ』（しだなどで編んだもの）にふせてから乾いたらお膳箱に入れて戸棚に入れとった。」と話してくれた。

G．食器の共用について

共用の食器という特別な意識はなかったようで，「おつけものとかそういう普段から一つのうつわに入れとるものは食事の時もみんながまわして取って食べた。」そうで，箸箱もなく，つましい（裕福でない）家では箸もその食事のたびに竹を削って箸を作っていたそうだ。

H．食事中にしてはならないことについて

「箸の上げ下ろしは別に言われんかった。口の中でこねまわしたりして，箸が折れるほどたたかれたという話も聞いたことがある。箸は大切なものやけん，両手で持って，それにおじぎしていただいてから食べた。特に朝は必らずそうした。」とのこと。食べる順序については，「あの時分は湯のみが各々になくて，ゴハンへお茶を入れよったけど，それが一口もゴハンを食べる前にお茶を入れたらしかられた。それで，まず真先にゴハンを一口食べてから，そのあとは自由に食べた。」そうで，とにかくお茶づけを最初からするなということはうるさく言われたそうだ。

食事中のおしゃべりはあまりなく，「食べる時はだまって食べれと言われた。」とのこと。きちんと正座して食べたが，父や祖父はひざを組んでいたそうだ。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは「いただきます。」食べ終わりは「ごちそうさま。」であった。

J．食事中の話題について

話がある時は，たいてい祖父か父が話主で，めったに話さなかった。話は食べ終わって，女がかたずけている間，男と子供たちがその日のことや昔話をしゃべっていた。

2．ちゃぶ台の時期

A．食事の形式と家庭環境について

食事はちゃぶ台でとった。真中と足とが折りたためるようになっており，使用しない時はたたんで部屋のすみに置いた。主に丸く，数人が座れるので丸い形のものが良かった（図93）。

実際にも「ちゃぶ台」と呼んでいた。大正の頃にはちゃぶ台になっていたかもしれないが，昭和の初期から，ほんの数年前（5・6年）まで使っていた。

その時期の家族構成は，「お父さん，お母さん，主人（婿養子），妹。」で，「弟は結婚してから町（N市）へ出て，そのうち子供が生まれたり，妹が嫁に行ったり，父母が死んだりということがあった。」とのこと。

住所は，やはり高知県土佐清水市であった。環境は，バスがついたが漁村そのものはあまり変化しなかったそうだ。戸主の職業も「雑貨店」で，他に雑貨店が1店新しくできたとのこと。終戦後は，米も少しは売るようになった。食事の形式が変化した理由としては，「みんなが新しいものを買い始めたのでうちでも買った。」のだそうだ。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋のことを何と呼んでいたかという質問をすると，「『はよ（早く，さあ）ごはん食べろうよね』といって，いつもごはんを食べる部屋にちゃぶ台を出して置いて，皆が集まってくるので，特に部屋の名前なんかはなかった。「食堂」と言いだしたがはここ2・3年のことで，家を新築してから。」と答えてくれた。

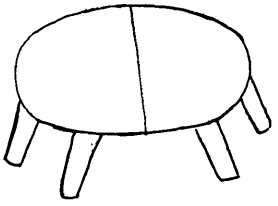


図93

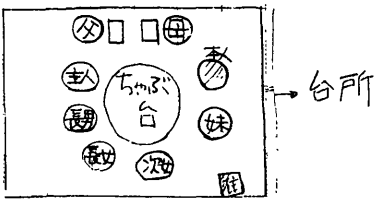


図94

その部屋は，ほりごたつがあって，寒い時など自然とそこに居り，いつも居る，だんらんの部屋であった。そこから，夜寝るときは『ねや（寝屋？）』に行って寝たそうだ。

部屋の広さは，四畳くらいのもので，台所からの「上がりはな」であった。流しがある家は珍しく，水屋とか小さな食器棚があった。それから，その部屋には仏壇と神棚があり，家の大黒柱もあった。

C．どのような座り方で食べたか

お父さん，お母さんは「昔の人」なので，お膳箱のほうが使いやすいといって，ちゃぶ台とは分かれて座っていた。やはり，主人は上座，女たちは下座で，子供たちは長男，長女，次女というように座っていた（図94)。「そうしなければいけない，そうするものだと思っていた。」そうだ。

みんなそろって食べた。タタミであった。座ブトンはお父さん，お母さんの2人にはあった。あとの人たちは，あってもしかなかったとのこと。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

ご飯は，切り干しごはんや麦ごはんだった。いつも漬け物が出，キビナゴなどの魚が出たら上等で，みそ汁が出るのは，病人の希望や客人などの特別の理由があるときだった。朝は，晩に残った煮ものなども出た。ごはんの度に違う物を作ったりはせず，あるものを食べ，失くなったら，「『今晩は何しょうか，きゅうりの酢ものでもしょうか』と言って作った。」ということで，とかくサイは一品か二品だった。ミソと漬け物がサイというパターンが一番多かった。ミソにじゃこを入れてまぜたおかずがおいしかったそうだ。

E．食事のときのご飯の給仕について

ご飯をよそうのは女の仕事で話者がよそっていた。順序は，まず主人，それから長男，その他の子供といった具合だった。神仏へのお供えは，仏様には毎朝欠かさずしたし，神様にも決まった日にお供えしてまつった。晩しゃくはしなかった。「金の働きが少ない者らは晩しゃくらぁできんかった。」とのこと。

F．食事のあとのかたずけについて

食べ終わったあと，すぐに運んで洗った。茶わんや箸を湯茶でゆすぐことはなかったが，食べ終わる前に，お茶を茶わんの中に注いでかきまわして飲むこともあった。食器を下げるのは，話者本人の仕事で，洗うのもそうだった。洗ったあと，「めんご」にふせて，それから，常用の食器は台所の棚に入れ，そうでないものはきれいにふいてからしまった。

G．食器の共用について

共用の食器には，お漬け物を入れる器があり，それから各々，欲しい者は取って食べた。

箸箱はなかった。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の上げ下ろしは別に言われず，言いもしなかった。「子供もあまり不作法はせんし，（しな

いし）自然と行儀良く食べていた。」

食べる順序は，まずゴハンを一口食べてからだったが，たいしてやかましく言わないようになっていた。

おしゃべりは，誰がしゃべるということもなく，「よくしゃべった。」そうで，きちんと正座して食べ，父，主人はひざを組んですわっていた。そのほか，食事中の禁忌は一般常識とされていることで，特にはなかった。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは，主人は「ごっちょ（ごちそう）になるぜー。」と言って食べた。他の者は，「いただきます。」だった。食べ終わりは「ごちそうさま。」と言って箸を置いた。

J．食事中の話題について

誰が主にしゃべるということはなく，みんなよく話した。昔話から世間話までいろいろな話をした。戦争の話などが多く話題に登ったとのことだった。

3．現在の時期

A．食事の形式と家庭環境について

現在の食事の形式はテーブルだが，イスに腰かけるものではなく，タタミの上に座るようになっているもの。真中に鉄板がついており，焼肉などが可能になっている（図95）。

実際に何と呼んでいるかというと，「台」とか「食べる台」と言っているそうで，5年ほど前，孫たちがお好み焼や焼肉に便利だからと買ってくれたもの。現在の家族構成は，主人（夫）と2人ぐらし。

住所は変わらず，高知県土佐清水市。

現在の住環境は，道路の整備にともない，村も発展し，漁村だが，「スーパーも郵便局もできて，電気屋とかもたくさんになって住みようなった。」とのこと。戸主の職業は，「お菓子店」になった。

食事の形式の変化の理由については，「皆がテーブルに変えはじめて，孫たちが買えとゆうので替えた。」と答えてくれた。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は，「すいじ場とか，食堂と言う。」そうで，「料理と食べるだけの部屋。」だとのこと。広さは，流し台その他を置いている所が板張りで，タタミは4畳半。テレビと食器棚が2つあり，仏壇と神棚もある。

C．どのようなすわり方で食べたか

今でもやはり主人は上座，女は下座で，2人そろって食事をしている（図96）。

だが，テレビの見やすい位置にすわるようになった。

畳の部屋で食べており，流しの所は板である。二人とも座ブトンを使っている。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

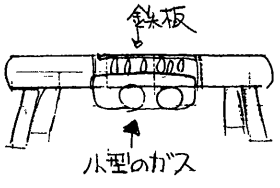


図95

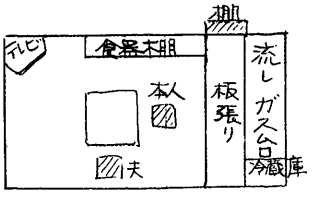


図96

朝：ナスとキュウリとカボチャを煮たものと漬け物，梅干し。

昼：焼き魚と朝と同じもの。

晩：サシミ，イカのあえもの，煮もの。

いつも，朝は前の晩の残り物とみそ汁その他を食べる。昼は必ず焼き魚を食べており，晩は3品～5，6品用意する。魚か肉のどちらかを毎晩出している。

特別にちがったものを食べるということはないが，「このごろ，じいさん（夫）の具合が悪いのでおかゆを食べさせている。」そうだ。

E．食事のときのご飯の給仕について

給仕は全ておばあさん本人がする。まず，おじいさんによそってから自分の茶わんによそう。

神仏へのお供えはかかさず，昔と変わりなくやっているが，仏様への供え物は，昔と違って，くだものやお菓子なども供えるようになった。晩しゃくはやらない。

F．食事のあとのかたずけについて

食べ終わったあとはすぐに台所へもって行き，おばあさんが洗う。洗ったあとは，食器乾燥器（去年買った）の中に入れ，次の食事までそのまま。しかし，大きな皿などは棚へもどす。

G．食器の共用について

サシミなどは一枚の大きな皿に盛っておいてそれぞれ小皿に分け取って食べる。箸箱は今は二人とも持っている。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の上げ下ろしなどは別にやかましく言わない。自由に食べて良いが，習慣で，まず一口ごはんを食べてから他のものを食べるようにしている。食事中は，よくしゃべる。正座して食べているが，おじいさんは，あぐらをかいて座わる。

I．食事中のあいさつについて

「いただきます」と「ごちそうさま」は必ず言う。朝食の時，おばあさんは箸におじぎをしてから食べているとのこと。

J．食事中の話題について

二人なのでどちらともなくしゃべっているが，おばあさんの方がよくしゃべる。話題は昔話，子供たちのこと，世間話などもするがテレビを見ながら食事をしているので，その話題がほとんどだそうだ。

調査者　No. 134(m)	調査日　昭和58年8月18日(木曜日)
被調査者　O.S.　　性別　f	出生年　明治38年(78歳)(第4子)
出生地　鹿児島県川内市	
生家の職業　警察官	
現住所　鹿児島県日置郡M町	
住所の変更とその年度　川内市—日置郡M町(明39)—串木野市(明45)—日置郡M町(大14)	
最終学歴　K尋常高等小学校高等科二年卒　　結婚　昭和3年(22歳)	
被調査者との関係　祖母(母方)	

1．お膳（箱膳など）の時期

A．食事の形式と家庭環境

使用していたお膳は図97のようなもので，「高膳」と呼んでいた。高膳を使用したのは明治四十五年～大正六年頃までである。家族（養家の家族）は，父，母，兄，兄の嫁，被調査者及び，十月頃からの季節労働者である使用人数名であった。その時の住所，鹿児島県串木野市（ただし，現在のどこになるのかはあまり確かにはわからないようである）。家のまわりは，いわ

ゆる商業地であった。家は焼酎製造業を営んでいたが，工業地というほどの所ではなかったそうである。食事の形式が変化したとすれば，なぜか—の問いに対しては，確かに高膳を使わなくなって食台を使うようになったんだけれども，それが何故かと問われてもわからないとしか返答を得られなかった。自分だけが高膳を使っていたという被調査者にしてみれば，家族が一緒の台で食事をするというのは普通であると思っていたようだ。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋のことを特別に何と呼んでいたことはなかったらしいが，一般的に言う「お末」という呼び方をしたかも知れないということである。又，その部屋は八畳敷きで茶棚（水屋のこと）が据えてあり，応接間としても利用したということである。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席の順番は図98に示すとおりである。南側に父親，東側に長男，西側に母，北側に長男の嫁がすわり，被調査者は，母の後ろについて一人だけお膳を使っていた。食事は皆そろって食べたが，家族は畳で，使用人は板しっ（板をしいた縁）と呼ばれる所で食べることになっており，おひつなども家族と使用人は別々であった。座ぶとんを使うのは，おとっさん（父），おっかはん（母），あんさん（兄・長男）のみであったということである。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか。

朝と昼は，おつい（味噌汁）とお茶があるだけの簡単なもので，晩は，皿もん（皿に盛ってある料理）一つとお茶があったそうである。おとっさん（父）とあんさん（兄・長男）は米ん飯（白米のみのご飯）を食べていたのに引き替え，他の家族は，何か別のもの，たとえば粟などを混ぜたご飯を食べていた。更にあんさん（兄・長男）は卵をよく食べていたということである。

E．食事のときのご飯の給仕について

ご飯をよそうのは，もっぱら兄嫁のすることで（もちろん使用人は別）であったということである。よそう順序は，おとっさん，あんさん，おっかはん，とよそうのまでは順序は決まっていたが，そのあとが兄嫁か被調査者であるかは決まっていなかった。仏さあ（仏様）へのお供へはいつもご飯で，かまん中をめげで混ぜんうつの飯（釜の中をしゃもじで混ぜない—おひつに移したりしない—うちのご飯）を供えていた。先述の順序を言うなら，ご飯を一番最初によそわれるのは仏さあ（仏様）である。晩しゃくはしなかったということである。家では焼酎を造っていたのだが……。

F．食事のあとのかたづけについて

食べ終わったあとは，湯茶で茶わんや箸をゆすいだりせずに，すぐに兄嫁が板しっ（板がし

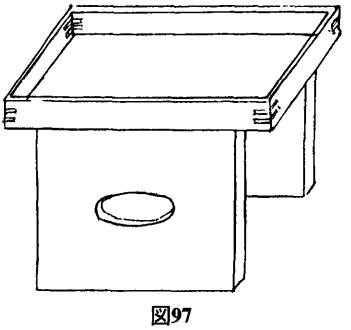


図97

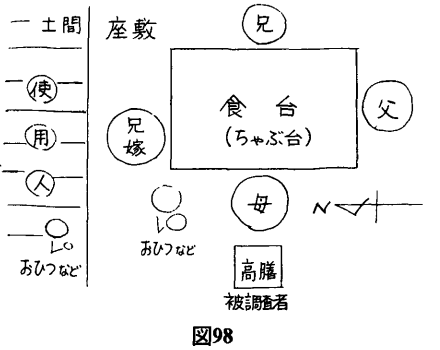


図98

いてある縁）に出し，それを女中が下げて，そのまま洗っていた。洗うときは，木の涌で洗って，茶わんめご（茶わんなどを伏せて置いておく竹製の籠）に置いていた。

G．食器の共用について

共用の食器というようなものは無かったし，各々が使うご飯茶わんなどにしても，誰のものであるかという区別がしてあった。但し，箸についてはそのような区別はなく，どの箸を使っても良かった。だから当然，箸箱なるものも存在しなかった。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の上げ下ろしや食べる順序については，特別に禁忌とされたことはなかった。食事中は無言。きちんと正座して食べなければいけなかった。その他してはならなかったこととして一度に二つの品に手をつけること（要するにご飯茶わんを左手に持ったまま他のおかずをつっつくこと）があった。

I．食事中のあいさつについて

食べ始めも食べ終わりも，特別言葉になったあいさつはなく，ただ食べ始めの時は，まず自分が食べようと思って手に持ったおわんを頭の上へ持ち上げて礼をするようなことをやり，食べ終わりは，黙礼をするだけであった。

J．食事中の話題について

食事中は無言であった。

2．ちゃぶ台（しっぽく台，飯台など）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

使用していたちゃぶ台は図99のとおりである。もっとも現在はこたつ台を使用している。ちゃぶ台のことは，食台と呼んでいた。食台を使用し始めたのは大正七年頃からで，現在も使用している。家族は，夫，被調査者と子供三人であった。住所―鹿児島県日置郡M町で，ここは近年住宅地化されつつあるとはいえ，現在でも農業に従事している家が多く，当時は殆んどが農家であり，被調査者の家（嫁ぎ先）もそうであった。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は，お末，あるいは，ゆるいの端（いろり端）と呼ばれており，食事をする以外に応接間としても使用された。部屋は六畳（内，いろり半畳）で，茶棚（水屋）とくすい棚（薬棚―被調査者は助産婦の資格を持っている―）が据えつけてあった。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席の順は図100のとおりで円い食台ではあったが，一応南に夫，東に長男，西に被調査者となっている。食事は皆そろってした。畳の上で食事をしたが，座ぶとんは誰も使わなかった。

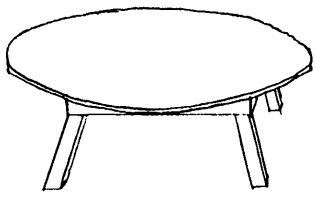


図99

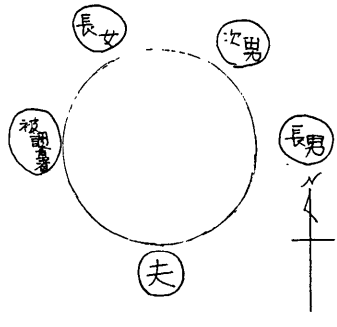


図100

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝と昼は，ご飯のほかにおつい（味噌汁）とつけもん（つけもの）とお茶があり，晩は，皿もん（皿に盛ってある料理）とお茶があるだけであった。誰か特別に違ったものを食べていたようなことは無かった。

E．食事のときのご飯の給仕について

ご飯をよそうのは，長女かまたは被調査者であり，夫，長男，次男，被調査者（または長女），長女（または被調査者）の順であった。仏さあ（仏様）には，朝だけお茶と供え（時々ご飯を供えることもあった）ていた。もちろん家族にご飯をよそったりする前にである。晩しゃくをするのは夫のみで，呑むものは必ず焼酎でそれ以外のものは呑まなかった。

F．食事のあとのかたづけについて

食べおわったあと，すぐに茶碗や箸を湯茶でゆすいでいた。食事が終わるとすぐに被調査者または長女が食器を下げ，そのまますぐに被調査者が洗った。洗った食器は，茶碗めご（洗った茶碗などを伏せて置いておく竹製の籠）に置いておいた。

G．食器の共用について

食器（ご飯茶碗，味噌汁椀）は，誰がどれを使うということは決まっていなかったので，共用であったといえる（但し，箸は誰の箸ということが決まっていた）。食器にはご飯，おつい（味噌汁）が盛られた。家族みんなが一つの皿のものを食べるという意味での共用の食器は存在しなかった。箸箱も使用したことはないということである。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の上げおろしについては，特にこんなことをしてはならないというようなことは無かった。食べる順序についても，特にこういう順序で食べよと言われたことは無かったけれども，ただ，好っなもんのあてぇ残すっんな（好物をあとに残すな—好物を最後までとっておくような卑しい食べ方をするな—）ということを言っていた。食事中は無言であったし，ずっと正座をしていなければならなかった。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは「いただきます」，食べ終わりは「ごっそさん（ごちそうさま）」と言っていた。

J．食事中の話題について

前述のとおり，食事中は無言であった。

3．現在（椅子式テーブルなど）の時期

被調査者は椅子式テーブルなどを使用しておらず，現在でも食台（ちゃぶ台）を使用している。従って概ねは2．における解答と同じであるので，異なる項目についてのみ記述する。

A．食事の形式と家庭環境について

現在，子供は三人とも実家にはおらず，夫も入院療養生活を送っているので，実質一人暮らしである。

E．食事のときのご飯の給仕について

実質一人暮らしをするようになってから，晩しゃくをするようになった。夏は麦酒，その他の季節は焼酎を呑んでいる。

I．食事中のあいさつについて

特別言葉になったあいさつはない。食べ始めの時は，最初に手にした椀を頭の上へささげ持つようなことをし，食べ終わりは，ただ黙礼をするだけである。

＊ H．食事中にしてはならないことについての項の補足

被調査者が養子であった頃，すなわち，高膳（箱膳）を使用していた頃，明確に言葉として

言われたことは無いけれども，してはならないことがあったという。それは，十月頃からの季節労働者達が来ているときの食事の時に限られていたけれども，彼らのおひつ（家族とは別のもの）の中のご飯が残り少なくなってくると，養母は，被調査者に「もう食べるな」—まだ茶わんに残っていても—と目くばせをしてそのあと食べさせてもらえなかったというものである。ただこれは，季節労働者を雇う側の労働者への配慮として，当時慣習的なものであったのか，被調査者が養子という立場にあったためなのかはっきりしないところがあるという被調査者の言により，補足の項とした。

調査者　No. 143(f)	調査日　昭和58年7月21日
被調査者　K.H.　性別　f	出生年　明治44年(72歳)(第4子)
出生地　長野県長野市M町	
生家の職業　会社員	
現住所　長野県長野市Y町	
住所の変更とその年度　長野市M町—長野市Y町(昭6)—長野市Y町(昭31)	
最終学歴　尋常高等科	結婚　昭和6年(20歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

どういう箱膳せったてね，四角な箱膳（図101）。一人ずつお膳になってんの。銘々膳だない。銘々膳せうだかなあ。なんしろね，私の小さい時（大正）は箱膳だったよね。お茶碗とお椀が一人ずつ分配してあるの。上の方にはお父さん，その次は長男。洗うのはてんで（ん）に（めいめいで）洗うの。そしててんで（ん）にしまうの。御馳走さまし（す）るでしょ，そん時にお湯飲むでしょ。必ずお湯を飲まなくちゃいけないの。今みたいにおばん茶だなんて，そういうものなかったけどものね。うちによっちゃあおばん茶が，今はおばん茶だけどね。昔はお湯の通るものを飲まないとこなれが悪いから。おつゆ飲んでも一番最後はお茶なりお湯なりを，子供はお湯，大人はお茶ってなってたもんだよ，ね。大正十五年くらいまでやってたよね。昭和になってテーブル，ちゃぶ台せうの，ね。大正十五年頃は箱膳までやってたんだけども，昭和の代になってからちゃぶ台ってものを使うようになって，みんなそこでぐるぐるとお膳なしで囲んで食べるように。お父さんは上座，お母さん横，子供ちょんずるずると，どっち座わったって構わないけどね。（使用人は？　の問いに）そういう者はいないの，貧乏人だもの。ぐるぐるみんな囲んでね，向い合って。まん中にお櫃とおつゆ。てんでにもってやるうちと，お母さんがもるうちと。（当時の住所，長野県長野市M町。商業地である。戸主の職業は鉄道関係の仕事とのこと。）二十才で嫁にいったんでしょ。そん時が昭和六年。その家がちゃぶ台の時期だったんだよ。割合に大正頃はほとんどちゃぶ台の人が多かったよ。農家の方が箱膳が多かったね。私の越後の姉さんの家は終戦ちょっと前まで箱膳だったよ。お寺だから。お寺のうちは割合と箱膳ね，多いんだよね。てんでにお膳までもって洗って。おはしの箱なんてそんなのないの。

B．食事をする部屋について

昔は「お勝手」とか，「台所」とも言うね。大抵はお台所で普通の家の人達はね。お客様の時は客間でね。お客さんが来た時そこで食事しるね，親しい人や今で言えばクリスマスの時ね。戸棚置いて，二つくらいあるよね。食事の時だけわね，板の間にござひいて，お年寄りの人いれば座布団あげて。それが普通だったね。居間も台所もいっしょになってたもの多いね。みんな借りたうちばっかに住んでたからね。米櫃って言えば茶箱の大きなね。よほどの時だなけり

ゃね，お正月とかお客立てしるとか。肉だのおしゃしみ（刺身）なんてそんなの毎日（は食べられなかった。）。朝みそ汁と梅漬けと，梅漬けは朝お茶飲む時に，神様にお供えして，御飯食べる前にそのお茶をみんなで飲んで，梅漬け食べて，梅はその日の難逃れでね，それから御飯食べるの，ね。四畳半くらいかなぁ。流しは付いてるよね。だけんね，未だに流しは外にしてね，ご飯たくにも外でね，土間せうだか，囲炉のそばに竈があって。上った所に戸棚，米櫃。電気はね，私の十二，三頃まではね，夕方の五時頃電気ついて朝の六時頃まであって，後は停電しちゃうの。配電していたからやたらと使わんないの。大抵の家は六時頃までにはご飯食べていたの。食事をする部屋は明るいほうだよね。商売人のうちはたいてい早いよ，六時半，七時ってえばみんな食べたもんだよね。学校だって早いし，もう八時十五分始まりっでね，私らの時は。小さい時は，学校から帰ってきてちょっと遊びに行っても，“電気ついたから早く帰ってこい”なんてせわれたんだよ。電気つく頃にはもううちに帰ってこなきゃ叱られたの。十五とか二十燭せってね。お客さまの時だけは大きなの付けて，そうだない時は大抵二十五燭か三十燭くらい。天井には電球が一つあるっきりでね。お勝手の所には火の神様ね，お札貼っておいとくの。こりゃ決まりだね。どんなうち行ってもあったわね。殺風景なもんだね。

C．どのようなすわり方で食べたか

上の一番奥まった所には家の主がちゃんと座ってね。お袋さんは亡なってたからね，五人でまるくなって。座りやすいとこに座ってればいいの（図102）。父親だけは座布団しいてね（夜の時だけ）。朝晩はみんな揃って食べたね。板の間にござしいて，子供は座布団なんてしかんないよ。

D．ご飯のほかに何を食べ，何を飲んでいたか

朝はおみをつけ，漬け物，その時によって果物くらいのもんかね。バナナなんて，やたらに食べられなかったからね，せいぜい自分のうちにある果物とか。卵だなんてそう食べられなかったよ。お祭りとかでなけりゃ，煮物とか揚げ物は食べられなかったね。盆と正月くらい。昼は漬け物とお汁。これがあればいい方だよ。晩は時には煮物やったり，お父さん帰ってくればお酒一本。夜はおつるとか。農家に行けばたいていそうだね。お豆腐だって何かある時だなきゃ。おからなんか夜食べてね。ごぼう，人参は欠かさなかったね，その頃も。冷蔵庫なんてないもの，なんしろ煮てね。煮物ばっかり。じゃがいも，大根，こんにゃく，殆んどおでんみたいなもんだね。たいていのもの入れて煮て食べた。それも夜だけね。（誰か特別にちがったものを食べていたかに対し）そんな事はなかったね。

E．食事の時のご飯の給仕について

あたしらの場合は姉さんがやってくれたよ（祖母が七才の時母親死亡のため）。お父さんか

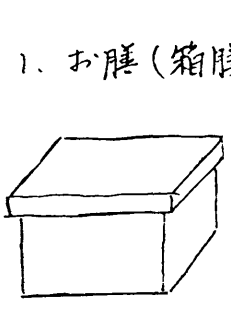


図101

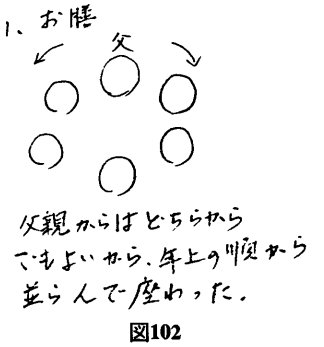


図102

ら先さ。真っ先に神さんにお上げしてさ。神さん両脇と仏さん両わきと，お供えして，それからお茶ね。真っ先神さんと仏さんのお茶碗に汲んでそれから，みんなにお茶だして梅漬け出して。それ飲んでそれから御飯。（よそう順は）年の順に。よそっている人が一番最後。うちのお親父さんは朝起きて真っすぐ四方を拝して，それからお茶と御飯上げて，それからみんなでお茶飲んで。うちの親父さんはお寺さんだったから，夜お酒済むまではいっしょに御飯食べなかった。

F．食事のあとかたづけについて

食事の後お茶なり飲んで，それで後洗うでしょ。（お茶などを飲んだだけで洗った事にしたかに対し），そりゃ昔の話，戦時中はね空襲あるからね，ぐずぐずしてらんないから，居ながらでお湯入れてぐるぐるぐるぐる洗ってその後ね，ロん中に流す。具合悪くならなかったよ，その頃。お水困った時なんかね，角々に水道があって鍵やってがちゃんとやって，汲んでバケツへね，それこそ水甕（へ）入れてね，お勝手には必ず水甕ってもん置いてあって，そこへそこのうちの子供が学校から帰ってきて，早い人順に水をはって。それはもうお決まり。夏はあんまり汲きおきしないの。（食器をあげさげしたのは？）てんでに。（洗った食器はどこにしまったか？）箱膳なかに入れてから戸棚にしまったの。

G．食器の共用について

（共有の食器について）そういうのはなかったの。箱膳の頃には。てんでに煮たもん分けたの。箸箱はその頃なかったの。

H．食事中にしてはならない事について

食事中にね，お便所にやたらと立っちゃいけない事。お汁先すって，一応お箸をぬらすって事なんだね。お箸をなめちゃいけないの。さし箸なんてやっちゃいけないの。自分の所食べたいもんだけもってきてから自由に食べんの。まずお皿にとってから食べるの。お箸をしごいたり，迷ったりしてはいけないの。お箸の持ち方もきちんとしなけりゃ叱られたしね。（食べる順序は，特別の細かな取り決めなし。）あんまりお喋りしちゃ叱られたよ。御飯を食べる時だけは男の人でも正座。肘ついて食べちゃいけないしね。おならしちゃいけないしね。

I．食事中のあいさつについて

（食べはじめは）いただきます。

（食べおわりは）ご馳走様でした。

J．食事中の話題について

（主に話した人）お母さん。主婦が言わなけりゃね（祖母の場合はお姉さん）。「いただきます」とか「さあ，みんな御飯食べましょ」って。それからみんなしてお喋り出来るでしょ。その日にあった事とかね。そん時の具合によってさ。

2．ちゃぶ台の時期

A．（お嫁に行った時は夫側の父親は既に亡なっていたから）三人だけだよね。お婆さんを上にして（祖母の姑），その次に旦那さん，あと嫁さんどっち座ったって，下座に座るようなもんだよね（図103）。（嫁入り先では“ちゃぶ台”を使用。よって“ちゃぶ台使用期間は昭和六年の結婚の時から昭和三十一年に現在の住居に移るまで。その時の住所は，長野県長野市Y町，商業地である。祖父は会社務め，祖母は髪結い業を営んでいた。“ちゃぶ台”になったのは，祖母の嫁入り先がこれを使用していたからである。）

B．居間。親子っきりだもの。（箱膳の頃より大きかった程度）四畳半か五畳くらいかな。お釜ね，お竈せってよ。（これは部屋の中にあったものとして挙げている。）その時分，嫁に来た時は水道だったから。うちだけは，うちん中に水道あったの。流し台，まな板も置いて，その

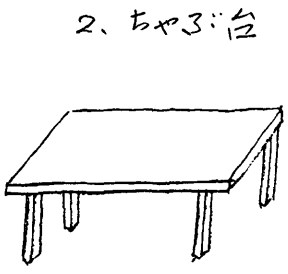


図103

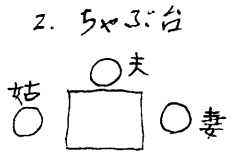


図104

横に戸棚があって（ちゃぶ台の頃には，箱膳の頃土間にあったものは板の間にあげられた)。漬け物桶も米櫃も置けるような家だったからね。電気は二十燭くらい。今度はメーターだったね（箱膳の頃は配電であったのに対して)。天井，真っ黒すけだった。火たくもの。小さい窓ね，土蔵みたいな窓だから。(この取材をする事に対するコメント）いい事だよ。懐しいよ。(箱膳当時，お客様の食事はテーブルでやってもらったとの事。由緒あるうちでは箱膳に紋が入っていたとの事。）普通のうちはね，お櫃せって冬になるとあったためておくようにせってね，藁でもってねお櫃入れとくのが出来てた。赤ん坊なんか，あんたのお母さん使ったかな，あのね“つぐら”せってね，あの棒をね，こうやってガッチャコン，ガッチャコンやってね，子守りしたね。揺り籠にしちゃったの，大きいからね。あったかいんだよ。うちのお婆さん（お姑さん）亡くなる時，畳屋さんからね，藁をすぐってもらって，天笠の白いきれね，病院で昔はよくね“すべ布団”せったのを使ってあげてさ，「ああ，いい気持だなあ」せって喜んでたよ。「こんな気持ちのいいの早くやってもらえばよかったなあ」せって，お婆ちゃん具合の悪くなった時に作ってあげたの，喜んで。

C．図104参照。(大正・昭和の初期までは，畳の上，ちゃぶ台で食べたとの事。座布団はの問いに対して）あんまり使わなかったね，お客さんでも来なければ。そんで子供小さいからそんな座布団なんて……お年寄くらいのもん。お炬燵のある時は座布団しくけんど，他の時はしかないよ，子供達すたこらすたこらで上がったり降りたりで，座布団なんてたまったもんじゃないよ（冬にはお炬燵で食べたとの事。これはちゃぶ台の時のみで，箱膳の頃はこうではなかった)。

D．だんだん栄養考えてくるから，一日おきか二日おきに，お肉しるとか，おでんするとかってね（昼飯は朝飯の残りというのが多かった)。天ぷらやったりね，する事が多くなったしね。天ぷらしるのはね，滅多にやらないの，昭和初期くらいはね。お祭りの時には，おでん，お肉とかね，すきやき（特別な物を食べる人はいなかった)。

E．（よそったのは祖父，順番は年の順。もちろん祖母自身のは最後である。神仏へのお供えはの問いに対して)，毎日毎日，御飯とお茶は必ず，真っ先。晩しゃくはやりました（祖父のみ，つまり祖母の夫)。最初の頃はね，おついたち（一日)，おじゅうごんち（十五日)，おはちんち（二十八日の事)。一ヶ月に三回だけ。お爺ちゃん（祖母の夫）のね，三十五，六になるまではね，そうやってきた。その後兵隊に行ったでしょ。お婆さん（姑）がそうふにしてたから。あいさには飲まないの。(しきたりかの問いに）しきたりって別にないけん，そうふに決めといたの。まだ青二才で“おじょこ”だってせってたよ（一ヶ月に三回しか飲まないその理由について)。

F．（食後，茶わん等は台所ですぐにゆすいだそうである。食器のあげ下げ等，すべて祖母が行なった。後，食器は戸棚にしまった。）

G．共用。（これが主であった。盛られていたものはみんなでつついて食べるものである。祖父には箸箱があったという。昭和三十年頃までこれは続いたという。）

H．（食事中の禁止事項は箱膳の時と同様との事。食事中の姿勢はもちろん正座である。）

I．（あいさつも箱膳の頃同様。手をあわせてこの言葉を唱えたという。）

J．（主に話したのは？）お婆さん。（あいさつをして，箱膳の時の祖母の姉と同様の役割をしたとの事。）

3．現在の時期—テーブル及び飯台

A．現在のテーブルになったのは，昭和三十一年に今の住居に来てからである。住所は長野県長野市Y町で住宅地である。祖母の長女が美容院を経営していたので，美容師見習いの者が常時二，三人以上は居たらしい。現在は見習い者二人でこの家に住み込み，祖母や先生（祖母の長女）と共に時々食事の用意などをしている。この見習い者の数は時おり変化するが，家族の構成員は，祖父，祖母，伯父，伯母，いとこ，二人の見習いの計七人である。戸主の職業は，祖父，伯父共に会社員で事務関係の仕事をしている。食事の形式が変化したのは，やはり現在の住居への引越しが原因である（図105）。

B．食事をする部屋を台所およびお勝手と呼び，ここは主に食事に使用。大きさは六畳ほどで，中央にテーブルがあり，その脇に大きな造り付けの戸棚がある。流し台とコンロが並びその前面に窓があるが，今風のキッチン等とは違い小じんまりとしている。その横に冷蔵庫がある。回りの壁には，鬼面，換気扇，コンロの上部に防火のお札がある。

C．座席の順番は，テーブルの南側に祖父及び伯父が座り，その横から祖母や伯母が座っていく。昼食時にの祖父，伯父の勤務中は南側の席に祖母が座る。つまりその時々で年長の者から南側に座る事になる（図106）。見習いの二人は家族全員の食事の終了後，食べるのであるが，彼女らの席は北側の席である。板の間にスリッパ履きである。

D．朝，昼，晩共特筆するほど特別な物は食べていないようだが，たいがい昼食は朝飯の残りという事である。特別に違ったものを食べる人はいない。

E．給仕は主に祖母及び伯母であるが，見習い者は二人だけで食べるので，彼女らの給仕は彼女らで行なう。よそう順序は，祖父，伯父を先にし，後の祖母，伯母，いとこはその給仕する人により順が違うが，給仕者を除いて年の順によそう。神仏へのお供えは，ちゃぶ台の頃同様真先に行ない，お茶や御飯をさし上げるのを欠かした事はない。来客の持参した贈り物や，各地での土産等は必ず神仏へ供えてから，家族の口に入るのである。祖父，伯父共に晩しゃくをしている。こちらに越してからは，毎晩あるようだ。

F．食後は御飯茶碗を使い，必ずお茶を飲む。祖母や伯母は時々，漬け物を中に入れて中を洗う

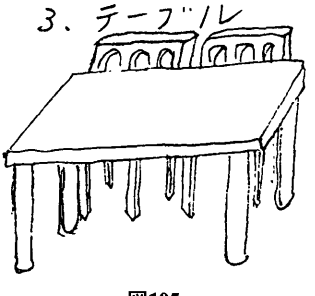


図105

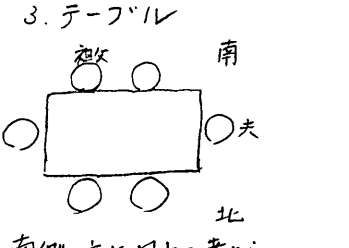


図106

ようにして飲んでいる。食器のあげ下げは祖母及び伯母，いとこである。家族の食事の時は女性三人（祖母，伯母，いとこ）が協力して食器を洗う。女性の場合は各自の茶碗等は各々で洗う事が多い。見習い者はすべて各自で行なう。洗った食器は戸棚にしまう。

G．共用の食器として形の特別なものはなく，そこに盛られていたものも全員が各自の皿に取って食べるようなものである。箸箱は，普段の食卓での食事には使用していない。これは，引越してきてからである。

H．食事中の姿勢は，いすに腰をかけている。その他はちゃぶ台の頃からのと同様である。

I．いただきます。ご馳走さまでした。（手をあわせる時やそうでない時もある。）

J．食事の開始を促すのは，祖母及び伯母である。隣の部屋にあるテレビをつけながら食事をするので，テレビの番組についての話題が多い。

調査者　No. 148(m)	調査日　昭和58年8月14日(日曜日)
被調査者　S.T.　　性別　f	出生年　明治41年(77歳)(第4子)
出生地　埼玉県比企郡Y町	
生家の職業　駄菓子屋	
現住所　埼玉県北足立郡H町	
住所の変更とその年度　埼玉県比企郡Y町—東京都中央区K町(昭2)—埼玉県北足立郡H町(昭20)	
最終学歴	結婚　昭和2年(21歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期

A．被調査者である祖母は，明治41年4月に，埼玉県比企郡Y村に生まれた。その当時の家族構成は，祖父，祖母，父，母，3人の兄，本人，というものであった。

当時のY村は，農村地であったが，父親は家で，駄菓子屋を営んでいた。使用人は，いなかったようだ。

Y村の生活では，食事のときに，箱膳を使用していた。彼らはそれを，「お膳」と呼んだ。お膳は蓋と本体よりなり，本体には食器類をしまっておけるしくみになっていた。蓋は，食事の際に裏返して食卓として使用した（図107）。

本人は小学校を卒業すると，現在の埼玉県行田市にあった，ある衣類商人の家へ行き，奉公人としての新しい生活を始めることになる。

その衣類商人の家では，多くの奉公人，使用人が働いていた。彼らの食事は，箱膳でおこなわれていたが，母屋の人々は，“ちゃぶ台”と呼ばれる共同膳で食事をしていたそうだ。

このことから，当時は，食事形式が，銘々膳から共同膳へ変化しつつあった時期だったと言えよう。被調査者自身も，21歳で結婚して，東京へ移った後，ちゃぶ台で食事をすることになるのだ。

B．食事をする部屋は，炊事場と一緒になっていて，「お勝手」と呼ばれていた。

その部屋は，広さが6畳位あり，食事以外には使用されなかったようだ。

C．食事は，家族全員がそろって食べた。

座席の順番は，日によって，まちまちだったそうだ。ただし，戸主だけは常に“東向き”という特定の位置に座っていた（図108）。

お勝手は，板張りの部屋で，冬でも座ぶとんなどしかなかったようである。

D．当時は，ご飯といっても，麦ごはんが主だった。

お菜は，朝食，昼食に，玉子焼き，きんぴらごぼう，野菜の揚げもの，たくわん，しょうが

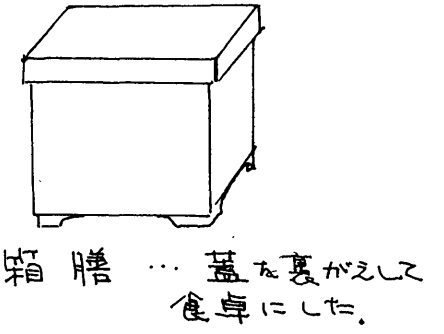


図107

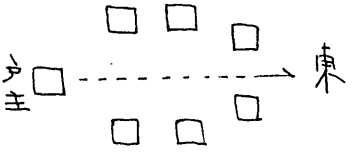


図108

づけなどで，朝食の際に作った残りを，昼食で食べるといったことが多かったそうだ。

晩のお菜には，朝昼食で食べたようなものの他，魚の塩焼きや，煮ものなどの多少手の込んだ料理を作ったようである。

なお，みそ汁は，毎度の食事で飲んでいたが，中身は現代ほど良いものではなく，入っているのはネギだけ，という程度のものだった。

家族の中で特別なものを食べていた者は，いなかったそうだ。

E．ご飯をよそったのは母親。必ず最初に父親のご飯からよそったが，あとの者の順番は特に決まっていなかった。

神仏へのお供えについては，仏さまを重視していたようで，毎日，朝食の際に，ご飯とお茶を供えていた。それに対して，神棚には3日に一度，お榊を取りかえる程度だった。

晩しゃくは，父親が毎日，やっていたそうだ。

F．食事が終わった後には，各自が茶碗や箸を，すぐにお湯でゆすぎ，各々の箱膳の中にしまった。そして各自がきめられた場所に箱膳を積み上げてかたずけたそうだ。また，週に一度くらい，母親が皆の食器をまとめて洗い，ふきんでふいて，また箱膳の中にしまっておく，ということをやっていたようだ。

G．箱膳の時期には，共用の食器というものは，なかったようだ。お菜類も各自の食器に盛られていた。

箸箱についても，やはり各自が持っていて，箸は箸箱に入れた後に箱膳の中へしまった。箸箱は箱膳が姿を消すのと同時に使用されなくなったようだ。

H．I．箱膳での食事では，箸の上げ下ろしについては，べつにうるさく言われなかった。食べる順も特に決まっていなかった。ただし食事中は，皆，正座。あぐらをかいてはいけなかった。おしゃべりも厳禁だったようだ。

食事のはじめに「いただきます」，食べ終りに「ごちそうさま」。このあいさつは，現在と変わっていない。

2．ちゃぶ台の時期

A．祖母は，昭和2年に結婚して，東京での暮しを始めている。

祖母の嫁いだ家は，現在の中央区K町にあり，商業地と呼ぶにふさわしいところだったそうだ。当時の家族構成は，姑，夫，娘，本人であった。戸主である夫の職業は務め人。時計などの精密機械をつくる会社に務めていたとのこと。

いつ頃から始まったのかは不明だが，その家では，既に，食事のときには，ちゃぶ台が使わ

れていたのである。ちゃぶ台は，長方形の木製の台で，足は折りたためるしくみになっていた。食事が終わった後，折りたたんで，部屋のすみなどにかたずけたそうだ（図109）。

B．食事をする部屋は，畳敷きで，6畳程度の広さがあった。この部屋自体の特別な呼び名はなかったが，「お勝手」または「台所」と呼ばれていた炊事場が，隣接していた。

この部屋は食事以外にも居間として利用されていたようだ。

C．食事は家族全員がそろって食べた。部屋は畳敷きの居間で，座ぶとんは使用していた。座席の順番は，箱膳の時期と同様，戸主が東向きに座り，あとの者は自由だった（図110）。（戸主が東向きに座るのは，仏教と関係するものだろうか。神道に関するものだろうか。非常に興味のあるところである。）

D．ご飯のほかに食べていたお菜類であるが，箱膳の時期と特に変わったところはないようである。しかし，ひとつだけ意外に思ったことだが，この頃から朝食の食卓に“のり”が初めて登場したそうである。（おかずとして“のり”が食されるようになった歴史は，意外と浅そうである。）

家族の中で，特別なものを食べていた人はいなかったようである。

E．ご飯をよそったのは，嫁として家族にはいった祖母自身。よそう順番は，まず戸主としての夫（つまり筆者の祖父），あとは，だいたい年の順だったようだが，その点は特にうるさくなかったようだ。

仏へのお供えは，夫の父親が健在だった頃には，その父親が毎日やっていたようであるが，神棚へのお供えは，特に重要視していなかったようだ。年に一度，元旦にお供えもちとお榊をあげる程度だったそうである。

F．食べ終った後，すぐに茶わんや箸を湯茶でゆすぐ，という行為はなかった。食事が終った後は，祖母が食器類を台所へさげ，洗ったそうだ。

洗った食器類は「洗いかご」と呼ばれるかごにいったん伏せておき，水をきった。その後，ふきんでふいてから食器棚にしまったという。その食器棚の呼び名がおもしろく「ねずみいらず」と呼ばれていたそうだ。ねずみが入れぬような工夫が施されていたのであろうか。

G．膳は共用になったが，共用の食器の数は少なかった。お菜は，各自の皿に分けて出したようだ。共用の食器に入れたものは漬物ぐらいであったようだ。

普段の食事で箸箱を使うことはなくなった。弁当箱に箸箱というのは現在でも使われているようだが。

H．I．食事中にしてはならないことについて，特に2人でひとつのものをはさむ，という行為はいけなかったようだ。これは，お骨をはさむという行為を連想させるためで，縁起の悪いこととされたからである。また，どのお菜を取るのか迷って，箸を空中で動かしたり，停滞させ

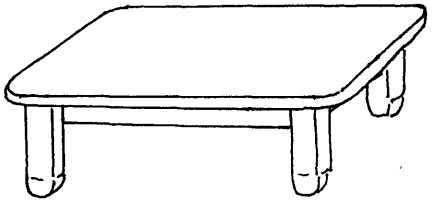


図109

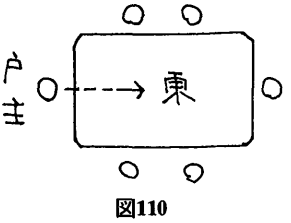


図110

たりすることを「迷い箸」と呼んで，行儀の悪いこととされた。

食べる順番は特に決まっていなかった。習慣的に食べ始めのあいさつの後に，まず味噌汁をひとくちすすってから食べ始める，ということはあったようだが。

食事中のおしゃべりは厳禁。しかし，座り方は箱膳の時期のように，正座を強いられたということはなく，あぐらをかいても許された。

食事中にしてはならないことについて，あれこれ言われるようになったのは，どうやら食事形式がちゃぶ台に変化した後のことであったようである。

食事前後のあいさつは，箱膳の時期から変化はない。

3．現在

A．祖母たちが現在の埼玉県北足立郡H町に引越してきたのは，終戦前の昭和20年3月であった。以来，この土地に落ちつき，現在に至っている。

H町は都心から一時間のところにあり，現在は住宅地，団地の様相を呈している。

祖母は4年前に夫を亡くし，現在は息子夫婦と孫たちに囲まれて生活を送っている。戸主である息子（つまり筆者の叔父）は会社員である。

食事形式は，時代の流れに忠実に従って，現在は椅子式テーブルを使用している。

B．食事をする部屋は「お勝手」あるいは「台所」と呼ばれている。炊事場と一緒になっている部屋で，広さは5，6畳ぐらいである。

この部屋は，料理をし，食事をし，あとかたずけをするための部屋であるが，それほど厳密に定められているわけではない。

C．D．座席の順番はまったく決まっていない。また，いつも皆がそろって食事をするわけでもない。特に，朝食はばらばらで，各自が家を出る時間に間に合うように食事をとっているためである。

もちろん，特別なものを食べている者は，いないそうだ。

E．ご飯をよそうのはお嫁さんの仕事である。よそう順番は一定していない。

仏さまへのお供えは，お盆と正月のときにするくらいである。神棚へのお供えは，年に一度元旦にやるだけだそうだ。

晩しゃくは，息子が毎晩やっているということだ。

F．食事のあとかたずけは，おもにお嫁さんがやる。食べ終ったあと，汚れた食器を流し台へはこび，洗うのである。洗った食器は水をきるためのカゴに伏せ，ふきんをかけておくそうだ。大きな皿やおはちなどは，洗った後，ふきんでふいて食器棚へしまっているとのことだ。

G．H．I．ご飯とみそ汁以外の食器は，ほとんどが共用となっている。

食事中の箸の上げ下ろしについて，以前はいろいろ言われていたが，最近はほとんど意識がなくなっている。

また，現在では，食事中に楽しくおしゃべりをしながら食べる家庭が増えているが，祖母の家では，食事は黙々ととるそうである。食事中におしゃべりをすることを，叔父は嫌っているようである。（しかし，食事前後のあいさつまでほとんど黙っているようになってしまったことは，残念なところである。）

調査者　No. 150(m)	調査日　昭和58年8月12日(金曜日)
被調査者　U.S.　性別　f	出生年　明治34年(82歳)(第4子)
出生地　新潟県中頚城郡Y町	
生家の職業　農業	
現住所　新潟県中頚城郡Y町	
住所の変更とその年度　結婚(大14)の際，現住所にうつる	
最終学歴　尋常小学校卒	結婚　大正14年(25歳)
被調査者との関係　父方の祖母	

1．箱膳・お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

生家では，箱膳は使わずにお膳を使って食事をした。大正14年に結婚して嫁に来ると，みんな箱膳を使っていたが，自分は嫁に来るとき赤く塗ったいいお膳を持っていったので，箱膳は使ったことがない。

ダンナサンなどいいうちでは箱膳は使われなかった。貧乏なうちで，箱膳は使われていた。

これ以下では，特に指定する以外は結婚後の話とする。

箱膳は昭和2～3年まで使用し，それから昭和17～18年までお膳を使用した（図111)。

お膳をやめる直前の家族構成は，父母，夫，男子3人，女子2人の9人であった。使用人はいなかった。雇えるだけの余裕がなかった。

住所は，新潟県中頚城郡Y町で水田地帯であった。戸主の職業は農業で，主に水田耕作をしていた。

箱膳からお膳へと変化したのは，特に理由はない。箱膳がこわれて使用できなくなったのを，お膳に変えていった。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋を「ヨゴザ」（横座か？）と呼んでいた。食事のほかに，お茶を飲んだり，火をたいてあたったりした。今の茶の間のように使われていた。

部屋の大きさは16畳ほどで，調度品としては，部屋のすみにお膳をしまう棚があった。棚といっても，上下二段に中が仕切られていて，押し入れのようなものであった。いろりがあった。

C．どのようなすわり方で食べたか

朝昼晩ともみんなそろって食べた（図112)。食べる場所はムシロが敷いてあった。座ぶとんは普通は使わなかった。法事や月に一度の命日でお坊さんを呼ぶとき，親戚が来たときだけ，お客さんにだけ座ぶとんを出した。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

ご飯のほかに食べたものは，朝昼晩ともにコウコとおつゆばかりであった。魚はめったに食

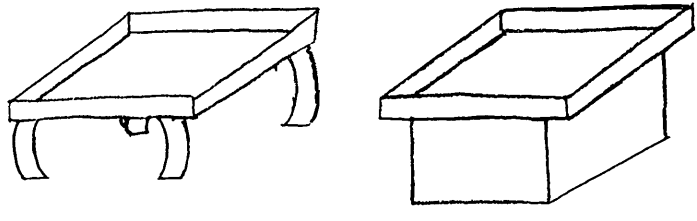


図111

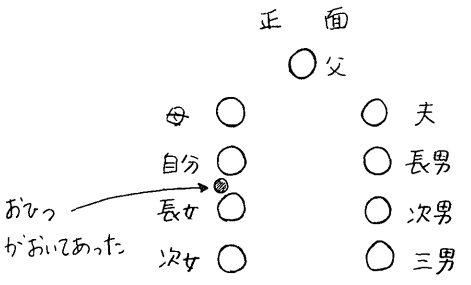


図112

べられなかった。主として家の畑でとれるイモやカボチャを煮たもの，キュウリナマス（キュウリしかはいっていない），ナワニザイ（しょっぱいマスやサケなどを使った）。卵でもつけば上等であった。ヤキモチを子供の頃と，嫁に来た当時に食べた。これの作り方をあげる。アサゲ起きて米の粉を煮る。ハシゴとこねばちでこねたものをまるめて，いろりでわら灰を使って焼きあげた。これに，にぎりめしと同じ要領で魚（サケ）とかゴマイでも入れれば上等であった。ヤキモチはあまりおいしいものではなかった。いろりがなくなるとともに，作らなくなった。

戸主であるからといってちがうものを食べたり，特別に一品つくということはなかった。ただ，同じおかずの内で，一番良いところをつける程度だった。

E．食事のときのご飯の給仕について

ご飯はおはちから各自が好きなだけよそった。よそう順序は特に決まっていなかった。昔はみんな3～4杯はご飯を食べた。おつゆはこぼれるといけないので一人（お勝手をするもの）がよそった。魚やイモなども同様にもった。コウコは各自が好きなだけ取っていった。

ご飯を炊くと，そのつど神棚と仏様にお供えをあげた。

晩しゃくは，あまり酒を飲む人がいなかったため，ほとんどしなかった。あるときでも特にそのために肴を買ったり，作ったりということはしなかった。肴としてはイモやカボチャの煮物，大根おろし，キュウリナマス，ナワニザイなど。

F．食事のあとかたずけについて

食事時になると各自が箱膳を持ち出してきた。食事後は，茶わんやお箸を茶や湯でゆすいだ。

食事後，各自が食器（ご飯茶わん，おわん，オテショ〔お皿のこと〕，箸）を箱膳の中にしまい，ふきんをかぶせ，ふたをして，5人分位かさねて部屋のすみにある戸棚にしまった。

普通の御膳の場合も同様に，お膳の上へ食器をふせ，ふきんをかぶせ，かさねて戸棚へしまった。

食器の洗浄は湯茶でゆすぐ程度であった。洗いたければ，各自で洗った。

G．食器の共用について

共用の食器はなかった。

箸箱は使っていなかった。嫁に来た時に持ってきたが，いつまで使っていたかは定かでない。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の上げ下ろしについてうるさくいわなかった。食べる順序についても特にいわなかった。姿勢その他について注意しなかったが，大人の話のじゃまになる子供のおしゃべりは叱った。

I．食事中のあいさつについて

食事中のあいさつは何もなかった。みんなが揃えば食べ始め，終われば片づけを始めた。

J．食事中の話題について

食事のときにだけみんなが顔を合わせるので，その日にやる仕事の打ち合わせなどをした。

2．飯台の時期

A．食事の形式と家庭環境について

昭和17～18年から昭和41年までの間，飯台で食事をしていた。

家族構成・住所・住環境・戸主の職業は1の時期と同じ。

お膳から飯台になったのは，まわりの家々が飯台を使うようになったから，いわゆるはやりものであったため。夫が飯台を作った。9人が座れる，大きなものだった。

B．食事をする部屋について

1の時期と同じ

C．どのようなすわり方で食べたか

朝昼晩とも，みんな揃って食べた（図113）。

食べる場所はタタミであった。

座ぶとんは使わず，お客さんだけが使用した。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

1の時期と同じ

E．食事のときのご飯の給仕に

飯台のまん中におひつを置いておき，各自が食べられる分だけよそった。おつゆは一人がよそった。おかずも同様であった。よそう順序は特に決っていなかった。

神仏へのお供え・晩しゃくの有無は1の時期と同じ。

F．食事のあとかたずけについて

茶わんや箸は湯茶でゆすいだ。

飯台になったら，茶わんを毎日洗うようになった。お勝手をするものが洗ったが，自分の使った食器は自分で下げた。洗った食器は戸棚にしまった。

G．食器の共用について

大皿に煮物などを盛るようになった。

H．食事中にしてはならないことについて

1の時期と同じ

I．食事中のあいさつについて

1の時期と同じ

J．食事中の話題について

1の時期と同じ

3．こしかけの時期

A．食事の形式と家庭環境について

昭和41年から椅子式テーブル（「こしかけ」と呼んでいる）を使用している。

現在の家族構成は，次男と嫁，孫娘1人である。住所・住環境は変わらない。

戸主の職業は，化学工場に勤めるかたわら，農業（稲作）を営んでいる。

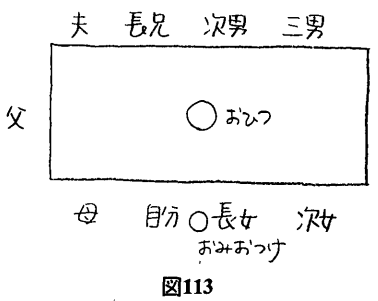


図113

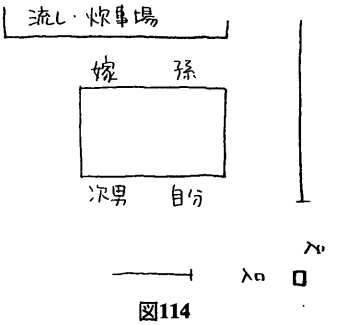


図114

家を新築したときに，タタミから板の間にして，こしかけるのにした。今でも古しいうちはタタミにすわって食べる。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋のことを，お勝手と呼んでいる。（台所と一続きになっているため）

大きさは10畳位，流し，食器棚，冷蔵庫などが置いてある。

C．どのようなすわり方で食べたか

仕事の関係で，朝昼晩ともみんな揃うことは難しい（図114）。また自分は高齢のため7時過ぎまで横になっているので，みんなと一緒に朝食を取ることができない。

食べる場所は板の間である。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝はゆうべの残りものや味つけのり。昼は油いためなど。夜だけ2品つくる。刺身，カレーライス，シチュー，マーボードーフ，サラダ。キュウリナマスにはタコやイカをいれる。てんぷら。肉類。

だれかが特別にちがったものを食べるということはなかった。

夕食時に炭酸飲料水を飲むこともある。

E．食事のときのご飯の給仕について

女3人のうちの1人がご飯をよそう。おかずはお勝手をする人がよそう。よそう順序は特にない。

神仏へのお供えはごはんをたくつどにやる。

晩しゃくはあまりやらない。やるとすればビールに枝豆，酢のもの等。刺身を買ってくる場合もある。

F．食事のあとかたずけについて

茶わんを湯茶でゆすいだりする。自分が使った食器は自分で下げる。お勝手をするものが洗い，食器棚にしまう。

G．食器の共用について

大皿に刺身などを盛った。箸箱は弁当を持っていくときだけに使う。

H．食事中にしてはならないことについて

1，2と同じ。

I．食事中のあいさつについて

1，2と同じ。

J．食事中の話題について

みんながそれぞれ話している。仕事の話や世間話など。

調査者　No. 153（f）	調査日　昭和58年8月
被調査者　S.H.　　性別　f	出生年　大正8年(64歳)(第1子)
出生地　鳥取県気高郡O村	
生家の職業　農業	
現住所　兵庫県神戸市垂水区	
住所の変更とその年度	
最終学歴　鳥取S女学校	結婚　昭和12年(19歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

箱膳いうてもね，家風それぞれに形が違うて，やっぱり小作人なんていうのは箱膳なんか使わへんかった。地主とか村の有力者が使うとった。私とこは農村の百姓いうても，大きな日本刀が2本床の間に飾ってあったり，枕をはずして寝たらいかんと言われとったような家やから，ちゃんと箱膳が置いてあった。

座ってひざよりちょっと高いぐらい。一尺ぐらいの高さやったわ。ひき出しがついていて，その取手には紋がついとったね。別にその紋がとれたらまたきちんとつけ直すということもなかったけれども，新しくつくる時はちゃんと紋をつけて作っとった。

箱膳のことを「おぜん」というとったけども，ニスぬりで黒や赤茶色のものやったわ。おぜんには名前が書いてあったし，また色で区別したね。黒はおじいさん，赤はわたしのいう風に。使わない時はおぜんを積んでおいた。

小さい子はおぜんをしてもらえんで，そうやねえ，だいたい小学校2年生，満で8つぐらいの時からちゃんとおぜんをしてもらえたんよ。私が覚えているのはね，小学校3年ぐらいから5年生までのだいたい3年間使うとったと思うわ。

その時の家族はね，おじいさんとおばあさん，おとうさん，おかあさん，私とあと妹らがおった。

住所は，鳥取県気高（ケダカ）O村。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋はいろりのついた部屋の隣で，むしろをしいた部屋やった。今でも田舎ではその部屋で食べとうよ。そこには，そなえつけの水屋があって，「水屋の部屋」いうて呼んどった。8畳の部屋で，水屋の上に板がはり出してあって，それは神棚になっとった。食事だけする部屋やったね。ごはんの後くつろぐのはいろりばたでやった。

C．どのようなすわり方で食べたか

ごはんはみんなそろって食べた。座る順番は必ず男が向かって右やった（図115）。今おひなさんでも男びなは右でしょ。あれと同じことや。

食べる場所はむしろの上。そのむしろは毎年織ったものやったから，今の畳よりぬくかったと思うわ。座布団なんか使わへんかったわ。

D．ご飯のほかには，何を食べ何を飲んでいたか

朝は麦ご飯とみそ汁。みそ汁の実は，じゃがいもやらおねぎやら，玉ねぎやらおなすやら。全部うちで作った。おみそもやで。私はじゃがいもとおろしねぎを入れたおみそ汁が一番好きでおいしかったわ。

昼はね，きっとお米を節約するためやと思うんやけどね，おばあさんが田んぼから，11時ごろ帰って来て，2等や3等のただ米のコゴメと，もち米のコゴメをうすでひいて，練って，春にとっておいてゆがいて，さらして丸めて干しておいた，よもぎを入れて，直径5cmのボールみたいな団子を作って，それを灰の上においたオキ（木をたいて炭火にしたもの）の上において，こげめをつけたものを，きな粉をつけて食べたんやわ。あと，おつけものとで済ましたね。

晩は，いろりの自在にかけた大きな鍋に，大根やら豆腐やら，厚あげ，じゃがいも，煮干しなんかをいっぱい入れたものや，菜っぱのおひたしやごまみそあえなんかを食べた。みんな，自家製やね。大豆も作とったし，ごまもちょこちょこっと作っとったからね。とうふもみそも，みんなうちで作ったもんやった。

みんな，おんなじもんを食べとったけど，お客さんが来ると嬉しかったのはね，朝昼晩と白いごはんやったからなんよ。

飲み物は番茶か水やったけど，その水はね，岩清水がちょろちょろ涌き出て，神社の大きな木の根もとの水だめにたまっているところのもので，「いけす」いうとった。イモリがすんでいるぐらいのきれいな水でね，イモリいうのは水がすんでないと住まへんのやからね，今考えるとね，ミネラルを含んどったんやろねえ。夏でも冷たい水やった。

お茶も家で作ってる茶の木を，屋根屋さんが使うようなハサミでつんで作った自家製の番茶で，茶がまの中に入れてある茶袋を使うてね，こしだしとった。だから茶こしなんていらんのよ。しぶでまっ茶になっとったねえ。お茶も「いけす」の水を使うから，そりゃおいしかったしね，伝染病なんて知らんのよ。どうもその水がええみたいなわ。

E．食事のときのご飯の給仕について

ごはんは，おかあさんがかまどからおひつにとって，よそってくれるの。おじいさんが先で，おばあさん，おとっつあん，おかあちゃん，長女の順やった。

その前に神棚に，おしきにごはんをのせたものと，仏さんに先祖の数だけの茶わんにご飯を入れて供えた。お祝いの日は，あずきごはんか白いごはんの上にあずきを三つぶのせたものやったけども。お神酒さしもそなえとったわ。晩しゃくはおじいさんとおとうさんがやってたね。

F．食事のあとのかたずけについて

食べ終わったあとは，箸はお茶でゆすいで箸箱にしもうて，いつもは洗わなんだわ。

茶わんとかは毎回，おかあさんがさげて，「いけす」で洗って，おぜんのひき出しにきちんと並べて入れといてくれたわ。その箱膳は使わへん時はね，つみあげておいたの。

G．食器の共用について

銘々の膳を並べた真ん中に，大鉢がおいてあって，たくわんなんかのつけ物が盛ってあったわ。

箸箱は白木のもので，みんな1つずつ持ってたな，うん，今でも使うてるよ。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の上げ下ろしいうんかね，箸をくわえながら口をきくいうのは，だめやったね。他所見もしたらあかんかった。姿勢正しく，正座してとにかく一生懸命いただくいう感じやった。おしゃべりはせえへんし，何しろ農家やから早く食べることが大事やった。くつろぐのはいろりばたにいってからやったね。

I．食事中のあいさつについて

家長のおじいさんが，「ほな食べようか。」言うて，そしたら皆が「食べよ」「食べよ」いうて食べ始めたわ。「いただきます」なんていう言葉は使わへんかったね。食べ終わった時は「ごっとつう（ごっつぉう）さん」言うたわ。

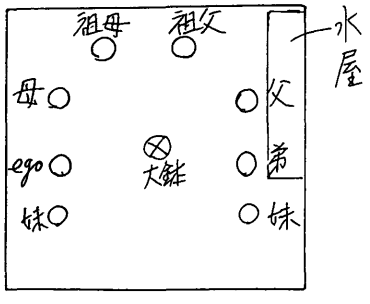


図115

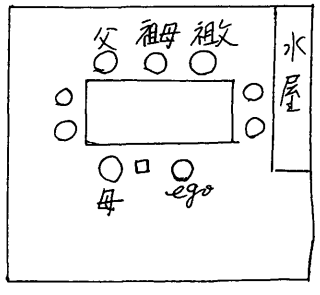


図116

2．ちゃぶ台の時期（その1）

A．箱膳からちゃぶ台に変わったのは，文化やろねえ。手間がかからんでしょ。80 cm×120 cm ぐらいの杉の木で作ったもんやった。ひらけたうちから，しょく台に変わっていったんやね。

B．食事をする部屋はやっぱり水屋のへややよ。真ん中にしょく台を置いただけなの。

C．おじいさん，おばあさんが亡くなってね，あまり上座・下座といわれんようになった（図116)。みんなそろって食べるんやけども，お客さんが来た時は，お客さんだけゴザをひいたんよ。でも，むしろだけでも，暖かかったけどね。

D．私が大きなるにつれて，海が近いからね，カレイのとれとれやサバなんかを，70 cm 平方の40 cm 深さのザルにかついで持って来るのを買おたんやわ。しょうゆで煮つけるんよ。小学校6年生ぐらいのことやったかいね。あじろの港から来るんやけども，リヤカーでも持って来よったね。そんなんは晩ごはんの時に食べたんや。

祭りあるき言うてね，氏神まつりの時は親戚同士回り歩いて，ご馳走を食べたんよ。くずしもの言うたら，かまぼこやちくわのことやし，魚はおすしにしてあったわ。

肉はほとんど食べへんかった。うさぎ程度のもんやね。

E．これはおぜんの時と変わらんよ。晩しゃくかてしてたね。

F．とうかずらで編んだ茶わんカゴに入れて，いけすに持っていって，そこのイデ（井田）いうところで洗ってね，それをそのままそこにおいとくんよ。日光での自然乾燥と消毒やね。今考えたら，きれいなんかどうかわからんけど，水はきれかったし，みんなそないしとったからね。夜はうちに持って帰って，流しのところにふきんをかぶせて置いといた。おばあさんか，おかあさんがしたわ。箸もいけすで洗って，おかあさんが箸箱に入れといてくれたん。

G．しょく台になってもね，おつけものを入れてある大皿があったくらいやね。魚の煮つけなんかは，一人一人に盛りつけてあった。大皿のことは「さはち」いうんよ。

食器はね，このころは，「からつ売り」という。夜店として香師がね，カーバイトたいて売りにくるんよ。瀬戸もののことやね。それを「からつもの」言うの。それが来ると，夜起きとけるから，大好きやったね，うん，箸箱はその時もずっとあったよ。

H．箸をひっくり返して，大皿のもんを取らんと，おじいさんに手をたたかれたね。おかあさんは分限者のとこから嫁さんに来た人らしく，大皿に，さい箸が添えられてたこともあったけど，大抵，箸をひっくり返して自分の手元に取ったんやわ。

それから，ごはんの茶わんを持って，もうかたっぽうの手で，お汁のわんを持つのは，ものすごう怒られたんやで。

おしゃべりもね，何となしに，だんだんしゃべるようになったな。もちろん正座やけど。

I．おじいさんかおとうさんが，「ほなら食べようぜ。」言うて，食べ始めたわ。おわりは「ごっそうさん。」やね。

J．おじいさんとおとうさんが，今日の田んぼの植え付けがどうこうとか，牛の話とか池の投網の話とか，百姓仕事の話をしてたんやわ。投網言うたら，おもりがついとってね，舟から池に投げると，ふなとかせいごとかがかかっとるもんや。

2．ちゃぶ台の時期（その2）

A．昭和10年に神戸に出てきて，12年に結婚して，おじいちゃん（聞き手からの立場。話者の夫）の仕事関係で，県に行ったんよ。K社の指導員でね。おじいちゃんと，その弟と私の三人で住んどった。社宅でね，県のN町というところ。丸いしょく台やったね。

B．食事は，茶の間と呼んどった三畳の部屋でね，水屋をおいてたわ。

C．座席は，流しの方が下座で，その向かいにおじいちゃん。下座から見て右側に，弟が座っと

ったかいなあ。タタミの部屋で，座布団はお客さんだけで，松の葉模様のおしりがのるだけの小さいもんやった。

D．今よりぜいたくなんとちゃうかしら。晩にはまつたけが，いっぱいあったりしたからね。

E．給仕なんかは，私がしたよ。おじいちゃんが一番先で，弟，私の順。晩しゃくは，二合ぐらいしよったわ。

F．食器洗いは，私がしたよ。洗った食器は，ふきんでふいて，水屋にしもうたわ。

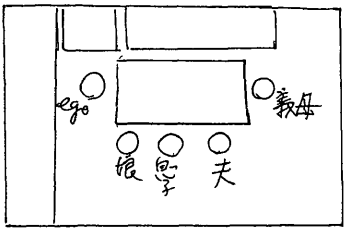


図117

G．箸箱は，めおと箸箱いうて幅が倍になっとって2ぜん入るのを使うたわ。めおと茶わんなんかは，欠かしたり割ったりするのは絶対あかんのよ。

H．J．おしゃべりは自由やったね。工場とか飛行場の話とか，野球の話をね，おじいちゃんがようしてくれた。

I．食べはじめは「いただきます。」おわりは，「ごっそうさん。」

3．現在の時期

A．昭和40年ごろやったかいな，台所の板の間にテーブル置いて使い始めたんは。冬はこたつを置いたこともあったけど。おじいちゃん（話者の夫）と，ひいおばあちゃんと（話者の姑）息子と娘がおって，教職員住宅の団地に住んどったんやけど，おじいちゃんが高校の教師やったからね。神戸市垂水区H町。

B．「台所」いうて呼んでたやないの。あそこは，6畳か8畳かどんなもんかなあ。流し台とか冷蔵庫，水屋なんか置いてたわ。

C．座席はひいおばあちゃんが部屋から近い所でしょ。あとテレビを見る位置なんかで自然に決まっていってたね。私は流しに近い所が便利やからね（図117）。座布団は椅子に上に敷いてた時もあった。

D．別にどうこういうて変わらへんのよ。でもおばあちゃん（話者の姑）が北海道の生まれでね，魚が好きな人やったから，昼は魚をかかしたことあらへんかった。晩も，魚の煮つけやとか，野菜，おからをたいたもの，とうふのみそ汁とかそんなもんやった。

E．給仕とかは私がしたわ。今は，一人で住んどうけどやっぱり，仏さんにお供えするのが先やね。

F．茶わんカゴがあったし，流しで洗うて，水を切ってふきんでふいて，しもうて，それでしまいやね。全部私が後かたづけしたよ。

G．私はあんまり大皿に盛るの好きやないねん。残った時困るからね。鍋から小皿に銘々わけてたわ。今でもそないするね。箸箱はもうずっと使うとるよ。

H．茶わんを持つ時は手を添える。昔からそうやけど，手盆の時は，「手盆ですんませんな。」と一言いうとかね。おならなんかは怒られたで。

I．「いただきます。」言うて，食べ終わったら，現在は自由やね。「ごちそうさま。」言うたり，「失礼」言うて席立ってもよかったし，「ああおなかいっぱいになった。」言うて背のびしたりな。

J．おしゃべりは，おじいちゃんが学校の話したり，ひいおばあちゃんとしゃべったり，昭和の33年やったかな，ちょっと忘れたけどね。「星影のワルツ」が大流行して，（ひい）おばあちゃんがそれが大好きやったもんで，よう歌うとたりしてた。

調査者　No. 158(m)	調査日　昭和58年8月18日(木曜日)
被調査者　S.N.　性別　f	出生年　大正6年(66歳)(第4子)
出生地　宮城県栗原郡S村	
生家の職業　農業	
現住所　宮城県栗原郡T町	
住所の変更とその年度　宮城県栗原郡S村—東京(昭10)—宮城県栗原郡S村(昭21)—T町(昭45)	
最終学歴　高等小学校2年	結婚　昭和10年(19歳)
被調査者との関係	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

図118に示したような，お膳を使っていた。左の猫足膳が一般に使われたようだが，猫足とはいっても，四本の足のいわゆる猫足膳とは外見上大きく異なっている。右側は高膳と呼んでいたもので客用かまたは上流階級の人が使ったようだ。お膳はすべてほぞ組みで，くぎは使われなかった。いつ頃から始まったかは不明であるが，生まれた時から昭和10年の結婚（当時19才）まで使用したとのことである。

この時期の家族構成は祖父母2人，親2人，兄弟7人，孫1人，それに兄嫁1人の計13人家族で，当時としてはきわめて一般的な家族構成であった。そのときの住所は宮城県と岩手県の県境に近い宮城県栗原郡S村で，住環境は，米作畑作を中心とする農業地で，戸主の職業も農業であった。食事の形式が変化したのは，前記したように結婚のためであった。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋のことを「台所」といい，今でいう，食堂，居間，応接間，台所を兼用していた。部屋の情景は囲炉裏が2つ（1つは客の接待用），カマド，井戸（上流家庭）などがあった。部屋の大きさは30〜40畳ぐらいあったが，畳は敷いてなく板の間であった。部屋は図119のように囲炉裏を囲み，大黒柱に向って正面が上座，左が客座，右が母座（かかざ）になり，一番離れた下座は一段低くなっていて，そこから木をくべたりしたため，木の尻（きず）が向くという意味で木尻りと呼ばれておりここに嫁がすわった。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席はB．で示したようにすわったが，子供たちは客座や下座など適当にちらばったようである。ただし嫁いだばかりの嫁さんは木尻りから上にあがることを許されなかった。食事は板目にじかにすわって皆いっしょに食べた。座ぶとんはなかった。客がきたときは，客座にゴザを敷いて接待した。

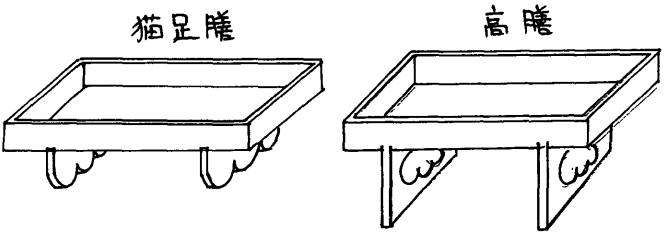


図118

D．ご飯のほかには，何をたべ，何を飲んでいたか

朝食，みそ汁，おしんこ，納豆（自家製でときどき食べた），大根おろし，など。

昼食，みそ汁，おしんこ，それに自分の畑でとれた，いも，たけのこ，などを煮こんで出した。

夕食，みそ汁，おしんこ，それに魚や煮ものをたべた。肉は値が高いことや品が薄いため食べなかった。家によっては，うさぎを飼って，盆や正月につぶしてその肉をたべたところもあったようだが，Sさんの実家では“四つ足は食うな”ということで肉はとらなかったそうだ。家長や長男が特別な待遇を受けることはなかった。

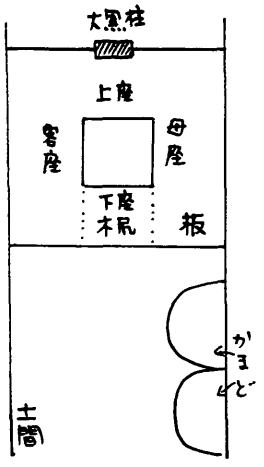


図119

E．食事のときのご飯の給仕について

ご飯は嫁さんや母さんがよそった。給仕はたいへん重要なことで，次のように言われたそうだ。“一人で十人前の給仕をしながら食べて一人前”とか“嫁にへらをあずける”とか。後者は，嫁に労働を左右する食事の責任をまかせるという意味だそうだ。よそう順番は祖父，祖母，父，長男……，というふうに年齢と性別を組み合わせて順にしたようである。仏様のお供えは，お茶，水，ご飯を毎朝食前に供えたし，神様には毎月でなくても，1日，15日，30日の月3日は茶，水，ご飯などをお供えしたし，またこの月3日は，農業をする人には休みにあたる月だった。晩しゃくは好きな人はのんだそうだ。買ってきてのむということはほとんどなく，“どぶろく”が主だった。酒は相当の贅沢だった。

F．食事のあとかたづけについて

食後，茶わんに湯を入れ漬け物などを使ってすすぎ，自分のふきんでふいて膳に置きふきんをして，たべ終った順に膳を下げた。膳は戸棚に順々に重ねていった。汚れのひどい日（納豆などをたべた日）や，きれい好きの人は自分で洗って，しまったようだ。

また“精進”という日があって，その日には嫁さんが皆の食器を洗った。精進とは亡くなった人の命日が年一回あるが，その月をはずして日だけを考え毎月，年12回まわってくる日のことである。Sさんの家では亡なった人が多かったということで，割と頻繁に食器を洗っていたそうだ。いくら井戸があったとはいえ，井戸から台所のかめや，風呂に水をくむことはきつい作業だったし，下水もくみあげて畑にまいた時代なので，水は非常に重要なものであった。そのため毎日食器を洗う作業をしなかった。

G．食器の共用について

共用の食器には納豆鉢とか，おごご（つけ物）用とか，特別におかずを作ったときの大きめの食器などがあった。箸箱は存在していなかった。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の上げ下ろしは，まよい箸，わたり箸など注意された（話を聞いているうちに，“まようくらい品数がなかった”と笑いが出た）。上げ下ろしについてはそれほど厳しくなかったが，箸のもち方は厳しく躾けられた。食べる順序は別になし。ただまんべんなく食べることぐらいである。食事中のおしゃべりは厳禁，ただし“おいしいネ”ぐらいは話した。食事中の姿勢は男女とも正座でたべた。この姿勢と，おしゃべりだけは相当厳しかった。

I．食事中のあいさつについて

食事は皆まとまってとったが，なにぶんいそがしかったので食べはじめは，図120のように

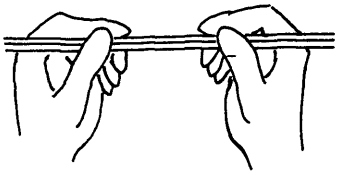


図120

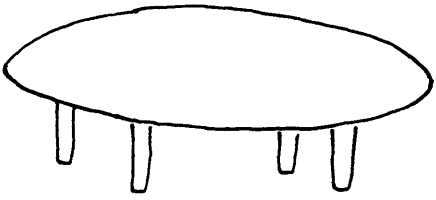


図121

箸をもって軽く会釈をして食べ始めた。“いただきます”さえ言わないことが多かった。食べおわりにはやはり“ごちそうさま”を言って各自膳を下げすぐ作業にとりかかった。

J．食事中の話題について

食事中に話をすることはなかったが，夜風呂にはいる前，家族が集まったときに話した。話しの内容は作物の話や世間話だった。一日のうちで，この風呂にはいる前の時間だけが家族のだんらんを味わえた時だったのだろう。

2．ちゃぶ台の時期

A．食事の形式と家庭環境について

図121のような飯台で食事をしていた。結婚して東京に出た昭和10年から始まりつい7～8年前まで使われていた。家族構成は最初2人それから子供が生まれ最終的には本人から見て，親（母）1人，本人，夫，子供6人の計9人家族になった。結婚当初は東京に住んでいたが，会社（工場）に遠かったため栃木，群馬など何度か住まいをかえている。そして終戦で宮城県栗原郡S村にもどってきたのは，昭和21年10月か11月だったそうだ。関東にいるときの戸主の職業は軍の飛行場での勤務だった。飛行場では100人に及ぶ工員を使っていたが，終戦と同時に飛行場は閉鎖され職業を失なった。この時，人手の必要だったS村に呼びもどされ仕事を手伝だったが，肩身の狭いおもいをし，このころが一番生活が苦しかったそうだ。関東にいるときは会社の団地に住んでいた。呼びもどされたときも一年間は貸家住まいだった。その後は子供が大きくなって新居を建てるまで，実家にもどった。この新居から飯台はなくなり椅子式テーブルになった。

B．食事をする部屋について

今後は，関東の団地生活にあわせて話を進める。食事をする部屋のことを「茶の間」といい，食事と接待をする場所だった。大きさは4畳半で茶ダンスがあるぐらいだった。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席は2人だったので上座に戸主，下座にSさんがすわった。朝は2人で食べたが，勤めがあったので，夜はバラバラで外食ですませることもしばしばあった。茶の間には畳が敷いてあり，結婚祝いに座ぶとんをもらっていたので，2人とも座ぶとんを敷いて食事をとった。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝，豆腐，納豆，焼魚など，以前と大差なし。

昼，弁当を作ってもっていった。

夜，肉，魚など，以前とちがって肉料理をして食べるようになった。肉料理など，たべたこともなかったので，肉を買うごとに店の人に料理の作り方をおそわって食べたそうだ。

E．食事のときのご飯の給仕について

奥さんであるSさんがよそった。順序は戸主によそって，それから自分がよそった。神棚も仏殿もなかったのでお供えはなし。晩しゃくは毎日コップで一パイずつ。このころは米一升二

銭であり，Sさんの旦那さんの給料は75円だったそうで，生活は楽だった。

F．食事のあとかたずけについて

この時期になると各家庭に水道が普及したので，食事の後片付けは大きく変わった。食後に茶わんや箸を湯でゆすぐことはしなくなったし，毎度，奥さんが2人分の食器を下げ洗っている。そして洗いカゴに入れてふきんをかけ，戸棚に入れておいた。

G．食器の共用について

まだ2人での生活だったし食器の数も少ないので，共同の食器はそれほどなかったが，漬け物などは一つの器に入れて出した。箸箱は弁当についているのみ。

H．食事中にしてはならないことについて

食事中のおしゃべりは農家ではいけなかったが，勤めに出るようになると食事のとき以外は話す暇がなくなるので，よく話した。箸の上げ下ろしなどは子供のころ躾けられているので，別に特に食事のマナーについて考えたことはないという。

I．食事中のあいさつについて

食前に“いただきます”，食後に“ごちそうさま”である。

J．食事中の話題について

世間話や家庭内のことなど，とにかくいろいろ自由に各自しゃべった。

3．現在（椅子式テーブル）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

図122のような一般に売られている4人用椅子式テーブルである。実際に「テーブル」と呼び，7～8年前から使用している。現在家族4人で生活，宮城県栗原郡T町が現住所で，先に出たS町とは隣町どうし，10 km ぐらいの距離にある。住環境は住宅地で戸主（Sさんの息子）の職業は地方のバス会社勤務である。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は「おかって」と呼ばれ，いわゆる台所である。調理および食事以外には，あまり使われていない。大きさは8畳程度，戸棚が2つ，冷蔵庫2つなどである。

C．どのようなすわり方でたべたか

がしに近いところに嫁さん，いちばん奥に旦那さんがすわる。あとはSさんと，孫がすわる。戸主の職業の都合で早晩とか遅番とかがあるため，そうした日にはそろって食べられない。晩はほとんど3人で食事をとっているそうだ。おかっては装飾された板がはってある。テーブルなので座ぶとんはなし。茶の間に座ぶとんがおいてある。

D．ご飯のほかには何を食べ，何を飲んでいたか

朝，ご飯は食べない，牛乳とくだものをミキサーに入れてジュースとしてのみ，すませる。たりないと感じたときは，その人がかってに何か食べる。

昼，弁当。

晩，若夫婦は勤めに出ているので，Sさんが材料を用意しておき，嫁さんがきたら，いっしょにつくる。料理好きのお嫁さんなので内容はいろいろだが戸主が魚をあまり好まないので主に肉料理になる。戸主が特別の物を食べるということはない。

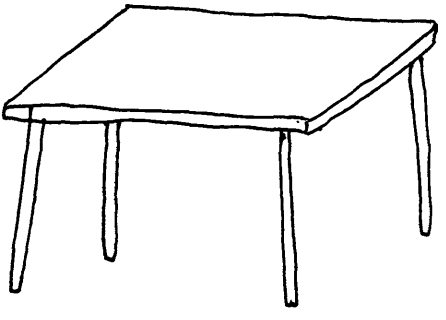


図122

E．食事のときのご飯の給仕について

ご飯は嫁さんがよそった。ただし，ご飯をよそう順は，席についた順にする。Sさんの家では，神仏に水，茶，ご飯を供え，毎朝毎晩とりかえる。戸主の晩しゃくは毎晩（夜勤を除く）コップで1パイぐらい飲むそうだ。

F．食事のあとかたずけについて

戸主を除いて，食べおわった順に食器を自分で下げる。食後茶をのむ前に食器を嫁さんが洗ってしまう。洗った食器は洗いカゴに入れてふきんをかけて戸棚におく。

G．食器の共用について

やはり，つけ物を入れるものや，煮物を入れるものがある。最近では料理を大きな器1つに入れ，各自が小皿などにとって食べることも多いようだ。箸箱は弁当以外なし。

H．食事中にしてはならないことについて

最近は食事を楽しむという考えが普及したせいか，あまりとやかくいわないようだが，テーブルなので孫が足を投げ出して，テーブルにひじをついて食べることがある。そういうときには姿勢を注意したりする。その他は，あまりない。

I．食事中のあいさつについて

食事中のあいさつは，食前“いただきます”食後“ごちそうさま”でかわらない。

J．食事中の話題について

主に嫁さんが話す。会社でのこと，世間話などやはり肩のこらない話が多い。

調査者　No. 160(f)	調査日　昭和58年8月21日(月曜日)
被調査者　M.A.　性別　f	出生年　明治43年(72歳)(第3子)
出生地　愛知県蒲郡市T町	
生家の職業　漁業	
現住所　愛知県蒲郡市K町	
住所の変更とその年度　愛知県蒲郡市T町—愛知県蒲郡市K町(昭4)	
最終学歴　尋常小学校	結婚　昭和4年(19歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

「ふたがきせるようになっとって，ほいでとって，ああぬけて食べる。」

茶わん，おわん，箸。「箱膳」と呼んでいた（図123）。

「子どものころから，おらとうが家を出るまでの昭和12年ぐらいまで箱膳で食っとった。」

「おじいちゃんとおばあちゃんと（自分と自分の夫のこと）親がふたいろと息子とやっさんと。」—義理の両親，夫，自分，義理の弟二人の計六人。

当時祖母たちは愛知県蒲郡市K町に住んでいた。当時から現在に至るまでK町は漁業水産業によって，多くの人々が生計を営んでいる。

戸主の職業はもちろん漁師であった。食事の形式の変化は「おらがうちは，じせいにかわったわけだ。移りかわりの時だわな。」（じせいに—自然に）

B．食事をする部屋について

家は六じょう四間（六畳の部屋が四つ）（図124）。

「今じゃあ台所台所っていうがそうじゃねえ，お勝手っていうだ。」

お勝手は食事以外には使われなかったそうである。また調度品については，「戸棚っていうが1つあっただけ。そん中にいらんものを入れとくだ，みな。戸棚っていうは，箱膳や，おは

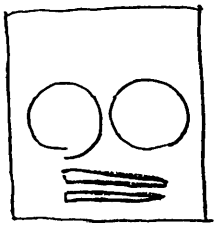


図123

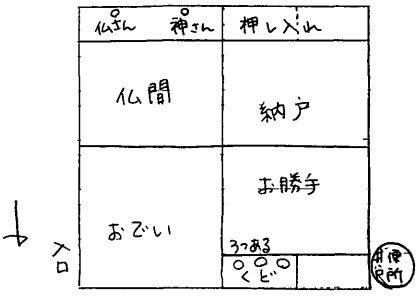


図124

ちから，おべいからみなのせとく（戸棚は三段で，食事の道具を置く場所だったようである）。それと，“蝿帳（はいちょう）が1つあった。“蝿帳”っていうは簀のま四角いやつ。食って残ったものがねくさらんように入れとく，冷蔵庫のかわりだ。」

C．どのようなすわり方で食べたか

「まん中へおはちとおしいとおかまをおいて，ぐるとぐろに人がすわって食べた。」（図125参照）。

座席については戸主が東向きに座ることが原則とされていたようである。また食事についても，みんなが一緒に食べなくてはいけないなどという堅苦しいものでなく，貧しさと忙しさのため，同時に食べることを余儀なくされていたようである。

「ござっていうか，柳のなんだ，“おすべり”っていうだ。」「座ぶとんなんか，あらすか。」

たぶん，おすべりとは，ヘリを附けたござ，薄縁（うすべり）のことであると思う（祖母の発音があいまいなため，薄縁と聞こうと思えば，そのように聞こえてしまうような次第である）。

D．ご飯の他に何を食べ何を飲んでいたか

「朝は麦めしにおしい。」

「昼は寒いときにはみそ焼き，熱いときには，つけもん。」

「夜は，うどん屋につとめとったで，うどんが多（おお）かった。」

「みんな一緒，そんな別のものはちょいともない。」

E．食事のときのご飯の給仕について

夫婦の場合は，夫にその妻がよそい，その他の者は各自よそったそうである。よそう順番においては曽祖父，曽祖母，祖父，祖母，その弟たちとなっていたが，それは絶対的なものではなく，時により前後したそうである。

「ご飯が炊けると，おくさんを最初に盛って，神さんにあげてから，そいからみんなが食べる。」

また晩しゃくは曽祖父はときどきやっていたが，祖父は全く酒が飲めないためやらなかった。

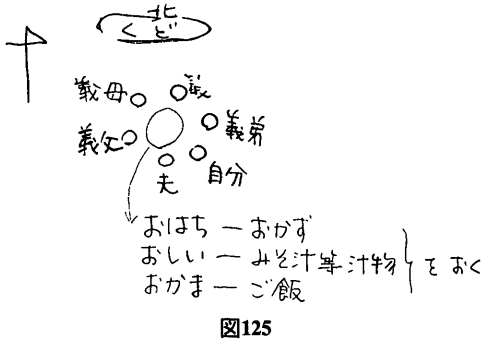


図125

F．食事のあとかたずけについて

「お茶を飲んで，きれいにして，そいでふたをきせとく。茶わんを三度三度洗うことはせやへん。」

「仕事が忙しいもんで，女がかたずけるだが，自分自分でやることもある。」

食器は祖母か，曽祖母が週に一度洗うだけだったそうである。

箱膳は前述のように戸棚に収められた。

G．食器の共用について

共用の食器はうどん（うどんは主食ではなく，家庭でかこむおかずだったそうである）を入れるどんぶり，魚などを盛るお皿（漁村であるので魚は豊富で，家族で一つの皿を囲むこともあったが，1人ひとり皿にもって食べたこともあったそうである)。

「お膳に入れとくで，箸箱なんかはねぇ。」

H．食事中にしてはならないこと

「ご飯食べる時にしちゃいけないこととかあった？」

「そんなことは，なんもねぇ。」

「食べる順序とかあった？」

「食べる順序なかねぇ。」

「食べるときに話しちゃいかんとか？」

「そんなことはねえ。そやぁ話なんか，しへんするだぁ。」（しへん—とてもよく）

「正座とかして食べてた？」

「男はあぐらかいて，女はすわって。」

I．食事中のあいさつについて

「いただきますとか言った？」

「そんなしゃれたことがあらあか。おしがとうは代がかわってきたもんで。おら，子どもひとねる時に，いただきますなんて言ったことがねえや。そんなしつけもしてねえ。」

J．食事中の話題について

「朝はそんなことねえが，晩にはな。みんな話しあって食べるはな。いろんなしゃばのわけことができてくるもんでな。」

思っていたよりも，かなり砕けた食事風景が浮かんできた。大きな海を相手として，仕事をしている男たちと，それをささえ，忙しく働く浜辺の女たちの食事の中には，格式ばったものなどかけらもないように思えた。

2．飯台の時期

A．食事の形式と家庭環境について

「飯台」と言っていた（図126)。

昭和十二年ごろより私たちと祖母たちが同居する昭和五十一年の四月まで祖母たちは，飯台で食事をしていた。

飯台が，箱膳時代の中心に入るだけでほとんどかわりはなかったそうである。

住所も職業も前述と変化せず。

B．食事をする部屋について

「昭和二十年の地震で，家がしゃあけたもんで小屋に暮らしとっただ。半年ぐれいなぁ。そいで水道とかを使うようになって，そいで畳になっただなぁ。」

依然として，その部屋はお勝手と呼ばれ，調度品もたいした変化はなかった。昭和二十年の三河大地震で家屋の半数以上がつぶれたため，生活の一つの転機となった。

C．どのようなすわり方で食べたか

家族全員がそろって食べ，震災後は畳をお勝手にも敷くようになったが，座ぶとんは，使用されていなかった。

D．ご飯のほかに何を食べ，何を飲んでいたか。

箱膳時代と，ほとんどかわらぬ食生活であったが，戦時中，震災後などは，ひえ，なんばとう（とうもろこし），いも，いものつるなど，さらに乏しい食生活となったそうである。

E．食事のときのご飯の給仕について

「飯台なら，おかまをまん中に置くことができいせんで，おれやおおばあさんがよそってやるだ。」

よそう順番，神仏へのお供え，晩しゃくなどは，何も変化はない。

F．食事のあとかたずけについて

食べ終った後は，その茶わんをゆすぐようにして，茶を飲む習慣が祖母たちにはついている。

「ご飯が終ったら，ついでに洗うだわ。洗うのは女の役目だでなぁ。」

「昔はざるがあってなぁ，そこへ茶わんをふせといて，ふきんをのせとくだ。」

G．食器の共用について

「魚はなぁ，1人づつ別々の皿。みなで食べるんは肉を煮たときや，肉うどんにしたときだなぁ。」

共用の食器はあいかわらず，どんぶりであった。

H．食事中にしてはならないことについて

I．食事中のあいさつについて

J．食事中の話題について

この三つの項目については変化はなかったということであった。

3．現在（椅子式テーブル）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

テーブルと椅子。

昭和五十一年四月より始まる。

夫，義息子，娘，孫三人（男二人女一人）。

前述と変わらぬ住所。

ロープ工業など多少の発展もあるが，漁業で生計をたてる人は依然として多い。

義理の息子である戸主は，工業製品の部品等を製造する会社の会社員である。

祖父の病気等で祖母たちと私たちの同居が決まり，家屋を新築し，洋式の生活となったため，食事の形式も変化する結果となった。

B．食事をする部屋について

「台所」と呼ぶようになる。その部屋は食事以外に使われることはまったくない。その部屋は六畳で，食器棚二つ，その他ガス台，調理台，流しなどがあるため，8人家族の台所としては狭い。現在は，私と兄が大学生となり家を出て生活しているため，充分のようである。

C．どのようなすわり方で食べたか

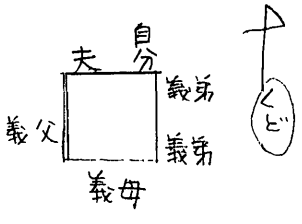


図126

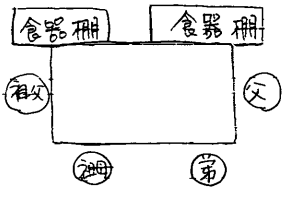


図127

私と兄のいない現在の食事は図127のようである。母は常に他の家族の食事が終ってから食べ，父は夕食は晩しゃくをするため，ほとんど一緒に食べないことが多い。また，祖父母たちと，私たちは食事をするものが異なるので，一緒に食べないこともよくある。台所の床は，板ばりの洋間である。椅子のため，座ぶとんは使用しない。

D．ご飯のほかに，何を食べ，何を飲んでいたか。

朝はみそ汁とつけ物，のり，生たまご。これは祖父たちも私たちも同じものを食べる。

昼は祖父母だけなので，魚を煮たり，コロッケなどを買ったりしているようである。

夕食は，私たちは，カレー，ピラフ，すきやきなどさまざまなものを食べるが，祖父母たちは，そういうものを好まないので，魚，豆腐，野菜の煮物を食べる。しかし，特別に誰かだけがちがうものを食べることはなかった。

E．食事のときの給仕について

祖父のものは常に祖母がよそう。あとは，母または私がよそう。祖父母たちは，歯が悪いため，おかゆに近いご飯を食べるので，我家では毎日二度ご飯を炊いている。そのため祖父母たちと私たちでは食事が分離してしまう。よそう順は，父，兄，弟，私という順である。神様へは，祖母が，ご飯がたけるとすぐによそって，お供えをする。

私の父は毎晩，晩しゃくをする。

F．食事のかたずけについて

食後すぐに，祖父母のものも一緒に，母か私が洗う。洗った食器は食器棚へかたずける。

G．食器の共用について

食器は特別に，どれが誰のものとは決まっていない。きのう父が食べた茶碗で，きょうは兄が食べているということもよくある。共用の食器は，大皿，はちなどたくさんある。たいていの場合，おかずは，そうしたものに盛りつけられる。箸箱はない。

H．食事中にしてはならないことについて

特別してはならないことはない。しかし，あまりに行儀が悪くてしかられることはある。

I．食事中のあいさつについて

兄・弟・私の三人は，「いただきます。」「ごちそうさま」とあいさつをするが，他の家族はしたり，しなかったりである。

J．食事中の話題について

食事中に話すことは，やはり，その日に起こったこと，近所の人たちの，おめでたや，悲しみについてである。

調査者　No. 165(f)	調査日　昭和58年8月13日(土曜日)
被調査者　M.F.　性別　f	出生年　大正3年(69歳)(第3子)
出生地　群馬県安中市G村	
生家の職業　農業(主に養蚕)	
現住所　群馬県安中市S町	
住所の変更とその年度　同じ村内での変更あり(結婚に伴い)	
最終学歴　高等小学校	結婚　昭和16年(27歳)
被調査者との関係　父の知人のお義母さん	

1．箱膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

「おぜん」と呼んで，昭和22～3年頃まで（戦後まで）使用していた。箱膳は，塗り物で，釘を使わない組木なので，すぐにこわれやすかった（板の厚さも5mmくらい）。

「おぜん」の上の食事の形式はだいたい図128のようで，いたって質素だった。

当時の家族構成は，祖父・祖母・父・母・Fさん（被調査者）ときょうだい（男2人，女3人の5人きょうだい）の9人家族だった。

場所は，群馬県安中市G村で，その後も村内で移転はあっても，Fさんは村から出たことはない。

住環境は（現在も）農業地で，当時は特に「おかいこ」（養蚕）が盛んだった。その他に，自給自足の為の作物，米・麦・とうもろこし・芋類などを作っていた。

「おぜん」が消えたのは，直接には箱膳そのものが古くなって使用に耐えなくなったので，その頃出てきた「ちゃぶ台」に替えた。「ちゃぶ台」に替わる直前，男の人は最後まで箱膳を使っていて，その間家族は板の間にじかに食器を置いて食べていた，という時期もあった。

B．食事をする部屋について

「おかって」と呼んで，その場所は食事の仕度と食事をする時にだけ使用。六畳位の広さで，部屋の隅にお膳をしまう棚がある以外には調度品はなかった。

C．どのようなすわり方で食べたか

図129の様な形にだいたい決まっていた。…「平均農家はそういうしきたり」だったそうだ。板張りで，そこにじかにすわって（座布団もなし）食べた。

食事はだいたい，皆一緒に食べた。

「おとこしゅ」が先に食べるというようなことはなかった。

おかってに隣接して下の方に，いろりがあって，そこで煮たきしたものを出していた。

D．ご飯の他に食べていたもの

朝：つけもの，おみそ汁程度。

昼：鉄火みそ（野菜いためのの一種），にしん，くじらなど。

晩：煮込みなど。

全体に，肉・魚類は滅多に出なかった（肉などはお正月に出るくらいだった）。

献立は皆同じで，特別に差別するようなことはなかった（このあたりに「かかあ天下」と言われるゆえんがあるのかもしれない，とのこと）。ただし，「働くことが最も大切」という考えなので，働いた人（つまり男の人）が多く食べる，ということはあった。

また，ご飯も普通の米飯ではなく，麦と米とを半々（か，麦が多いくらい）にまぜた麦飯で，時には代わりに，さつま芋，じゃが芋，えんどうなどがまざることもあった。とにかく粗末な食事だったそうである。

E．ご飯の給仕

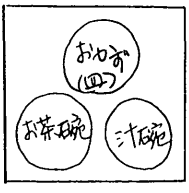


図128

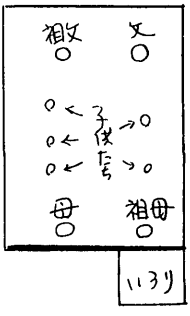


図129

「おんなしゅ」が，祖父・父・子供・女の順でよそっていた。また，朝だけは，仏様に小さなお茶碗にご飯をよそって供えていた。お供えは，ご飯を“煮た”時，“変わりもの”が出たときにしていた。晩しゃくはまったくなかった。

F．あとかたづけ

自分のお茶碗をお茶でゆすいで，そのまま箱にしまっておいたのを，後で女の人がおかっての隅の棚の上においた（膳は一つ一つが違うもので，ひとのものを間違うことはなかった。中のお茶碗は，2，3日ごとに女の人が洗っておいた）。

G．共用の食器

食事の時には使わなかった。お茶の時間などのとき，煮物などを皆で食べたり，食後の残り物をのせたりする時にだけ使った。通常の食事では，各々の皿に一人分ずつのせてあった。

たけたご飯を・おひつなどに移すことはなくて，たいたかまのまま「かましき」（わらを縄でまいてドーナツ型にしたもの）の上においた。

箸箱はもともとなくて，めいめいの箸は，お膳の中にいっしょにしまっておいた。

H．食事中にしてはならないこと

特別にきびしいきまりはなかった（食器の並べ方ぐらいは決まっていたが）。姿勢は男の人はあぐら，女の人は正座して食べていた。おしゃべりもかなり自由にしていた。

I．あいさつ

食べ始めは，お膳が整った順に適当に「いただきます」とあいさつして，食べ始めた。食べ終わりも，食べてしまった順に「ごちそうさま」をして，食器を箱にしまっていた。

J．食事中の話題

家族が好きなようにその日のできごとなどの雑談をして，かなり自由な雰囲気だったようだ。

2．ちゃぶ台の時期

A．食事の形式は，お膳の上のものがそのままちゃぶ台に移った感じで，ごく質素だった。

お膳が完全に消えた昭和22～3年頃，周辺の家からだんだん広まってきた「ちゃぶ台」に替わり，引越してテーブルに替わる昭和28年まで使っていた。

当時の家族構成は，養父・養母・夫・Fさん・子供5人の9人だった。その頃もやはり村じゅうが農家であった。

B．食事をする部屋は，お膳の時期と同じく，「おかって」と呼んで，調度品も何もない六畳くらいの部屋だった。つまり，「おかって」というと食事をするところ，「だいどころ」というと土間（食事を作るところ）のことを指すということである。

「おかって」は，食事をする以外に使用することはなかったが，例外的に夏の間だけ，家中の部屋いっぱいに“おかいこ”を飼って（かご飼いだった）いたので，「おかって」が皆の休むところだった。

C．上座に男の人，下座に女の人，中間に子供，というのはずっと同じ（図130）。お膳の時期のすわり方が，そのままちゃぶ台の回りに集まった感じ。

食事は，皆いっしょに，やはり板張りのところに座って食べた。

D．全般的に，農業でとれた野菜や“（お）さつま”やじゃが芋などを煮たりして食べていた。

朝：つけもの，かんづめ…中身は海苔や昆布や具などのつくだにだった。あとは，飼っていた鶏の卵が毎朝出ていた。

昼：野菜をいためたり煮たりしたものがほとんどだった。

晩：ご飯をたき直さないので，「おっきりこみ」という一種の煮込みうどんが夕飯だった。「おっきりこみ」には，うどん（市販のものが出回るまでは，家庭で打っていた）に，ねぎなどの

野菜や里芋，じゃが芋などを入れて煮こみ，汁椀で食べていた。あとは，つけものが出ていたくらいだった。

もし，ご飯が余っていれば，「おとこしゅ」たちに食べさせてやった。

カレーの時（これは最上のごちそうだった）や，さんま・にしん・くじらなどの魚がある時だけ，もう一度ご飯をたき直した。

この頃，肉類をあまりとらなかったので，卵が重要な栄養源だった。近所に病人が出たりすると，家で食べるのをひかえて，そちらにお見舞代わりに持っていったそうである。また卵は，たいていは焼いたりせずに，直接ご飯にかけて食べていた。

誰かが特別なものを食べていたということは相変わらずなかった。せいぜい食べる量に差があるくらいであった。

E．ご飯をよそるのは女の人で，順序は男→子供→女と，お膳の時期と変わっていない。

仏壇へのお供えは，毎朝ではなくて，変わりものができた時，“お盆さま”，お彼岸のときに限られるようになった。

F．食べおわったら，女の人や子供が片付けをして，すぐに洗った。だから，お茶でゆすいだりすることもなくなった。

水は，ちょっと遠くにあるつるべ井戸から毎日汲んできて，大きな水かめにためておいた。そのため水は，たいへん貴重だったので，米のとぎ汁や，茶碗を洗った水は，「ゾウズオケ」というおけにためておき，馬に飲み水として与えた。また，風呂水もすぐには捨てず，水ためにためておいて，畑にまいてこやしにしていた程，水をムダにはしなかった。

洗った食器は，おかっての隅にある，竹で編んだ「ちゃわんかご」にしまっておいた。

G．おしんこ・野菜を煮たり（エンドウやナスなど）いためたり（キャベツなど）したものは，大きな皿に盛っていた。その他のおかずも，魚をぬかして，だいたい一緒の皿で，直接そこから取って食べていた。

H．お膳の時期と同様，マナーにうるさくはなかった（食事中トイレに立つと文句を言われる程度だった）。

I．やはりお膳の時期と同じ。皆がそろうのを待ってから後は，めいめいが好きなようにしていた。

J．上と同様，昔から食事中の内容は変化しないようである。

3．テーブルの時期

A．昭和28年，現在の場所に引越してきた（同じ村内で移っただけ）。その時，テーブルになった。

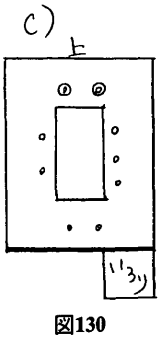


図130

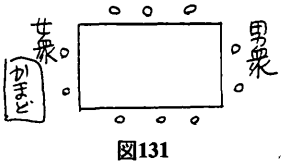


図131

引越した当時は，養父・養母・夫・Fさん・子供6人の10人家族だったが，2，3年後に老夫婦が亡くなって8人となった。現在はFさん夫婦，娘夫婦，孫2人の6人家族。

住環境は変わらず農業地だが，15年位前に専業農家が減り始め，現在専業の家は村にまったくなくなって，半農半サラのような家になってしまった（仕事のあいまに農業をやる，いわゆる家庭菜園を大規模にしたような形）。

Fさんの家も同じく，若い人は勤めに出て，老夫婦が小規模に農業をやっている（養蚕も少しはやっているそうだ）。

B．引越した当時は，土間におかってを作ってテーブルを置き，そこで食事を作ったり，食事をしたり，お茶を飲んだりした。昨年，ダイニングルーム（六畳くらいの広さで，やはり「おかって」と呼んでいる）に新しくテーブルを入れて食事をとっている。現在の「おかって」には冷蔵庫・食器棚がある。

土間におかってがあった頃は，食器棚やかまどなどの他に，風呂おけが入口の近くにあり，そこで囲いもなしに入っていた。

C．席順はだいたい図131の通り。食事は昔から同じように，皆がそろって食べる。

土間の時期は，地下足袋をぬがなくていいように，土足でいすにすわってテーブルについていた。

D．朝：それまでと同じく質素で，つけものやつくだに，卵，みそ汁というパターン。朝に納豆屋が来て，納豆も取るようになった。

昼：野菜いため，ゆうべの残りものなどの他に，魚・肉などを食べていた。又，マヨネーズの普及とともに，サラダ（生野菜）も食べ始めた。

晩：煮込み，うどんなどが主。

全体的に食生活が向上してきて，魚・肉・ソーセージなど，動物性タンパク質を多く取るようになった。その頃，即席ラーメンが出てきて，間食としてとることもあった。

最近は，引越の頃から少しは変化した。

朝：ご飯・みそ汁・卵・板海苔・ハムなど。

昼：あまり以前と変わらず，野菜いため，魚・肉類など。

晩：「おっきりこみ」の伝統からかめん類が多い。たとえば，そばや冷や麦なども食卓に上るようになった。

現在は，和食だけでなく，洋食なども食べるようになり，昔からくらべればかなり食生活は向上したようである。

特別にちがったものを食べる人がいるようなことは，昔通り今でももちろんないようである。

E．よそる順序も，よそる人も昔から変わっていない。

お供えも，何か特別なときにだけ（初物・お盆・彼岸）している。

晩しゃくも通常はなくて，勤めから帰った息子さんが，寝る前に一人で飲むくらいである。

F．食べおわれば，すぐに女の人がテーブルから下げて洗っている。

洗った食器は食器棚にしまっている。

水道が普及したために，お茶などでゆすぐ必要がなくなったので，すぐに洗っているのではないか。

G．お茶碗と魚などを乗せる皿以外は，全て共用している。大きな皿につけものやおかずをのせて，自由に取って食べている。サラダなども，「ふたとこくらいにおいて」スプーンで各自好きに取るようにしているそうである。

H．I．J．昔から全く変わらず，自由な雰囲気がそのまま続いているようである。

調査者　No. 167(f)	調査日　昭和58年8月8日(月曜日)
被調査者　K.K.　　性別　f	出生年　明治43年(73歳)(第3子)
出生地　秋田県横手市U町	
生家の職業　郡役所の職員	
現住所　秋田県秋田市T町	
住所の変更とその年度	
最終学歴　H産婆学校	結婚　昭和7年(23歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期

A．一人用のお膳は，「猫あし膳」と呼ばれていた。それは，図132のように，四本足のもので黒塗りであった。家族の間では，「お膳こ」(「こ」は方言）と呼ばれていた。客用には，本膳と呼ばれる少し大きめの膳と，料理の多いとき，二の膳と呼ばれる膳が用いられた。二の膳は，猫あし膳よりも少し背が低く，皿をのせる部分は赤塗りであったそうだ（図133)。これらの膳は，祖母が生まれる以前から用いていて，祖母の生家では，昭和三十年頃まで使い続けていたらしい。祖母は，昭和のはじめに東京に出たために，そのお膳をそれ以来使わなかったそうだ。家族構成は，父に死別したり，姉の結婚や出産でたびたび推移したが，祖母，祖母の母，兄，姉，姉婿，姉の子ども二人の七人の時期が長かった。住所は秋田県横手市Uで，住宅地だった。父親は郡役所に勤めていて，義兄は鉄道の測量師だったそうだ。食事の形式の変化は，祖母が東京の学校に通うようになったためである。

B．食事をする部屋について食事の部屋は，台所と続いていたために，「お勝手」と呼ばれていた。家の一部の見取図を図134に示したが，ふだんはお勝手で食事をし，食後の語らいをした。たまに茶の間で食事をすることもあったそうだが，ふつうは茶の間では，繕いものをしたり，団らんをしたり，親しい友人を招いて，お茶を飲んだりしたそうだ。二部屋ともいろりがあって，それを囲んで家族が座ったという。(座順は図134のとおり）また，四畳半の部屋と台所には，戸棚があり，そこに，ふだん使う皿をしまっていた。

C．どのようなすわり方で食べていたか

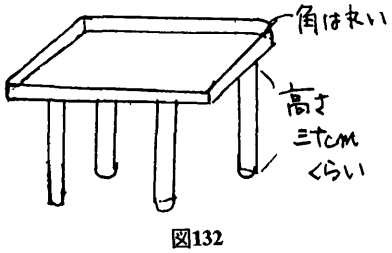


図132

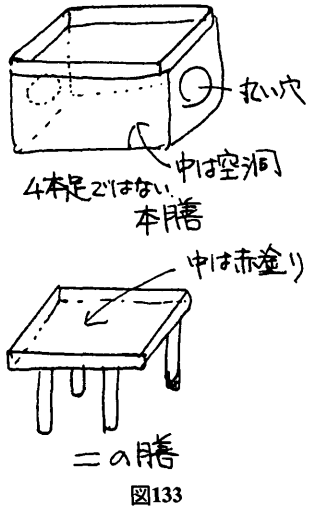


図133

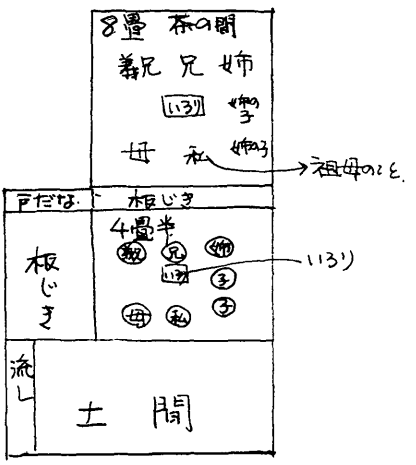


図134

座順は先にあげた通りで，たいていは，皆がそろって食べたという。食べる所は，畳敷きで，子どもを除いて皆，小さい座布団に座っていたそうだ。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

食事の内容は，現在とは大差ないそうだが，野菜の種類は少なく，パンもなかったそうだ。朝は，ごはん，おつゆ，つけもの，おかず（おひたし，にしめ，納豆など），昼は適当に，塩ざけとごはんや，畑のもの（芋や栗）や，卵など，夜は，ごはん，おつゆ，つけもの，主菜，副菜だったという。

E．食事のときのご飯の給仕について

よそったのは祖母の母で，順序は座順と同じで，義兄，兄，姉，子ども，（祖母），母というものだった。お供えは，ふだんは朝だけ，ご飯からおかずまで，少しずつとって供えたし，お盆のときは，食事ごとに供えたそうだ。晩しゃくは，義兄が行っていた。

F．食事のあとかたずけについて

食べ終ったあとは，めいめいがお湯を飲んだそうだ。これに茶わんをゆすぐ意味があったかどうかは，わからない。食器は，祖母や祖母の母や姉，つまり女の人が食後のあいさつをしたあとで，適当にさげたそうだ。そして，洗いおけの中で水で洗ったあと，お湯ですすいだそうである。食器は，台所やお勝手の戸棚の中にしまった。

G．食器の共用について

茶わん，箸，おわんは自分のものが決まっていたが，総菜用の皿は，数枚組の皿をその時々で各自に割りあてて使っていた。また，漬物や梅干しは，一つの皿に盛りつけられていて，皆がそこから好きなだけ取って，食べていたそうだ。箸箱は義兄と兄だけが使っていた，ということだった。

H．食事中にしてはならないことについて

まず，箸の上げ下ろしについては，箸はそろえて置くこと，持つときは右手で上から持って，左手に持ちかえて，それからきちんと右手で持つこと（置く時も，右手→左手→右手），また，持ち方としては，中指に箸の間にはさんで持つことを厳しく注意されたそうである。食べる順番は，はじめにおつゆに箸を浸して，または，おつゆを飲んでから，ご飯，おかず，という順だったそうだ。ここでは，何か一つだけに集中して食べないように言われたそうだ。また，食事中は全然話さずに食べ，食べ終えてから，かたづける前にみんなで話をしたそうだ。姿勢はと言うと，膝を折ってきちんとして食べなければならなかったという。そのほかはごく常識的であったそうだ。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは，「ごっつぉうなるんす」と皆で言い，食べ終わりには，ただ頭を下げたそうだ。

J．食事中の話題について

前にも述べたが，食事中はおしゃべりをせず，もっぱら食後に話しをしたそうだ。皆がよく

話したそうで，話題はその日のでき事，学校であったことなど，日常的なものだったという。

2．ちゃぶ台の時期

A．食事の形式と家庭環境について

めいめい膳ではなく，一つのお膳の上に，みんなの茶わんや料理をのせていた。形式は変わったが，前と同じように，「お膳こ」と呼んでいたという。それは，昭和のはじめ頃から四十五年ぐらいまで用いていた。最初の頃は四角い膳で，あとから丸いものが流行してきたという。図135は，丸い方である。私も，祖母の家に足を折りたたむ丸いちゃぶ台があったことを記憶している。このちゃぶ台の時期は，祖母の東京での独身時代から，結婚，出産，戦争で秋田に疎開して，祖父の実家で暮らしていた時期，秋田市に引越してからの時期……というように，めまぐるしく祖母の生活が変化したので，東京で親子三人暮らしていた時期と，戦後，秋田市で，やはり親子三人暮らしていた時期に絞って聞いてみた。

家族構成は，祖母，祖父，母（私からみたもの）の親子三人で，東京では文京区K町に住んでいた。祖父は，講道館で柔道教師をしていたそうだ（秋田では，県庁に勤めていた）。食事の形式は，家族の人数で変化したとも考えられる。なぜなら，ちゃぶ台はさほど大きくなく，小人数用の膳と考えられるからだ。だから，疎開中に多人数で暮らしていたときはちゃぶ台を用いなかったし，母が結婚・出産して家族が増えてからは，ちゃぶ台より大きいテーブルや，椅子式テーブルを用いるようになったのだ。

B．食事をする部屋について

東京では借家住まいをしていたので，食事部屋は茶の間でもあり，また，仕事部屋でもあったそうだ。広さは四畳半で，「四畳半」というのが，そのまま部屋の呼び方になっていた。そこには，茶だんすが置かれていた。秋田時代も部屋は六畳になったが，茶の間として，あるいは，ちょっとした仕事場として用いられた。特に部屋の呼び方は決まっていなかったが，「この部屋で食事をする」と決まっていたそうだ。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席の順番は図136のようで，皆そろって食べたそうだ。食べる場所は畳敷きで，座布団をしいて食べていた。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

1．であげたものと大差はなく，誰かが特別ちがったものを食べていた，ということはなかったらしい。

E．食事のときのご飯の給仕について

給仕をしたのは，祖母で，祖父，母，祖母（私から見て）の順に，よそったそうだ。この時期には，お正月を除いて，神仏へお供えすることは行わなかったという。また，祖父は，家ではめったに晩酌をしなかったそうだ。

F．食事のあとかたずけについて

食べ終えてから，お湯を飲んだのは1．と同じである。食器をさげたのは，祖母や母（成長してから）で，二人で適当に洗ったり，ふいたりしていた。洗った食器は，台所の戸棚にしまったそうだ。

G．食器の共用について

共用の食器についても，1．とほとんど同じである。つまり，茶わん，おわん，箸は各自のものが決まっていて，おかずを盛りつける皿は，食事のたびに適当にふりわけられた。漬物類は一つの皿に盛りつけられて，各自でそこから取って食べた。このときは箸箱は用いなかったそうだ。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の上げ下ろしについても，1．と同様である。食べる順序も原則は同じだったが，祖父はあまり守らなかったそうだ。また，食事中は，多くはしゃべらなかったという。姿勢は，祖母と母は膝を崩さずに食べたが祖父はあぐらをかいて食べていたことが，多かったそうだ。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは，「いただきます」で，食べ終わりは，「ごちそうさま」だったそうだ。

J．食事中の話題について

よく話したのは祖母と母で，一日の出来事を話すことが多かったそうだ。

3．現在の時期

A．食事の形式と家庭環境について

現在は椅子式テーブルである。それは，「テーブル」と呼ばれていて，昭和四十五年頃から使いはじめたようだ（詳しい年代は，はっきりしない）。家族構成は，現在は祖母と祖父の二人暮らしである。住所は秋田市T町で，住宅地である。祖父は現在，会社員である。

B．食事をする部屋について

台所と一緒になっているので，「台所」と呼んでいる。この部屋は，調理と食事の時に使われている。部屋の広さは八畳ほどで，冷蔵庫，戸棚，流し，ガス台などが置いてある。

C．どのようなすわり方で食べたか

ふだんは祖父と祖母の二人暮らしであることは，前に述べたが，時々，父，母，私，妹があそびに行くので，テーブルは六人用のものを置いてある。座順は，図137の通りである。二人のときは，適当にすわっているということだった。六人のときも二人のときも，特別なことがない限り，みんなでそろって食べている。食べる場所は板の間で，椅子の上に座布団をしいて食べている。

D．ご飯のほかに何を食べ，何を飲んでいたか

詳しく述べると，食事の中味は変化してきているが，基本的なスタイルは変わっていないと思う。それに祖父や祖母は，（特に祖父は）新しい洋風の味や油っぽいものよりも，昔ながらの味や料理が好みであるから，自然とおかずも和風のものが多くなる。

E．食事のときのご飯の給仕について

ふだんはもっぱら祖母が，祖父，祖母という順でよそっている。六人の時は，私が，祖父，祖母，父，母，妹，私の順でよそう。神仏へのお供えは，正月にお神酒とお雑煮を供えるだけである。また，晩しゃくについては，少し前までは祖父が気が向いたとき少し飲んでいたが，今はまったく飲まない。

F．食事のあとかたずけについて

食べ終わったあと，祖父はいつも湯を飲むが，ほかの人は飲みたい時にだけ飲むようになっ

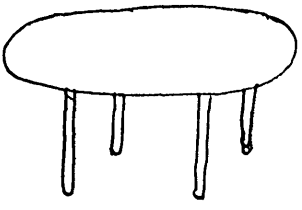


図135

図136

図137

た。食器をさげて洗うのは祖母で，私たちが一緒のときは，母や妹や私が行うようにしている。洗った食器は戸棚の中にしまっている。

G．食器の共用について

各自の食器については，1．2．と同じである。漬物類を一つの皿に盛りつけて，取り分けて食べるのも同じだ。最近の傾向として加えるのは，主菜や，あるいは副菜の一部を大皿に盛りつけて，各自が小皿にとりわけて食べることが多くなったことである。箸箱は今日では使われていない。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の上げ下ろしについては，それほど厳しく言われることはなくなった。が，小さい頃には，正しく持つように何度も注意された。持ち上げ方，置き方については，1．の項のように細かく言われなくなった。食べる順序についても，あまり厳しくない。ただ，一つのものだけを食べてはならないと言われている。食事中は，わりとよく話をすると思う。しかし口に物を入れたまま話すことは，いけない。姿勢は椅子にすわって食べる。そのほかしてはならないことは，常識的だが食卓に肘をつかない，茶わんは持って食べる，こぼさないで食べる，というようなことである。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは「いただきます」，終わりは「ごちそうさま」である。

J．食事中の話題について

二人で食べる時は，あまり話をしないそうだ。六人で食べる時は，食事中には，妹や私がよく話をする。ごく日常的な話である。

調査者　No. 173（f）	調査日　昭和58年8月21日（日曜日）
被調査者　T.K.　　性別　m	出生年　明治45年（71歳）（第1子）
出生地　福井県大飯郡H村	
生家の職業　履物屋と農業	
現住所　福井県大飯郡O町	
住所の変更とその年度	
最終学歴　尋常高等小学校	結婚　昭和12年（27歳）
被調査者との関係　母のいとこ	

1．箱膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

男の人は「箱膳」で，女の人は普通の「お膳」だった。箱膳もお膳も，明治の終わり頃から終戦まで使った（図138）。家族構成は，祖母，父母，弟2人，妹2人と本人，それに職人が2人いた。住所は，福井県大飯郡H村。住環境は，商店街。この家も戸主であるお父さんが履物屋をしていて，職人さんを2人おいていた。また，おばあさんとお母さんは，少し離れた所にある田んぼと畑を作っていた。履物屋と農業は，どちらが主でしたか，と聞くと，「半々やっ

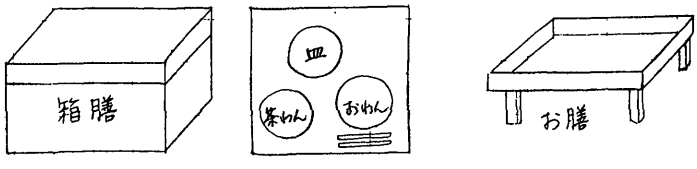


図138

た」とのこと。食事の形式が変化したかどうかは，「わしが生まれてからのことしか，よーわからへんさかいになぁ…」ということであった。

B．食事をする部屋について

部屋のことを，「おま」と呼んでいた。「おまっていうのは，居間っていう言葉がなまったんやろ」ということである。いろりがあったので，その部屋の端っこでわら仕事（なわや桟俵を作る）や夜なべなどをした。その部屋の大きさは，8畳ぐらいで，箱膳とかをしまっておく戸棚（暗赤色の漆塗りのようなもので現存）があった。

C．どのようなすわり方で食べたか

横座には，戸主と長男（本人），木尻には，女の人，その他の人は適当にすわった。

食事は家族全員（職人も）でそろってしたが，時々，子供だけ先にすますということもあった（図139）。食べる場所は，板間でむしろが敷いてあった。客が来た時はござを敷いた。座ぶとんは無かった。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝，米：麦＝10：3の麦めし（先に大麦を炊いてからご飯と一緒に炊いた），汁（具は，豆腐やネギやカボチャなど），つけもん（の）（キュウリの浅づけなど）。

昼，朝と同じ。

晩，朝と同じものに，煮物（「まちかね」というのをよく食べた。「まちかねってゆうのは，ダイコンとその葉っぱとくきを塩づけにしてー，それを自分とこで作ったみそとか，へしこのぬかとかで炊いたもんや。いろりになべかけて炊くんや」ということであった），他に魚（イワシの桜干し，アジ，アカヒモなど）も食べた。夏にはよく冷ややっこも食べた。かしわはたまに食べたが，それ以外牛肉とか豚肉とかは，1年に1回食べるか食べないかだった。

家族も職人もみんな同じものを食べていた。

E．食事のときのご飯の給仕について

お母さんがよそった。よそう順序は特別に決まっていたわけではない。神仏へのお供えは，毎日神棚と仏さんにする。何をお供えするのかは，うっかり聞き忘れた。（参考までに，我家では毎朝，家族のご飯をよそう前に，神棚と仏さんに炊きたてのご飯とお茶をお供えしている。多分，この家でも同じだと思う）。晩しゃくは，お父さんがお酒を全く飲まなかったので無かった。

F．食事のあとかたずけについて

食べ終わると，茶わんや箸をお茶でゆすぎ，各々の箱膳に食器をしまった。また，お膳の場合も食器をお膳にふせておいた。その後，個人個人で戸棚に膳をしまった。1週間か5日に1度ぐらい，おばあさんとお母さんが食器を洗い，それを箱膳などに入れ，膳はまた戸棚にしまった。

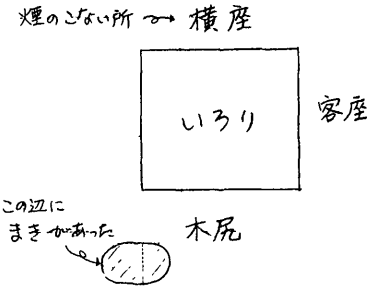


図139

G．食器の共用について

共用の食器には，つけもん（の）の皿，なますやしたしなどの器があった。つけもんの皿には，キュウリ，ナス，ダイコン，ハクサイ，カブラ，ウリなどの浅づけとか，器には，酢のもの，菜っぱのごまあえなどが盛られた。箸箱は，「あったことはあったけんど，使う時やら使わん時やらで，はっきりせーへんなー。なんか知らんけど，思い出したようにつこうてみたり，まためんどくそーなって使わんよう

になったり…」ということであった。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の上げ下ろしとか食べる順序は，別にとやかく言われることもなかった。しかし「しゃべるな」とか「こぼすな」とよく言われた。もし，食べ物をこぼしたりすると，「マッチ1本が米16粒なんやで。こぼさんとおきなよ」と言われた。食事中の姿勢は，男の人があぐら，女の人は正座をしていた。その他おならなんかしてはならなかった。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめもおわりもあいさつなんてしなかった。

J．食事中の話題について

たいてい大人がしゃべっていた。「子供らにとってお父さんていうのは，ものすごーこわい存在やったし，お父さんの前では，きちんとかしこまっとった」ということであった。その日の話題が多かった。

2．飯台の時期

A．食事の形式と家庭環境について

飯台は，終戦後から昭和50年まで使っていた。箱膳と同じように，引き出しの中に茶わんなど食器をしまった（図140）。家庭構成は，父母と妹2人と本人（昭和8年に履物屋をやめたので職人はいない）。住所は，福井県大飯郡O町（町名変更，出生地に同じ）。住環境は商店街。農業で田や畑を作っていた。終戦後，膳から飯台に変わったのは，社会の風潮であり，周りがみんな変えるというので，この家でもそれにあわせて変えた。

B．食事をする部屋について

部屋のことは，「おま」と呼んでいた。食事以外では，家族の団らんに利用。大きさは8畳ぐらいで，戸棚があった。

C．どのようなすわり方で食べたか

たいていみんなそろって食事したが，子供たちだけ先にすますこともあった。昭和20年にいろりをつぶし，畳を敷いた。座ぶとんは，みんな使っていなかった（図141）。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝，米だけのご飯に汁につけもん。

昼，朝と同じものに野菜の煮つけなども食べた。

晩，朝と同じものに魚とか煮物とかを食べた。月に1回ぐらい肉を食べるようになった。

家族みんな同じものを食べた。

E．食事のときのご飯の給仕について

お母さんが給仕した。よそう順番は特別に決まっていなかった。神棚と仏さんには毎日お供えする。晩しゃくは無かった。

F．食事のあとかたずけについて

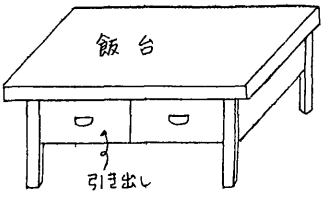


図140

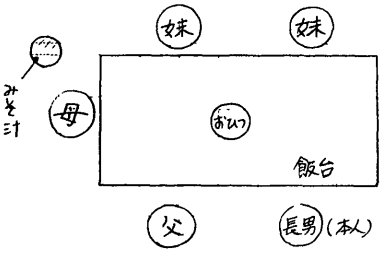


図141

食べ終わると，茶わんや箸をお茶でゆすがずに，お母さんや奥さんが炊事場に食器をさげ，お母さんや奥さんが灰のあくなどで食器を洗った。洗った食器は，飯台の引き出しにしまった。

G．食器の共用について

魚などは各々の皿にもりつけてあったので，やはり，おしたしや酢のもの，つけもんの器が共用だった。箸箱は1．箱膳の時期で述べたことと同じ。

H．食事中にしてはならないことについて

これも1．箱膳の時期で述べたことと同じ。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめもおわりもあいさつなんてしなかった。

J．食事中の話題について

箱膳の時期に比べて，けっこうみんなしゃべっていた。その日の話題が多かった。

3．椅子式テーブルの時期

A．食事の形式と家庭環境について

テーブルは，昭和50年から使っている。家族構成は，本人と妻と長男。住所は，福井県大飯郡O町。住環境は商店街。農業で田畑を作っている。飯台からテーブルに変わったのは，社会の風潮だから。

B．食事をする部屋について

食堂と呼んでいて，団らんの場でもある。大きさは10畳で，食器棚やテレビがある。

C．どのようなすわり方で食べるか

みんなでそろって食べる。板間で椅子にすわる。座ぶとん無し（図142）。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいるか

朝，みそ汁，つけもん。

昼，魚，煮物，くだもの。

夕，魚，肉，etc……。

みんな同じものを食べる。

E．食事のときのご飯の給仕について

奥さんがよそう。順序は別に決まっていない。神棚と仏さんには毎日お供えをする。晩しゃくは無し。

F．食事のあとのかたずけについて

食べ終わったら，すぐ奥さんが食器をさげ洗う。洗った食器は食器棚にしまう。

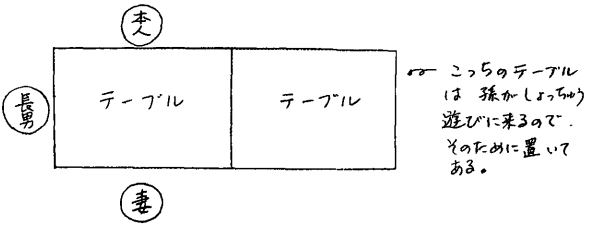


図142

G．食器の共用について

2．飯台の時期と同じ。

H．食事中にしてはならないこと。

特にやかましく言われることはない。

I．食事中のあいさつについて

あいさつなし。

J．食事中の話題について

みんなで楽しくしゃべっている。話題はニュースのこととか仕事のことなどが多い。

調査者　No. 180(f)	調査日　昭和58年12月26日(月曜日)
被調査者　Y.K.　　性別　f	出生年　明治44年(72歳)(第6子)
出生地　大阪府大阪市東区A町	
生家の職業　洋反物の卸商	
現住所　兵庫県西宮市Y町	
住所の変更とその年度　小学校まで大阪市東区A町—U町(本宅)—結婚後西宮市G町	
最終学歴　高等女学校	結婚　昭和6年(21歳)
被調査者との関係　祖母(母方)	

1．ちゃぶ台の時期

A．食事の形式と家庭環境について

祖母は小学校までを大阪市（東区）A町にあった店で過ごし，小学校にあがるころ，U町に本宅ができあがり，家族は本宅に移り住むことになりました。図143はU町の本宅の見取図でです。U町は住宅街で，商売も繁盛し，財も豊かになってきた，というので，店とは別にここに本宅を構えたのでした。このころの家族構成は，祖母の両親，七人の兄弟（祖母は六番目で，女の子は祖母一人。そこで店では「とうはん」家では「こいさん」と呼ばれていたそうです。）それに女中さんと丁稚さんです。女中さんは主に主人の世話をする上女中と，家事一般を受け持つ下女中がそれぞれ一人ずつで，丁稚さんは一人ずつ一年交代で店からの本宅づとめで，奉公にきていました。

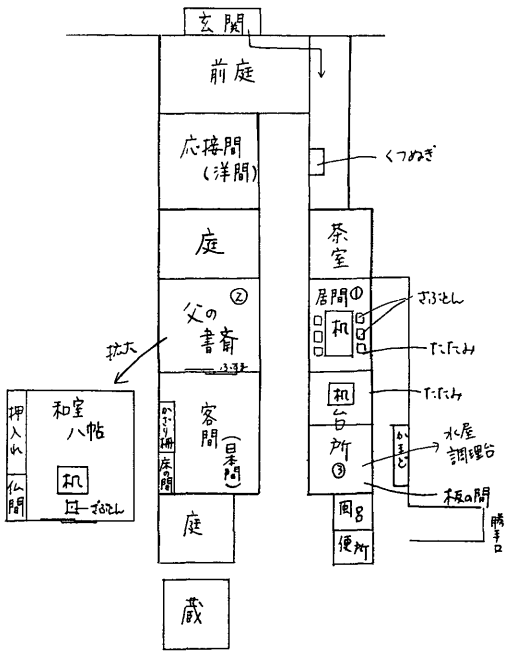


図143

食事の形式としては，父親と家族は別々の部屋で食事をとり，父親はひとり父親の専用室（図の②），家族は台所の横の居間（図の①）で食事をしていました。また女中さんや丁稚さんは台所（図の③）で食事をしていました。図のように父親は専用室で，専用の机で食事をし，家族は一つのちゃぶ台（ちゃぶ台と呼ば

れていない。名称は不明。）で，女中さんや丁稚さんも一つのちゃぶ台を使っていました。この形式は戦争前までは続いていただろう，ということです。

B．C．について

A．でも述べましたように，父親と家族は別々に食事をとっていたわけですが，父親の専用室は書斎も兼ねており，ここで仕事もしていたようです。広さは八帖の和室で，仏間があり，机の前に座ぶとんはいつも置いてありました。家族が食事をする居間は，六帖の和室で，大きなテーブルが一つあり，座ぶとんは置きっぱなしでした。ここは食堂兼居間として家族のだんらんの場であったようです。台所は半分がたたみ，半分が板の間になっていて，板の間の方には，水屋，調理台などがありました。また祖母の兄たちも店に出たりしていたので，家族そろって食事をとることはあまりなく，すわる順番も決っていなかったようです。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝はご飯，みそ汁，つけ物と決っていましたが，昼，夜は特に決っていませんでした。ほとんど和食で，祖母のコメントとして，「当時の洋食といえば，コロッケにビフテキ」ということです。また父親の権威は絶対であり，父親は家族とは別に自分の好きなものばかりを食べていたそうです。

E．食事の時の給仕について

父親が食事をする時は，上女中が運んできたものを母親と娘（祖母）が給仕をしました。父親は毎晩晩しゃくを楽しんでいたそうで，おしゃくも母親がしました。家族が食事をするときは，女中さんが給仕をし，よそう順序はやはり年上の人から，ということです。神仏へのお供えは，仏壇と商売の神様である今宮戒，大黒様，台所の神様である清荒神に，仏壇にはお花，水，お仏飯，神様にはお花，水，塩，あらい米をそれぞれ母親がお供えしました。また神様には新しいお酒をおみきとしてお供えすることもありました。

F．食事のあとのかたづけについて

食べ終ったあとは，箸だけはお茶でゆすぎ，めいめいの箸箱に納めましたが，その他の食器類は，女中さんが食べ終るとすぐにさげ，洗ってふき，水屋に片付けました。

G．食器の共用について

食器の共用はつけもの鉢程度で，他はほとんどがめいめいの食器を使っていました。F．でも述べたように，箸箱は使っており，戦争の前あたり（昭和20年ごろ）までは使っていた，ということです。

H．食事中にしてはならないことについて

特に厳しいしきたりやきまりはなかったそうで，“お箸を食卓にじかに置いてはいけない”ということぐらいだそうです。食べる順序なども特にきまりはなかったようです。ただ姿勢だけは厳しく，“背筋をまっすぐのばして，あぐらは絶対にかいてはいけない”といわれたそうです。

I．食事中のあいさつについて

あいさつについては今と同じように，食べ始めは「いただきます。」，食べ終りは「ごちそうさま。」「よろしゅうおあがり。」です。

J．食事中の話題について

家族の食事がいつもバラバラで，祖母は母親と二人で食事をすることが多かったので，話題といっても，一日のできごとなどが，話題の中心だったようです。また父親は祖母にとっては“一目おく”“けむたい”存在だったそうで，あまり話すこともなかったみたいです。

K．その他

毎日の食事は一つの大きなちゃぶ台でしたが，お正月だけはお膳を使っていました。これは男は背の低いもので外側も内側も赤い塗りのもの，女は背の高いもので外側が黒，内側が赤い塗りで，どちらにも定紋が入っていたそうです。

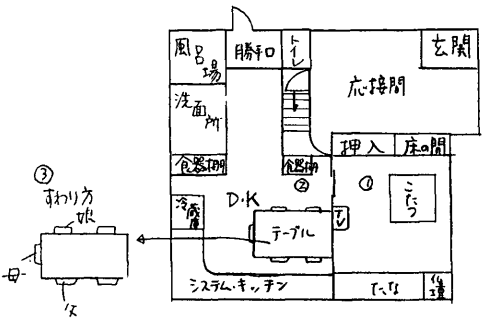


図144

2．現在の時期

A．食事の形式と家庭環境について

現在，祖父母は兵庫県西宮市Y町というところで，長男夫婦と孫一人にかこまれて暮らしています。ここは静かな住宅街です。長男の職業はサラリーマンです。現在の食事の形式は，祖父母と長男一家とは別々の部屋で食事をとることになっています。図144に一階の見取図を示します。

祖父母は①の部屋で，長男夫婦は②のダイニングキッチンで食事をとります。この家が建つまでは，椅子式テーブルではなく，ちゃぶ台を使っていましたが，この家を建てるときに洋風にし，椅子式テーブルを使うようになりました。

B．食事をする部屋について

A．で述べたように，祖父母は①の部屋で食事をしますが，この部屋は八帖の和室で祖父母の居間となっています。調度としては床の間と仏壇があり，床の間には掛け軸と生け花が飾ってあります。長男の家族が食事をする②の部屋はダイニング・キッチンで，もちろんここで調理もします。広さは10帖ぐらいの洋間です。

C．どのようなすわり方で食べたか

祖父母はこたつで向かいあって，家族の座席の順番は図の③に示します。長男の帰りがおそく，家族そろって食べることはあまりありません。座ぶとんはもちろん使っています。

D．ご飯のほかには何を食べ，何を飲んでいたか

朝はパン，紅茶，卵，野菜など，昼，晩は特に決っていません。

E．食事のときのご飯の給仕について

祖母や嫁が給仕をし，よそう順序は特別には決っていません。神仏へのお供えは，仏様にお花，水，お仏飯を，神様へは水，あらい米，塩をそれぞれ祖母がお供えします。晩しゃくは，祖父は健康のためにあまりやりません。

F．食事のあとかたづけについて

食べ終わると祖母や嫁が食器をさげ，すぐに洗って，食器棚にしまいます。

G．食器の共用について

つけもの鉢程度で，その他はめいめいのお皿を使っています。箸箱は今は使っていません。

H．食事中にしてはならないことについて

私にとってはいとこにあたる中一の女の子がいますが，彼女はお箸の持ち方や，姿勢などについて，やかましくいわれているようです。食べる順序などは特に決まりはありません。一家のだんらんの場として，おしゃべりもします。

I．食事中のあいさつについて

昔と同じように，食べ始めは「いただきます。」，食べ終りは「ごちそうさま」「よろしゅうおあがり」です。

J．食事中の話題について

祖父母の方は，特別な話題が食卓にのぼることはあまりなく，その日のお天気のことやおかずのことなどを，話すそうです。長男一家の方では，やはり話題の中心は子供で，学校であったことなどが話題にのぼるようです。

調査者　No. 182(ｆ)	調査日　昭和59年1月16日(月曜日)
被調査者　M.T.　性別　f	出生年　明治44年(72歳)(第4子)
出生地　愛知県海部郡S村	
生家の職業　教員	
現住所　愛知県海部郡S村	
住所の変更とその年度　昭和6年	
最終学歴　A女子師範学校	結婚　昭和6年(20歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

a．父母（被調査者からみて）は，紋入りの丸いお膳を使用しており，それは母が嫁入りしてきた時に持ってきたものである。他の者，つまり被調査者の兄たちは箱膳を使用し，被調査者を含む姉妹は，ふたのないお膳を使っていた。それは箱膳が家族人数分なかったためらしい。各自ひとつずつそのようなお膳があり，お膳の中には茶碗・汁物を入れるお碗・小皿1枚と箸がはいっていた。食事時になると各自（父親は除く）それを戸棚から持ってきて，箱膳の場合はふたをあけ，そのふたの上に茶碗などをのせた（図145)。ふたなしのお膳はそのままお膳の中に茶碗などをおいて食べていた。

b．実際には，「箱膳」または単に「お膳」と呼んでいた。

c．被調査者の記憶に残っている限りでは，物心ついた頃からお膳を使用しており，それは昭和5年頃まで続いた。

d．両親と兄3人，弟ひとり，本人，妹ふたりという家族構成であった。

e．f．愛知県海部郡(アマグン)S村。住環境はほとんど農家ばかりで70戸～80戸程家があり，当時はそれぞれ「番戸(バンコ)」で呼び合っていた。

g．戸主の職業は教員（小学校校長）であり，本人は父親のことを時々「家長」とも呼んだ。

h．世間一般に飯台が普及し始めたため。

B．食事をする部屋について

a．「お勝手」または「お勝手場」と呼んだ。

b．食事の仕度は同じ所でやっていたが，その他にはほとんど利用しなかった。

c．6帖程度の大きさで，引き戸の戸棚（横1間×奥行2尺×高さ3尺くらい）と，蝿がせせらないように食べ物をしまっておく「蝿帳」と呼ばれる物が置いてあった。

C．どのようなすわり方で食べたか

a．父を中心に半円を描いて座った。母の側に「おはち」あり（図146)。

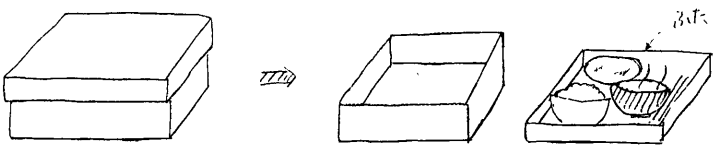


図145

b．朝ご飯は，各自出かける時間が違うため，各々時間が異なることが多かったが，夜はほとんど全員そろって食べていた。

c．縁張（板張）のお勝手場で食べていた。

d．寒い時，冬には全員がお勝手用の古い座ぶとんを使用。夏は誰も使わなかった。

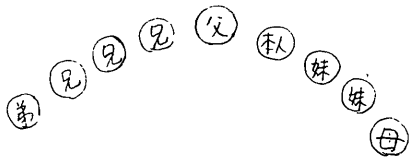


図146

D．ご飯の他には何を食べ，何を飲んだか

a．朝は，みそ汁・漬物等。正月の朝はほとんど雑煮ばかりで，正月の7日には，「七日がゆ」（「なずながゆ」）という菜っ葉と餅を入れたおかゆを食べた。雑煮に黒砂糖をつけて食べることもしばしばあった。

b．昼は，朝の残り物や野菜を炊いたもの（煮たもの）を食べ，特別何かを作るということはほとんどなかった。

c．晩は，おじや・みそ雑炊などをよく食べていた。その他には野菜の煮物が多かった。肉・魚料理はあまり食べず，いわし・さんま・さば，馬肉を時々食べる程度で，鶏肉や牛肉はほとんど食べていない。

d．これといって特別違ったものを食べる人はいなかったが，珍しいおかずは父から箸をつけ，魚でも何でも一番いいものを父親の膳に並べていた。

E．食事のときのご飯の給仕について

a．本人の言葉より「それはもうおっ母様（かさま）に決まっとるわ」

b．上記と同じく「もちろん，父・兄・弟・本人・妹・母の順，男が先で女はあとだった。」

c．朝のみ。しかし，珍しいものを作った時などは夜でもお供えした。神仏へのお供えはまだ誰も手をつけていない炊きたてのご飯を一番初めによそった（父よりも先である）。

d．酒の肴がある時だけ晩しゃくはあった。魚など普段よりご馳走のあった時のみ。

F．食事のあとかたづけについて

a．最後にお茶を飲んで，そのままふせてお膳の中にしまった。みそ汁のお椀にもお茶を入れてゆすぎ，そのお茶は捨てずに飲んだ。

b．食事の前には，戸棚から各々自分の箱膳をはこび，食べ終わると箱膳の中に茶碗等をしまって，それぞれ各自で戸棚の中にしまっておいた。父のお膳の出入は母がやっていた。

c．食器を洗うのは2～3日おき。洗ったのは「おっ母様にきまっている。」

d．洗った食器は，ざるの中にしばらくふせて水を切り，その後，箱膳の中に入れて戸棚の中へしまっておいた。

G．食器の共同について

a．b．どんぶり・鉢・小物鉢などに，漬物や野菜の煮物・芋の煮っころがしなどを盛った。

c．箸箱は，この時期はずっと使っており，茶碗と同じく箸も2～3日おきにしか洗わなかったので，普段は食べたらそのまま箸を箸箱へ入れ，お膳の中にしまっておいた。箱膳が飯台に変わると同時に箸箱は使わなくなる。

H．食事中にしてはならないことについて

a．お箸を持ったまま両手に茶碗とお椀を持って食べたり，箸で茶碗等をたたいたりしてはいけない。

b．被調査者が女学校で習った作法によれば，渡り箸（おかず→汁物→おかず，おかず→おかず）をやってはいけないのだが，被調査者の家では食べる順序に関しては，それほどやかましくいわれなかった。

c．口の中に食べ物を含みながらおしゃべりしてはいけない。

d．足を投げ出してはいけない。きちんと正座をして食べた。父はあぐらをかいていた。

I．食事中のあいさつについて

a．全員のご飯をつけ終わるのを待っていたわけではなく，よそってもらった人から順に「いただきます。」と言って食べ始めた。

b．食べ始めと同じく，各々食べ終わったら「ごちそうさまでした。」とあいさつをして，それぞれのお膳を戸棚の中にしまった。

J．食事中の話題について

a．特に誰がということはなく，みんなが話したい時に，好きなように話した。

b．学校のことや世間一般のことなどその日一日の出来事についての話題が多かった。

その他，この箱膳の時期のことについて聞いたことだが，冬にはご飯が冷めないように，わらで作った「いずみ」と呼ばれる保温器のような物の中にご飯を入れておいたという。

2．ちゃぶ台の時期

A．a．飯台の上に茶碗・汁物・おかずなどを置き，その飯台を囲んで座って食べていた。すき焼きなどをする時は，中央に穴のあいているしっぽく台を使った（図147）。

b．aで記したように，「飯台」と呼んでいた。

c．昭和5～6年頃に始まり，昭和37年頃まで飯台を用いていた。

d．この時期は被調査者が結婚した頃をはじめとしている故，家族構成はしばしば変化している。最初は義父母・被調査者の夫（主人）そして本人，次は義父母・主人・本人・娘ひとり・使用人（子守），そして義母・主人・本人・娘・息子・使用人（子守）である。姪2人を預かっていた時期も2年程ある。上の場合の使用人（子守）は，被調査者が職業をもっており，昼間は勤めに出ていて家に不在であったため，小さな子供の世話をしてもらっていた人である。

e．愛知県海部郡S村。

f．周囲は田畑が多く，農家が多かった。

g．義父は農業（自作農），主人は教員。

h．昭和37年に家を改造したため。

B．a．「お勝手」または「お勝手場」と呼んだ。

b．特に利用していない。食事を作っていた。

c．約6帖の板張と12帖の土間。ご飯を炊くくどやかまど，流しなどはすべて土間にあった。板張と土間にはとうぜん段差があり，板張の所に切板（まな板）を置いて包丁を使った。板張の部屋には戸棚が置いてあった。

C．a．図148

b．朝夕ともほとんど，全員そろって一緒に食べていた。

c．最初の頃は上記の板張の部屋で食べていたが，暗いため隣の畳の部屋に飯台を持ち出してきて，そこで食べるようになった。

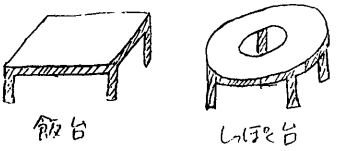


図147

d．冬には全員が座ぶとんを使用した。やはり，お勝手用の古い座ぶとんである。

D．a．朝は，みそ汁・漬物・前日の残り物。

b．昼は，朝の残り物。本人は勤めていたのでお弁当。弁当のおかずは野菜の煮物・梅干しが常で，たまに卵焼きなどを入れた。

c．野菜の煮物・芋の煮っころがし，時々，卵料理，魚

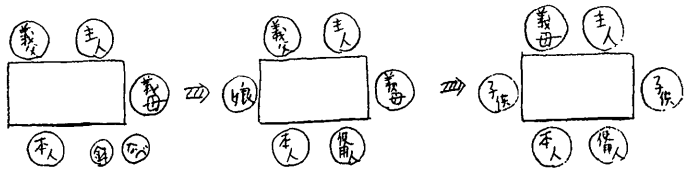


図148

料理（いわし・さんま等），1ヶ月に1～2度肉料理を食べていた。野菜や芋類は自給自足で，店で買うことはほとんどなかった。

d．みんな同じものを同じように食べていた。

E．a．被調査者自身がよそった。

b．（義父）・主人・義母・子供・（使用人）・本人。

c．神仏へのお供えは朝のみ。箱膳期と同様，誰も手をつけていないご飯をまっ先によそってお供えした。被調査者は，それのことをおぼくさまと呼んでいる。

d．誰も飲まないので晩しゃくはなかった。

F．a．この時期になると，3度が3度食べる毎に茶わんもおわんも箸等も洗うようになった。

b．全員が食べ終えた後，被調査者がさげた。

c．食器をさげた後，被調査者が洗った。

d．洗った食器は，ざるまたはかご（水切り台）の中に置き，その後，皿や小鉢などは戸棚へしまうが，平生使う茶碗や箸などはそのままざるの中へ入れておく。食事の時はざるを飯台まで持ってきて，そこから茶わん等を並べた。

G．a．b．どんぶりや小鉢に，煮物や漬物を盛る。

c．飯台に変えた時から箸箱は使っていない。

H．a．両手に茶わんとおわんを持ってはいけない。

b．食べる順序に関してはあまり厳しくない。

c．口の中に食べ物を含みながらおしゃべりしては絶対にいけない。

d．みんな正座をして食べていた。

e．食事中に席を立ってはいけなかった。

I．a．箱膳期と同様，ご飯をよそってもらった者から「いただきます」とあいさつし，各々食べ始めていた。

b．食べ終わった者から順に「ごちそうさま」と言って席を立った。

J．a．みんなが話したい時に話していた。

b．1日の出来事，学校での出来事（子供），世間一般の話題が多かった。

3．現在の時期

A．a．ひとつの大きなテーブルを囲んで，家族全員椅子に座って食べている。

b．実際には，「テーブル」と呼んでいる。また「飯台」と呼ぶこともある（図149）。

c．昭和37年頃から始まり，現在に至る。

d．最初は，主人・本人・息子・嫁で，その後，孫が加わり，現在は孫3人を含む7人。

e．愛知県海部郡S村→S町（昭和42年）。

f．昭和37年当時はまだ農家がほとんどで，どちらかといえば農村であった。字（アザ）の全世帯数75戸であったのが，昭和43年には300戸となり，現在も増加の傾向にある。現在では団地が増えてきており，農家はほとんどない。

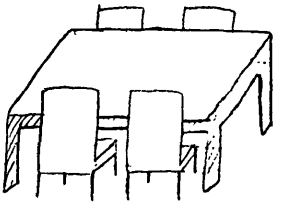


図149

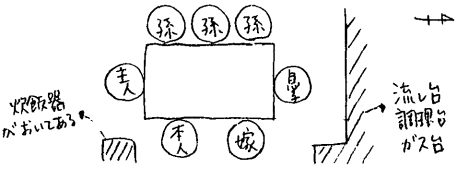


図150

g．戸主の職業は教員である。

B．a．「お勝手」または「お勝手場」，「台所」などと呼んでいる。

b．調理はするが，特別他には利用しない。

c．11帖程の広さに，流し台・調理台・ガス台が据えてあり，更に冷蔵庫，食器棚などが置かれている。

C．a．嫁や被調査者は炊飯器やおかずの鍋が置かれている近くに座っている（図150）。

b．朝は，皆の起床時刻・出かける時刻がまちまち故，そろって食べることはあまりない。昼は，本人と嫁の2人のみで他の者は不在。夜は，全員そろって食事することが多い。

c．昭和53年に多少改造した。改造前は板張であったが，改造後はフロアークッション。

d．全員椅子を使用のため，座ぶとんは使っていない。

D．a．みそ汁・漬物。昭和40年頃から目玉焼き・海苔・つくだ煮などが並ぶようになった。現在は，ご飯の代わりにパンにバターやジャムをつけて食べることもある。

b．朝の残り物。干物。焼飯・ラーメン・焼そば等，簡単に料理できる物。作りおきして冷蔵庫などに入れてある物。

c．それまで野菜が主であったのが，昭和43年頃から魚・肉類が主になった。卵を頻繁に使うようになった。ハム・ソーセージ・缶詰め等，加工食品を使用した料理もしばしば食卓に並ぶようになった。

d．全員同じものを食べていた。

E．a．嫁，または被調査者が，ご飯をよそう。

b．いちおう主人・息子・孫・本人（嫁）・嫁（本人）の順であるが，一様ではない。現在では，席についた順によそうことが多い（冷めるため）。

c．炊きたてのご飯を朝のみお供えする。やはり，おぼくさまと呼んでいる。

d．誰も飲まないため，晩しゃくはなし。

F．a．3度とも，きちんと流しで洗っている。

b．全員が食べ終えた後，嫁・本人がさげる。

c．食器をさげた後，嫁または本人が洗う。

d．洗った直後は水切り台にふせておき，しばらくしてから皿や鉢などは拭いて戸棚へしまう。茶碗や箸は水切台の中にそのまま置いておく。

G．a．b．c．小鉢・お鉢・大皿などに，つけ物・煮物・つくだ煮，フライ・天ぷら・サラダなどを盛っている。箸箱は最初から使っていない。

H．a．b．c．昔からほとんど変わっていない。

d．e．食事中に席を立ったり座ったりしてはいけない。

I．a．ご飯をよそってもらったら，各々適当に「いただきます」とあいさつして食べ始める。

b．各々食べ終えると「ごちそうさま」と言って席を立つ。

J．a．b．皆，銘々話しているが，現在は小学生の孫が学校での出来事・友達のこと等を話題にして主に話している。他は，一日の出来事，世間一般のことなどの話題が多く，この件に関しては昔からほとんど変わっていない。

調査者　No. 185(f)	調査日　昭和59年1月9日(月曜日)
被調査者　N.H.　　性別　f	出生年　大正2年(70歳)
出生地　三重県阿山郡N村	
生家の職業　農業	
現住所　三重県上野市N町	
住所の変更とその年度	
最終学歴　A実科女学校	結婚　昭和7年
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時代について

A．食事の形式と家庭環境について

「箱膳」と呼ばれるお膳を使用していた（図151）。

箱膳は，生まれた時から使っていて，戦争（第2次世界大戦）が終わるぐらいの頃まで続いていたそうです。家族構成は，父・母・祖母・姉・自分・弟の6人家族でした。

その時の住所は，三重県阿山郡N村で，そこは農村地でした。

戸主（父）の職業は農業兼雇われ国鉄道夫で，「食事形式が，変わった理由は…。」とたずねると「さあー。回りが変わっていったからやろなー。」と言ってて，特にこれといってないようでした。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は，「台所」と呼んでいたそうです。（「料理する部屋は…。」とたずねると，「炊事場。」と教えてくれました。）その部屋は主に3度の食事のための部屋で，他人は家族それぞれが休けいするための部屋だったそうです。大きさはいせ間の6畳で，作り付けの大きい水屋があり，食事以外の時は箱膳もその中に重ねてしまってありました。

C．どのようなすわり方で食べたか

図152のようにすわっていて（子供の座席の細かいことは忘れてしまったそうです。）全員そろって食べました。

台所自体は畳でしたが，『ひろしき』と呼ばれる板の間の部分があり，そこに座って食べなくてはいけない人もいたとか…。座布団はみんなひいていました。

D．ご飯の他には，何を食べ，何を飲んでいたか

家が農家だったこともあり，白いご飯を食べてました。

朝：ご飯・おつゆ・おつけもの・夕べの残り，食後にお茶。そして，父にはお弁当を…。たいてい朝にご飯を炊いたそうです。

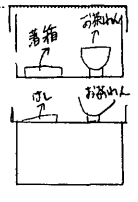


図151

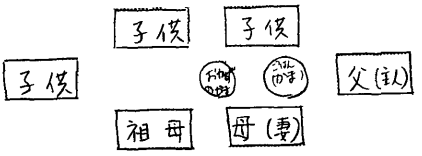


図152

昼：ご飯・おつゆ・おつけもの・おかず（野菜などを炊いたもの。）・干物，食後にお茶。

晩：ご飯・おつゆ（吸い物）・おつけもの・おかず（野菜などを炊く）・魚，食後にお茶。

全員が公平に同じものを食べたそうです。

E．食事の時のご飯の給仕について

母がよそい，順番は，父・祖母・子供・自分（母）。

ご飯を炊いた時，家族で食べるよりも先に，仏さんにお供えをしていた。たいてい朝。晩しゃくは父がしていた。

F．食事の後のかたずけについて

食べおわるといつも茶わんにお茶を入れて箸をゆすぎ，あと口にそのお茶を飲んでいた。だから，湯のみ茶わんはなかった。さげるのは1日1回で，母が下げていたか，自分たちで下げていたかは忘れてしまったそうです。夜に食器を井戸で洗い，かわかして，次の朝に配ったそうです。洗うのは母だった。それ以外の時は，箱膳の中に入れ，箱膳ごと水屋の中に重ねてしまう。

G．食器の共用について

共用の食器などは使わなかった。2枚目の図に書いたように，お鍋ごと持ってきて，まん中に置いていた。

箸箱も箱まくらもあったが，特に箸箱は，必ずあったそうです。「箱膳がなくなると同時に，箸箱も使わなくなったように思う。」といってました。現在も銘々の箸箱はあるにはあるが，まったく使ってないそうです。

H．食事中にしてはならないことについて

わりあい自由に食事をしていたようです。

箸の上げ下ろしについては，言われたかどうかは覚えてないようです。食べる順序も，自分の好きなように，食べてよかったし，他人のおかずでも「やろー。」って言われたら，別にもらってもよかったそうです。そして，おかずがある限り，自分の好きなだけ，おかわりができました。

みんなが好きなように，しゃべってたそうです。

姿勢は正座か，しびれた人は足をくずしたりしていたが，あぐらなどは父でもかいたりはしなかったようです。

他に食事中にしてはならなかったことは，食事中にお手洗に立つこと，そして，口いっぱいにものをいれてしゃべることなどだそうです。

I．食事中のあいさつについて

食べ始めは，手を合わせて「いただきます。」，食べ終わったものから，立つときに「ごちそうさま」といって，席を立っていった。

J．食事中の話題について

みんなでしゃべっていました。身近な話題ばっかりでした。

2．ちゃぶ台の時期について

A．食事の形式と家庭環境について

『折足のちゃぶ台』と呼ばれる，図153のような食卓で食事してました。そのちゃぶ台で食べたのは，戦後から昭和50年ぐらいまでだそうです。

その時期の家族は，義理（夫）の母父，夫，長男，次男，三男，四男，長女，次女（子供は合計6人），自分の10人家族でした。その後の新しい家族である，夫，自分，三男，三男の嫁，孫2人のときも，しばらくはちゃぶ台で食べていました。

その時の住所は，三重県上野市N町。住環境は，農村地です。

戸主の職業は，O定信局員（近畿郵政局）で，国鉄で通ってました。

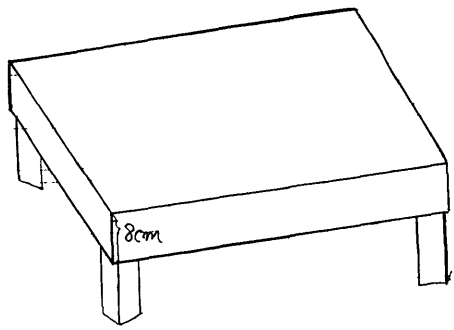


図153

B．食事をする部屋について

食事をする部屋を「台所」，食事を作る部屋のことを「炊事場」と呼んでました。後の方の家族構成の時代は，台所と炊事場はいっしょになっていて，「台所」と呼んでました。台所は，食事と休けいのために使ってました。部屋の大きさはいせ間の四畳半で，「膳戸棚」と呼ばれるガッチリした造りの水屋が置いてありました。

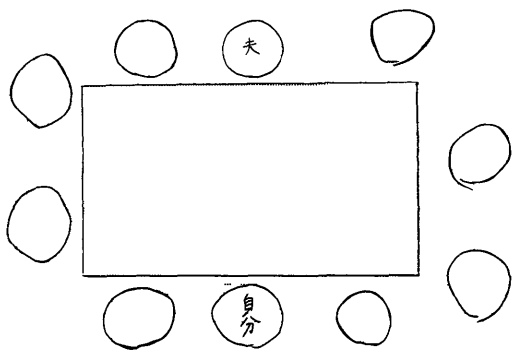


図154

C．どのようなすわり方で食べたか

座席の順は，大家族でごちゃごちゃしていたせいもあり，はっきりとは決まっておらず，夫と自分の席だけははっきりと決まっていたが，あとの8人は食べるごとに順番が違っていたそうです（図154）。

朝は，夫が大阪に勤めていたので，1人だけ早く食べてました。その次は，たいてい自分が畑に出かけるので食べて，そのあとは，子供や義父，義母が食べていたとのことです。昼は，みなそれぞれお弁当を持っていってました。夜は，夫の帰りが遅かったので，残りの9人が先に食べてました。

その部屋自体は畳でしたが，板の間にはみ出てしまう人もいました。座ぶとんは，みなが敷いてました。

D．ご飯の他には，何を食べ，何を飲んでいたか

朝：白いご飯，おつゆ，おつけもの，夕べの残り，お茶。

昼：白いご飯，おつゆ，おつけもの，魚。

お弁当…ご飯，つけもの，塩じゃけ，けずり粉など…。

夜：ご飯，魚（干物，かど（さんま），さば，なまぶし，にしんなど），とうふ，おつゆ，おつけもの，お茶。

おやつに，はったいこという名の，麦をひいたものを砂糖を入れ，甘くたいたようなのを食べたそうです。

別に病気する人もいなかったし，みんな同じ物を食べてました。

E．食事の時のご飯のお給仕について

自分がよそい，順番は，夫がおればまず夫，養父，義母，子供，最後に自分でした。お供えはご飯を炊いた時で，たいてい朝と晩。とくに朝は毎日だったそうです。晩しゃくは義父と夫がしていました。

F．食事のあとかたずけについて

義父・義母は，習慣で，茶わん・はしを湯茶ですすいでいたが，その他のものはしなかった。

食べてみんなが席を立つと，すぐ自分か義母が食器を下げ，すぐに洗っていたそうです。洗った食器は，ふいて戸棚にしまったそうです。

G．食器の共用について

あまり食べる物がなかったので，みんな公平にいきとどくように10に分け，銘々の器にいれていたそうで，共用の食器はありませんでした。箸箱はもうなくなってました。

H．食事中にしてはならないことについて

あんまり忙しくって，言ってられなかったようです。言ったかもしれないが，覚えていないとのことです。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは，みんな手を合わせて「いただきます」といって食べ，食べ終わったら手を合わせて，「ごちそうさま」といってました。

J．食事中の話題について

みんなが自由に学校のこと，畑のことなど，身近なことをしゃべってました。

3．ちゃぶ台の後の時代について

A．食事の形式と家庭環境について

形式は，さきの「折足のちゃぶ台」と同じです。その形式は20年ぐらい前からで，今現在も続いています。家族構成は，夫，三男，三男の嫁，孫2人，義母，自分の7人家族です。

住所は，三重県上野市N，農村地です。戸主の職業は，郵便局員です。

B．食事する部屋について

食事する部屋は，台所。食事の他，ちょっと休けいするのにも，使ったそうです。

その部屋は，いせ間の6畳です。図155には書いてありませんが，電話，テレビ，なども置いてあります。

C．どのようなすわり方で，食べたか

嫁のすわる場所だけ，だいたい決まっているが，他の者は別に決まっていないそうです（図156）。板の間に敷物をひいてあります。みんな座布団をひいてました。

D．ご飯の他には，何を食べ，何を飲んでいたか

朝：おつゆ，お弁当のおかずの残り，茶など。

昼：朝の残りなど，適当。

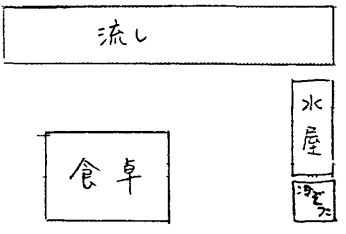


図155

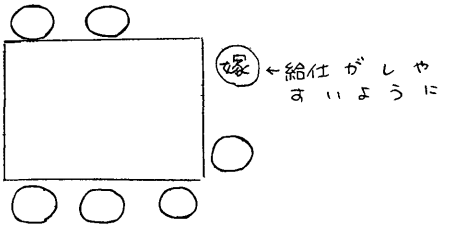


図156

夜：いろいろと自由。

もう，本当に自由で，別に決まったものを書き出せません。みんな，公平に，同じものを食べてます。

E．食事の時のご飯のお給仕について

嫁がよそい，順番は三男（主人），夫，自分，義母，孫2人，嫁です。

神仏へのお供えは，ご飯を炊いたときで，たいてい朝と晩です。晩しゃくは三男と夫がします。

F．食事のあとかたずけについて

食べ終って，みんなが席をたつと，すぐに嫁が流しにもっていって洗います。洗ったお茶わんは水切りカゴに入れておき，しばらくしたら水屋にしまいます。

G．食器の共用について

共用の食器も時々使い，大皿が多い。天ぷらなどもいちおう銘々に入れるが，お代わりが欲しい人のために大皿にもり，まん中に置いたりする。箸箱は，もう使いません。

H．食事中にしてはならないことについて

わりと自由に食事をしていますが，行儀の悪いこと……たとえば，ひじをついて食べる，食事中にお手洗に立つ，口にほおばってしゃべるなど，をすると注意しています。すわり方も，正座したり足くずしたりあぐらをかいたり，いろいろのようです。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめに「いただきます」，食べおわりに「ごちそうさま」を言います。

J．食事中の話題について

みんなが自由にしゃべるか，若い者が中心の話題（学校のこと）や最近テレビをよく見るので，テレビの話題，仕事の話題などがほとんどだそうです。

調査者　No. 192(f)	調査日　昭和59年1月8日(日曜日)
被調査者　Y.M.　性別　f	出生年　明治41年(75歳)(第2子)
出生地　和歌山県西牟婁郡K町	
生家の職業　教師	
現住所　大阪府和泉市A町	
住所の変更とその年度　西牟婁郡K町—東牟婁郡N町(大11)—兵庫県神戸市(昭10)—大阪府和泉市(昭49)	
最終学歴　高等小学校	結婚　昭和10年(27歳)
被調査者との関係　知人	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

まず食事の形式についてであるが，家長だけが「高膳」と呼ばれる脚付のお膳を，他の者は「箱膳」と呼ばれるお膳を使用していたということだ（図157）。この「箱膳」には浅いフタがついていて，食事のときにそのフタをひっくり返した上に食器をのせ，使わないときはフタをしていたそうだ。しかし，当時でもまだお膳を使用していた家庭は，近所にそう多くはなかったという話だ。

この形式は大正11年に転居するまで続き，この転居の際に荷物を少しでも減らすという意味で次のちゃぶ台へと変わる。

その時期の家族構成は両親と本人の他に兄弟5人で，使用人などはいなかった。またその時期の住所は現在の和歌山県西牟婁郡K町だが，当時の呼び方は忘れており，漁業地で，その時

期に戸主は高等小学校の校長をしていたということで，先に述べた転居も戸主の転勤によるものである。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋を「勝手」と呼んでおり，食事のみに使用し，大きさは普通の高さの2畳の部屋と1段高くなった1畳がくっついた形で，その部屋には常にお膳が（高膳はそのまま，箱膳はフタをして）並べられており，備え付けの戸棚が1つあるだけで，天井からはランプがつり下げられていて，その光で食事をしたそうだ。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席の順番は家長だけが一段高くなった1畳の上座で，母親は給仕のしやすさなどからまん中と決まっており，子供の座席もいちおうは決まっていたが，長男なのでここ，というような決まり方ではなかったということだ。食事は全員そろってとり，家長の座る1畳だけがタタミで他の2畳はぶ厚めのゴザのようなものが敷いてあり，座ぶとんは誰も使用しなかったそうである（図158）。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝はみそ汁とつけ物ぐらいで，昼は魚の煮つけが多く，晩はたいてい魚と野菜，そしてそれぞれにお茶がついていたということだが，さすがに漁業地だけあって魚料理が多かったようだ。また，家長だけ特別余分におつくりなども食べていた。

E．食事のときのご飯の給仕について

よそったのは母親で，その順番も家長が一番だが，あとの順番はこれといって決まっていなかった。神仏へのお供えはお茶とご飯ということで，晩しゃく（家長のみ）はあった。

F．食事のあとかたずけについて

食べ終わったあと，すぐに茶わんや箸を湯茶でゆすぐということはなく，もうすぐに食器をさげてすぐに洗ったそうだ。食器をさげたり洗ったりするのは，初めは母親であったが長女（被調査者）が9才ぐらいになると，すべて長女がやっていた。（これは長女にとってかなり嫌な仕事であったらしく，それまでと違ってこの質問で急につっけんどんな返事の仕方になった。）洗った食器は備え付けの戸棚にしまったそうだ。

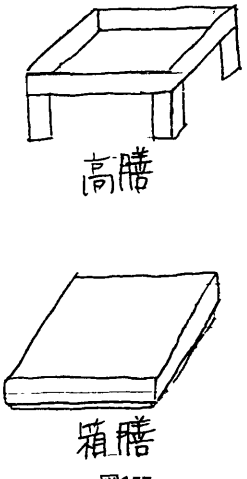


図157

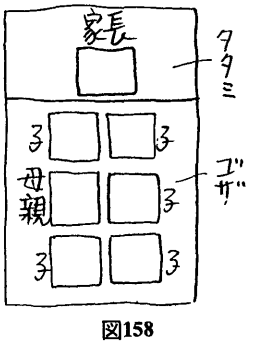


図158

G．食器の共用について

1人ひとりそれぞれ自分のお膳で食べていたので共用の食器はなく，箸箱も使用しなかったそうだ。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の正しい持ち方を食事中にかなり厳しくしつけられたそうで，何度も強調してそのことを話していた。食べる順序などは特に決まっておらず，食事中のおしゃべりは禁止されていたが，それでもいくらかはしゃべっていたようで，しゃべらないように注意されたことを楽しげに話していた。

I．食事中のあいさつについて

これといった特別なあいさつはなく，母親に「ごはんよー」と呼ばれて自分の膳に着き，それぞれ勝手に食べていたそうだ。食べおわりも各自が「ごちそうさん」と言うだけだった。

J．食事中の話題について

いちおう食事中のおしゃべりは禁止されていたが，子供達がこらえきれなくてその日のでき事をしゃべることもあったようだ。

2．ちゃぶ台の時期（その1）

A．食事の形式と家庭環境について

まず食事の形式については，長方形のちゃぶ台を使用していたが，呼び方は以前と変わらず「お膳」と呼んでいたそうだ（図159）。それは大正11年に和歌山県東牟婁郡N町に転居したときから，昭和10年に結婚して兵庫県の神戸市へ転居するまで続き，N町へ転居してしばらくの間の家族構成は，以前と変わらず両親と本人の他に兄弟5人で使用人はなかった。その時期の住所は和歌山県のN町ということしか覚えていないそうで，やはり漁業地であり，戸主は高等小学校の校長だった。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋のことも以前と変わらず「勝手」と呼んでおり，食事以外には利用しなかった。その部屋の大きさは約3畳で，やはり備えつけの戸棚があったということである。また，N町はO町より開けていたので，ここではランプではなく電球を使っていたそうだ。

C．どのようなすわり方で食べたか

家長だけ高膳ということはなくなったが，それでもやはり家長がいちばん上座で，他の者はこれといって決まっていなかった（図160）。食事はみんなそろってとり，食べる場所には全面タタミが敷いてあったが，あいかわらず座ぶとんは誰も使用していなかったということである。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝食はやはりみそ汁とつけ物程度で，昼も晩も，全体的に言えば魚料理が多いが，特に決ま

図159

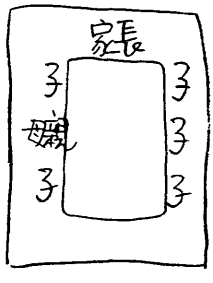


図160

ってはいなかった。また，以前と同様に家長だけ特別余分におつくりを食べることもあったそうだ。

E．食事のときのご飯の給仕について

よそったのはあいかわらず母親であり，よそう順番も以前と同じように家長が一番ということだけが決まっていて，他の者は特に決まっていなかったということだ。神仏へのお供えも以前と同じでお茶とご飯であり，晩しゃくも家長のみあった。

F．食事のあとかたずけについて

食べ終わったあと，すぐに茶わんや箸を湯茶でゆすぐということもなく，食器をさげたり洗ったりするのも，この頃にはすべて長女（被調査者）が食後すぐにやっていたということであり，洗った食器もやはり備え付けの戸棚へしまい，お膳を使用しない時には，壁にたてかけていたそうだ。

G．食器の共用について

全く食器を共用しなかった以前に比べると，多少食器を共用するようになったが，ほとんどつけ物を盛るどんぶりがそれであったということで，当時食べたつけ物の量は現在よりかなり多かったそうだ。また，箸箱はこの時期も使用しなかった。

H．食事中にしてはならないことについて

以前やかましく言われた箸の持ち方に関しては，この時期にはほぼ正しく身についていたのであまりとやかく言われず，食べる順序も特に決まってはいなかった。食事中のおしゃべりもいちおう禁じられてはいたが，少しはしゃべっていたそうで，食事中の姿勢については，普段から正しい姿勢が身につくようにしつけられていたので，特に食事中に注意されるようなことはなく，そのほか，食事中にしてはならなかったことは特になかったということである。

I．食事中のあいさつについて

これと言って特別なあいさつはなく，食べはじめる前に各自めいめいに「いただきます」ぐらいを言うだけで，食べおわったあともただ「ごちそうさん」と言うだけだったそうで，あいさつに関しては淡々としゃべっているだけだった。

J．食事中の話題について

これもいちおう食事中のおしゃべりが禁じられていたので，あまりしゃべることはなかったそうだが，以前と同じく子供がその日の出来事について話し，そのたびに注意されていたということだ。

2．ちゃぶ台の時期（その2）

A．食事の形式と家庭環境について

結婚前にひき続きちゃぶ台を使用しており，その呼び方も「お膳」であり，この形式は昭和49年に大阪府和泉市へ転居するまで続いた。その時期の家族構成は被調査者とその夫，そして娘1人であり，その時期の住所は兵庫県神戸市だった。その時期の住環境は住宅地で，その時期の戸主の職業は洋家具業であったが，結婚後すぐに亡くなったために被調査者が働いて生活していたそうであるが，職種についてはふれてほしくなさそうなのでふれなかった。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋の呼び方は特になく，その部屋居間も寝室も兼ねていたそうで，6畳の広さがあり，水屋とタンスが置かれていたということだ。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席の順番は家長が上座，妻（被調査者）がその向いで，子供が小さいうちは妻の横であったが，少し大きくなった頃には家長はいなかったので，そのあとに座ったということだ。食事

は全員そろってとり，食べる場所はタタミで，全員が座ぶとんを使用していた（図161）。

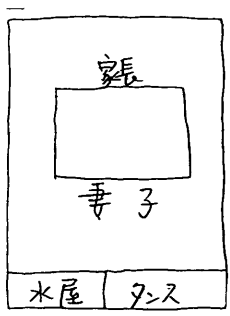


図161

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝はみそ汁とつけ物ぐらいで，昼も晩も特にこれと言って決まっておらず，誰かが特別なものを食べるということもなかった。

E．食事のときのご飯の給仕について

よそったのは妻（被調査者）であり，その順はまず夫，次に子供，最後に妻だったそうだ。神仏へのお供えはお茶とご飯で晩しゃくはなかったということである。

F．食事のあとかたずけについて

食べおわったあと，すぐに茶わんや箸を湯茶でゆすぐことはなく，食後すぐに妻（被調査者）が食器をさげてすぐ洗い，水屋へしまった。

G．食器の共用について

食器はいっさい共用しなかったそうで，箸箱も使用していないということだ。

H．食事中にしてはならないことについて

全般に特にしてはならないことはなかったが，ひじをつくなどのだらしない姿勢は当然しなかった。また，おしゃべりに関しては自由だったそうである。

I．食事中のあいさつについて

これといった特別なあいさつはなく，「いただきます」「ごちそうさま」もあまり言わなかったようだ，ということである。

J．食事中の話題について

おもに話していたのは妻（被調査者）で，内容は仕事のことが多かったそうだ。

3．現在の時期

A．食事の形式と家庭環境について

ごく普通の椅子式テーブルで普通に「テーブル」と呼んでおり，この形式は現在まで続いている（図162）。その時期の家族構成は被調査者とその娘，それにその夫と孫1人で住所は大阪府和泉市A町であり，住宅地で，戸主（被調査者の娘の夫）の職業は中学校の教師だそうだ。食事の形式が変化した原因は被調査者の娘の結婚による新築への転居である。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋を「炊事場」と呼び，その部屋には備え付けの流し台があってそこで調理した。大きさは6畳ほどで水屋を置いていたそうだ。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席の順番は戸主が上座で被調査者がその向い，そしてその両横に妻と孫が座った（図163）。食事はみんなそろってとり，床は板で，全員が椅子に座ぶとんをしいているそうだ。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝はご飯を食べずにパンと紅茶で，昼は夫婦共に勤めに出，孫も学校へ行って被調査者1人になるためにもっぱらありあわせですます，ということだ。晩は特に決まっておらず，だれかが特別にちがったものを食べていたということもない。

E．食事のときのご飯の給仕について

よそうのは妻で，その順序は家長，被調査者，孫，妻だそうだ。神仏はなく，晩しゃくもないということである。

F．食事のあとかたずけについて

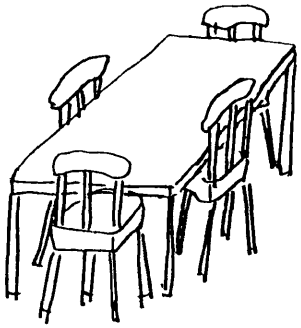


図162

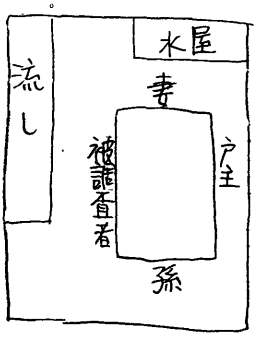


図163

食べおわったあと，すぐに茶わんや箸を湯茶でゆすぐということはなく，食後すぐに被調査者が食器をさげ，すぐに洗って，水屋にしまうそうである。

G．食器の共用について

主にサラダを盛る鉢や，おつくりなどを盛る平皿が，共用している食器であり，箸箱は使用していないそうだ。

H．食事中にしてはならないことについて

常識的にしてはいけないこと以外には特になく，おしゃべりも自由ということだ。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめに「いただきます」，食べ終わりは「ごちそうさま」と言うぐらいで，特にない。

J．食事中の話題について

孫はまだ小さいこともあってあまり話というほどの話はせず，もっぱら夫婦が2人共教師であるために学校の話題が多いそうだ。

調査者　No. 205(f)	調査日　昭和59年1月　日(日曜日)
被調査者　H.H.　　性別　f	出生年　明治42年(76歳)(第4子)
出生地　岡山県倉敷市S町	
生家の職業　開業医	
現住所　岡山県岡山市H町	
住所の変更とその年度　昭和26年12月	
最終学歴　女子専門学校	結婚　昭和4年(21歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期

A．①祖母の記憶の限り大正初期より飯台であったが，使用人は茶色塗の箱膳であった。祖母の家は開業医をしていたため，当時の近所の農家がすべて箱膳であったにもかかわらず，飯台であった（図164)。

②ごぜんをちょうだいす（よく意味がわからなかった)。

③明治初期より大正末期まで続いていると思う。ただし，今でもそのしきたりの一部を続けている家もあるようだ。

④（祖母からみて）父，母，兄，姉，妹，女中，使用人（車夫等)。

⑤岡山県都窪郡N村。

⑥貧しい小作人，またはわずかな農作地を持っているだけの貧しい農村だった。

⑦開業医（昔から代々医家で，医者は仁なりと薬代，往診料すべて無料で薬礼として夏は西瓜，じゃが芋，玉葱をもらえば良いものであった。当時はお年貢と称して小作人は地主に出来た米を届けていた。）

⑧当時は食事の形式は進歩もなく，ほとんどご飯だった（ママ）が，“幸いに”祖母の家では全員が白米であった。米倉には米俵が積まれていた。

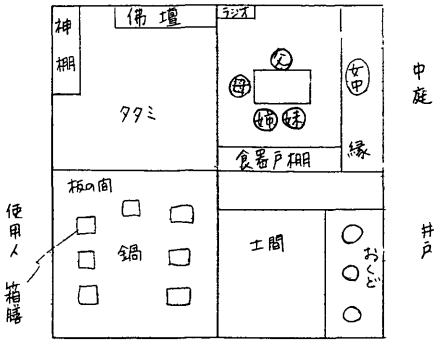


図164

B．⑨「茶の間」と呼んでいた。近所の家では，「おへっつい」と言っていた。

⑩夜，一家の団らんの部屋でもあった。

⑪部屋の大きさは，6畳2間。隣の部屋には，神棚，佛壇，中庭に面した部屋には入れ込み（つくりつけ）の大きな食器戸棚があった。

C．⑫父（祖母の）が上座にすわっていた。なお，使用人は次の間。

⑬職業柄，夕食だけそろって食べた。他は時間のずれがあり，個々にとった。

食べる場所は，家の者は畳。使用人は板の間であった。

⑮座ぶとんは全員使った。ただし使用人のは紺木綿のものであった。

D．⑯朝　味噌汁，漬物，番茶（農家では味噌，豆茶（道端で取ったもの））。

⑰昼　野菜を煮たもの，漬物，番茶（農家ではいつも同じようだった。）

⑱晩　魚を煮たり焼いたりしたものと野菜など。

⑲父，兄（祖母の）はおさしみなどがあった。

E．⑳母，または女中，時には祖母たち姉妹。

㉑父，兄，母，女の姉妹の順。使用人は別に好きなだけよそっていた。

㉒お供えは第一に神様，仏様には御飯とお茶とう。

㉓父は晩酌を必ず1本だけしていた。

F．㉔食べ終わったあと，必ず湯茶でゆすいでいた。一粒の御飯も残すと目がつぶれると教わったので。

㉕女中が食器をさげたが，姉妹は必ず手伝いをした。

㉖井戸端で女中が洗った。

㉗食器は綺麗にふいて，大きな食器戸棚に角盆にふせてしまった。

G．㉘漬物鉢，小鉢，おさい箸。

㉙漬物，煮物その他つくだ煮（いりぼし，じゃこなど），昆布。

㉚箸箱は明治の頃からあり，（祖母の）両親だけはかなり長く続いていた。祖母たちは，洗って角盆にそろえてあった。箸箱は今も続いている家がある。

H．㉛箸の上げ下ろしは常に注意されていた。

㉜御飯，お汁とあれこれと食べ荒さないこと。

㉝口に食べものを入れておしゃべりしないように言われていた。

㉞正座，ひじなど食卓につかぬこと。茶碗をちゃんと手に持って食べる，お椀も同じく。

㉟音をたてないこと。中座して，便所に行くのはもってのほか。

I．㊱いただきます。

㊲ごちそうさまでした。

J．㊳姉妹のうち下の2人（祖母も含め）。

㊴村での出来事（牛が追いかけてきた等），学校での出来事など。

2．ちゃぶ台の時期

①家族はちゃぶ台，使用人は箱膳が昭和の初期まで続いた。

②ごぜんにする（意味不明）。

③ちゃぶ台は今でも続いている。

④父，母，兄，姉，妹，女中，使用人。

⑤大正中頃，都窪郡N村，しだいに発展してきて昭和のはじめには倉敷市となった。

⑥貧しい農村は河川買収により，倉敷レーヨン工場が建設され，年ごとに工業地と変わって行った。

⑦開業医であった。無医村のため，各科担当の看護婦を雇い，全科を診ていた。出産も多かったようである。また，倉レの工員も多く来診した。

⑧工場の工員となる者もあったり，工場社宅ができて，知識階級者が村に入ってきたこと。倉敷市内に行くのに交通（バス）の便がよくなったこと。工場が出来たために水道が引かれ，電気もつき，それにともない食生活は一変して良くなった。卵など蛋白質に目を向けるようになった。この頃から牛肉も市内まで求めに行くようになった。祖母の家でも一ヶ月に一度くらいは牛肉を食べた。使用人も別鍋ですき焼を食べていた。

B．⑨「お茶の間」と呼んでいた。

⑩夕食の団らんの部屋でもあり，ごく親しい人の接待の間でもあった。ただしコタツはしていなかった。

⑪前の時期と同様。この頃になって，ラジオが置かれた。

⑫父が上座，使用人は次の間。

⑬朝，昼は別，夜はそろって食べた。

⑭家族は畳，使用人は板の間。

⑮家族の者は白いカバーのついたもの。使用人は紺木綿。

D．⑯朝　味噌汁，漬け物，いり干しを油いりしたもの。のみものは番茶。牛乳などは手の届かないものであった。

⑰昼　野菜の料理，揚げ豆腐など。

⑱⑲晩　当時いちばんご馳走で，魚のフライ，1ヶ月に一度くらい，すき焼であった。ただし当時，お肉を食べる家はあまりなかった。鶏肉は，トリを飼っていた家が多かったので食べていたようである。またこの頃，卵料理（オムレツなど）を，使用人も食べていた。父だけ晩酌をしていた。

E．⑳母，姉妹，女中。

㉑神佛の後，父，兄，母，姉妹の順。

㉒まず神様（お水もそえ）仏様（お茶とうも加え）。

㉓父がしていた。

F．㉔必ず，お茶ですすいでいた。

㉕女中が井戸端に運んでいった。

㉖女中が洗ったが，姉妹は手伝った。

㉗洗った食器は必ずふいて茶の間の食器戸棚にしまった。家族の者だけ角盆にまとめて，茶碗はふせて置いた。使用人は各自，自分で洗い，箱膳にしまった。ただし横着者の車夫（男衆）は，何日でも洗うことなく叱られていた。

G．㉘漬物鉢，煮物鉢，重鉢など，ただしこれには常に塗り箸がついていた。
㉙漬物，ごぼう，こんぶ，重ね鉢の中には，らっきょ，梅雨干し，奈良漬等。
㉚箸箱は，祖母の知る限り，両親が使っていた。

H．㉛～㉟までは前の時期とまったく同様であった。

I．㊱いただきます。ただし使用人は，おちょうだいします。
㊲ごちそう様でした。ただし使用人は，ごっつおうさんでした。

J．㊳㊴も同様である。

3．現在（椅子式テーブルなど）の時期

A．③昭和30年頃より外国式が入ってきて，ほとんどの家に今日に至っているが，祖母宅では使われていない。
④この時期は核家族が多いが，家族構成は（祖母からみて）夫，子（長男（別居）長女（結婚して別居）次女，次男（同居）看護婦1人）。
⑤広島等転々としたが昭和26年には岡山市内に落ち着いた（岡山市H町）。
⑥商業地で隣近所には小売店が軒を連ねている。生家の方では，戸主は故人となり，かなり広い農地はすべて不在地主として（農地解放のため）小作人の手に渡った。残ったのは家屋敷と野菜畑150坪程となった。
⑦結婚後，祖母の夫は県の公務員であったが，昭和28年頃，開業して内科をした。
⑧国全体に欧米化が行きわたり，新しい世代の人々は受け入れていったが，祖母宅においては，食事室は茶の間で畳敷のため今でも椅子は取り入れられていないが，看護婦は台所で食事をするため椅子を使っていた。

B．⑨食堂
⑩料理をする部屋でもある（台所と茶の間が両面づかいの食器棚が置かれているので）。大きさは3畳半ぐらいの台所に，4畳半ぐらいの茶の間。当時，椅子式を取り入れている家では，大きさはだいたい6畳ぐらい（フェルト張り，またはリノリュームの美しい柄），大きな角テーブルに椅子があった。調度品は電気製品（冷蔵庫，オーブン，ハイザー，レンジなど），昔にくらべこの時期の変わり様は驚くほどであった。

C．⑫座席の上下なく便利を考えて適当に腰かけたが，調理台や炊飯器の近くに女性が腰かけた。
⑬職業柄，子と夫の時間帯が異なるので朝，昼は別，夕食はいっしょに食べた。
⑭キッチンルーム。
⑮座ぶとんは必要なし。

D．朝　パン，牛乳，サラダ，玉子等（祖母宅ではご飯に味噌汁，小魚等）。
昼　給食，弁当，ラーメン等（祖母宅，ご飯，パンの時もある。粥等）。
晩　肉食または油いため，その他フライなどもある。

E．⑳大体母親，娘等。
㉑子供を先につけることもある。㉒の神仏のお供えはしなくなった。する家庭もあるが少なくなった。㉒晩酌はしだいに薄れる感じがあるが，その代わりビールが多くなってきている。

F．茶碗を湯茶でゆすぐことはあまりない。㉕母親や各自がすぐにさげた。㉖母親，あるいは娘など。㉗食器戸棚にしまった。あるいは食器伏せに置いておくこともある。

G．共用の食器はどの時期でも変わらず，おさい箸がつけられている。㉚箸箱を使っている家はほとんど見られないようだ。

H．食事中にしてはならないことは，ほぼどの時期でも共通しているが，現在では，それ程躾のきびしい家庭も少なくなってきている。してはいけないというよりも1つのマナーとして相手

に不愉快を与えないように，また，見ていて綺麗な身のこなしが，基本的には変わらずその根底にあると思う。

I．J．も同じで，食事中の話題は子供中心で繰り広げられるのも，今も昔も変わっていない（特に女の子の方が中心に話すようだ）。しかし，現在，食事時にテレビをつけて見ながら食べるという家庭も増え，家族の団らんの場が単に個々の集まりとなり，コミュニケーションも行われないまま時間が過ぎるというパターンだ。現代核家族と機器の氾濫が生んだ病理現象である。

調査者　No. 217(f)	調査日　昭和59年1月12日(木曜日)
被調査者　K.S.　性別　f	出生年　明治33年(82歳)(第2子)
出生地　長野県東筑摩郡I村	
生家の職業　農業	
現住所　長野県松本市I町	
住所の変更とその年度　村内で大正13年	
最終学歴	結婚　大正13年(24歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

お膳を丸く囲んで食べた。お膳は箱膳であり，中に各々の食器をしまっておいた。これは実際「お膳」と呼ばれ，昭和25年頃まで使われた（図165）。

結婚する前の家族構成は，父，母，兄1人，妹2人の6人であり，住所は長野県東筑摩郡I村で山間地であった。戸主である父の職業は農業であった。結婚してからの家族構成は，義母，夫，子8人で，義母は昭和20年亡くなった。住所はやはり同じくI村で，隣りの部落からお嫁に来たということである。夫の職業は農業であった。結婚する前と後の食事の形式にはほとんど違いはないようである。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は「お勝手」と呼ばれ，炊事場とつながっていた。結婚する前のことは不明であるが，嫁いだ家のお勝手は図166の様であり，12畳ぐらいであると思われる。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席の順番であるが，結婚前のことは不明であり，結婚後は，夫がいろりのそばの席であり長男，次男，長女，……というように，長女より次男の方が年下にもかかわらず，よい席であった（図167）。食べる場所は，ねこというわらであんだもので，ござより厚いものであり，座ぶとんはなく，みんなでそろって食べた。

D．ご飯のほかに何を食べ，何を飲んだか

やはり結婚前のことは不明である。結婚後は，朝はみそ汁，つけもの，昼も朝と同じようで

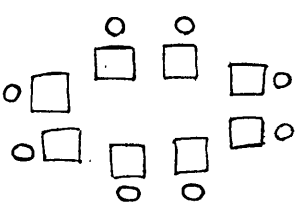


図165

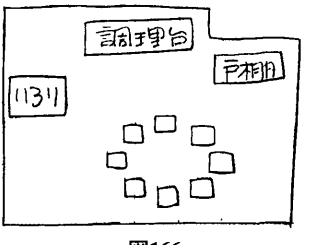


図166

あり，夜はみそ汁，つけもの，にもの，魚などであった。誰かが特別なものを食べていたのではないが，魚などの時は，一番大きいものを夫に，というようにしていた。

E．食事のときのご飯の給仕について

結婚前では，母がみんなの分をよそい，順序は父が一番であった。神仏へのお供えは毎日かどうかはわからないが，ご飯をお供えし，晩しゃくはしなかった。

結婚後では，本人がみんなの分をよそい順序は，夫，長男，次男，長女，次女，……六女，本人であった。毎日，ご飯を仏様にお供えした。夫は毎日，晩しゃくをした。

F．食事のあとのかたづけについて

食べおわったあと，すぐに茶わんや箸を湯でゆすいだ。結婚前は不明であるが，結婚後では，食べ終った人から，自分の食器をお膳の中にしまい，部屋のすみにお膳をつみ上げた。しかし夫の食器に関しては，妻である本人がお膳の中にしまい，部屋のすみに積んだ。

食器は週に1回，子どもたちが川に洗いに行き，お膳の中へしまった。子どもといってもほとんど女の子が洗った。

G．食事の共用について

結婚前では，どんぶりや皿などが共用の食器であった。それにはつけものやにものが盛られていた。

結婚後では，どんぶりやおてしょうと呼ばれる小皿，大皿が共用の食器であり，やはりつけものやにものや魚が盛られていた。魚は生臭いので魚専用の皿があった。

H．食事中にしてはならないことについて

箸については，箸の向きを逆に持って使うこと，音をたてておくこと，箸と箸で食物をわたすことなどがしてはならないことであった。食べる順序は夫が先であり，夫が箸をつけるまでは誰も箸をつけてはならなかった。食事中のおしゃべりはしてはならなくて，姿勢は正座であった。そのほかにしてはならないこととしては，食事の途中で席をたつこと，あくびをすること，などがあった。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは「いただきます」「ちょうだいします」のどちらかで，食べおわりは「いただきました」「ちょうだいしました」であった。

J．食事中の話題について

食事中は話をしてはならなかった。

2．飯台の時期

飯台の時期には，大きく分けて家族構成が本人，夫，子どもの時期と本人，夫，息子夫婦，孫の時期がある。

I．家族構成が本人，夫，子どもの時期

A．食事の形式と家庭環境について

長方形の飯台を囲んで食事をした。実際，それを「飯台」と呼んだ（図168）。これは昭和25年頃から使われ，今でも使われている。この時期の家族構成は，夫，子5人の7人で，住所はそれ以前と同じであるが，市に合併したので松本市であり，やはり山間地であった。戸主である夫は農業を営んでいた。食事がお膳から飯台となった理由は，覚えていないようである。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は以前と同じく「お勝手」と呼んでいて，炊事場とつながっていた。お勝手の情景は飯台がおかれていること以外は，以前と同じである。

C．どのようなすわり方で食べたか

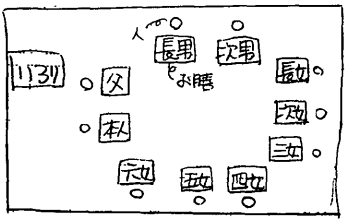


図167

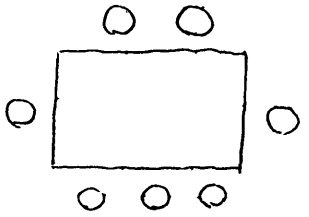


図168

座席の順番は図169のようであり，みんなでそろって食べた。食べる場所はござ，その後ビニール製のカーペットのようなものとなり，座ぶとんはいずれも，誰も用いなかった。

D．ごはんのほかには何を食べていたか

朝…みそ汁，卵，のり，納豆など。

昼…おじや，魚，にものなど。

夜…魚，野菜いためなど。

魚はサンマやニシンであり，肉は特別な時にしか食べなかった。魚などの時は夫に一番大きいものを盛った。

E．食事のときのご飯の給仕について

本人がみんなのご飯をよそった。よそう順番は夫，長男，次男，四女，五女，六女，本人であった。仏様には毎日ご飯をお供えし，夫が毎日晩しゃくをしていた。

F．食事のあとのかたづけについて

食べ終ったあと，すぐに茶わんや箸を湯でゆすいだ。食器は食べ終った人から，めいめいのものをさげそのあとすぐに洗った。ただし，夫の分は妻が行った。

洗った食器は，ざるにあげて，そのままざるにいれておいたり，普段あまり使わない皿などについては戸棚にしまったりした。

G．食器の共用について

共用の食器としては，皿やどんぶりがあり，それには，つけもの，にもの，野菜いため，魚などが盛られていた。箸箱は使わなかった。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の上げ下ろしは以前と同様，箸の向きを逆に持つこと，音をたてておくこと，箸と箸で食物をわたすことがしてはならないことであった。食べる順序は夫が一番先であって，そのあとは誰から食べはじめてもよかった。

食事中のおしゃべりはしてもよく，姿勢は男はあぐら，女は正座だった。そのほか，食事中にしてはならないこととしては，ひじをついて食べること，あくびをすること，汚ない話をすることなどがあった。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは「いただきます」，食べ終わりは「いただきました。」で，手のひらをあわせて言わなければならなかった。

J．食事中の話題について

おもに夫が話していて，近所のうちのことなど，世間話が多かった。

Ⅱ．家族構成が本人，夫，息子夫婦，孫の時期

A．食事の形式と家庭環境について

長方形の飯台を囲んで食事をしている。実際は，これを「テーブル」と呼んでいる（図170）。これは今もつづいている。この時期は，本人，夫，次男，次男の嫁，孫1人の5人である。住所は同じく松本市であり，山間地である。戸主である夫は無職であり，家で食べる分くらいは農作物を作っている。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は「お勝手」と呼ばれ，炊事場がつながっている。部屋の情景は図171の様である。

C．どのようなすわり方か

座席の順番は図172のようで，次男の帰りが遅い時は別として，みんなそろって食べている。食べる場所はタタミであり，座ぶとんを使用している。孫は，まだ小さいので，子ども用のいすを使用している。

D．ご飯のほかには，何を食べていたか

朝…みそ汁，卵料理，のり，なっとうなど。

昼…魚，野菜いため，つけもの。

夜…魚や肉，サラダ，にもの，あえ物，つけもの，みそ汁。

特別にちがったものを食べている人はいない。

E．食事のときのご飯の給仕について

よそうのは嫁であり，よそう順序は，夫，次男，本人，孫，嫁である。仏様へは毎日，ご飯をお供えしている。

夫と次男が毎日晩しゃくをしている。

F．食事のあとのかたづけについて

食べ終わったあとは，茶わんをゆすいできれいにするという目的でないのであるが，茶わん

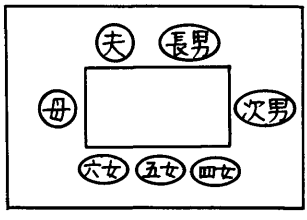


図169

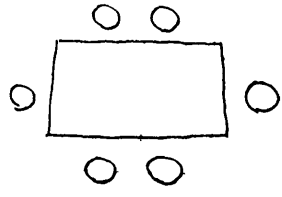


図170

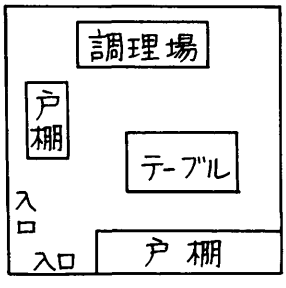


図171

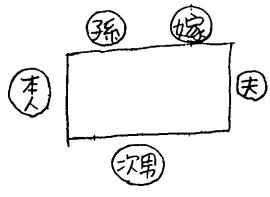


図172

に湯を入れて飲むということはしている。

みんなが食べ終ったあと，嫁は食器をさげ，そのあと嫁が食器を洗い，洗った食器は洗いおけに置き，そのままにしておくか，戸棚にしまうかしている。

G．食器の共用について

共用の食器は，どんぶりや皿があり，にものやつけもの，サラダなどが盛られている。箸箱はない。

H．食事中にしてはならないことについて

箸の上げ下ろしは，箸と箸で食物をわたすことがしてはならないことで，その他は特にない。

食べる順序もきめられているわけではないし，食事中のおしゃべりももちろんしてもよい。姿勢は男はあぐら，女は正座であるが，別にくずしても構わない。食事中にしてはならないことは，ひじをついて食べることである。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめ…「いただきます」

食べおわり…「いただきました」「ごちそうさま」「ごちそうさまでした」

J．食事中の話題について

夫や次男がおもに話している。話題は，近所のこと，テレビ，新聞の内容について，孫の話などが主である。

調査者　No. 221(f)	調査日　昭和59年1月8日(日曜日)
被調査者　K.J.　性別　f	出生年　大正2年(70歳)(第2子)
出生地　島根県飯石郡M町	
生家の職業　農業	
現住所　島根県出雲市H町	
住所の変更とその年度　昭和23年	
最終学歴　M家政高校	結婚　昭和23年(35歳)
被調査者との関係　祖母の義姉	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

お膳は「箱膳」と呼ばれ各自別々に所有していた。男は黒塗り，女は朱塗りで大きさも違っていた。使用人は膳は食器を並べる台のような物でしかなかった。食事は図173のような形式でなされ，使用人との区別は少しあるが，世代による区切れはみられない。この形式は昭和3年頃まで続けられたが，出し入れに不便だったので，箱膳はしだいに消えていったようだ。

当時は，祖父母，父母，姉1人，弟2人，使用人（男2，女1）の11人家族だった。住所は島根県簸川郡M町で，山間の農業地である。戸主は農業を営んでいた。

B．食事をする部屋について

食事をしていた部屋は「台所」と呼ばれた。近くに炊事場があり，食事をする所は一段高くなっている。この部屋は食事以外には特に使用されていなかった。広さは10畳程度で，箱膳をしまっておく戸棚だけがあった。

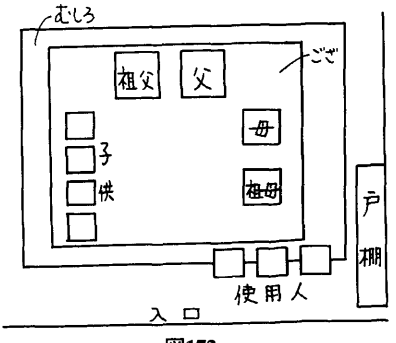


図173

C．どのようなすわり方で食べたか

座席は，上に祖父と父，横に子供，母，祖母，下に使用人の席があった（図173）。母の座席が祖母より上にあるのは，祖母がご飯をよそうためであったらしい。皆がこのきめられた座席につくと，そろって食事を始めた。台所は板の間だったので，食事中はそこにむしろを敷き，その上へござを敷き，そこへ正座をして食べた。座ぶとんはだれも使用しなかった。

D．ご飯の他には何を食べ，何を飲んだか

農家のため，家でとれた野菜が主なおかずとなる。朝はご飯を食べることはまれで，大根をいれたお団子をいくつか食べていた。昼はご飯とみそ汁，大根やイモの煮しめを食べた。煮しめの具がかわる程度で毎日同じようなものだった。夜はご飯とみそ汁，煮しめの他にひたしや豆腐，油あげなどが一品加わる。時にはくじらの肉のみそ汁があり，子供心に印象的だったようだ。また，つけものは必ず毎食，食卓にのぼった。

食事は特別に違うものを食べる人もおらず，皆同じものを食べていたが，母や使用人は満足を得られる程の量ではなかったようだ。

E．食事のときのご飯の給仕について

おかずは家の女たちが手分けをして盛り付けたが，ご飯をよそうのは祖母の役目だった。ご飯の給仕は家計を預かる者の権力を示すようなものであったらしい。「杓子は嫁にはまかせられん」といわれ，嫁は40～50才になるまでご飯をよそうことを許されなかった。そのため，嫁はわずかなご飯でがまんしなければならなかった。そして，祖母の手により，祖父，父，弟，姉，本人，母，使用人の順によそわれた。

また，神仏のお供えは，その日初めてご飯を炊いた時供えられた。晩酌は無かった。

F．食事のあとかたづけについて

食べおわると，茶碗に湯をそそいで飲む。この時，茶碗や箸はゆすがれた。その後，各自が自分の食器を自分の箱膳の中にしまって台所から立ち去ったあと，嫁と女使用人がこの食器のしまわれた箱膳を重ね集めて戸棚へしまった。食器は嫁と女使用人が洗うが，特に汚れた時以外，毎日洗うことはなかった。

G．食器の共用について

茶碗は身体の大きさに応じ違うので個人の所有だったが，汁をもるお椀やおかずを盛る皿は共用されていた。また，箸や箸箱は銘々がもち，現在でも続いている。

H．食事中にしてはならないことについて

さい台からとったおかずは残さず食べなければならなかった。食べる順序は汁を先に一口飲みご飯をたべたが，それほど気をつかわれなかった。しかし，おしゃべりだけは厳しく注意され，少しでも話すと「だまってはやく食（く）ってしまうだが」としかられたという。食事中は男はひざを組み，女，子供は正座をして静かに食べた。その他，自分がたべおわってもすぐに立ち歩かず，みんながたべおわるまで静かにまつようにいわれたという。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは「いただきます」，食べおわりは「ごちそうさまでした」がいわれた。祖父がまず最初に言い，その後，他の者がそろっていうようにしていた。

J．食事中の話題について

H.で書いたように，食事中の話は厳しく禁じられていたため，祖母のおかわりをすすめる声がひびくだけだった。

2．ちゃぶ台の時期

ここでは，おばあさんが現在の家へ嫁がれた昭和20年台のちゃぶ台の様子を調べた。なお，A

－J．の項目は，1．お膳の時期のそれと同様である。

A．ちゃぶ台は「飯台」と呼ばれ，昭和3年頃から現在にいたるまで続いている。食事の形式は図174のように一つの飯台をかこむ形になっている。

当時の家族構成は，夫，息子2人，娘1人の5人家族であった。住所は島根県出雲市H町で，農業地である。戸主は農業を営んでいた。

B．食事をする部屋は近くに炊事場があるため「台所」とよばれ，食事時以外にはあまり使用されなかった。広さは10畳ほどで，食器棚と砂糖や乾物をいれる戸棚がおかれていた。

C．核家族なので人数も少なく，1つの飯台を皆の座席が囲み，上に夫の座席がある（図174）。食事は毎食，皆がそろって食べ始めた。台所は板の間で，そこへ食事時に銘々薄い座ぶとんを運び入れ正座をして食べた。

D．食事内容は，戦後まもないため，あまり高価な物は食べられなかったが，農家なので，野菜やお米には困らず，家でとれた野菜と他の物を交換したりして食べていた。朝はお団子や水団（すいとん），昼はおかゆとみそ汁，煮しめが一般的だった。夜はご飯とみそ汁，煮しめの他，毎日というわけではないが鰯やさばといった魚が一品加えられるようになった。特別に違う食事をする者もなく，家でとれた野菜を煮しめやつけものにして食べていた。

E．おかずの盛りつけはおばあさんと娘，ご飯の給仕は一家の主婦であるおばあさんの役目だった。よそう順序は夫，息子2人，娘，おばあさんの順であった。

神仏のお供えは，仏さまだけに夜供えられた。また，晩酌は無かった。

F．食べおわると，茶碗にお湯をそそいで飲み，茶碗や箸をゆすいだ。食事後，食器はおばあさんと娘がさげた。当時は，毎食ごとに食器を洗うことはなく，一日一回夕食後，おばあさんと娘が共同で洗った。洗った食器はかごのようなものに伏せ，ふきんをかけておいた。

G．茶碗はそれぞれの所有だったが，汁をいれるお椀やおかずを盛る皿は共用されていた。箸箱は当時もひき続き存在し，今も続いている。

H．食事中にしてはいけないことは箱膳の時期とあまりかわりがない。食べる順序は気にされなかったが，皆汁から口をつけたようだ。以前とかわったことはおしゃべりについてだろう。静かに食べることが望まれたが，以前ほど厳しさはなく，笑いもあったようだ。食事中は皆，正座をして食べた。その他，子供たちには，ひじをついて食べたり，立ち歩かないように注意したという。

I．あいさつは以前とかわらず，食べはじめに「いただきます」，食べおわりに「ごちそうさまでした」がいわれた。

J．食事中は，おもに子供たちが話をし，一日の出来事や，友だちのことなどの話題が多かったようだ。

3．現在のちゃぶ台の時期

A．現在も結婚当時とかわらず，「飯台」とよばれるちゃぶ台で食事がされている。食事の形式は図175のようになっている。世代による区切れはないが夫婦は近くに座っているようだ。

現在の家族構成は，息子夫婦，孫夫婦，孫の6人家族で使用人はいない。住所はかわらず島根県出雲市H町で，近年ぶどうの栽培が盛んとなった農業地である。この家庭は兼業農家で，戸主は養豚，ぶどう栽培を行うかたわら，土木工事にもでかけている。

B．食事をしている部屋はいわゆる「台所」である。この部屋は料理や食事以外には使われず，食後の家族の団らんに使われる程度だ。広さは8畳ほどで，料理に関する一切のもの，つまり，流し台，冷蔵庫，電子レンジ，茶棚，食器棚，食料品入れなどがおかれている。

C．座席は，以前のように上下にこだわることがあまりないように思える。ご飯をよそったり，

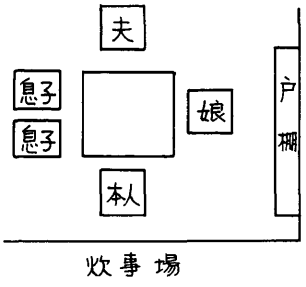


図174

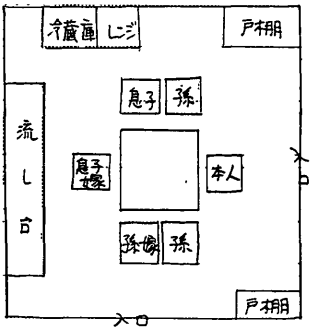


図175

かたずけに都合のよいように配置されている。おばあさんに関しては，動きやすいよう戸口の方へ席を移してもらったそうだ（図175）。食べる所は板の間で，食事時になると飯台を1つおき，板の上に各自が座ぶとんをしいて座っている。この家は現在，新築され，台所も現代風のダイニング・キッチンとなり，新築当時は，いちおう椅子式テーブルが備えつけられる予定だった。しかし，やはりなじむことができず，テーブル式はとりやめ，結局，新しい板の上に食事時だけ飯台をおき，座ぶとんをしいて食べるという，以前と同じ状態になってしまった。

食事は，朝と夜は全員そろって食べ，特に夜は，おばあさんの「働いてかえってくるもんより先にくったら，ばちがあたる」という言葉で，必ずそろってから食べ始める。昼は家に残ったおばあさんと孫の嫁がいっしょに食べるそうだ。

D．食事内容は，朝はご飯とみそ汁，煮しめ，つけものが一般的である。昼は二人なので，夕食の残りや朝と同じ程度で軽くすませている。夜は，男の人たちが帰ってくるのでみそ汁，煮しめの他に，肉か魚のどちらか一品が加わる。冬場は鍋物が多いそうだ。おばあさんもすき嫌いがなく皆と同じ食事をするので，特に違った食事をする人はいないが，男の人に，朝は卵をつけたり，夜は酒のさかながつく。

田舎にも最近は近くにスーパーがたち，肉や魚が容易に手に入り，食生活も変化したようだ。しかし，家でとれる野菜は鍋物や煮しめなどにして，いつでも調理されている。特に煮しめは茶口にもなっている。

E．ご飯の給仕は，息子の嫁と孫の嫁の役目である。おばあさんは手が少し不自由なためよそうことはなくなった。複合家族であるが，以前のように差別されることはなく，嫁も自由に食べることができる。なお，ご飯をよそう順序は息子，孫2人，おばあさん，息子嫁，孫嫁の順である。

神仏のお供えは，朝ごはんを仏さまへのみ供える。晩酌は孫が毎晩行うが，他の者はだれもやらない。

F．ご飯を食べおわると，湯茶がご飯茶碗にそそがれて飲む。最近では湯のみ茶碗を使うときもあるが，おばあさんなどはご飯茶碗にそそぐのが習慣となっているようだ。

皆がたべおわると，息子の嫁，孫の嫁が飯台からすぐ近くにある流し台へ食器を運び，毎食後洗う。洗った食器は，毎日使うものは流し台の横にあるカゴに伏せられ，カバーがかけられる。

G．ご飯茶碗は別だが，汁をもるお椀やおかずを盛る皿は共用されている。また，箸箱は今でも使用している。

H．食事中にしてはいけないことのうち，一番気をつけるのは，自分の箸で中のおかずをとらな

いということだ。中のおかずには専用の別の箸がつけられていて，それでとり自分の皿まで運ぶ。食べる順序は自由だが，やはり先に汁に口をつける人が多い。食事中は皆，正座をして食べるのが習慣となっている。また，たち歩いたりしてはいけない。

昔とかわったのは，食事中のおしゃべりだけで，2の時期よりさらにゆるくなり，今では別に悪いことだとは考えられていない。

I．食事のあいさつは，食べ始めに「いただきます」，食べおわりに「ごちそうさま」をいう。各自が銘々で，食べ始める前と食べおわったときにあいさつしている。

J．この家庭では，息子の嫁が一番よく話すようで，一日の出来事，近所のうわさ話などが話題となるようだ。

調査者　No. 224(f)	調査日　昭和59年1月11日(火曜日)
被調査者　N.C.　性別　f	出生年　明治40年(77歳)(第3子)
出生地　和歌山県西牟婁郡M町	
生家の職業　農業	
現住所　和歌山県田辺市S町	
住所の変更とその年度　昭和3年	
最終学歴　県立T高等女学校	結婚　昭和3年(22歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期

A．これは祖母が嫁入りした昭和3年から15年頃にかけてのことで，その時期における家族構成は，戸主，嫁（祖母），戸主の父，母，祖父，祖母の6人で，使用人は女中2人と仕事場の人が6～7人である（以後この名称で呼ぶ）。家は，住宅地である和歌山県田辺市S町にあり，しょう油醸造業を営んでいた。

食事の形式は，家族のそれぞれが箱膳を使用し，畳の間と板の間の2間を使って食事をしていた。

B．食事をする部屋は，八帖の畳の間で，その隣の10センチメートルくらい低くなった所に板の間が三帖程と炊事場が四坪分程あり，この部屋は，ほとんど食事だけのために使われた。調度類は，大きめの桧の水屋二棹と，桧のはえいらずで，部屋は暗く，20ワット程度の照明が食事室と炊事場にそれぞれ1箇ずつあるだけであった。「はえいらず」というのは，はえが入らないように網を張った食器棚のことであるらしい。また，冬には，何も暖房をしていなかった。

C．座席は図176のようで，上座に戸主を中心として，父，祖父がすわり，父，祖父の横側にそれぞれ母，祖母が，嫁は戸主の向かい側に，使用人達は，板の間で食事をとった。

座布団は，畳の間で食事する者だけでなく，使用人達も薄いものを使っていた。食事の順番は，まず戸主を中心に家族6人が食べ終わった後，使用人達が板の間で食事をした。箱膳には二種類あり，畳の間で食べる者が使っていたのは高膳，使用人達のは低膳であった。

D．食事内容は，朝は紀州茶がゆ（「おかいさん」と呼んでいる。）とお漬物，昼はご飯と魚，野菜のたき物など，夕食には一日の内で一番のごちそうが出，さしみなどを食べていた。使用人達が食べるものは，家族の者が食べるものとほとんど差が無かったようであるが，戸主だけが，毎日牛乳を一本飲んでいたようである。

E．給仕は，もっと上流の家庭では女中の仕事であったらしいが，この家では嫁かまたは母の仕事で，戸主，父，祖父，祖母，母，嫁の順で給仕された。また，朝は茶がゆ，昼はごはんを母が仏壇にお供えしていた。

晩酌は毎晩で，戸主，父，祖父が飲んでいた。

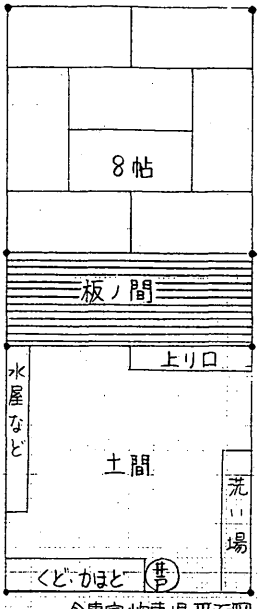
F．茶わんやお皿は，食後すぐ洗い場で女中が洗っていたが，お箸は，お湯でゆすぐだけで各自の箸箱に入れ，一日一回程度しか洗い場に持って行かなかった。洗い終わった食器やお膳は，土間にある戸棚にしまった。また，食器やお膳を運んだり，下げたりしたのは女中で，仕事場の使用人の食事中に家族の食事の後かたづけをすませ，使用人の食事の後かたづけが終わった後，やっと自分達の食事を取ることができた。

G．共用の食器はほとんどなく，漬物ばちくらいのものであった。箸箱は明治の末頃から昭和の初めにかけて使われており，この時期にはまだ使われていた。

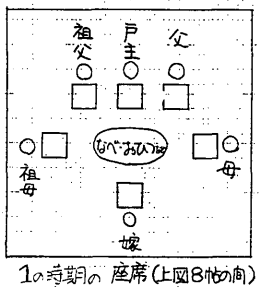
H．食事の順序は，一番にみそ汁やお吸い物など汁物をいただき，食事中は，横尻などせず正座し，不浄の話はしてはいけないと言われていたが，そのほかは，トイレに立つことがいけないと言われていたくらいで，割と自由にできたようである。（箸の上げ下ろしについては，迷い箸などいろいろあるに違いないと尋ねたところ，そんなことをする人は居なかったから特に注意しなかったという話であった。）

I．食事中のあいさつは，食べはじめが「いただきます」食べ終わりは「ごちそうでございました」とほとんど今と変わりはない。

J．食事中は，主に戸主や母が話をしており，話題は，戦争や軍人についてが多かったようである。



食事室炊事場平面図



1の時期の座席（上図8帖の間）

図176

2．ちゃぶ台の時期

A．祖父や祖母が亡くなった頃から，終戦を経て，昭和35～36年頃までがちゃぶ台の時期である。箱膳がちゃぶ台に変わったのは，こちらの方が便利だからという理由のためである。この期間には，家族構成の変化が激しいので，図177では昭和10年代後半のものを描いている。戸主と嫁（祖母），戸主の父と母，子供4人，女中1人，子守り1人，仕事場の使用人は戦争のため減って3～4人という構成であった。家のあった場所は，箱膳の時期と変わらず，田辺市S町である。この時期の住環境も住宅地であった。この頃，祖父は戦争のため醸造業を廃止し，戦争中は酢をつくり軍部糧秣廠（リョウマッショウ）へクエン酸を収める事業に転職していた。

B．食事をつくる部屋のことではなく，食事する部屋のことを「台所」と呼び，その部屋は食事のためだけに使われていた。部屋は箱膳の時期と同じ部屋で，箱膳の代わりにちゃぶ台が置かれており，一段下がった板の間には折りたたみ式の丸いちゃぶ台があった。土間にはくど，へっついや洗い場や井戸と水屋があり，箱膳の時期と同様である。

C．座席の順は，戸主が上座に坐り，その両側に父と長男，横に母や次男，長女，次女がすわり，嫁は戸主の向かい側に坐り，自分の近くにおひつやなべを置いて，家族がそろって食事をした（図177）。女中達は，家族が食事をすませた後で，板の間で食べた。座布団は家族の分だけでなく，女中達使用人の分も用意されていた。子供が小さい頃は，おもちゃ室という食事室とは別の部屋で女中や子守りの人が子供といっしょに食事をすることもあったらしい。

D．朝は紀州茶がゆ（おかいさん）とつけ物，昼はごはんと野菜など，夕食にはごはんと魚や野

菜の煮物などが出，戸主が毎日牛乳を飲む以外は，使用人も皆同じ献立のものを食べていた。毎日戸主が牛乳を飲んでいるのを見て，末娘が「わたしも，あの白いのが飲みたい」と言ったという話であった。

E．食事の時，ご飯の給仕は嫁の役目であり，その順番は，戸主，父，長男，次男，母，長女，次女，自分という風になっていた。神仏（「仏さん」と呼んでいる。）へのお供えも嫁がやり，朝は茶がゆ，昼はごはんと一日二回お供えしていた。晩酌は毎晩のことで，父は毎日昼食の時もお酒を飲んでいたとのことである。

F．この時期にはもう箸箱はなくなっていたので，食後は食器（茶わんやお皿など）だけでなくお箸も，お盆で運び，流しで洗っていた。食後食器をさげ，洗ったのは女中の役割であったが，戦後は女中が居なくなり，嫁の仕事となった。洗った食器は，水屋にしまっておいた。

G．共用の食器は，箱膳の時期と同じく，つけ物ばちであった。これと同様なものとして，煮豆やつくだ煮などを入れる小ばちがある。

H．食事中してはならないことについては箱膳の時期と変わらず，みそ汁などの汁物から順に食べるということ以外，自由であった。食事中は正座であったが，これも戦争が終わってからはあまり厳しくは言われなくなったらしい。

I．食事中のあいさつは，食べはじめが「いただきます」，食べ終わりが「ごちそうさま」，それに対して「よろしおあがり」と答えた。

J．食事中の話題は，この時期もやはり戦争関係の話題が多く，主に戸主と嫁とが話していた。

3．現在の時期

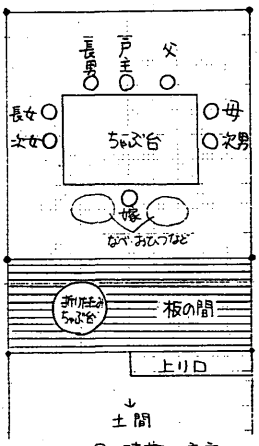
A．昭和35～36年頃から現在にかけての時期で，もう子供達は皆それぞれの家庭を持っているので，祖父と祖母，老夫婦二人で暮らしているが，週一回くらいは，市内に住む娘（次女，三女など）が顔を見せに来る。祖父は現在無職で，玄関入ってすぐの部屋を事務所として貸している。住所は田辺市S町で変わらないが，前の二つの時期に住んでいた家は今住んでいる家の何軒分もある広いものであったが，今の家は昔の家の一部であり，他は他人のものとなっている。したがって，台所も前二つの時代の台所ではなく，前時期に子供達と女中が食事をしたおもちゃ室であった所らしい。流し台が置いてある板の間は十年くらい前は土間であったのを改造したものである。土間の方の炊事場も料理によっては今も使われており，冷蔵庫も臭いのきつい物は土間の方の冷蔵庫に入れるなどの使い分けがされている。

椅子式テーブルは購入時には利用されていたが，祖父は畳の間に坐って食べたいということなのであまり使わず，今では調理台と化して図178のような配置となっている。

B．食事をする部屋には水屋（はえいらずのような形態のもの）が置いてあり，その隣りにテレビをのせた3～4段の小だんすがある。間仕切りなく土間の通り路があるので冬など暖房が効きにくいということもあるが，明るさの点では南側に窓があるので十分光が入る。この部屋は，食事の他に親戚が顔を見せに来た時などの団らんにも使われている。

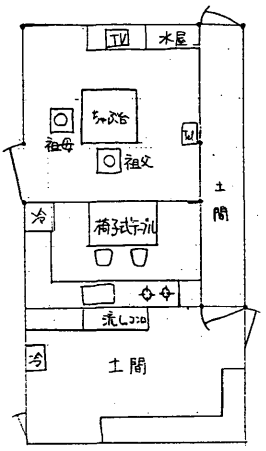
C．座席は，祖父がテレビに向かう位置にすわり，祖母がその隣りにすわるが，祖母は椅子にすわって食べる方が流しなどに近く便利なので，簡単にすませたい時は椅子式テーブルで食べることも多い。いつもそろって食べるとは限らず，特に最近は祖父の身体が弱くなって寝ていることが多いので，祖母はますます椅子で食べることが多くなっている。

D．朝は習慣通り茶がゆにつけ物や煮豆など，昼はおそばやうどんまたはパンなど，夕食はごはんと肉または魚と野菜といった食事内容で今でも祖父は欠かさず牛乳を飲んでいる。また，たまには，祖父がいつものようにお肉やさしみなどを食べていても，祖母が前の日の残り物を食べることもある。



2の時期の座席

図177



3の時期の平面図と座席配置図

図178

E．ご飯の給仕は，祖母以外にする人は居らず，仏壇へのお供えは，朝お茶と夕方にご飯を上げている。晩酌は毎晩とは限らないが祖父がしている。

F．食後は祖母が茶わんや箸を流しで洗い，食器棚，はえいらずにしまう。

G．共用の食器は，つけ物ばちや煮豆，つくだ煮などを入れるための器である。

H．食事中にしてはならないことというのは，子供達も居ず老夫婦二人でのことなのでない。というよりも，注意されるようなことを誰もしない。もししたとしても，注意する程だと思わないようである。

I．食べ始める時は「いただきます」，食べ終わった時には「ごちそうさま」とあいさつし，それに対して「よろしおあがり」と答えるが，二人だけで食事する時には省略されてしまいがちのようである。

J．食事中（特に夕食時）は，テレビを観ていることが多いので，話題は，テレビの内容についてであったり，身体に良い健康食品や薬，健康器具などについてである。

調査者　No. 226(f)	調査日　昭和59年1月7日(土曜日)
被調査者　T.H.　　性別　f	出生年　明治41年(75歳)(第3子)
出生地　福岡県八女郡M町	
生家の職業　地主，糸屋	
現住所　福岡県福岡市南区O町	
住所の変更とその年度　(結婚後)大分県中津(昭10)—福岡県筑上郡(昭15)—宗像郡(昭18)—八女郡(昭22)—福岡市	
最終学歴　高等女学校	結婚　昭和5年(23歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳（箱膳）などの時期

祖母の覚えている頃は，家族みんなが，箱膳を使っていたわけではなく，祖母の父親と隠居の祖父母だけが使っていたそうなので，ほとんどわからないとのことだった。

A．食事の形式と家庭環境について

①これは質問の内容がわからなかったので，箱膳とはどのようなものであったかたずねた。

②「そりゃ，箱膳ち言よったたい」(図179)

③「始まったのとかわからんよ。終わったのはいつ頃やったかねえ。私が結婚するときにはもうなかったような気もするけど」

④父，母，姉2人，弟2人，妹2人，本人，女中1人，乳母（バーヤン），番頭，隠居には祖父母と女中1人，がいたそうだ。私が「すごい大家族。お金持ちやったちゃね」と言うと，「あはは，そうたい。昔は大地主やったもんば」と笑いながら言った。

⑤福岡県八女郡M村。

⑥「農村じゃろうねぇ。でもあん頃は家のまわりは，傘屋がほんに多かったよ。傘の商売をしよってあった」

⑦商売としては糸屋をしていたが，主な収入源と考えると，地主ということになるだろう。大地主だったと本人は言っている。

⑧自然と。めんどうだったから。「わからんねぇ，そんなことまで」

B．食事をする部屋について

①「お台所じゃたやろう」(図180)

②していない。

③8畳の板ばり。調度は戸棚だけ。しかし，井戸と釜戸も土間のような所にあったらしい。

C．どのようなすわり方で食べたか

①前にも言ったように，箱膳を使用していたのは父親だけで，あとの人たちは，ちゃぶ台で食べていたそうである（図181)。

②「女中さんとか番頭さんは，あとじゃったろうね。大家族やったけん皆いっしょには食べれんじゃったよ。それに商売をしよったから交代で食べよったんじゃなかろうかねえ」

③板ばり（祖父母は，タタミの間）

④座ぶとんはなし。

D．ご飯の他には何を食べ飲んでいたか

「さぁ，よくは覚えんが，昔は粗末なものじゃったよ」

①朝は，みそ汁，つけ物，お茶，そして1日と15日には「お生酢（なます）」があったそうだ。

②昼「わからんよ……。それこそ寒い時には，おじや（雑炊）なんかを食べよったたい」

③晩はお煮つけ，野菜の煮しめ，などで，刺身などはめったになかったらしい。

④やはり，父親だけは，他の者にお魚がない時でも必ず食べていたそうだ。

E．食事の時のご飯の給仕について

①「そりゃ女中さんのおらっしゃったけん，女中さんやろう」

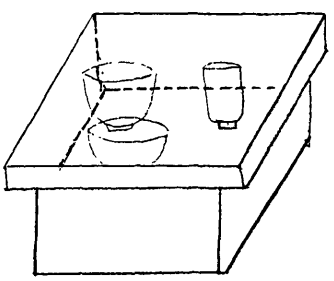


図179

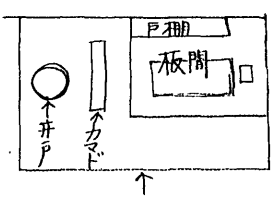


図180

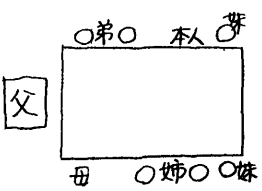


図181

②やはり父親が最初で，あとは男の人が先にというところ。
③「うん，朝しゃっち（必ず）神さんと仏様にはご飯ばあげよったたい。それとお茶」
④父親が毎晩，ご飯の前に飲んでいた。

F．食事のあとかたづけについて
①そんなことはしなかった。
②「そりゃ女中さんがおってじゃったけん」
③やはり女中さんがしていた。
④父親のは箱膳にしまったかもしれないが，他の人のは戸棚にしまった。

G．食器の共用について
①「お父さんのは別やったけど，あとの者は，お茶わん以外は皆いっしょじゃったよ」
②「えー。おかずのこと？そんなのはなかったよ。ああ，漬け物はそうやったかね」
③なかった。

H．食事中にしてはならないことについて
①「そんなことはあんまり言われよらんかったがねぇ」
②特別になかった。
③「うん，ものを言うちゃできん（いけない）て言われよったたい」
④べつに言われなかったようだ。
⑤「さあ，あんまりねえ，聞きよらんかったごたぁがね（聞かなかったようだけど）。覚えとらんち書いとかんね」と言っていた。

I．食事中のあいさつについて
①「言いよったかね，“いただきます”ぐらいは」
②「言わんじゃったもんねぇ，あははは」

J．食事中の話題について
①②とも，話をしてはいけなかったので，何とも言えない。
この時期のことは，祖母の記憶があいまいであったし，また祖母自身が箱膳を使っていなかったので，あまりピンとこなかったようである。また女中がいてあまり家事に気をくばる必要もなかったのだろう。

2．ちゃぶ台（しっぽく台，飯台など）の時期

A．食事の形式と家庭環境について
①図182参照。
②ちゃぶ台と呼んでいた。
③実際，祖母自身は小さい頃から，ちゃぶ台で食べていたようであるが，前の箱膳の時期を祖母の父親だけが使っていた時としているので，ちゃぶ台の時期を，結婚した後と考える。すると昭和5年ぐらいから45年ぐらいまで。
④主人と本人と息子2人，娘1人。
⑤大分県北海部（あまべ）郡→大分県中津市→福岡県筑上郡→宗像郡→八女郡と，ずいぶん移っている。
⑥「みんな，そうやねえ，住宅地でよかろうや」
⑦英語の教員。すごく恐い先生だったらしいが，現在の祖父を見ていると，とても信じ難い。
⑧息子（つまり私の父）夫婦と一緒に住むことになり，私の家では以前からテーブル形式であったので，祖父母も必然的にそのようになったのである。

B．食事をする部屋について
①「“台所”じゃろうね。あん頃も“台所”ち言よったごたあ。食堂なんちは言わんかった

ろうねぇ。そんなハイカラな物はなかったもん。あはは……」

②4回くらい引越しをしているが，そのうちで福岡県筑上郡に居た時は，食事だけでなくて，その他のことにも利用する“居間”でもあった」

③「だいたい6畳ぐらい。調度は茶だんすがあったたい。あの頃は茶盆戸棚ち言いよったよ」

C．どのようなすわり方で食べたか

①図183参照。

②みんなそろって食べていた。

③タタミ敷の部屋。

④「なし。座ぶとんやらない。もちろんおじいちゃんにもなかったよ」

D．ご飯の他には何を食べ，飲んでいたか

①「みそ汁と，さぁ，それこそ卵ぐらいは食べよったかねぇ。お茶は毎食飲みよった」

②「みんなはお弁当じゃったけん。私は，どうか……適当になんかあるもんば……」

③「晩は……魚はありよったよ」

④皆同じ物を食べていた。

E．食事のときのご飯の給仕について

①「そりゃ，うちたい（本人）」

②主人からで，あとは決まっていない。

③神様と仏様と同じ所ではあったけれど，毎朝，ご飯をお供えしていた。

④主人も，ほとんど晩しゃくなどしていなかったようである。

F．食事のあとかたづけについて

①その様な事はせず，お茶はきちんと，湯のみ茶わんで飲んでいた。

②本人。
③本人。
④戸棚。
} “あたりまえ”という顔をして。

G．食器の共用について

①質問の意味が理解し難いが，誰の食器とかに決められていたのは湯のみぐらいで，その他の，お茶わん，ハシなどは決まっていなかった。

②皆で各自が取り分けて食べるおかずがあったかという意にとると……「そんなもんは無かったよ。みんな1人1人につぎ分けよったもんば」

③そんな物は使ったことがない。

H．食事中にしてはならない事について

①②③とも特別，気にしなかったし，おしゃべりもしていた。

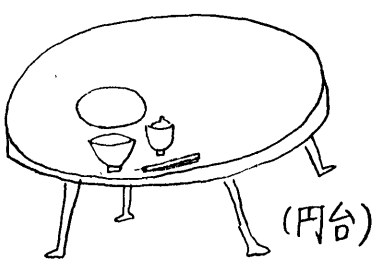


図182

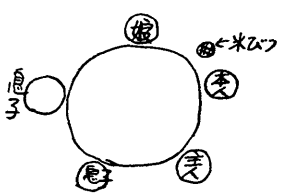


図183

④「食事中の姿勢は時々注意しよったよ。お父さん（私の父）がたまに猫背になりよったから。ちいっと言ったくらいじゃあるけど」

⑤はしからはしへ物を受け渡してはいけないと言っていた。葬式で骨を拾う時にする事だからで，ご飯にはしを刺すなどもその類であろう。

Ⅰ．食事中のあいさつについて

①「いただきます」

②「ごちそうさまでした」ぐらいの事は言っていたそうだ。

Ｊ．食事中の話題について

①子供たち。祖父は無口だったらしい。

②学校での出来事など。

3．現在（椅子式テーブルなど）の時期

Ａ．食事の形式と家庭環境について

①図184参照。

②テーブルまたは，食卓。

③昭和45年あたりから，現在も続いている。

④本人，夫（私の祖父），息子夫婦，孫3人。

⑤福岡県福岡市南区。

⑥住宅地。

⑦戸主は私の父だから……内科開業医師。

⑧変化していない。

Ｂ．食事をする部屋について

①“食堂”と本人は呼ぶそうだ。

②食後の雑談を除けば，食事以外には利用していない。

③「8畳くらいじゃなかね。調度は，冷蔵庫に食器棚に，ガスレンジと暖房もあるじゃないね」

Ｃ．どのようなすわり方で食べたか

①図185参照。

②「だいたいそろって食べよるじゃんね。戸主は時々いないて書いとかんね。ははは」

③板ばり

④椅子なので，もちろんなし。

Ｄ．ご飯の他には，何を食べ飲んでいたか

①朝は，家族がそれぞれ好みにより，和食または洋食（トースト）であるが，本人はほとん

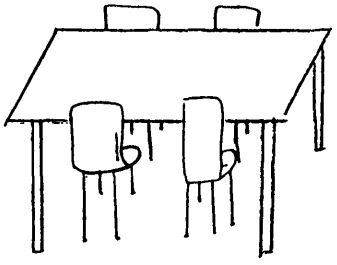


図184

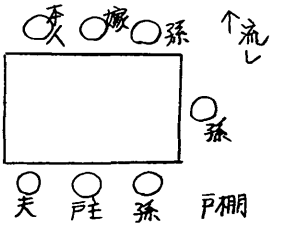


図185

ど和食。つまり，みそ汁，つけもの，卵を毎日ではないけれども食べているようだ。

②昼は，朝母が弁当を作るので，そのおかずの残りなど。「わりあいパンを食べる時も多かよ」と言っていた。

③晩は，魚または肉と，あと野菜は十分に取るように心がけている。品数としては，3品以上5品以内というところ。

④父（戸主）が鶏肉を食べないので，皆が鶏肉のとき，父が牛肉だとか，また近頃は，だいたい皆同じであるが，やはり父の物が優先的になるようだ。子供たちが小さい頃は子供と老人とでは好みも異なるので，子供の分を別々に作ることが多かった。

E．食事のときのご飯の給仕について

①嫁。場合によって祖母（本人）や孫がよそうがいずれにせよ女の人。

②戸主（父）が最初，その次は祖父，あとは決まっていない。

③1日1回，仏様にご飯をお供えする。

④我家の夕食は，父が帰る頃，およそ6:30くらいからであるが，祖父は6:00頃から，毎晩欠かさず酒を飲む。父は，毎日ではないが，ビールを飲むことが多い。時には祖母も……。

F．食事のあとかたづけ

①しない。

②食事が終わり，頃あいをみて（たいていの場合父が席を立ったころ），女達が。

③祖母と母と娘3人のうち，平均3人くらいで，かたづけをするが，祖母はよく働く方である。（母が父の手伝いで働きに行くことが多いので，祖母は家の事をやってくれている。）

④食器棚。

G．食器の共用について

①湯のみとお茶わんは決まっている。

②共用のおかずと考えると漬物や，つぎ分けるほどの量がない物などは，1つの器に盛って，それを各人が取る。

③ありません。

H．食事中にしてはならないことについて

①②③とも特別に言わない。

④姿勢や行儀については，比較的厳しい。

I．食事中のあいさつについて

①②皆が声をそろえて言うことがないが，各自で言っていると思う。

J．食事中の話題について

①子供が主に話すが，私が思うには祖母も，かなり話すのではないだろうか。

②その日の出来事や，祖母の場合は，テレビを見てのおもしろい話やニュースなど。

調査者　No. 233（f）	調査日　昭和59年1月5日（木曜日）
被調査者　O.M.　　性別　f	出生年　明治43年（73歳）（第1子）
出生地　愛媛県新居浜市	
生家の職業　会社員	
現住所　愛媛県新居浜市N町	
住所の変更とその年度	
最終学歴　女学校	結婚　昭和6年（23歳）
被調査者との関係　祖母	

被調査者の場合，箱膳を使用した記憶はないということで，ちゃぶ台の時期から始める。

A．食事の形式と家庭環境について

被調査者は子供のころから，結婚して被調査者の末子が独立して数年後までの期間をちゃぶ台で食事をしている。が，それをちゃぶ台とは称せず「お膳」と呼んでいる。被調査者が両親，兄弟と住んでいた時期（独身時代）と配偶者，子供と住んでいた時期（結婚後），末子の独立後（老後）の3時期に分けられる。生家の父と夫はともに会社員で家庭環境は結婚の前後で大差なく，ただその家庭における彼女自身の役割と立場が変っただけである。図186は独身期及び結婚後の形式でaは父または夫の席，bは子供（b_5 まで書いたが時期により人数は変わる。子供席順は不定。）cは母または妻の席。したがって独身期はb，結婚後はcが被調査者の席である。老後二人の生活では，図187の形式となるが，部屋の「奥」が夫の席となる。住環境は工場，商店，民家の入り混ったごくふつうの地方の町である。

B．食事をする部屋

部屋に対する呼称は特になし。食事以外の用途は広い。就寝には用いられないが，他のあらゆることに利用されていた。休息，子供の遊び場，団らんなど。ただし食事を作る台所とは別のスペースになっている。部屋は八畳くらいの畳の部屋だが隣室との間のふすまは冬以外は開け放たれていることが多かったので，実際には広々した印象だった。時代によりラジオ，テレビなどがあり，部屋の端には座ぶとんが積まれていたが，家具などはほとんど他の部屋に置いてあった。

C．すわり方

席順の順番は，A．の項に述べたとおりである。被調査者は長女であるから，独身時代も食事の準備を手伝うので，食事の席につくのが遅く，台所との出入口の近くの席（b_5 や b_3 の席）につくことが多かったが，他の子供より先に席につくときは，b_1，b_2 などの位置にも座った。原則として全員揃って食べた。部屋はタタミ敷き，座ぶとんはみんな使っている。

D．御飯の他に食べていたもの

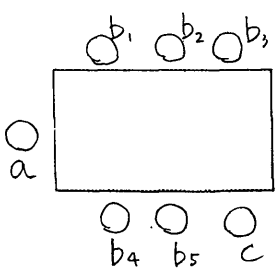
朝……味噌汁，漬物，魚の干物など。

50才を過ぎたころからは，パンと紅茶と目玉焼などという日も週に1日くらいあった。

昼……漬物，前日の残りのおかず，朝の残りもの，常備菜など。ただし，休日はめん類が多かった。

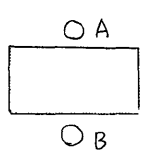
晩……煮魚，野菜の煮物，味噌汁，漬物，常備菜類。

特別にちがうものを食べていた人はいないが，魚の切身の大きいものは父親や男の子につけるという程度の差はあった。



（I）

図186



（II）

図187

E．給仕について

給仕は母親であり妻である立場の人が行う。順序は父親（＝夫）が一番で，給仕する人のは最後，あとは茶碗の重なっている順に上からよそい，茶碗の持主へまわされる。

神仏へのお供えは結婚後は朝，食事の前に御飯とお茶を供える。季節の初ものは適宜に供える。独身時代のことはあまり憶えていないということである。

晩しゃくは，生家ではなし，結婚後はあり。夫の気の向いたときに，夫が自分で台所で準備する。飲むのも夫だけ。週に2～3日程度で週末は必ずある。日本酒に限る。

F．あとかたずけ

食べ終ったあと茶碗でお茶を飲んだ。箸はゆすがずに食器と一緒に洗う。全員が食べ終り，少し話などしてから，おもむろに妻と女の子供が食器をさげて，洗う。洗った後はふきんでふいて，戸棚へかたずける。

G．食器の共用

大皿，大鉢，漬物鉢などが共用。魚などは一人ずつ盛られたが，野菜の煮物，漬物，つくだ煮，常備菜などは共用の器に盛り，各自が自分の取り皿にとって食べた。

箸箱は，お弁当以外には用いたことがないということである。

H．食事中してはならないこと

箸を食べること以外の目的に使うこと（箸であそぶ，食器をたたくなど）。まよい箸。落としそうになる程たくさんはさむこと。食べる順序については特になし。

おしゃべりは，ふつうに話すのは良いが，大声を出す，下品な話題，口に食べものを入れたままで喋ることは，しかられたし，しかった。姿勢は女性に関してのみ，正座を崩さないこと。その他に食事中にしてはならないことは，給仕以外の目的に立つこと。

I．あいさつ

食べはじめ……「いただきます」

食べ終り……「御馳走様でした」

しかし次男だけはキリスト教を信仰していたので，「天にまします父よ……（云々）今日のかてを与え給うたことを感謝します」と3分くらい何か言っていた。が，他の人は気にせずに食べはじめていた。

J．話題

全員が話をしていた。話題はほとんど日常的な話題，たとえば，共通の知人，親せきのこと，学校のこと，畑のこと，食事の料理のことなど。

被調査者が，ちゃぶ台から椅子とテーブルに移行したのは，末子が独立して，夫と二人になり，家を改装して，ダイニングキッチンにしたときである。被調査者が58才のとき（昭和41年）である。

A．食事の形式と家庭環境

形式は椅子とテーブルで夫と向い合って食事をする。図はB．食事をする部屋の項に記す。それに対する呼称は特になし。昭和41年の家の改装を機に，家族が少なくなったのと年老いたという理由で，便利なダイニング・キッチンにして椅子とテーブルに変えた。住環境は工業地。戸主（夫）の職業は，初めは会社員，現在では無職。住所は，愛媛県新居浜市N町。

B．食事をする部屋

食事をする部屋は台所を兼ねているので，「台所」と呼んでいる。その部屋の用途は食事と食事の準備である（図188）。部屋の広さは8畳くらいで，板間でテーブルと椅子のスペースに

は，じゅうたんを敷いている。

椅子は4つあるが，被調査者はAの位置。夫はBの位置に座る。

C．すわり方

座席の順番は，図188のとおり，向い合って座る。原則としてはそろって食べる。部屋は板間であるが，食事をするスペースはじゅうたんを敷いている。座ぶとんは椅子の上に，薄い小型の座ぶとんを置いている（4脚全部に）。

D．御飯の他に食べているもの

朝……味噌汁，漬物，魚の干物など。

被調査者は週2日くらいはパンと紅茶，ジャム，果物などを食べるが，夫は毎日御飯である。

昼……主食が御飯のときは他に味噌汁，漬物，前日の残りもの，朝の残りもの，常備菜など。めん類やさつま芋やとうもろこしを主食とする日もある。

夜……魚料理（焼魚，煮魚，お刺身），野菜の煮物，味噌汁，漬物，常備菜類など。

特別にちがったものという程ではないが，朝と昼は，各自好きなものを適当に食べることが多い。被調査者が起きたときには，夫は朝食を食べ終っていることもある。

E．給仕

御飯をよそうのは被調査者であるが，ひとりのときは夫も自分で給仕する。

よそう順序は，夫が先，被調査者があとである。神仏へのお供えは，御飯を炊いたときに御飯を供え，お茶は毎朝供える。季節の初物と，畑でその年にはじめて収穫した野菜やとうもろこしなども供える。

晩しゃくは，ほとんど毎晩だったが，医師に止められてから週に1～2日になった。被調査者は飲まない。

F．あとかたずけ

食べ終ったあと，茶碗や箸を湯茶ですすぐことは意図的にはしないが，茶碗でお茶を飲むので，茶碗だけは，すすいでいることになる。

食べ終ったら，被調査者が，食器をさげて洗う。洗ったあとは，カゴにふせて，ふきんをかけ，そのままガス台の横に置いておく。

G．食器の共用

皿，鉢，漬物鉢，常備菜用のふたものなどは共用。茶碗，汁椀，取り皿などの他は，ほとんど共用である。魚の干物，刺身，野菜の煮物，酢の物，漬物など，御飯と汁物以外は共用の食

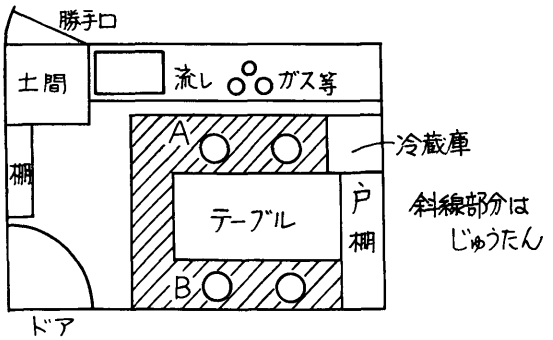


図188

器に一緒に盛る。

箸箱は，以前からずっと使用していないし，現在も使っていない。箸は，食器と同様に扱っている。

H．食事中にしてはならないこと

ちゃぶ台の時期で書いたのと，ほとんど同じだが，取りたてて，してはならないこととして意識しなくても，習慣的にしない。夫がしない様に言われているのは，二人で食べるときに新聞を読まないこと。

I．あいさつ

食べはじめ……いただきます。

食べおわり……御馳走様でした。

J．食事中の話題

おもに話すのは被調査者で，夫は聞いていることの方が多い。

話の内容は，子供，孫，親せきの近況や，病気や健康のことなどが主である。

ちゃぶ台の時期は，被調査者の結婚の前後で，被調査者自身の役割は大きく変化したが，それぞれの家庭において，同じ立場の人がしていたことであるから，一つにまとめて書いた。被調査者の幼少のころは，被調査者の祖父も一緒に住んでいて，同じちゃぶ台で食べていたはずであるが，ほとんど記憶にないということなので，席順や給仕の順などについて変化があったかもしれないが，全面的に省略した。

調査者　No. 237(f)	調査日　昭和59年1月4日(水曜日)
被調査者　O.R.　　性別　f	出生年　明治38年(78歳)(第3子)
出生地　兵庫県竜野市	
生家の職業　農業兼製紙業	
現住所　兵庫県姫路市O町	
住所の変更とその年度　大正12年現住所へ移転(結婚のため)	
最終学歴　尋常小学校	結婚　大正12年(18歳)
被調査者との関係　父方の祖母	

1．お膳（箱膳など）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

新聞の2分の1ぐらいの大きさの箱膳の上に，汁椀，飯茶碗，小皿，箸を並べて，銘々が，自分の前に置いて食事をした（図189）。

箱膳は塗りのもので，対のふたがあり，重ねるのに都合良くできていた。「ふたをしたら，箱の形になるさかいに，『箱膳』いうとった」そうである。

箱膳は，祖母が生まれる前から，ずっと続き，祖母が結婚してからは，ちゃぶ台に変わったが「(山) 奥のほうやったら，終戦のときまで」箱膳を使っていた。しかし，嫁入りの時に，いちおう箱膳は持っていったそうだ。

この時期，祖母の家族は，戸主である祖母の父，母，祖母の祖父，兄弟が4人の計7人に，「若い衆が4人か5人」を加えて，11人～12人の，大人数だった。家は農村にあり，村の戸数は，30戸もなかった。戸主である曾祖父は，農業と製紙業を兼業していた。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は，「ちゃのま，ごはん間」と呼ばれていた。四畳半ほどの広さの板間で「台所の土間から上がる，あがり口のとこにも，もうちょっと板間があって，若い衆はその辺で食

べよった」（図190）

茶の間は，家の中でも一番北にあって，暗くて寒かったという。「部屋の北べりに，明かりとりの戸があって，その横べりに，大けえ水屋が置いたった。真中に，囲炉裏があった」

茶の間は，囲炉裏があったので，夜なべ仕事にも使われた。夜の照明器具は，ランプくらいだったので，それを，土間と茶の間の間に柱につけて使った。

C．どのようなすわり方で食べたか

戸主（祖母の父）が一番奥に座り，以下，長男，他の子供，母の順序で並ぶ。あがり口の板の間には，若い衆が座っていたらしい（図191）。

家族の座る囲炉裏の回りは，「むしろとござのあいのこ」のようなものが敷かれていた。これは自家製だったらしい。若い衆は板の間に直接座って食事をした。

朝・昼・晩とも，いっせいに食事をとるのが常で，学校に行っている子供も，昼には帰ってきたそうだ。

むしろを敷いていたので，座布団は使わない。「あったけど，祭りと正月にも使わへんかった。嫁いりのときくらいや」そうである。

D．ごはんのほかの食べ物

朝……「お汁（つい）とつけもん。もろみ。」

昼……「つけもんともろみ，野菜の炊いたもん。」

晩……「お汁（つい）。豆の炊いたんや，野菜の炊いたもん。みそ。魚もん（丸干しや，めらし（めざし？））

お茶は急須を使わず，どびんに直接にお茶の葉を入れて出していた。お茶の葉や，つけもの，味噌やもろみ，野菜など，たいていのものは自家製だった。ほとんど油は料理に使われなかった。

また，父親が魚料理などで量の多いものをとる他には，別に食事の内容に差はなかったらしい。

E．食事のときのご飯の給仕

汁ものやご飯の給仕は，母親や大きい女の子供がやった。よそう順序は，まず「仏さんの御飯さん」，それから父親（祖母の），祖父，長男，若い衆，子供たち，最後に母親，となる。仏壇には毎朝，御飯をそなえたが，神棚へは盆と祭りと正月にだけだった。

晩しゃくは，毎日とまではいかないが，父親がみそを肴に一合ほど飲んでいたらしい。

F．食事のあとのかたづけ

食べ終わりには，漬けものとお茶とで，汁椀，飯茶碗，小皿などをゆすいだ。「箸はな，よ

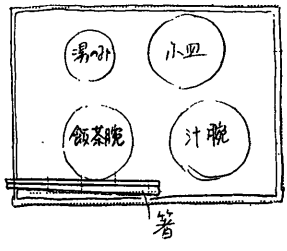


図189

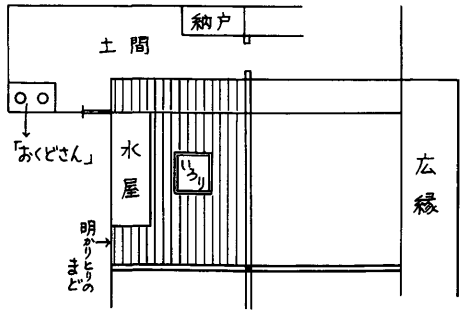


図190

うねぶって，食べかすが残らんようにし，と言われたんや」そうだ。

ゆすいだ茶碗は，箱膳の中に入れ，その上からふたをして，水屋の前に各自で重ねて置かれた。食器（茶碗類と箸）は，何日かごとに湯であらためてよくゆすぎ，ふき浄めた（その時使った湯は塩を混ぜて，家の牛にやったそうだ）。

湯で洗った食器は，一度水屋におかれて，それからまた箱膳の中に入れられた。

G．食器の共用について

共用の食器には，鉢，どんぶり，大皿などがあった。みそ，もろみ，野菜の煮つけなどの盛りつけに使われていたという。

このころ，箸箱は使われなかった。

H．食事中にしてはならないこと

箸の持ち方のしつけが，厳しかったそうである。箸を持ったままその手で，汁椀や湯のみを持って飲んではいけない，とか，箸で物をぶすぶすつきさして，くずしてはいけない，など。食べる順序でしてはいけないことというのは別になかった。

食事中，食べる邪魔にならない程度のおしゃべりは許されていたが，口の中にものが入っているのにしゃべっていると，きつくおこられたそうである。

食事中の姿勢は「おひざま」（正座）で，足をくずすと注意された。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめのあいさつはなかった。食べ終わったときは「ごちそうさん」と言った。

J．食事中の話題について

食事中の話題の中心は父親。田畑の仕事の割りあてや，作物の出来のようす，天気，村の年中行事などについて話したという。子供は聞き役で，御飯をかきこむのに夢中だったので，生返事をしては怒られたそうだ。

2．ちゃぶ台の時期

A．食事の形式と家庭環境

「ごはんの間」で，円型の小さなちゃぶ台の回りを一家でとりかこむようにして食事をした。その台のことは，「ちゃぶ台」「お膳」と呼んでいたそうだ（図192）。

ちゃぶ台での，食事は，大正15年くらいから昭和の55年まで，祖母の家では続けられた。この時の家族構成は，戸主である夫，妻（祖母本人），子供が7人と，やはり今に比べると大家族である（ただし昭和39年～55年は，夫婦2人だけ）。村は，昭和30年代までは50戸くらいの農村であったが，その後宅地造成が進み，昭和50年代には住宅地になった。

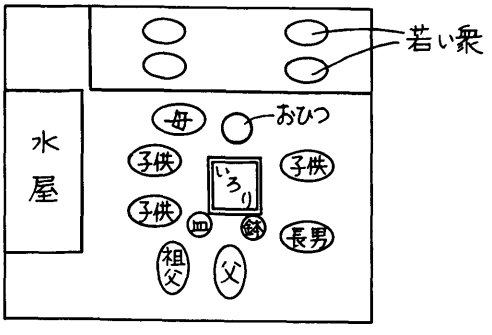


図191

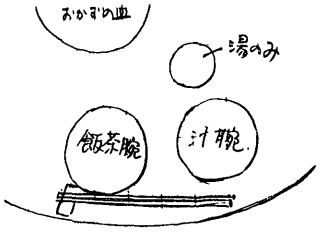


図192

村の横に巾50mほどの川があり，戸主（祖母の夫）は小型の船で，みかん，米などを大阪，神戸に運ぶ仕事をしていた。

食事の形式の変化は，「世の中のはやり」だからだそうだが，家の広さが変わった（居住部分も，収納部分も狭くなった）からではないだろうか。

B．食事をする部屋について

やはりこの時代も「ごはんの間」と呼ばれていた。部屋の中央に，堀り炬燵があったので，冬に子供たちが，そこで暖をとりながら遊んだり，祖母自身も編物をしたりするのに使ったそうだ。

広さは4畳半で，北側のかべに水屋を置いていた。柱に日めくりのカレンダーをかけ，窓の横の壁には皇室御一家の写真を貼ってあったという。

C．どのような座わり方で食べたか

あがり口に近い所に祖母本人が座り，夫は奥のほう，子供は夫と祖母の間に座った（図193）。うすい座布団が使われたそうである。

D．ご飯のほかには，何を食べていたか

朝…みそ汁，漬けもの，まめ。

昼…みそ汁，漬けもの。

夜…野菜の炊いたもの，漬けもの，お汁，川でとれた魚，貝の炊いたもの。

お茶は，昭和の20年代までは，急須を使わず，土びんに直接にお茶の葉を入れてだしていた。

E．食事のときのご飯の給仕について

御飯や汁の給仕は祖母の役目だった。よそう順序は「仏さん，お父さん，子供の大けな順」だった。仏壇へは，毎日「御はんさん」をそなえたが，「神さんには，あんまりそなえへんかった」らしい。晩しゃくは，夫が御飯のおかずを肴にして，毎日一～三合ほど飲んだらしい。

F．食事のあとかたずけについて

食べおわったあと，お茶で軽く食器をゆすいでから，祖母と女の子たちが流しのほうへ運んだ。家の中に井戸を作ったので，食事ごとに水で食器をゆすぎ，ふいてから水屋の中にしまった。

G．食器の共用について

どんぶり，大皿，小皿，汁椀，箸おきなどが，共用の食器であった。箸箱は親類からもらったので，終戦前後の少しの間使ったが，たべかすが残って衛生的でないので，すぐにやめた。それからは弁当につけたくらいで，ほとんど使われなかった。

大皿は，野菜の炊いたもの，豆の炊いたもの，小皿には魚の炊いたもの，つけものが盛られていた。

H．食事中にしてはならないこと

箸で皿や鉢をひきよせる，かちゃかちゃと箸で碗などをたたくなど「箸ぐせのわるい」ことをすると，注意した。また，ひじをついたり，足をくずしたりするのも，いけなかった。

御飯の上から箸をつきさして，遊んでいると，注意した（仏さんごっこだそうである）（図194）。

I．食事中のあいさつ

食べはじめ…「いただきます」，1～2才の，舌がまわらない子供は，「まんまんちゃん，ああ。」と，いった。

食べおわり…「ごちそうさん」

J．食事中の話題について

学校のできごと，町内会のことなどが話題の中心。戦時中は，戦局についてもいろいろ話した。話を切りだすのは長男や祖母本人で，子供との会話が多かった。

3．現在の椅子式テーブルの時期

A．食事の形式と家庭環境について

陶器，磁器の食器を使い，メインのおかずは，各人ごとに盛りわけて出される。長方形のテーブルに並べられ，椅子に座って食事をとる。洋式のテーブルだが，「お膳」とも呼ばれている（図195）。

昭和55年から祖母は伯父の家に同居することになったので，祖母にとって，椅子式テーブルの食事はそれからはじまる（伯父宅では，昭和35年ごろからこの形式である）。

祖父，伯父（戸主），伯母，の3人家族で，伯父宅は祖母の家から徒歩で4～5分の同じ町内，新興住宅地の中にある。戸主は伯父で，製鉄会社の現場社員を一昨年に定年退職した。3人の娘があったが，皆結婚して家を出ている。

祖母にとって食事形式の変化の原因は，伯父との同居をはじめたことにある。

B．食事をする部屋について

ダイニング・キッチンなので，「台所」と呼ばれている。「ごはんの間」とも言うが，「食堂」とは呼ばないらしい。

「台所」にはテレビがおいてあるので，伯父たちの憩いの場所でもある。子供が小さいころには，勉強机かわりにテーブルを使った。「台所」の広さは10畳ぐらいで，洋室。炊事部分と食堂部分は，つくりつけの食器棚で，いちおう区分けされている。

C．どのような座り方で食べたか

テレビのよく見えるところが「よい席」なので，伯父が座る。台所がわに伯母，壁がわが祖母の席である。

朝，昼は，そろって一緒に食べるが，夜は伯父だけ遅くに食べる。子供のいた頃は，朝昼夜，ともに，ばらばらだったそうである。食べる部屋の床は板ばり，そこにアームのついていない椅子をおいている。座布団は，椅子用のうすいものを使っている。

D．ごはんの他の食事

朝……ご飯ではなく洋食。トースト，コーヒーか紅茶，副食にサラダやハムエッグ。（時々，和食にするが，その時は，みそ汁，しゃけの切り身，のり，つけもの，など。）

昼……朝の残りもの，前日の晩御飯の残りものなど。飲みものは，お茶。

晩……お汁，野菜料理と肉料理それぞれ一品くらいずつ。油を使った炒めものや，天婦羅，

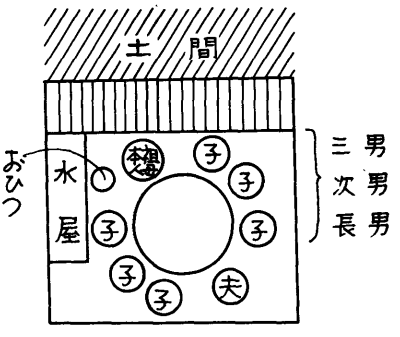


図193

図194

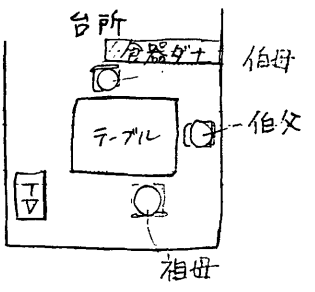


図195

フライが多い。

特に1人だけ違ったものを食べることはない。量の多いものは戸主（伯父）がとる。

E．食事のときの給仕

給仕は伯母がする。よそう順序は，伯父が一番最初（子供が居たころも）。

神棚がないので，御飯のおそなえは仏様にだけ。晩しゃくは，伯父の健康上やっていない。

F．食事のあとのかたずけ

食べ終えたあと，食器はすぐに台所の流し台に伯母が運ぶ。晩ごはんの食器はすぐに洗い，朝食の食器は昼食のあとでいっしょに洗う。これも伯母の役目である。

洗った食器は食器棚にしまわれる。

G．食器の共用について

共用の食器は，どんぶり，汁茶椀，湯のみ，取り皿（小皿），スプーン，フォーク，汁椀，小鉢など。つけものなどが盛られている。箸箱は使われていない。

H．食事中に，してはならないこと

だいたいちゃぶ台の時代と同じ。椅子に座って食事をするので，足を組んだり，ぶらぶらさせたりするのはいけない。口の中に食べものを入れたままでしゃべったり，くちゃくちゃと音をたててはいけない。また，箸をやたらになめ回すのも，注意される。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめ……「いただきます」

食べおわり……「ごちそうさまでした」

J．食事中の話題について

伯母と祖母が話し役で，伯父が聴き役。近所のうわさ話，子供たちの近況，などが主な話題だそうだ。

調査者　No. 238(f)	調査日　昭和59年1月9日(月曜日)
被調査者　K.C.　性別　f	出生年　明治43年(73歳)(第1子)
出生地　静岡県志太郡N村	
生家の職業　商人(糸屋)	
現住所　静岡県藤枝市	
住所の変更とその年度	
最終学歴　県立F女学校	結婚　昭和5年(21歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

家族構成は，祖母の両親と祖母，ねえや（女中）の4人。各自決まった箱膳をつかい，箸，茶碗も自分のものが決まっていて，その箱膳の中に入れてしまっていた。お膳で食事をとる形式は昭和10年頃まで続き，形式がちゃぶ台へと変化するが，その理由として，ねえやが徴用で家からいなくなり，また父や叔父達が生まれたため形式が簡略化。と同時に，ちゃぶ台の普及が考えられる。

この時期の住所は，静岡県志太郡N村。住環境は宿場町のなごりか，商家が並んでいた。八百屋，菓子屋，下駄屋，油屋 etc。祖母が育った家も商家で，糸屋をやっていた。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は，「茶の間」または「台所」と呼んでいた。食事をする場所であると同時に，ねえやの寝起きする部屋でもあった。部屋の広さは，縁つき6畳で畳敷き。あまり明るい

部屋でなく，長火鉢（年中置いてあった），食器戸棚などが置かれていた。

C．どのようなすわり方で食べたか

三食ともそろって食事をしたが，昼食時は父親が商用でいない時があり，その場合は，家にいる人達でそろって食事をとった（図196）。食べる場所は畳で，座布団は皆がつかった。

D．ご飯のほかに何を食べ，何を飲んだか

飲み物は，朝昼晩を通してお茶のみ。

朝食は，御飯の他に，みそ汁，おしんこ，梅干しなど。昼食は，御飯の他に一品。これは，前の晩の残りなどで，適当にあるものですませた。夕食は，御飯の他に，吸い物またはみそ汁と，他に一品とおしんこ。一品というのはほとんど魚，野菜類で，焼き魚とか煮魚または煮物。そして吸い物，みそ汁の具は，ほとんどと言っていいほど豆腐だった。家族の間で品数の差はなかったが祖母の父親が晩酌をしていたので，時々おさしみとかを父親だけに出したりした。

E．食事のときのご飯の給仕について

祖母が子供の頃は，主にねえやが給仕をして，よそう順序は，父→母→本人（祖母）→ねえや。結婚してからは，祖母がすべて給仕。よそう順序は，父→夫（祖父）→母→子供（父や叔父）→本人（祖母）。晩酌は，祖母の父親が毎晩していた。神仏へのお供えは，結婚前は祖母の母親がやり，結婚後は祖母の役目であった。

F．食事のあとのかたずけについて

食べ終わった後，茶わんや箸を湯茶でゆすぐことはしないで，ねえやがすべてかたずけ洗い，茶わんと箸は個々の膳にのせてしまい，他の食器は戸棚やひき出しへかたずけた。また，ねえやの膳だけはかたずける棚が違っていた。

G．食器の共用について

箸と茶わん以外はすべて共用で，大皿，小皿，おてしょ，わん，小鉢など。

箸箱は，膳をつかわなくなるまで各自のがあった。

H．食事中にしてはならないことについて

*箸の上げ下ろし

①まよい箸（どの皿の料理を食べようかとグズグズして箸をウロウロさせること）

②さぐり箸（まだ残っているかなど箸で器の底をさぐること）

③そら箸（食べようといったん箸をつけながら食べないで箸を引くこと）

*食べる順序

- 汁→飯から食べ始める。
- 菜と菜の間にはご飯を食べる。

*食事中のおしゃべり

話をしながら食事をとり，犬喰いといって，ただうつむいて黙々と食べることは嫌われた。

*食事中の姿勢は正座

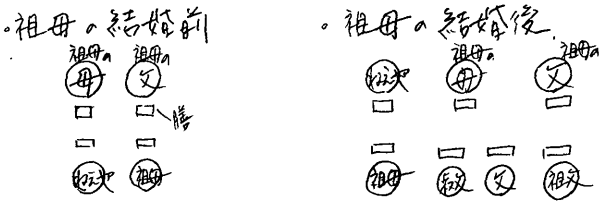


図196

*その他食事中にしてはいけなかったこと。

トイレにたってはいけない。

I．食事中のあいさつについて

食べ始めは，皆が揃ってから「いただきます」と言って食事を始めるが，食べ終わりは食事がすんだ人から「いただきました」と言って席をたつ。

J．食事中の話題について

その日，外へ出ていた人が話題を提供。または，家族の中で学校へ通う者がいるのならば，その子供が中心となって話した。

家の主人が話の中心となる時は，世間話や商売の話が主で，子供の話の中心となるときは学校での出来事が主であった。

2．ちゃぶ台の時期

A．食事の形式と家庭環境について

ちゃぶ台で食事をとっていた時期は，昭和11年から，戦争をはさんで今から15年前，つまり私が小学校へ入学する頃までである。それまでの商家といった感じの家を壊し，新築した時点で，食卓がちゃぶ台からイスとテーブルに変わったのである。

この時期の家族構成というのは，私の父の弟や妹が生まれ，父が母と結婚し，祖母の両親が亡くなり，父の弟達が結婚して家を出て，私と弟が生まれてといった具合に，目まぐるしく変わり，ちゃぶ台の時期は，祖父母の両親，祖父母，父，叔父（4人），叔母（2人）という家族構成に始まり，祖父母，父母，叔父（1人），叔母（1人），弟，私の家族構成に終わったのである。

この時期の住所は，静岡県藤枝市。住環境は商業地。

戸主の職業は，教師（祖父）で，祖母の父親が営んでいた糸の商売は，戦争が始まる頃に廃業。

ちゃぶ台をやめて，イスとテーブルに変わった大きな原因は，家の新築である。それまですべて和室だった家から，洋間のある家へと変わり，食事をとる部屋は，ダイニング・キッチン。床の上にカーペットを敷き，イスとテーブル。洋間をとり入れた家の構造の変化とイス，テーブルの普及にともない，ちゃぶ台が姿を消していった。

B．食事をする部屋について

「茶の間」と呼び，食事をする時以外にはつかわない。6畳の畳の部屋で，茶ダンスやレンタン火鉢（年中置かれている）などが置かれていた。

C．どのようなすわり方で食べたか

朝食は，出勤時間に合わせて勝手に食べ，昼食は，家に残っている者でそろって食べる。夕食は，原則として全員がそろって食べることになっていた（図197）。

食事をとる場所は畳で，皆が座布団を敷いた。

D．ご飯のほかに何を食べ，何を飲んでいたか

朝食は，みそ汁，おしんこ，時々のりとか，納豆がついた。昼食は，弁当の残りとか，あるものですませる。夕食は，肉，魚，野菜をつかい二品。吸い物またはみそ汁。おしんこ。飲み物は三食通してお茶。

晩酌をする人がいなかったので，料理の差はなかった。

E．食事の時のご飯の給仕について

母がお嫁に来るまでは，祖母が給仕をして，母が来てからは，母が給仕をした。よそう順序は，祖父→父→叔父，叔母→祖母→私・弟→母。

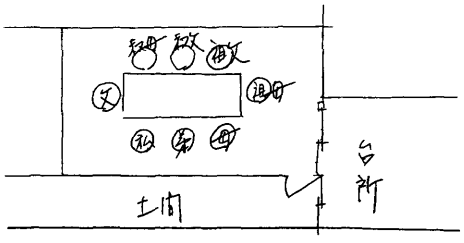


図197

神仏へのお供えは朝のみで，祖母の役目である。朝お供えのご飯を一番はじめによそって，それから皆のご飯をよそう。

晩酌はなし。

F．食事のあとかたずけについて

母が皆の食器をさげて洗い，食器棚や茶ダンスへかたずけることは祖母と二人でやっていた。

G．食器の共用について

茶わん，箸，湯のみ茶わん以外は共用の食器で，皿類，おてしょ，わん，小鉢など。

H．食事中にしてはならないこと

*箸の上げ下ろし—まよい箸。

*食べる順序—マナーとしての順序はあるが，それほどうるさく気をつけなかった。

食事中の姿勢は，男子—胡坐，女子—正座。

話をしながら食事をした。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめの「いただきます」，食べ終わってからの「いただきました」は，各自が勝手にしていた。

J．食事中の話題について

祖父が主に話して，話の内容は，祖父が小学校の教師をしていたので学校の話とか，あとは普通の世間話であった。

3．椅子式テーブル（現在）

A．食事の形式と家庭環境について

ちゃぶ台から椅子式テーブルに変わった頃は，叔父と叔母が一人ずついたため八人家族で，テーブルは楕円の広さの調節ができるものである。現在は，叔父も叔母も結婚して家を出て，私もN市にいるので，祖父母，両親，弟の5人で，楕円のテーブルも広くしてつかうことはないようである。

現在の住所は，静岡県藤枝市。ここ15年ほどで，家のまわりは変化してきている。前の道が拡張され歩道がつき，そのため土地を削られた家は引越してしまったり，昔からの商家というものは姿を消し，ハンバーガー屋，レンタルレコード，ブティックといった新しいものが並び始めている。私の家も商家であったし，家が大きかったので，新築のとき，道路側の土地に車が10台くらいはいるガレージを作り，今も近所の家の車を預かっている。そして現在，祖父は無職で父は高校の教師をしている。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋を「居間」と呼び，ダイニング・キッチンになっているので，TV やソファもあり，団らんの場となっている。広さは10畳ほど。

C．どのようなすわり方で食べるか

晩は皆がそろって食べるが，誰か帰りが遅くなるからといって待つことはほとんどなく，毎日同じ時間帯に夕食をすます。朝は皆バラバラだが，祖父母は一緒に朝食をとっている。昼食も家に残っている者が勝手にすます（図198）。

D．ご飯の他に何を食べ，何を飲んでいるか

*朝…みそ汁，おしんこ，卵とかのり，納豆，前の晩の残りなど。飲み物はお茶だが，その後

に，祖父母を除いてはコーヒーまたは紅茶を飲むことがある。

*昼…ご飯の時は，弁当の残りとか，ある物ですませる。また，パンと牛乳，卵とか，うどん，そば，という時がある。

*晩…炊飯器が二つあり，一方のので祖母が，祖父母用のやわらかいご飯を炊いている。料理は皆同じ。

E．食事の時のご飯の給仕について

給仕は祖母と母がして，よそう順番は，祖父→父→祖母→弟，私→母。神仏のお供えは毎朝祖母の役目。

晩酌は現在，祖父がしている。

F．食事のあとかたずけについて

母が食器のあげさげ，かたずけ，すべて一人でやっている。

洗った食器は乾燥機へ。

G．食器の共用について

茶わんと箸，湯飲み茶わん以外はすべて共用であり，皿類，おてしょ，わん，小鉢ほか。

H．食事中にしてはならないこと

*箸の上げ下ろし…迷い箸。また，箸どおしで料理をつまみ渡しをすること。

*食べる順序…あまりこだわらない。

*食事中の姿勢…椅子に座っているが，祖母は時々，椅子の上で正座をしている。

*食事中のおしゃべり…話をしながら，なごやかに食事をとる。

I．食事中のあいさつ

各自が勝手に「いただきます」「いただきました」と言う。食べ始めは皆同じだが，食べ終わった人から席をたつ。

J．食事中の話題について

今は主に弟が学校の話とかして，話題の中心になっているようである。

調査者　No. 241（f）	調査日　昭和58年12月20日（金曜日）
被調査者　N.T.　　性別　f	出生年　明治36年（81歳）（第5子）
出生地　香川県綾歌郡S村	
生家の職業　農業	
現住所　香川県綾歌郡Y村	
住所の変更とその年度　綾歌郡—香川郡（大3）—現在の住所へ（大8）	
最終学歴　K実業学校	結婚　大正8年（16歳）
被調査者との関係　親類	

A．食事の形式と家庭環境について

被調査者は，箱膳，食台，テーブルの三段階を経験している。

まず箱膳について：被調査者は幼い時から箱膳を使い，昭和17 or 18年（下男がいるまで）

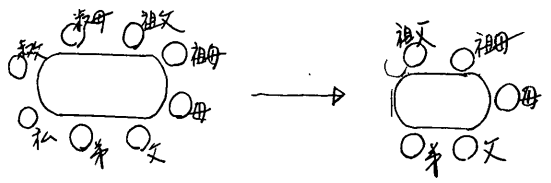


図198

まで使っていたそうだ（図199）。この時期の戸主の職業は，大地主（全国的に見れば中地主程度）。住環境は農業地。住所は香川県綾歌郡Y村。家族構成は義祖父母・義父母・夫・自分・義弟3人・義弟の嫁・下男2人・下女・子もりの計14人。被調査者は3才の時祝膳を贈られた。これは 20 cm³ ぐらいの小型のもので，箱膳の下に引き出しがあり，その上に棚があり，その中に飯碗・湯飲み・汁椀・平・壷碗・箸（すべて蓋付き）を入れて文箱のような蓋をする。戸主の膳は，この祝膳と同じ型で 50 cm³ ぐらいの大きさで箸は塗り箸。戸主以外の者は 35 cm 角，高さ 15 cm ぐらいで引き出しがなかった。下男・下女の箸だけ白木だった。箱膳の時期の女中部屋を改造して新しく台所を作り部屋変えをしたので，食台に変化する。

食台について：食台（しょくだい）は昭和17 or 18年ごろから昭和42年まで使用した（図200）。この時期の戸主の職業・住環境・住所は箱膳の時と変わらない。家族構成は義祖父・夫・自分・子供（男3人女3人）6人の計9人。食台（しょくだい）といって，長さ 1．5 m，巾 40 cm ほどの長机に引き出しが2つ付いていて，1つの引き出しに2人分の箱膳の品を収納した。時には3人分収納もした。また家を改造し部屋変えをしたので椅子式のテーブルに変わった。

テーブルについて：昭和42年から現在まで使用（図201）。この時期の家族構成は自分・子（女）・嫁・孫2人（男）の計5人。戸主である被調査者の職業は無職。住環境は農業地。住所は変わらず。「テーブル」と呼んでいる。普通のものだ。

家の改造によって台所が部屋変えになったから，箱膳から食台さらにテーブルへと変化したというより，それを機会に新式を取り入れたということだろう。この辺りでは最先端を行っていたということだ。

B．食事をする部屋について

C．どのようなすわり方で食べたか

箱膳の時期：食事をする部屋を「お台所」と呼んでいた。お台所は食事だけに利用した。お台所は9畳のタタミ敷き，それに3畳ほどの大きさの板の間，ちょうど箱膳の高さぐらい (15 cm) 低いのだが，から成っていた。調度はなく，お台所にくっつけて作られているとりこみ部屋（2畳の広さ）に棚が作られている。そこに箱膳をかさねて収納していた。戸主から下男・下女までみんなそろって食べた。座ぶとんは畳の上に座る者はみな使っていた。板の間の上に座る下男・下女は円座というわらでこしらえたものを使っていた。座席の順番は図202に記す。向かい合って食べた。昔の上座と今の上座の左右が逆だということだ。

食台の時期：食事をする部屋のこと「お台所」というのは変化せず。お台所は食事だけに利

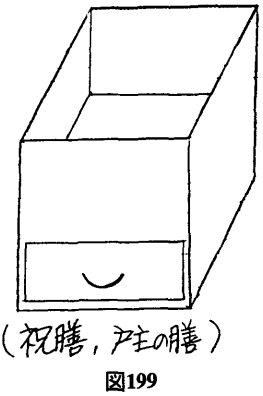


図199

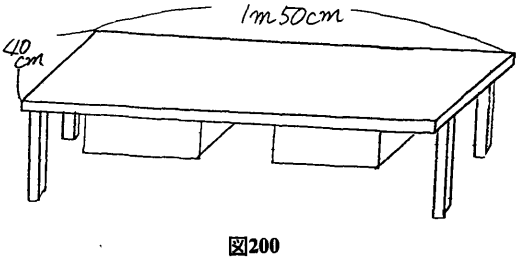


図200

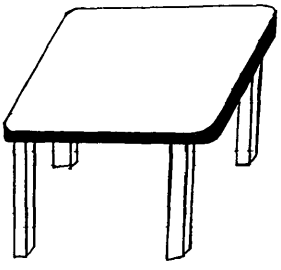


図201

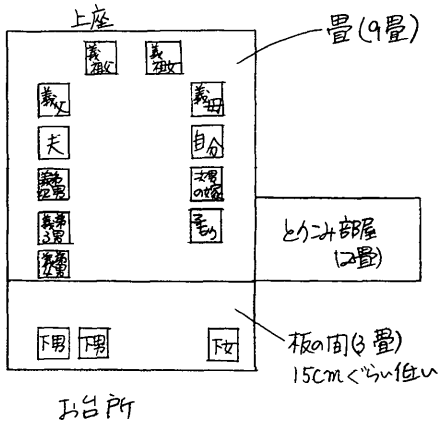


図202

用された。お台所は6畳の広さの板の間。調度として食器棚があった。食器棚には来客用のものを10人前ずつ箱に入れて収納した。日常使用するものは食台の引き出しにすべて収納した。みんな座ぶとんを敷いた。みんなそろって食べた。座席の順番は図203に記す。食台を2つくっつけて向かい合って食べた。農繁期に雇用人を使った時は別の調理台の上で食事をした。

テーブルの時期：食事をする部屋のことは「お台所」と呼んで変化なし。お台所は食事だけに利用。お台所は6畳の広さの板の間。調度は流し台・調理台・三角棚・コンロ台・冷蔵庫。椅子式なので座ぶとんは使わない。被調査者と子（3女）と嫁は必ずそろって食べるが，2人の孫はそれぞればらばらに食べる。座席の順番は図204に記す。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

箱膳の時期：1日4食だった。6:00朝食—ご飯・おつけもの（葉菜，根菜，しょうがみそ・ねぎみそ・やきみそといったみそざい，らっきょ，うめ）・お茶。10:00朝飯（あさじや）—ご飯，おみそ汁（主にうどんの打ち込み汁で具に野菜類で大根・さといも・あげがは入っている）。14:00お昼—ご飯・醤油豆などの簡単なおかず・おばん茶。19:00 or 20:00夕食—ご飯・いささかごちそう（おさば・いわし・いかを煮たもの，かぼちゃなどの煮物）いささかごちそうも2品ぐらい。寒い時にはご飯の代りにすいとんにすることもあった。農繁期だけ16:00おやつ—ホッポロ焼きとかさつまいもがあった。みそざいは，千石（2500俵）の年貢がないと食べられない品だった。また煮物もお醤油で煮ているのでうらやましがられるものだったらしい。そして戸主から下男・下女までみんな同じ物を食べていた。「そう考えたらうちは平等だったんやねえ。若い（15ぐらい）時から働きに親元離れて来てるんやからかわいそうや思て」と言っていた。

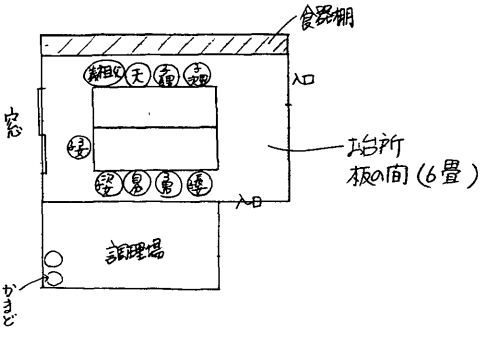


図203

食台の時期：ちょうど戦争の頃で食料不足になりだし，食事の回数は3回にな

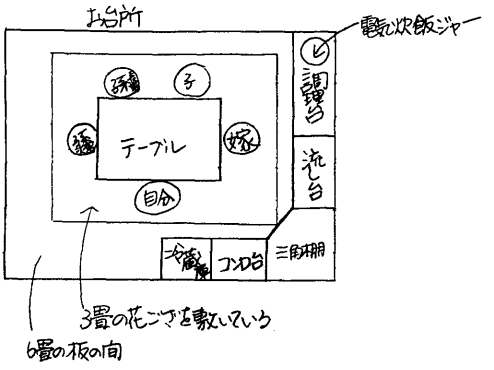


図204

った。6:00朝食—ご飯・みそ汁（とうふ汁が多い，かしわのあらでだしをとって）・常備食（しおこんぶ・らっきょ・梅・かすづけ・みそづけ・つけもの類）・お茶。12:00昼食—ご飯・醤油豆とか常備食・お茶。19:00 or 20:00 夕食—ご飯・あげとかしわの入った野菜の煮物・魚類（おさば・いわし・いか）。特に子じゃこ・昆布・若目・あらめを多く食べていた。祝祭日にはぶりやたいを食べた。かしわを常に利用したのは家の者に病人がいたからしい。そしてみんな同じ物を食べた。食事が1回減るとお腹がすいてなかなか慣れなかったらしい。田植えや稲刈りの時は，15:00おやつ—おまめ入りのご飯をおにぎりにして食べた。

テーブルの時期：7:00朝食—ご飯・みそ汁・つけもの・ハムエッグのような簡単なもの。12:30—ご飯・野菜の煮物・常備食。6:30夕食—ご飯・野菜の煮物・煮魚 or お肉・くだ物。ほとんどみな同じ物を食べるが，孫との年齢がはなれているので孫だけ特にちがったもの（肉類）を用意したりもする。また，何を飲んでいたかというのはお番茶である。特に最近は健康面からウーロン茶を常飲している。

箱膳・食台の頃は，3月ゆむぎもち・5月鰆のおしぬき・6～7月うどんとあんこ付きの団子・10月の祭り魚・巻きずし・おしぬき・うどん・すし・田植え“さいけ”お魚で田植祝い，田植えが終わると“さなぼり”うどん・おすし・団子で田植えの労をいやす・稲の脱穀後“岡入れ”あずきご飯・大根と芋とあげ1枚とで収穫の祝いまた“庭上げ”などといった季節ごとに特別なものをする習慣がある。当日，日頃は質素なものを食べていても，このようなもので季節のものを食べ，祝ったのだろう。テーブルになってからも簡略化されながらこの習慣はつづいている。

E．食事のときのご飯の給仕について

箱膳の時期は女中がいたので，女中がご飯をよそった。が，人数が多いので女の人で手つだっていた。食台になると女中がいないので母である被調査者がよそった。テーブル形式の現在では嫁がよそっている。よそう順は昔も今も長幼の序に従ってよそう。おかわりは空いた人からよそう。神仏へのお供えは昔も今も，神さんには，1日と30日だけにお花・お神酒・へぎに米飯・御澄明を供える。仏さんは，毎日4つ仏飯と夏には水，冬はお茶を供える。これ以外に神仏へのお供えは，正月・神まつり・神おろし・七草・節分など何かの行事につけ決まったお供えがなされる。晩しゃくについては，箱膳と食台にわたり義祖父が生きていた時のみあった。食事のつど疲れた時にお湯飲みに一杯ぐらいおひやで飲んでいた。が，夫は酒を飲まない人だったので，以来今まで晩しゃくはない。

F．食事のあとかたずけについて

箱膳の時：食事の前後に女の人みんなで運んだり下げたりした。食べおわった後ご飯茶碗は湯飲みの湯ですすいだ。箸は懐紙でふいてしまった。その他の食器はそのつど洗わずしまっていた。そして女中が（せわしい時には女の人みんなで）夏季には週一回ぐらい，冬季には1ヶ月に1回箱膳や食器を洗った。箱膳を洗うのは木炭，食器は石粉。また，お魚を食べたものは

ゆむぎで臭気を除いたらしい。洗った食器はふいて箱膳にしまい，Cで図示したとりこみ部屋にしまった。

食台の時期：箱膳の時から変わったのは，女中がいなくなったので，主婦である被調査者が食器を洗うようになり，冬季でも週一回は洗うようになった。そのうえ，汁椀と小皿にみそや醤油がついたら食事ごとに洗うようになった。食器はいつも食台の引き出しの中にしまった。ご飯茶碗は食後湯飲みの湯でゆすぎ，箸は懐紙でふいた。食器のあげさげは主婦。

テーブルの時期：食後茶碗を湯でゆすぐことも，箸を懐紙でふくこともしなくなった。食前食後，食器を運んだりさげたりするのは嫁と子がする。食後使用した食器は，嫁と子ですべて洗う。洗った食器は食器乾燥機で乾かし，食器棚にしまう。

G．食器の共用について

箱膳の時からテーブル式の現在まで，共用の食器として大鉢と小鉢があり，大鉢には大根やかぼちゃの野菜をかしわと煮たものを盛り，小鉢にはつけもの・うめ・らっきょなどを盛る。大鉢にはおかけ（布巾）をかけておく。大鉢と小鉢には菜箸をつけておく。

箸箱は，食台の時だけ使用した。

H．食事中にしてはならないことについて

箱膳の時から現在でも，箸の上げ下ろしとして，移り箸・探り箸・なめ箸をしてはいけない。食べる順序は，まずお汁にお箸をつけて，おつゆを一口飲み，お汁をいただいてから他の物を食べる。食事中のおしゃべりはせず，静かに食べる。「しゃべると唾が飛ぶのでしゃべらんと食べ」と子供の時から教える。食事中の姿勢は，ひざをくずさず，ひじをはらないで脇に腕をつけて食べる。その他食事中にしてはならないこととして，人の食べているのをのぞき見しないこと。汁をすする時，音をたてないことである。

I．食事中のあいさつについて

箱膳の時期は下男・下女がいたので，下男・下女の方から「いただきます」と食べはじめのあいさつがあり食べ始めた。がこれといったあいさつを戸主側からはしていない。ただお正月にはお祝いのあいさつをした。食べ終りも何もあいさつしない。

食台になり，みんながそろって「食べましょうぜ」といって食べる。終りのあいさつはなし。

テーブルの現在，お箸をとるのは戸主となった被調査者が一番だが，これといったあいさつを食前食後にしない。

昔も今も食後は，農繁期などのせわしい時はそれぞれ食べ終ったら席を立つが，それ以外の時は一緒に席を立つということだ。

J．食事中の話題について

昔から食事中に話をすることがいけないとされてきたので食事中には話をしなかった。が，食べ終わり，まだ他の人が食べている時，終わっている者同志でなんやかんや世間話をする。

調査者　No. 242(f)	調査日　昭和59年1月13日(金曜日)
被調査者　S.K.　性別　f	出生年　明治40年(76歳)(第6子)
出生地　奈良県天理市K町	
生家の職業　農業	
現住所　奈良県奈良市T町	
住所の変更とその年度	
最終学歴　J女学校	結婚　大正14年(18歳)
被調査者との関係　友人の祖母	

1．お膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

奈良県の古い商家であるため，家族と使用人の差はもちろんのこと，何事も店中心で，あわただしい食事だったらしい。

家族はタタミの間で，大きな長火ばちをお膳として使用し，使用人の“ぼんさん”たちは，縁に箱膳を並べ，土間に置かれたしょうぎに腰かけて食事をしていた（図205）。

このような食事の形式が，いつ頃始まったのかは，はっきりわからないが，被調査者が嫁いで来た時はすでにこの形式だったので，大正14年以前である。昭和10数年まで，この形式は続く。

当時の家族構成は被調査者の義理の父母と被調査者夫婦と使用人が4・5人と女中1人の計10人と，後に被調査者の子どもが二人増し，10数人の大所帯でした。

当時の住所は，奈良県T町です。

環境は，向いがT小学校で，隣家は墨で有名な古梅園の墨屋，あとは小さな店が点々とある程度の住宅地でした。

当時の職業は寝具店で，呉服も少し扱っていました。

食事の形式の変化は，昭和10年頃に，被調査者の姑が死に，家の実権が嫁の被調査者に移ったことから始まります。しかし，古い商家であるため，なかなか難しかったようです。

B．食事をする部屋について

特別に呼び名があったわけではなく，強いて言えば「茶の間」でした。

台所から続いた部屋で，冬は長ひばちに鉄びんがかけてあり，家族のくつろぐ場であり，気軽な客を通す部屋でもありました。

八畳のタタミの間で茶ダンスとお膳にしていた長ひばちがあっただけです。部屋の端の台所側に縁があり，この板間と土間に置かれたしょうぎが，使用人の食事場でした。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席は，主人がとうぜん上座で，若主人の息子が横，姑と嫁は下座で，給仕のしやすい所でした。子供の場所は特に決まっておらず，空いている所や好きな所で食べていました（図206）。

朝昼は店が第一なので，そろって食べることはありませんでしたが，夜は店が終わって主人が晩しゃくを始めている間に使用人は店をかたずけ，主人の晩しゃくが終わる頃にボツボツ集まって食事を始めました。

食べる場所は，家族がタタミの間で，使用人は土間というように，差がありました。

座ぶとんは，家族も使用人も全員が使用していましたが，もちろん主人の座ぶとんは一番立派なものであり，上下の差で物がちがいました。使用人は土間に置かれたしょうぎの上に小さな座ぶとんを置いていました。

D．ごはんのほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝は奈良名物の茶がゆまたはみそ汁とつけ物，昼は一汁一菜で，野菜の煮つけなどが出され，夜は一汁二菜で，昼の献立に魚や天ぷらが加わりました。

主人は晩しゃくをしていたので，酒のあてが家族とは別に出されていました。

E．食事の時のごはんの給仕について

給仕は当然嫁の仕事でしたが，商家の朝昼は忙しく，嫁がずっと奥に居るわけにはいかなかったので，女中がそれを助けました。夜は，家族側が嫁，使用人側を女中が給仕しました。

よそう順序は，主人・姑・若主人……最後が嫁でした。

神仏のおそなえは，とうぜん嫁がしていました。

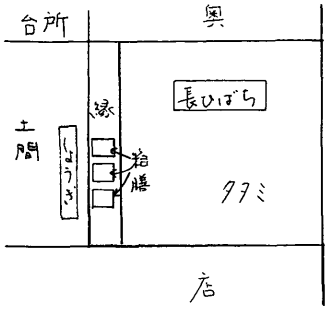


図205

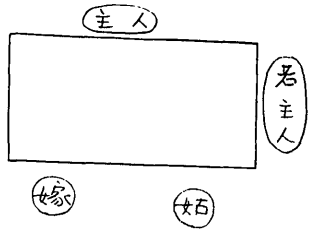


図206

晩しゃくは，毎晩主人がしていました。

F．食事のあとのかたずけについて

食事の最後はお茶づけて，つけもの皿のしょうゆをきれいにすすいて食べました。この際，おはしもゆすぎ，はし箱にしまいました。

食器を下げるのも洗うのも嫁と女中の仕事でした。

洗った食器は台所の横にある食器棚にしまいました。

G．食器の共用について

お皿・おはち・おわん類は共用で，はし・ちゃわん・ゆのみは各自決まっていました。

共用の食器に盛られたのは，野菜の煮つけ魚などです。

はし箱は，被調査者が嫁に来た時すでにありましたが，被調査者はこの不衛生な習慣がいやだったため，昭和10年頃，姑の死後すぐにやめました。

H．食事中にしてはならないことについて

はしの上げ下ろしや食べる順序は大したきまりもなく，一般的にお汁からでした。

食事中のおしゃべりは厳禁，姿勢は全員が正座でした。

食事中に音を立てるのはいけなく，食器の音，食べる音が特にきびしく言われ，その他まよい箸，ねぶり箸など一般的なことがいけないこととされていました。

I．食事中のあいさつについて

各自で，「いただきます」「ごちそうさまでした」と言いましたが，「ごちそうさまでした」の返事は何もありませんでした。

3．現在の時期

A．食事の形式と家庭環境について

終戦前頃に，大きな長火ばちから，座敷机に代わった。ちゃぶ台の時期はなかった。また戦後，使用人との同居はなくなり，箱膳も使わなくなった。土間が板の間になり，通ってくる使用人の昼食用の机が置かれるようになる。食卓の呼び名は特になく，強いて言えば「テーブル」です。

終戦前か，姑の他界した昭和10数年頃，どちらにしても，昭和10年代に形式が変化し，現在に至っている。

現在の家族構成は，被調査者夫婦と，長男夫婦と孫二人の計六人です。9時から17時半の間，お手伝いの女性が来て，家事をしています。

住所は，奈良市T町です。

現在は，近くに商店が多くできましたが，やはり住宅地です。

現在は，呉服商で，50 m ほど離れた所に寝具店がありますが，呉服商が中心です。

食事の形式は，昭和10数年に，姑が他界した頃から徐々に変化しはじめ，終戦後，使用人の待遇が問題になり，使用人の数も増し，寮を作って通いにするなど，様々な面から変化してくる。また，近年は食事も洋風化し，孫たちの好みも加わり，食事の形式は大きく変化し続けている。

B．食事をする部屋について

特に呼び名はないが，家族が集まりくつろぐ場で，居間である（図207）。

六畳の間で，茶ダンスがあるだけ。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席の順番は図208のとおりで，孫は席が決まっていない。

朝は各自の予定に合わせてで，昼は手のすいた人から順次，夜は，ほぼ全員がそろう。

食べる場所は，タタミの間。

座ぶとんは全員が使う。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝は，パンと牛乳が大半だが，主人はお茶と和菓子，上の孫はごはんとみそ汁と様々です。お昼は，使用人は弁当で，家族は，お手伝いの女性が作る，めん類，焼飯，野菜いためなどで，主人はごはんとみそ汁，おひたしなどです。夜は，もっぱら孫に合わせて洋風料理ですが，主人は酒とあてで軽くすまします。

特別ちがった物を食べる人は特にいません。みんなそれぞれ，好みのものを食べています。

E．食事の時のご飯の給仕について

給仕は，今も変わらず嫁の仕事で，姑である被調査者も手伝います。

よそう順序も，一応，主人・若主人・姑……そして嫁です。

神仏のおそなえは，きちんと嫁の仕事です。

晩しゃくは，主人が毎日しています。

F．食事のあとのかたずけについて

食べおわったあと，お茶で茶わんをすすぐのは姑ぐらいで，他の人はしません。

食器を下げたり洗ったりするのは，朝昼は嫁とお手伝いの女性ですが，夜は姑嫁孫の女三人でするそうです。

洗った食器は台所の横の食器棚にしまいます。

G．食器の共用について

おちゃわん・ゆのみ・はし以外はすべて共用で，様々なものが盛りつけられます。

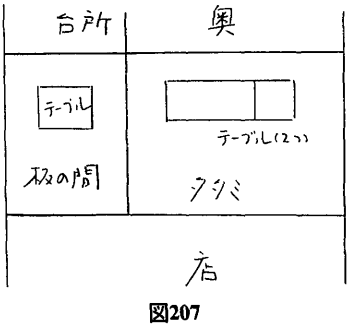


図207

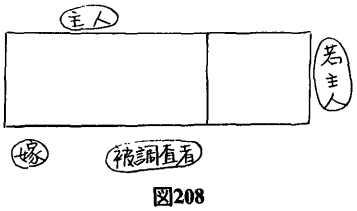


図208

箸箱は，前述どおり，昭和10数年になくなりました。

H．食事中にしてはならないことについて

はしの上げ下ろし，食べる順序など，昔のようになく，作法をあまりうるさく言いません。

食事中のおしゃべりも，もちろん行なわれており，楽しくにぎやかな食事です。家族が顔を合わす唯一の団らんです。

食事中の姿勢は，女の人は正座，男の人はあぐらです。

食事中にひじをついたりという，よほどひどいことをしない限り，行儀にもうるさいことを言いませんが，なんとなく親の作法を見てか，小さい頃からのしつけか，特にしてはならないことを考える機会もないほどです。

I．食事のあいさつについて

食事のあいさつをするのは嫁ぐらいで，他の人は何も言わずに食べはじめ，おわります。

J．食事中の話題について

主にしゃべるのは女の人で，店のこと，日常生活のとりとめもないこと，孫は学校のことなどです。

調査者　No. 243(f)	調査日　昭和59年1月21日(土曜日)
被調査者　G.T.　　性別　f	出生年　大正2年(71歳)(第2子)
出生地　大阪府八尾市	
生家の職業　庄屋	
現住所　大阪府八尾市	
住所の変更とその年度　なし	
最終学歴　小学校	結婚　昭和22年(35歳)
被調査者との関係　近隣関係	

1．箱膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

形式の略図は図209のとおりである。しかし姉，私，妹の順番はさだかではない。母が土間に近いところにすわり給仕をつかさどっていた。それを実際に何と呼んでいたかは，わからないとおっしゃる。そしてこの形態は，お生まれになった時は，すでにこの形で，戦後まで続いたという。家族構成はこのとおりで，使用人はたくさんいたが，食事も何も別々だったらしい。その時の住所は，大阪府八尾市のある村，そこの庄屋さんであった。今でこそ新興住宅区域が徐々に押し迫り，この付近も家が建ち並んで新しい家族が入ってきている。私の家族もそのひとつの例であるが，昔は歴史ある，閑散とした農村であった。戦争がおこり，みんなどさくさにまぎれた生活をし，戦後に一からやりなおしで新しいものが入ってきたところで，箱膳はなくなってしまったみたいである。しかし父親だけは，亡くなってもしばらくの間ひとりだけ，箱膳で食事をしていたらしい。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋は，やはり「台所」と呼び，箱膳をかたずけると，ただの部屋になるにもかかわらず他には用途はなく，あくまで食事をするところであった。土間の大きさは聞かなかったが，食事するところは，1段上がったタタミの間で六畳であった。

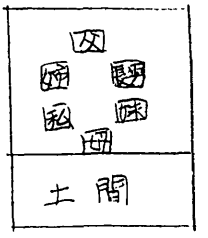


図209

C．どのようなすわり方で食べたか

いつも父親（一家の主）が上座であった。上座であるということは，食事を作る土間が正面に見えるということである。続いて長男がその側

に座り，父の次に権力があることをあらわしている。今のようにお父さんが会社から帰るのが遅いとか，子供が塾から帰るのが遅いとかいうことはないので，必ずみんながそろってから食事をしていた。今のように父親がまだ帰らぬうちに食事をすることなんて，あり得なかっただろう。六畳のタタミの間で座ぶとんは，それぞれ全員使っていた。しかし男はやはり形の大きいものを敷いていた。体が大きいからその分，体にあわせて，とおっしゃっていたが。

D．ご飯のほかには何を食べ何を飲んでいたか

朝昼晩食べていたものをそれぞれ思い出すことは不可能だろう。戦争が間に入ったので，その時の日本の状態に応じて配給のひもじいものを食べていた時もあった。今のように肉類はあまりなく，野菜類が主なおかずだった。カレーやハンバーグやシチューなんてものはなかったから，今は昔と比べて食事の内容もめざましく変化しているだろう。父親や長男がお酒のあてとして，皆と同じ食事に加えて，何か肴になるものを食べていた。

E．食事の時のご飯の給仕について

やはりよそうのは母親であった。母親がたえず給仕をしていた。よそう順序は神仏のお供えが一番に，そしてだいたい年の順であったそうだが，あまり決まっていなかった。昔から今でも神様や祖先をたいへん大切にしていらっしゃる家なので，毎朝初水とお茶を供え祖先にむかってお祈りとお礼をし，合掌することは，現在でも絶やさないとおっしゃった。晩しゃくは，先ほど記述したとおり，毎晩のようにあった。

F．食事のあとかたずけについて

食器は母親がはこんだ。食器はみな，貴重な感謝のこもったご飯を入れる器だから上等で，今のようにすぐ代わりのものを買うということができなく，大切に今でも保管しているというくらいである。だから洗剤でごしごし洗ったりせず，ていねいにひとつひとつゆすいだ。お正月の3が日は，使用人が里帰りをするので，その時だけ食後梅ぼしを入れてお湯をそそいで洗うだけで，これが消毒にもなったという。あとはみんな使用人が洗った。箱膳なので，横に引き出しがついていて，各自それぞれの引き出しに食器を入れた。そして食器だなではなく，箱膳を重ねて入れる押し入れのようなものがあり，そこに入れていた。箱膳には，色か柄で誰のものかがわかり，各自に自分のものがあった。

G．食器の共用について

共用の食べ物はなかった。どんなものもそれぞれのお膳の中のお皿に盛り分けられていた。あり得なかった。強いて言うと，つけものくらいだった。それは順番に，自分のほしい分だけとり，横にまわしていった。箸箱は生まれた時からあり，今でも続いている。でも父親だけは，「鶴」と書いた箸紙を，365日間汚すこともなく使っていた。自分たち子供は，汚してしまってとてもそんなことはできない，とわかっていたので，初めから木の箸箱を使っていたという。

H．食事中にしてはならないことについて

食べる順序は決まっていない。してはならないことといえば，おしゃべりだった。食事中におしゃべりをしながら食べたら，ご飯がおろそかになる。ご飯に対して，感謝をして食べなければならぬ，とおそわった。そして，何よりも行儀が悪いとおそわった。

I．食事中のあいさつについて

「いただきます」「ごちそうさま」でした。「よろしゅうおあがり」と言うのは，母に限ったことではなく，みんなで言っていた。

J．食事中の話題について

食後は，少し間をおいてからすぐにお膳を片付けた。汚ないものがいつまでも前にあっては不快であり，だらしのないことであった。そして片付けてから雑談をした。その日のできごと，

世間話など，母がその時の雰囲気にまじえて盛り上げたりした。しかし子供の前では，おとな同士の話はしなかった。たとえば家計や，おとなの世間話，庄屋であったため，そのへんの苦労話はいっぱいあったろう。そんな話は決してしなかったという。

2．ちゃぶ台の時期

おばあさんは「しっぽく台」と言っていた。先ほど記述した通り，戦後，昭和22年に変わったそうである。あとで結婚日を聞くと昭和22年であった。このおばあさんは，養子をむかえたのでお嫁には行っていない。しかしやはり結婚という変わり目に，しっぽく台に変えたのだろう。

全体的に箱膳の時と，そう変わりはない。しかしこの時期は，日本のめざましい高度経済成長の発展段階である。冷蔵庫，テレビ，洗濯機，さまざまな電気類が家庭に入ってきた。しかしこの家は，昔のしきたりを守り，マスコミ社会にもあまりゆり動かされなかっただろうと思う。

だが，農地改革が行われた。庄屋が解体させられた。ふつうの農家になった。そのころのお話はあまりしてもらえなかったが，いろいろな苦労があっただろう。

A．この時期で，母親がお亡くなりになり，姉妹がお嫁に行き，長男が戦死なさったので家族は3人になり，しばらくこの形態であった。やはり父親は，土間の方を向いた上座である。この形態（名称はわからないが）は，家を改築した昭和46年まで続いた（図210）。

B．お嫁に行っておらず，家も同じなので，食事をする部屋も大きさも箱膳の時と同じである。しっぽく台も，足が折りたたみで片付けられるようになっている。でも食事以外にはその部屋は使わなかった。

C．座席の順番は先述の通り，箱膳の時と変わらずみんなそろって食べ，座ぶとんもそれぞれが敷いていた。

D．やはり野菜類が主なおかずだった。この時も父親と主人に，酒のあてとして肴があった。今食べているような，魚やおつくりなどは，お盆や正月の時しか食べなかった。昔を思うと，今は毎日が正月だ，と言う。おかんをあたためたり，鍋ものができる装置がついていたそうである。今の椅子式テーブルは面積が広いが，しっぽく台は全体的に小さい円型だ。今のように，洋風皿をいっぱいならべたりしないから，小さくても余地があったのだと思う。

E．母親が亡くなると，自分が“嫁”なので，よそう役がまわってきた。やはり父親からよそって，晩しゃくもあり，神仏のお供えは，変わらず一番によそった。

F．農地改革のあと，使用人がいなくなると，かたずけや洗いものは，母親か私がしていた。湯茶でゆすぐということもあまりしなくなっただろう。箱膳でなくなると，食器を納めるところは，食器棚になった。

G．箱膳からひとつのまるい台にみんなで食事をすることになれば，共用のおかずもいっぱい出てくるだろうと思ったが，そんなわけでもなかった。つけものぐらいのものだった。なぜかと聞くと，子供がいれば，そういうことをすると，好きなものしか食べない，という癖がつくからだ。好き嫌いもなく，まず自分のお皿に盛られたおかずを食べなければならない，ということだ。どんな少ないおかずも，ひとりひとりのお皿に盛ったらしい。でも，たまに，残りものを，ふたもののお皿に入れて，まん中におく時もあった。箸箱は今でも続いている。

H．別にしてはならないきまりはないが，おしゃべりだけは，昔から同じように慎んでいた。今のように，ベラベラしゃべりながらや，テレビを見ながら食事をしたりして，感謝の心がよそを向いている，ということはなかった。

I．J．食事中のあいさつも昔と変わらず話題も変わらない。

3．椅子式テーブルの時期

さて，現在の型である。今私の家もそうであり，他の人の家もほとんどがそうであろう。私の

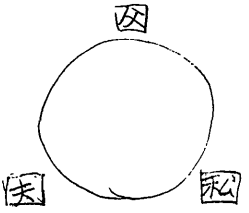


図210

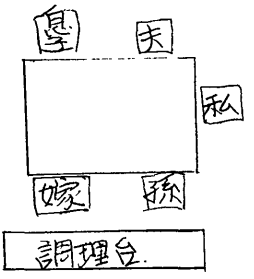


図211

家も知らぬ間に変わっていた。小さい頃は，掘りごたつであり，夏は座ぶとんを敷いて，座って食べていたように思う。そしてもの心がつかない頃には，土間もあったらしい。私自身は小さかったせいか，少しも気づかぬうちに変わっていたが，しっぽく台から椅子式に変わることは，すごく抵抗があったことだろうと思う。このおばあさんなら，たぶん変えてほしくなかっただろう。

A．今のダイニング・キッチンを見せてもらった。やはりお嫁さんが，給仕しやすい位置にいる（図211）。どこの家でもそうだろう。昭和46年，家を全部改築し，昔の土間ではなく，今風の高級住宅街にありそうな，鉄筋の荘厳な家になった。百貨店に家具を買いに行っても，現代的なものしか売っていない。子供が大きくなって結婚し，世代が代わった。家の構造も，昔と同じようにはいかなくなった。そこで現在に合わせて，改築と同時に椅子式になった。“夫”はすぐ亡くなられたが，孫も生まれ，現在は4人家族である。職業は，今では企業の会社員である。

B．ダイニング・キッチンである。そこにはテレビがおいてあり，食事をしながら，おやつでも食べながら見れるようにしてある。何かを食べながら，みんなが集まるところとして，その部屋の用途がある。12畳ほどである。

C．息子が会社に行くと，夜遅くなる時もあるので，全員そろって，というのは昔ほど守れなくなった。もちろん板の間である。

D．E．F．G．H．I．J．あまり変わらない。食事内容は変わってきただろう。たぶん今，私達が食べているのと同じだろう。お嫁さんが来た。よそう人や食器を洗ったり，はこぶ人はお嫁さんにとって代わられた。しかし，もう湯茶で茶わんをゆすぐようなことはしない。全体的に昔のように，全員がそろってお父さんを尊敬し，ご飯に感謝しながら食べることはなくなったが，今この社会で昔のままを続けようとするのは大変である。しかしおばあさんは，ただひとりの孫に，昔の話を聞かせ，昔のように，規律正しい生活をするようしつけている。若い人にもっと昔のことを知ってもらいたい，と私にも訴えてこられた。社会が一変してしまった時に生きるおばあさんの切実な願いなのだ，と私も聞き入った。

調査者　No．247（f）	調査日　昭和59年1月9日（月曜日）
被調査者　N．C．　性別　f	出生年　明治45年（72歳）（第2子）
出生地　山口県宇部市O町	
生家の職業　農業，炭坑経営	
現住所　山口県宇部市H町	
住所の変更とその年度　昭和6年	
最終学歴　山口県立U高等女学校	結婚　昭和6年（20歳）
被調査者との関係　母方の祖母	

1．お膳の時期

祖母は明治45年生まれの72歳で，生まれて以来，山口県宇部市に住んでいる。宇部市は元は半農半漁の村であったが，大正時代に石炭の産地として栄え，一躍，市になったところである。

最初の形式は，お膳形式で，「箱膳」と呼んでいた。これは蓋のついた箱で，食事の時蓋を裏返して膳とした（図212）。それは，祖母が，ものごころついた頃すでにあり，10歳のころ大正10年頃に終った。

当時の家族構成は，父，母，姉，妹，弟，使用人（女中さん）が1人であった。住所は山口県宇部市Oで，その住環境は，「田内（でんない）です。田舎のおうちだから，農村ですね。下の方に田んぼがある。ちょっと小高いおうちだから，おとなりと言っても，ひとたんぼおいて，むこうというぐらい」

その時の戸主の職業は，農業と炭坑経営であった。食事形式の変化の原因は，「それは，やはり生活の簡易化でしょうね。まあそういう世の中になったんですよね，世の中が」

食事をする部屋のことは，「おだいどこ」とか，「茶の間」と呼んでいた。その部屋は食事以外には使わなかった。部屋の情景は，「広さはね，8畳か，ぐらいですよ，水屋とか置いてあるですよね。まわりには，やはりですね，ちょっと離れたところに，作りつけの，おだいどこ用戸棚，お火鉢とか……」

座席の順番は，「一家の主人が，上（かみ）でコの字型，おじいちゃまが，一番上で，わたしどもが，横にならんだのね。子どもが。そしておばあちゃまが，おじいちゃまの向かい合わせいね。少人数だから」（おじいちゃま，おばあちゃまは，彼女の両親）（図213）

使用人は，別の部屋で食事をした。食事の場所は畳敷きで，座ぶとんは，使用人以外全員使用した。

さて，ご飯の他に何を食べ，飲んだかというと；「なんかお浸しのようなものとかね。それから，おつゆがでるでしょ，おみそ汁。そして何か炊いたものと，おつけもの」

昼食は，「おかずは，おさかなを焼いたり，昔だからいわしのようなものとか」

夕食は，「時おり，さしみなんか……」

子どものころなので，あまり憶えていない様子である。しかし，父親だけに，おさしみがつくことがあった。給仕については，「御飯は，母がついだり。お台所で作ったものをそこまで運ぶのは，女中さんの役目」

よそう順序は，なんでも一家の長である父から次に長男，姉，妹，主婦という順であった。

神仏へのお供えについては，朝食の前に仏様に，ごはんをお供えして，おがんで，次に神様をおかんだ。この作業が終るまでは，食事をとることが許されなかった。

晩しゃくは，父親が飲酒しなかった。

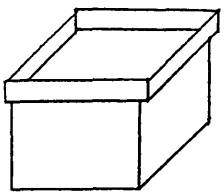


図212

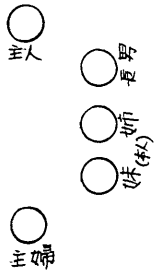


図213

食事の後かたづけについては，食事の後，箸を湯茶ですすいた後に箸箱にしまった。箸は，何日かに一回，流しで洗った。食器を下げることについては，「それはもう，人まかせだからね。女中さんが下げてくださるし，子どもだから，別に，お手伝いしなかったですよ。女中さんが食器を洗って，手が足りない時は，おかあさんが洗ったの。食器は洗ったら，“めご”にふせて，それから，造り付けの戸棚に置いて，並べてふせて置くとか」

当時は，共用の食器は無かった。箸箱は，箱膳が無くなるとともに無くなった。

食事中にしてはならなかったことで，箸の上げ下ろしについては，「なかなか厳しかったですよ。箸の持ち方，話をしない」

食べる順序は，おとうさんからで，食事中のおしゃべりは，許されず，姿勢も正しく保たねばならなかった。男子だけは途中から，足をくずすことができた。またその他には，「たいてい，わたしたちは子どもだったから，今から食事ですよ，と呼ばれて，お膳につくわけ」。呼ばれるまで茶の間に入ることができなかったようである。

食事のあいさつは，食べはじめは「いただきます」，食べ終りは「おごちそうさまでした」であった。

食事中の話題は，主に父親と母親が話し，子どもが口をはさむことはできなかった。話題は「家」のことであった。

2．ちゃぶ台の時期

彼女は，ちゃぶ台のことを「飯台」と呼んでいた（図214）。飯台は，10歳（大正10年）から，昭和48年まで続いた。家族構成は，彼女が，結婚するまでは，お膳期と同じで，彼女が結婚した当時は，夫，妻，夫の母，夫の兄弟3人で，後に，夫，妻，子供（7人）（女女男男女男男の順）で，終戦まで，女中が，ひとりいた。

結婚してからの住所は，山口県宇部市Hであった。その住環境は，「畑とか田んぼとか，山とか，地主ですからね」

主人の職業は，U株式会社石炭営業部と地主，借地業であった。

食事をする部屋のことは，「茶の間」と呼び，団らんの部屋にも利用した。「後には，堀りごたつも造ったので，冬は，なにかと皆が集ってお話をしたの」

部屋は6畳の畳の間と3畳の板間がつづいており，その横に，細長い廊下がついていた。調度品は，水屋と食器戸棚などで，それらは，3畳の方に置いてあった。

座席の順は，「主人が上(かみ)で，横に子どもたち，向かいあわせにわたくし，女中さんもいっしょだったですよ」

たいてい全員でいっしょに食べたが，主人が，仕事の関係で欠けることがあった（図215）。女中以外は全員座ぶとんをひいていた。飯台は円形であった。

御飯の他に食べたものについては，「朝は，おみそ汁と，おにしめや，つくだ煮」

昼食は，子供たちはお弁当で，彼女は前日の残り物や，ありあわせのものを食べていた。そして，「夕食は，やはりおさかなが主菜，まあ毎日，主人にはおさしみを欠かしたことはありませんね。でも，全員が同じ（同じ物を食べる）という考えでね。子どもは好き嫌いがあるけど。皆いっしょってわけにはいかないでしょ。でもまあ，そのころ平等主義っていう考え方」

ところで，給仕をするのは主婦で，父親から次々に子どもへの順番であった。神仏へのお供えは，朝食の前に御飯を供えた。晩しゃくは，1合から1合半，日本酒をいただいたようだ。

食事の後かたづけについては，「それはもう，わたくしか女中さん。もうお箸をお茶ですすぐことはしない。食べた後すぐにさげて，女中さんが洗ったの」

その後に，「めご」に伏せて，ふいた後，造り付けの戸棚や水屋にしまった。

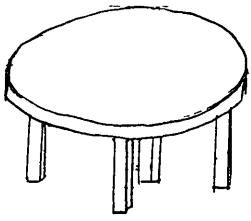


図214

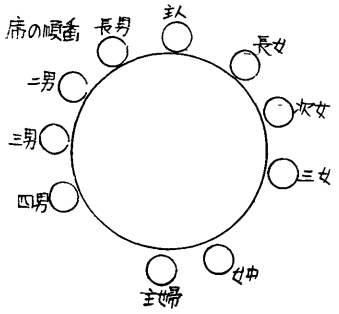


図215

共用の食器については，「おどんぶりっていうか，大きいおどんぶり，お鉢ね，有田焼の。昔はいっぱいあったの。おにしめとか，炊いたものをね。盛ったの。きょうはね，特別っていう日に盛ったの」

食事中にしてならないことは，「お箸の持ち方は，やかましく言いましたよ，子どもに。食事の談話は，わりあい自由ですよね。いろんなことをお話する。姿勢はちゃんと。男のひとは，途中から足を崩しても良かったの。そのほか，まあ子どもが小さいころは，食べこぼしなんか，厳しく躾けましたよ」

食事のあいさつは，「いただきます」と，「おごちそうさまでした」であった。

食事中の話題については，「やはり，話題の中心は，主人とわたくしでしたね。子どものこと，家のことを話したり，子どもがまた話したりっていう。まあわりと楽しいお食事でしたね」

3．現在（椅子式テーブル）の時期

彼女は，この形式のことを「テーブル」と呼んでいる（図216）。昭和48年以来ずっと続いている。家族構成は，彼女と，息子であったが，3年前に彼が結婚してから後はひとりぐらしである。住所は，山口県宇部市Hである。古い住居をほどいた後，新築したのである。夫は，約30年前に亡くなっている。

戸主（息子）の職業は医師である。

形式の変化の原因は，「家を新築したから，台所も改善したの」

食事する部屋は「台所」と呼んでいる。そこは，DK 式で，I 字形に流し台，調理台，ガスコンロが続いている。他に冷蔵庫，食器戸棚，本棚がある。リビングルームが続いてある。

座席は，「テーブルに向いあってた。向かい合ってね，いちばんいい席っていうの。テレビも見やすいとこが順介（息子）ね」（図217）

しかし，息子の職業柄，遅くなることが多かったので，彼女はひとりで食べることが多かった。

朝食は「パンと牛乳。それと野菜サラダとか，野菜ジュースとか。あとはハムと卵」。

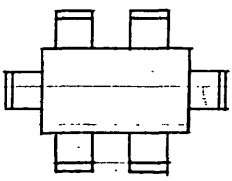


図216

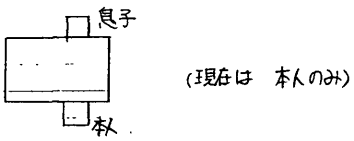


図217

昼食は，ありあわせのものを食べた。夕食は「なんでも，息子には若者が好むもの。わたくしは老人が好むもの」

肉類などは息子のみ食べていたことが多い。

給仕は，彼女がした。よそう順序は，いっしょに食事するときは，息子からであった。神仏へのお供えは，彼女がごはんを仏壇にお供えする。晩しゃくは，息子が，時折，ビールを飲むくらいであった。

食後のあとかたづけについては，「それは，もちろんわたくしが，食事が終ったらすぐ洗うの」洗った後，カゴに伏せて，しばらくしてからふきんでふいて，食器戸棚にしまうのである。

共用の食器は，お鉢の他に洋食器なども使っている。どんな食器でも使っている。それには，つけもの，つくだに。また，人が集まった時は，さしみ，揚げ物，サラダ，などを盛っている。

食事中にしてはならないことは，「わたくしはなんにも言わない（無いという意）。順序もない。おしゃべりは，大おしゃべり，あれ（息子）が何でも話すから，私は聞き役」

食事のあいさつは，「いただきます」と「おごちそうさまでした」，息子は「ごちそうさま」。彼女は，約20年ぐらい前からキリスト教信者なので，食前に，黙礼した後に「いただきます」と言う。この習慣は，誰といっしょに食事をしようと，どこだろうと，止めることがないようだ。

食事中の話題は，息子が職場の話をしたり，彼女が，子どもや孫の話をしたりする。わたしと食事をするときは，聖書のこと，神父さまのことなどである。

調査者　No. 253(f)	調査日　昭和58年1月2日(月曜日)
被調査者　I.S.　性別　f	出生年　大正5年(68歳)(第1子)
出生地　愛媛県八幡浜市Y村	
生家の職業　農業	
現住所　愛媛県八幡浜市K町	
住所の変更とその年度	
最終学歴　女学校	結婚　昭和19年(28歳)
被調査者との関係　伯母	

1．お膳（箱膳）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

愛媛県八幡浜のY村あたりの農村地帯では，図218に示したような「箱膳」と呼ばれるものを使って食事をしていたそうです。

その時期のその家の戸主は農業を営んでおり，その時の家族構成は，被調査者からみて祖父母，父母，おじ，おば，子供，それと作男が1人とおなごしが1人からなっていたそうです。

B．食事をする部屋のことを「茶の間」と呼んでいたそうです。その部屋には，いろりがあり，食事をするとき以外には，家族の団らんの間でもあったようです。

部屋の大きさは八畳で，戸棚がおいてあったということです。

C．どのようなすわり方で食べたか

茶の間は，図219に示したようになっており，家族全員がそろって，図に示したような座席の順番ですわったそうです。ゆかは板でできており，座ぶとんをしいていたそうです。

この時使用人の人たちは，家族といっしょに食事をとることは許されず，土間で食事をとっていたということです。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝食は，お汁，つけもの，みそ，昼食は，朝食とほとんど同じで，みその他にいりこなどもついた。夕食は，にしめ，お汁，魚だったということです。

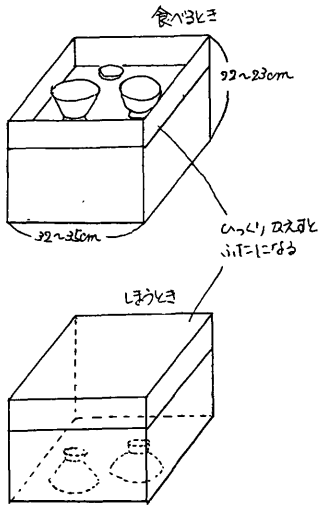


図218

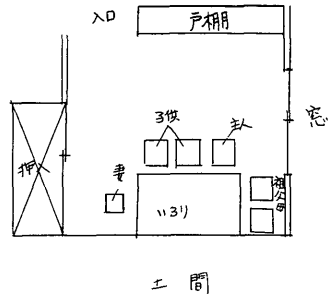


図219

特別にちがったものをだれかが食べるということはなかったそうです。

また，ご飯は，麦：米の比率が4：1ぐらいの麦飯というものをとり，ごはんのかわりに，さつまいもを食べるということもあったそうです。

E．食事のときのご飯の給仕について

ごはんをよそうのは，母（妻）であり，祖父母，主人（夫），子供，妻の順番だったそうです。

また，仏様には毎日，ごはん，お茶，水をお供えをして，神様には，月に1回ぐらいずつとか，節句やお祭のときに，おせん米（あらった米），塩，いりこ，水をお供えとしたそうです。そして，神様にも仏様にも，かきやみかんの初ものなどもお供えしていたそうです。

晩しゃくはあったそうです。

F．食事のあとかたずけについて

食事がおわると，すぐに茶わんやおはしをお茶でゆすいで，自分で箱膳の中にしまい，それを戸棚の中においておいたそうです。

また一週間に一回ぐらいは，母が茶わんやはしなどの食器を洗っていたそうです。洗う回数は，夏ごろになるほど多かったということです。

G．食器の共用について

共用のものとしては，図220のようなものに，梅干し，らっきょう，みそ，もろみ，塩などを入れておいたそうです。また，使用人は，家族とは別に，もう1つこういったものがあったそうです。それから，つけものなどは「かさねばち」と呼ばれるお皿に盛ってあったそうです。それは，小皿で，何段にもそのお皿が上にかさねることができるようになっていたそうです。

H．食事中にしてはならないことについて

食事中にしてはならないこととしては，はしのつまみわたし，まよいばし，食べるのに口の中で音を出すことや，しきばしで共用のものをとること（共用のものをとるときは，はしをさかさにする）や，はしで，食器の音をたてたりすることです。

食べる順序は，まずはしをお茶でぬらしてから，1口ごはんを食べてからお汁をのみ，あと

は自由に食べていたそうです。

食事中は，座布とんの上に，きちんと正座をして，背すじをのばしてすわっていたそうです。あまり体を丸めたりしてはいけないそうです。

I．食事中のあいさつについて

合掌して，食べはじめは「いただきます」，食べおわりは「ごちそうさまでした」と言ったそうです。

J．食事中の話題について

この当時は，食事中にしゃべるということは，不作法だということになっていたので，ほとんど無言で食べていたということです。

2．ちゃぶ台（しっぽく台，飯台など）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

明治45年くらいから，昭和20年ぐらいまでの間，図221に示した「飯台」と呼ばれるものの上で食事をとっていたということでした。その時期の家族構成は，被調査者からみて，父母，本人，夫，子供，夫の兄弟，作男，おなごしが1人ずついたということでした。その時期の住環境は農村で，戸主の職業は農業，住所は，愛媛県八幡浜市Kです。この飯台になる前は，箱膳だったわけですが，時代の波によって，飯台になったということでした。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋のことを「茶の間」と呼び，食事をする以外には，居間として使っていたそうです。広さは8畳で，長ひばちを置き，戸棚などもあったそうです。

C．どのようなすわり方で食べたか

座席の順番は，箱膳のときと同じで，板の間に座ぶとんをしいて，家族全員がそろって食べたということです。しかし，使用人たちは，やはり，土間で，四角い盆に食事をのせ，板の間に腰かけて食べていたということです。

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

飯台の時期になっても，朝昼晩の食事のメニューは箱膳のときとかわりがなく，朝昼はお汁，つけもの，みそやいりこ，夜は，それに魚やにしめがついたりしたということです。

また特別に，戦時中は食糧事情が悪かったので，いもやかぼちゃ，黒パンや，とうもろこしの粉などを食べていたということです。

だれか特別にちがったものを食べるということはなかったそうです。

E．食事のときのご飯の給仕について

よそうのは，被調査者がよそい，父母，夫，子供，本人の順によそっていたということです。このとき，被調査者の夫にあたる人が，あまりお酒を飲む人ではなかったので，晩しゃくはしなかったそうです。

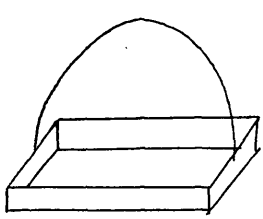


図220

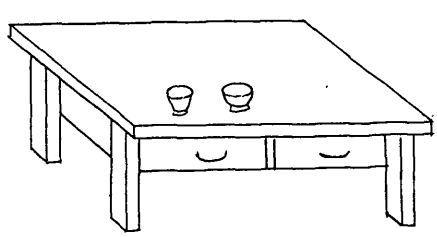


図221

神仏へのお供えとしては，箱膳の時代からかわっておらず，仏様には，毎日，ごはん，お茶，水を，神様には，月に1回ずつぐらいと，節句やお祭のときにおせん米，塩，水をあげ，かきやみかんなどの初ものは，神様にも仏様にも供えたということです。

F．食事のあとかたずけについて

食事がおわると，すぐに自分で食器をさげ，被調査者が洗い，飯台についているひき出しの中にしまっていたということですが，この時，はしは洗わずに，はし箱にしまっていたということです。

G．食器の共用について

箱膳の時代の図に示したようなものがつづいて用いられていたということです。また，はし箱はこの時期に使っていたということです。

H．食事中にしてはならないことについて

食事中にしてはならないことは，箱膳のときと同じで，食べる順序，姿勢なども同じで，食事中のおしゃべりも，あまり行儀のよいことではなかったようです。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは「いただきます」，たべおわりは「ごちそうさま」だったそうです。

J．この時期は，H．でも述べたように，まだ食事中のおしゃべりは不作法とされていたので，無言で食べていたということです。

3．現在（椅子式テーブルなど）の時期

A．食事の形式と家庭環境について

戦後になってから，椅子とテーブルを使って食事をとるようになったということです（図222）。

家族は，被調査者からみて，本人，夫，娘，孫2人です（母子家庭）。戸主は農業をやっており，愛媛県八幡浜市Kで，農村です。時代に応じて，また，台所の便利さを考えて，椅子とテーブルを使って食事をするようになったということでした。

B．食事をする部屋について

食事をする部屋のことを「食堂」と呼び，流しや調理台などもあり，炊事としても使います（図223）。また，食器棚，冷蔵庫，電子レンジなども置いてあります。

C．どのようなすわり方で食べたか

テーブルを使うようになってくると，きちんとした席順はなく，ただ，便宜上のことを考えて，女性が流しに近くに座り，他はその時々によってちがうようである。たべる場所は板の間で，全員が集まって食べ，椅子にすわって食べるので，座ぶとんはありません。

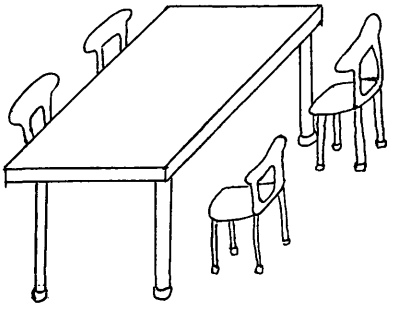


図222

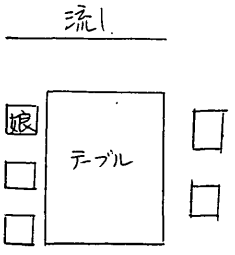


図223

D．ご飯のほかには，何を食べ，何を飲んでいたか

朝は，みそ汁とつけものということもあるし，パンと牛乳に玉子ということもあるそうです。昼や夜などには，肉や玉子，魚などを使った料理などが多くなってきたということです。また時には，昼食にパンやめん類をとるということもあるそうです。

だれか特別にちがったものを食べるということはないそうです。

E．食事のときのご飯の給仕について

ご飯をよそうのは，本人であったり，娘さんであったりして，順序は，夫，子供，本人がよそうときは，娘さんの次に本人，娘さんがよそうときは，本人の次に娘さんという順序のようです。晩しゃくはないそうです。

神仏へのお供えは，箱膳のときや，飯台のときとかわらないということでした。

F．食事のあとかたずけについて

食事がおわると，各自自分で食器をさげ，毎日毎回，娘さんか本人が洗うということです。洗った食器は，食器乾燥機の中へしまうということです。

G．食器の共用について

つけもの，らっきょうなどは，1つのお皿に盛り，共用だということです。

H．食事中にしてはならないことについて

食事中にしてはならないことは，箱膳のころ，茶ぶ台のころと変わりありませんが，ものを食べる順番などは自由で，おしゃべりも楽しくおいしく食べるためにということで，してもかまわないということです。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは「いただきます」，食べおわりは「ごちそうさまでした」と言うそうです。

J．食事中の話題について

その日その日によって話題はさまざまで，孫が幼稚園で何か事件があればそのことについて，また，夫に事件があれば，そのことについてであったり，テレビのニュースなどであったりもするそうです。

調査者　No. 254(f)	調査日　昭和59年1月5日(木曜日)
被調査者　I.K.　性別　f	出生年　明治38年(78歳)(第2子)
出生地　鳥取県西伯郡A町	
生家の職業　農業	
現住所　鳥取県米子市S町	
住所の変更とその年度　大正12年	
最終学歴　高等小学校	結婚　大正13年(18歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳の時期

A．お膳の時期は，被調査者が明治38年に生まれてから，大正12年に結婚するまでである。その時期の家族構成は，被調査者，祖父，祖母，父，祖父の弟，姉（姉が大きくなってからは姉の婿とその子供，また被調査者が3才の時，母が死亡している)。住所は，鳥取県西伯郡A町で，農山間地である。戸主の職業は農業であった。家族で膳を並べて食事をしており，形式の呼び方はなかった。

B．流しのある所は「台所」と呼んでいたが，食事をする部屋は「小座敷」と呼んでいた。食事以外には，わら仕事をした。小座敷は1間と2間ぐらいで，いろりがあり，奥行が2尺，横幅が1間ほどの戸だながあった。台所には流しと水ガメ，米ウスそしてクドがあった。8人で食

事をするのには少しせまかった（図224）。

C．みんなそろって食事をした。板の上にむしろをひいてあり，だれも座ぶとんはしていなかった（図225）。

D．食事はだれも同じものを食べていた。朝は味噌汁ときんざんじ味噌，良い米はほとんど売ってしまったため，米のくずを石うすでひいて粉にし，それをいろりで焼いて焼きもちを作って食べた。昼はご飯をたいたが，その中に，麦は今のようなおし麦でないため一度煮てから，ほかには，さつまいも，ずいきの葉，粟，きび，つけもののきざんだものなどをいっしょに入れてたいた。晩は昼のご飯の残りで茶づけをした。あとは野菜の煮たものや，そばの粉でだんごやそばもちを作ったりもした。祭りの時など何かあった時は，魚も食べたが，普段は魚はいりこぐらいしかなかった。正月には6日まで白いご飯や餅を食べたが，7日には正月に氏神さんに供えた七草で，さばあこという雑炊を作って食べ，それ以降は，白いご飯や餅以外のものを食べてもよかった。

E．食事の給仕は祖母がやり，姉が大きくなってからは姉がした。よそう順序は，父，祖父，祖父の弟，兄，（姉の子），被調査者，祖母，姉であった。晩しゃくは毎晩はしなかったが，祭や盆，客があった時など，水酒という水を混ぜた安い酒があったので，男性がわりとよく飲んでいた。神仏へのお供えは，えびすさんには毎朝祖母が，ご飯を2・3粒供えた。正月6日には，なますを皿に盛れるだけ高く，山盛りに盛り，その上にほしかをのせて供えた。仏さんには，彼岸，盆，そして毎月の命日にご飯を供えた。大晦日には餅を供え，1月16日までは戸をたててしまった。トシ神さんには，普段は何もしないが，正月には朝は餅，昼はご飯，しる，なます，ごぼうやにんじんやこんにゃくなどの煮たものを供えた。民神さんには正月には七草を供えた。荒神さんは，かのえさるの日にかけじくを掛けて，小豆ご飯とぼたもちを供えた。

食べ終わると，茶わんは茶づけを食べた時はそのままふせてしまったが，ほかの時は洗った。箸はお茶でゆすいでそのままお膳に入れておいた。ほかのものは食べ終わるとすぐ洗ったが，皿におかずが残った時は，そのまま皿はお膳に入れておいた。膳はふいてから戸だなにしまった。食器をさげたり洗ったりしたのは祖母で，姉や被調査者が大きくなってからは姉や被調査者もした。火がえといってかのえさるの日や，近所で人が死んだ時には，箸も膳も茶わんもかまも，すべてきれいに洗った。

G．共用の食器にはからつの皿などがあり，味噌，たくわんなどが盛られていた。箸箱はなかった。

H．食事中は男性はひざをくみ，女性は正座をしていた。そして，祖父や父など年長の者が箸をとってから他の人も箸をとっていた。おしゃべりはしても良かっただけでなく，食事の場は同

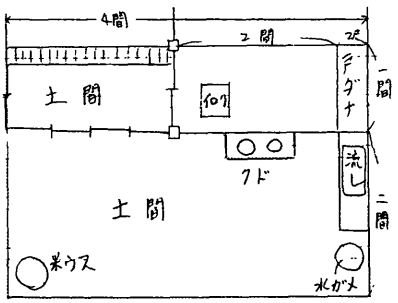


図224

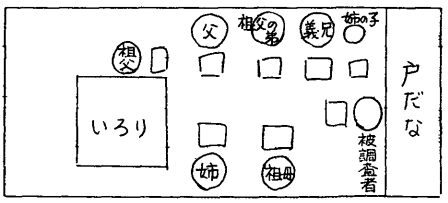


図225

時に家族の会話の場でもあった。食事中にしてはならなかったことは，また盛りぐいといって，ご飯を箸でかためて食べることや，犬ぐいといって口で音をさせて食べることや，さぐりばしといっておかずをまぜくり，ほぜくり出して食べることや，人の膳をのぞいたりすることであった。

I．食事中のあいさつはしなかった。食べはじめに茶わんと箸を持ち上げて，ちょっと頭を下げてから食べたぐらいであった。

J．話はみんなでした。近所であったことや，学校であったことの話などが多かった。

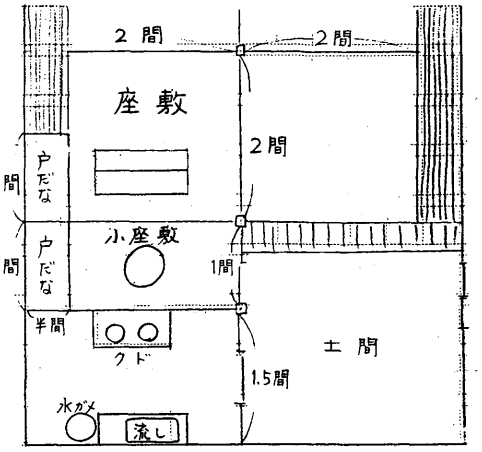


図226

2．飯台の時期

A．大正12年に結婚をしてから，昭和44年に家を建て直すまでである。家族構成は，被調査者，義祖父，義母，夫，義妹，そして子供が4人である。のちに被調査者，夫，子供2人，嫁，孫という家族構成になった。住所は鳥取県米子市Sで農業地帯である。戸主の職業は農業である。食事の形式が変化したのは，結婚して他の家へ入ったからである。2つの飯台をくっつけ，後には丸い飯台を囲んで家族で食事をしており，呼び方などなかった。

B．流しのところは「台所」と呼び，それより一段高い所を「小座敷」，もう一段高い所を「座敷」と呼ぶ（図226）。始めは座敷で食事をしていたが，嫁を2人もらってからは，下の小座敷で食べるようになった。座敷でも小座敷でも，夜には人が寝た。座敷は2間2間くらいで，奥行半間横幅1間ほどの戸だながあった。小座敷は1間2間くらいで同じような戸だながあった。台所にはクド，流し，水ガメがあった。

C．座敷は畳，小座敷は板間でむしろがしいてあり，その上にござがしいてあった。座ぶとんはだれもしておらず，みんなそろって食事をした。初めのころが図227左で，嫁をもらってからが図227右である。

D．朝はつけものと味噌汁，味噌など，昼，夜は野菜の煮たものなどを食べていた。魚などはときどきしか食べられなかった。皆同じものを食べていた。

E．ご飯の給仕をしたのは，座敷のときは，義祖父だけは義母がよそった。あとの人には被調査者がよそった。よそう順序は，義祖父，夫，（義妹），子供，義母，被調査者であった。晩しゃ

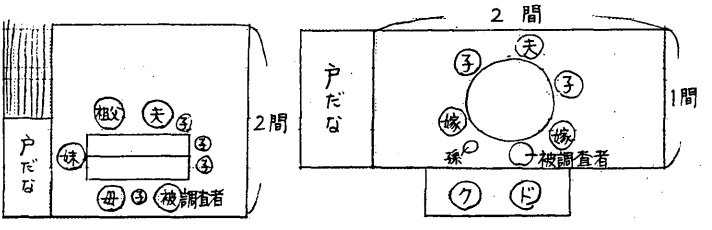


図227

くは毎晩，義祖父が少しずつしていた。義祖父が死に，義妹が嫁に行き，子供1人に嫁が来てからは，その嫁の夫子供には嫁が，あとの人には被調査者が給仕をした。もう1人の子供が嫁をもらってからは小座敷に移り，嫁2人と被調査者でご飯の給仕をした。お供えは，仏さんには毎月の命日にご飯を供えた。神さんには，祭や彼岸，正月にお供えをした。

F．箸はお茶でゆすいでしまった。皿におかずが残っている時は，そのまま戸だなにしまった。食事が終わるとすぐ，被調査者が食器をさげて洗った。洗った食器は小座敷に運び，義母がふきんでふき戸だなにしまった。火がえの日には，なべ，かま，すべて洗い，箸も洗った。

G．共用の食器には皿などがあり，つけもの，味噌などが盛ってあった。箸箱は，飯台になってから使い始め，今でも使っている。

H．食事中は，男性も女性も正座をしていた。おしゃべりはしても良かった。特別そうしろと言われたわけでもないが，祖父，夫など，年長の男性が箸をとってからあとの人も箸をとったものだ。食事中には，やはり，犬ぐい，また盛りぐい，さぐりばしなどはするものではなかった。女性は，特に被調査者は嫁として，みんなのあとからすわって，早く食べてしまわなければならなかった。

I．食事中のあいさつは別に何もしなかった。

J．食事中に，話はだれもが同じようにした。世間話，村であったことなどの話が多かった。

3．椅子式テーブルの時期

A．昭和44年に家を建て直してから約5年の間である。家族構成は，被調査者，夫，子供1人，その嫁，孫2人である。住所は鳥取県米子市Sで，農業地帯である。戸主の職業は農業である。食事の形式が変化したのは，家を建て直し，台所を改善したためである。家族で一つのテーブルを囲んで食事をしており，特別，形式の呼び方などなかった。

B．食事をする部屋は「台所」と呼び，食事以外には何も利用しなかった。台所は2間2間ほどの8畳程度で，流し，ガス，冷蔵庫，1間くらいの戸だながある。

C．座席の順番は図228で，みんなそろって食べていた。台所はタイルであった。座ぶとんはしていなかった。

D．朝は味噌汁，つけもの，つくだになどを食べた。昼，晩は，魚，野菜の煮たものなども食べた。特別にちがったものを食べていた者はいなかった。

E．ご飯の給仕は，被調査者と嫁とでやった。よそう順序は特別決まっておらず，早く席についた順ぐらいのものであった。仏さんのお供えは，毎月の命日にご飯を供えた。神さんのお供えは，祭や彼岸，正月などにした。神仏のお供えは被調査者がしていた。晩しゃくはしていなかった。

F．食事を終わると箸はお茶でゆすいで箸箱にしまった。あとの食器のうち，被調査者と夫の食器は，被調査者がすぐはこんで洗った。残りの食器は嫁がはこんで洗った。洗った食器は，流しの横のだいのわんかごにふせて入れておいた。

G．共用の食器にはお皿などがあり，つけものやきんぴらなど野菜の煮たものが盛ってあった。箸箱はイス式テーブルの間はずっとあり，今も使っている。

H．食べる順序など別に決まっておらず，だれからでも気にせず勝手に食べていた。姿勢は別にどうということなく普通の姿勢で，おしゃべりをしてもかまわなかった。箸の上げ下ろしで特別にしてはならないことは何もなかった。その他のことでも食事中にしてはならないことは特別なかった。

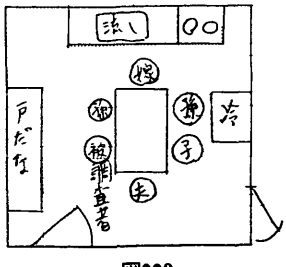


図228

I．食事中のあいさつは何もしなかった。

J．食事中話をしてもかまわなかったのだが，被調査者と夫と，嫁の仲があまり良くなく，話をすればけんかになるため，ほとんどだれも話をしなかった。

4．飯台の時期

A．昭和49年ごろから現在まで，再び飯台になった。家族構成は，これが家族と呼べるものであるならいちおう，被調査者，夫，子，嫁，孫2人であるが，孫のうち1人は大学生で家にはほとんどいない。住所は鳥取県米子市Sで農業地帯である。戸主の職業は農業である。食事の形式が変化したのは，被調査者と夫と，嫁の関係がうまく行かなくなり，嫁が食事を作って食べさせなくなったため，台所を別に作り，別々に食事をするようになったためである。形式の呼び方はない。

B．食事をする部屋は「台所」と呼び，食事以外には何も利用していない。台所はほんの2畳半ほどで2人にしても大変せまい。戸だな，冷蔵庫，流し，ガスがある。

C．被調査者と夫は図229で，板の間にカーペットをしき，座ぶとんをしている。子供とその嫁は，前の台所で図230のようにすわって食事をしている。あとの2人の孫は，自分のそれぞれの部屋で，勝手に食事をしている。このように，単に食事をする時間がちがうためみんながそろって食事ができないというのではなく，まったくそれぞれちがった場所で，台所まで別々に食事をしている。が，被調査者と夫はいつもいっしょに食事をしている。

D．朝は味噌汁，つけものなどを食べ，牛乳を飲んだりもする。昼や晩には魚や野菜の煮たものも食べる。豆腐，ほうれん草なども食べるようにしている。食後にはくだものを食べることもある。2人とも同じものを食べている。ほかの人のことはわからないが，孫は，けっこう勝手にインスタント食品などを自分で作って食べているようだ。

E．ご飯の給仕は被調査者がしている。よそう順序はやはり夫からである。お供えは，やはり，仏さんには毎月の命日，神さんには祭や彼岸，正月などにする。晩しゃくはしていない。

F．食べ終わると箸はお茶でゆすいで箸箱にしまってしまうが，ほかの食器はすべて，すぐに被調査者がはこんで洗ってしまう。洗った食器は流しの横のわんかごにふせておく。

G．共用の食器にはやはり皿があり，つけものや煮豆などが盛ってある。箸箱は被調査者が嫁に来た時から今までずっとある。

H．食事を食べる順序など決まっているわけでもないが，2人しかいないので，まあ夫が箸をとってから被調査者も食べている。姿勢も適当に楽にすわって，おしゃべりもしながら食事をしている。食事中にしてはならないことなど別にない。

I．食事中のあいさつも，やはり別に何もしていない。

J．食事中は被調査者がよく話をし，近所であったことを話したり，夫の耳があまりよく聞こえ

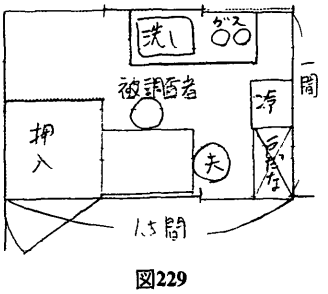


図229

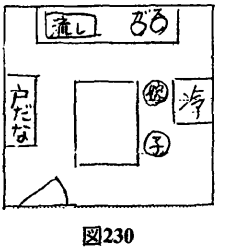


図230

ないので，テレビでやっていたことを説明したりすることが多い。

調査者　No. 261(m)	調査日　昭和58年8月17日(水曜日)
被調査者　S.T.　性別　m	出生年　明治36年(79歳)
出生地　京都府綾部市N町	
生家の職業　農業	
現住所　京都府綾部市N町	
住所の変更とその年度	
最終学歴　尋常小学校6年	結婚　大正14年(22歳)
被調査者との関係　祖母	

1．銘々膳の時期

A．食事の形式と家庭環境について

祖母の生まれた明治36年頃，私たちが現在住んでいるところは，市・町の地域区分がなされていなかった頃で，“京都府向鹿（いかるが）郡M村”という名でよばれていました。当時も現在と同じように田畑が山で囲まれた典型的な農村で，どの家庭でも自給自足とわずかの貯えができる程度の小規模農業を営んでいました。また現在では全くみることのなくなった養蚕業もその頃多くの家庭で行われていました。我家でも当時祖母とその父母・祖父母の5人の家族がいて，農業・養蚕業により生活をたてていました。

いつ頃始まったか定かでないのですが，祖母が生まれた頃，我家ではすでに“箱膳”の形式で食事がなされていました。箱の中には図231のような配置でお茶碗・お箸・おてしょう（小皿）の3つの食器が並べてあり，食べる時には箱のふたを裏返しにして下箱の上に置き，それを台にして使って食べていました。箱膳は各自の前に置かれ，ごはん籠・漬け物皿・料理鉢等を囲むように座りました。そしてめいめいの好きなものを好きなだけおてしょうに分け取り食べていたのでした。ちなみに外来のお客様に対しては，“お膳”とよばれる4本足のついた膳でもてなしていたそうです。

昭和の中頃になると，以前の古い住所のよび名も改められ現在の“京都府綾部市N町”とされていました。また生活のいろんな面でも以前と比べて変化していて，父は会社勤めを始め，そのかたわら家族といっしょに百姓仕事をするといった兼業農家として生活するようになりました。村全体の農業も，土地の整備拡張により規模が拡大し，またわずかながら林業も行われていました。

同様に家庭内の食事生活においても変化がみられ，両親が結婚した昭和34年を契機に古くなりつつあった“箱膳”の習慣が改められ，変わって“飯台”が使われるようになりました。我家の飯台はただ単に食器を並べるだけでなく，底の深い引き出しが備えつけてあり，箱膳的な役目も果たしていました。引き出しのなかには箱膳同様にお茶碗・お箸・おてしょうなどが2人分入れてあり（図232），食べる時には飯台の上に出して使いました。

飯台の中央にはやかん・漬け物皿・調味料他数品の料理が鉢に入れておいてあり，その飯台の周りを家族6人（祖父母・父母・姉・私）が正座の姿勢で取り囲んで食事をしました。冬の寒い日には，部屋の中央にある堀ごたつに移動して食べたこともありました。

百年近くもの間，建ち続けてきた我家も家屋の老朽化などで数年ほど前から改築が行われ始めました。それまでの台所は，料理を作るだけの場所だったのですが，改築に伴い昭和55年食卓と台所を兼ね備えたダイニングルームが新たに造られました。そのことによって我家の食卓も“飯台”から“テーブル”へと変わり現在に至っています。テーブルの様子は飯台のときとたいして変わりなく，以前と同じ様なものが並べてありました。そして以前と同じ家族6人が

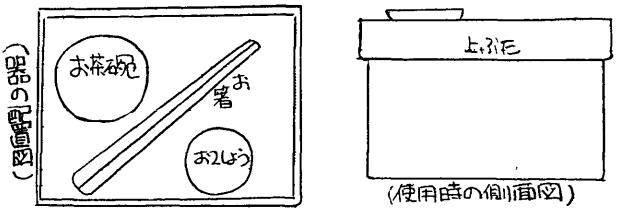


図231

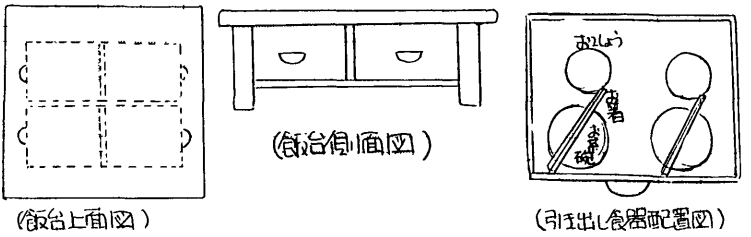


図232

テーブルを囲んで食事をする毎日です。

B．食事をする部屋について

箱膳を使っていた頃は，“座敷（ざしき）”とよばれる居間で食事をしました。この部屋はタタミ8畳の広さがあり，食事時には箱膳が並べられ，終ると家族のだんらんの場として使われました。明治末の頃なので部屋のなかには今のように多くの家具もなく，部屋のすみに食器棚それと冬になると中央に囲炉裏が作られる程度の簡素な部屋でした。

飯台の時期となっても座敷とよばれる部屋で食事をしました。飯台は食事時以外は邪魔にならないよう部屋のすみに寄せられていました。部屋のなかには他にタンス・テレビがあり，そしていつの頃からか部屋のまん中には堀りごたつがつくられていました。冬はみんなでこたつにあたり，夏はタタミの上に寝そべりながらテレビをみたり会話をしたり，我家ではこの部屋ひとつでくつろぎの時間を過ごしました。

テーブルの時期になると食卓専用の独立した部屋がつくられたため，それまで使っていた座敷は憩いの場としてのみ使われるようになりました。“台所”とよんでいる新しい部屋には流し台・テーブル・水屋・冷蔵庫が全ておかれていて5畳ほどの広さをもつ今にあっては大き目の部屋だと思います。

C．どのような座り方で食べたか

座席においては「戸主が上座（かみざ）とよばれる上手の席に座る」ということが3つ時期を通して共通していて，戸主以外の者には決まりはなく，ただ習慣として図233のような座り方をしていました。

座布団についても決められた使用者はいなく，寒さに応じて個人で好き勝手に使っていました。

食べる場所については，箱膳の時代は座敷といっても今のようにタタミが入っているわけでなく，板間の上にござのようなものを敷いただけの粗末なものでした。しかしこの時代には食事は家族そろっていっしょに食べるという良い習慣が守られていました。飯台が使われ始める頃には，すでにタタミが入れられていましたが，テレビの出現や，農機具・照明器具の導入に

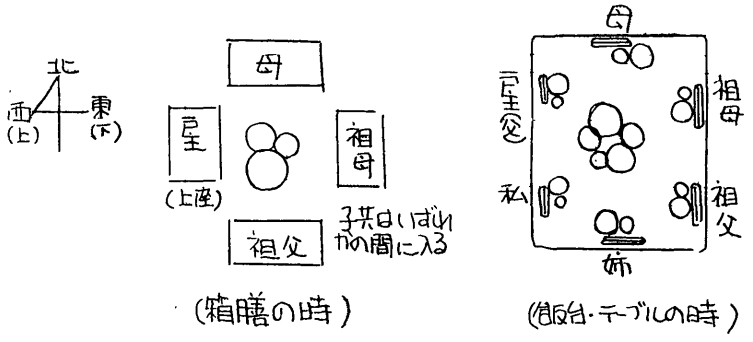


図233

よる夜遅くまでの百姓仕事などのため前記の習慣は乱れるようになりました。テーブルの頃になると以前に加えて会社の残業・交代勤務・学校からの帰りが遅いなどで一家そろって食べる機会はほとんどみられなくなりました。

D．ご飯の他に何を食べ何を飲んでいたか

家業が農業であるため我家では昔からご飯に野菜というパターンがほとんどでした。ご飯といっても昔は白米に麦を混ぜた麦飯が主食でした。米の収穫がわるいときなどは，わずかのご飯に大根のたくさん入った“大根めし”といったものを食べることが時々ありました。

第二次大戦が始まると，収穫した米は戦争物資として供出させられ，食生活はきびしいものになりました。この頃には大根めしが主食となり，麦の収穫期の夏になると麦のたくさん入った麦飯を食べることができるのでした。大根めしといってもご飯の少ない分をかぶらや菜っ葉・サツマイモ・カモチャなどの野菜で補うため，雑炊の質を悪くしたような粗末なものでした。

戦争が終っても，食べるものは戦前の麦飯で，白米だけのご飯を食べるようになったのは昭和45年の頃からでした。

食生活も豊かになると，うどん・そば・ラーメンなどの麺類やお好み焼きなども料理に取り入れられるようになりました。間食として昔はイモの焼いたものやソラマメのいったものを，今ではお菓子・ケーキ・ジュースなどいろんなものが食されています。

E．食事のときのご飯の給仕について

箱膳のときは，ごはん籠がみんなの真ん中に置いてあったので各自で好きなときに好きなだけよそい，特に決められた人がよそうといったことはありませんでした。飯台・テーブルの頃は，母がごはん籠・電子ジャーの近くにいてみんなのご飯をよそってくれました。

よそう順番についても特に決められていなく，席についた者からよそっていきました。お腹がすいて待ちきれないものは，自分でよそい先に食べることもありました。

晩しゃくについては，昔は生活にあまりゆとりがなくできなかったのですが，飯台になった頃からは，父や祖父時々は母や祖母もいっしょになってビールやお酒を飲むことがありました。

神仏へのお供えは昔も今も仏さんには毎日お茶とご飯が，お盆とお正月には果物やお餅，お寿司などがお供えされました。

F．食事のあとかたずけについて

箱膳の頃は湯飲み茶碗を使っていなかったので，ご飯を食べた後は，お茶碗でお茶を飲んでいました。このことはお茶を飲むと同時に，使ったお茶碗をきれいにするためでもありました。

使い終った食器は水で洗わず，お茶でゆすいだままの状態で再び箱膳のなかにもどされ，母あるいは祖母によってもとあったあみ棚にかたずけられるのでした。

飯台が使われる様になっても同様で使ったお茶碗は自分でゆすいで引き出しのなかへ入れてかたずけるのでした。しかしこの頃になると油物の料理がつくられるようになったので，おてしょうは一度さげて水洗いするようになりました。飯台の上に並べてあるものは，生物は冷蔵庫へ，残りのものは飯台の上に整理しておいてその上からあみでできた覆いをかぶせておくのでした。

テーブルになると，お茶碗もお箸もおてしょうもその都度洗うようになり，そのためか，お茶碗でお茶をのむことも少なくなりました。

後片付けについては，テーブルだと箱膳や飯台のときのように食後のだんらんに邪魔になるので早く片付けるといった必要がなくなり，以前と比べてのんびりと気の向いたときにされるようになりました。食器をさげるときは，祖母が自分と祖父の分を，それ以外のものは母がさげるのがだいたいでしたが，これも決っていることではなく，時々は自分でさげて水おけにつけるといったこともありました。食器洗いも主に母の仕事でしたが，時々祖母や姉がすることもありました。洗った食器は水切りケースに入れられ，時々しか使わない共用の食器はふきんでふいて水屋にかたずけられました。

G．食器の共用について

昔はご飯のおかずといってもそんなに種類があったわけでなく漬けものの他に2・3種類並べられる程度でした。それもきまって野菜の煮ものや生野菜といったものがほとんどでした。それが大皿や鉢に入れて並べられていました。

飯台・テーブルの頃になるとおかずの種類も豊富になり魚や肉料理なども作られるようになりました。それに伴い食器の数も増え，また料理に見合った食器（中華風の鉢・洋皿等）も使われるようになりました。我家の食卓の共用の食器には，家族みんなで箸をつける大きな食器の他2人1組で使う中位の皿と2通りのものがあります。これはおかずが家族の人数分だけ作られているときや，一回の食事で食べ切れる程度の量のおかずが出るときに使われ，私と姉・父母・祖父母の3組に分かれて使っています。

H．食事中にしてはならないことについて

食事中は特にきびしくいわれるようなことはなく，かといって口を開けて食べたり，ものをかみながらしゃべるといった下品な者もいませんでした。むしろ食事中のおしゃべりなどは，沈黙のなかで食べるよりにぎやかな方がたのしいという理由でだれとなく無意識のうちに口を開いているものでした。ただ自分自身の体験としてあぐらをかいたり，テレビをみるためにうしろを向きながら食べたり，食事中にかかわらず貧乏ゆすりをしたときなどはよく母にしかられたものでした。

I．食事中のあいさつについて

昔は食事の前後にみんなであいさつをしていたのですが，みんなそろって食べることがなくなり始めると，いつしかあいさつもいわなくなってしまいました。ただ祖父母の2人だけは天理教信仰者ということもあって，今でも食事の前後には手を合わせて小さな声であいさつをしています。

J．食事中の話題について

食事中にはだれとなくめいめいに好き勝手なはなしをしていましたが，昔は今の祖母の亡くなった母が性格上よくしゃべっていました。今では主に母がしゃべり出す方で，それに合わせて他の者もよく口をはさむといった具合にみんながみんなよくしゃべり，家ではにぎやかな食

卓の時間となっています。話題は昔も今も変わりなく百姓仕事の話や町内でのうわさばなし，その日会社や学校であったことなどの話が交わされています。

調査者　No. 272(f)	調査日　昭和58年8月12日(金曜日)
被調査者　A.K.　　性別　m	出生年　明治41年(75歳)
出生地　福井県吉田郡M村	
生家の職業　大工・機織	
現住所　福井県吉田郡M町	
住所の変更とその年度	
最終学歴　(旧制)小学校	結婚　昭和6年(25歳)
被調査者との関係　祖父	

A．食事の形式は図234の通りである。

主食は戦前や戦後直後は麦飯やいもがゆが多く副食は少なかった。戦後おちついた頃から主食には米のはいった麦飯に裏の川でつった魚を副食にした。そして現在，主食は米，副食には肉や魚，煮物等が主でみそ汁やあっさりした，あえ物なども出るようになった。

これを何と呼んでいるかはわからないが，昔から今もこの形式は続いている。家や土地によって違うらしい。なぜ残っているのかと聞くと，これが一番食べやすいし，(右ききの人は)茶わんなども持ち上げやすい位置におかれ，お茶の位置は子供がこぼしにくい。そして形式を定めると自分のものかどうかがはっきりして子供らは食べ忘れるということがないからであると言った。

次に家族構成だが，大正期は親2人と自分を入れて兄弟5人だったが昭和にはいって妻と子供6人になった。みんな貧しかったので使用人などいなかった。

その頃の住所は福井県吉田郡は同じだが，大正では「M村」となり昭和の戦後「M町」になった。

住宅環境は大正から戦後まで農村だった。現在は畑や田んぼも減少して住宅地に変化し，木だけで出来ているいえも建て変え，減った。ちなみに被調査者の家は大工だったので，今も長持ちしている。

戸主の職業は，大工だった。長男が成人してから大工を一緒にやっていたが，不景気になり(田舎で家を建て直す所など限られていたから)，昔から福井は綿絹織物が盛んだったので機織(はた)も始めた。しだいに機場(はたば)では機械をとり入れるようになり，速く大量の織物を作ることが出来た。現在では織物では生活して行けなくなったので，長男以外は機場をやめて，福井市内で働くようになり，三男だけ中学卒業して後，大阪へ一人で働くようになった。

今，戸主は末っ子五男と暮し，五男に養ってもらってて仕事はしていない。時々長男の機場の様子を見に行くぐらいである。

話は戻り，食事の形式が変化したとすればとあるが，ほとんど変化していない。しかし形が変わるのはテーブルになると狭いので一皿にまとめたり，置き場所(みそ汁や小さな小ばちの)が変わるせいだと思う。

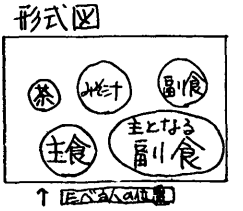


図234

B．食事をする部屋についてだが，お膳やちゃぶ台の時期は「いろり端(ばた)」と言ったが，現在オイルショック以後は「台所」と言う。向い側に洋風の家が立ったが，その家の人は，ちなみにダイニングとか言う耳なれないことを言うらしい。その部屋は食事以外では使用しない。しいて言うならば，漬け物の作業場になったり，この家伝統の押し寿司を7月中旬から8月上旬までに作るための大作業場とな

るぐらいである。情景は，他の部屋との境目がなく，だいたい食事するのに使う広さは，8畳ぐらいにみずや（茶ダンスのこと）があったぐらいである。部屋・廊下も続いていた。

C．すわり方について。座席の順番は，図235のようである。長男はいつも戸主の隣で，長女や妻は調理場に近い所に座った。このことからわかるが，食事の準備は妻と長女が必ずしていたことがはっきりしている。

客が来た時は一番入口に近い席になった（図236）。みんなそろっては食べたが，妻は戸主が食べ終わる頃に食べ始めた。魚などは出来た順に出していったし，次々におかわりがあるので食べ始めが遅い。これは昔から今も家族が多いので変化はない。食べる所は，大正～戦後直後は板間で後に何枚か畳をひいた。座ぶとんは，みんな使っていたがそれぞれ自分らのが決まっていた。主人はやはり一番大きくて厚いものを敷いていた。現在，買いかえたのでみんな同じものである。

D．ご飯の他には，何を食べ，何を飲んでいたか。他のものは，あまり食べなかった。おやつに団子じるやいもを食べた。現在ではくだものやとうもろこしを食べたりすることもある。飲み物はいつも番茶の熱いもので，主人は晩だけ酒を飲んでゆっくり食事をした。

特別に主人や長男が違ったものを食べるということはなかったが，量がいくらか違った。主人が一番多く，長男は次に多く，あとは同じ量だった。子供が小さかった頃は，主人や長男が食べた後，残りものを妻が食べていた。

現在は残りものは捨てる。それだけ食べ物が豊富になってきたし，息子嫁はいやがるからである。

E．ご飯の給仕について。妻か長女がほとんどよそい，父・長男・子供ら・長女・妻の順だった。客がいる時は，父，長男をついでから客だった。客の身分にもよる。しかし，主人より目上の客なら主人の次か主人の前になるが，普段目上の客は来ない。目上に用があるならこちらから出向いていくのが普通だったからだ。神仏へのお供えは，初飯を供え用の茶わんに盛って供えた。夜，その飯を下げて茶漬けにして食べた。

晩しゃくはあった。主人だけ。毎晩あったと思う。現在は，ビールに変わって来ている。安いし手間がかからない。けれど冬は，やっぱり酒である。酒も妻が用意をし，妻は夫が起きる前から働き，夫が寝るまで働き続けた。風呂は現在もまきをくべているので湯かげんを一定にするのはとても難しく時間がかかる。夫が帰るまでにはきちんとしておかなければならなかった。

F．食事のあとかたづけについて

食べおえた茶わんはすぐにあらった。1つでも茶わんがあいたらすぐあらっていた。現在は，油ものなどもあるので，しばらく（流しの）水につけておく。食べた後の箸は，湯茶でゆすいだ。口の中も湯茶でブクブクとやって飲んでいた。現在，息子夫婦や孫はやらないが，箸をゆすぐのだけは，みんなする。

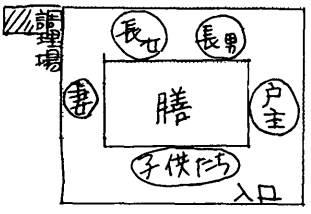


図235

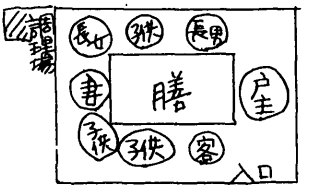


図236

食器を下げるのも洗うのも妻か長女だった。妻か長女が洗ってどちらかが茶わんをふいて，しまった。しまう所は，大体「みずや」だった。現在は，妻より嫁が洗うのが多く，洗った後しばらく水を切るために“めご”の中に入れたまま放っておく。それからかるくふいて「みずや」へ入れる。（大阪では「みずや」というが福井で何というのかと聞くとわからないといって，ここでは「これ」とか茶わん入れる所とか言えば通じると言われた。）

図237

G．食器の共用について

共用の食器は大ざら等であるが，あまり利用しない。現在では客が来たとき，まん中に盛ったりするがほとんど使わない。みなで共用する食器は1つずつの物を共用していた。

たとえば茶わんや箸は決まっていたが，副食用の皿は決まっていなかったので，皆で使っていた。現在もそうで，茶わん，箸以外は共用である。

箸箱は，昔から現在も使っていない。けれども，前述したように大工だったので膳も自家製のものを使用している。その膳は，それぞれの席に引き出しがついており，その中に茶わんと箸を入れていた（図237）。もちろん，図に記した部分には引き出しはない。この膳は，現在もずっと大切に使われている。

H．食事中にしてはならないこと

箸の上げ下ろしでカチャカチャ音をたててはいけないし，箸を持ったまま湯のみやみそ汁わんを持ち上げてはいけなかった。

食べる順序は別にないが，とにかく残してはいけない。魚では背骨以外は食べなければならなかった。息子に嫁が来てからなくなった。食事中のおしゃべりは絶対禁止で，とにかく一生懸命食べることを教えられた。

食事中の姿勢は，父親はあぐらで子供と妻は正座だった。子供たちは男だけ高校ぐらいの年齢からあぐらだった。現在では，おしゃべりは孫が母親に少しかけるだけで，絶対いけないこともないようになってきた。姿勢は，女と孫だけ正座で主人や息子はあぐらである。孫も正座しないと膳にとどきにくいし，まだ安定しないのでバラバラこぼすからであった。

その他，食事中にしてはならないことは，途中で立ったり，トイレに行ったりすること。これは，今も昔も変わりはない。それに田舎や都会でも変わらないだろうと思う。

I．食事のあいさつについて

親指と人指し指の間に箸を横にしてはさみ，そのまま両手を合わせて，「いただきます」と言って食べ始め，食べ終わった後は箸をおいて「ごちそうさまでした」と言った。現在は，箸をおいて「いただきます」と「ごちそうさま」である。

J．食事中の話題について

昔は，誰も何も話してはいけなかった。現在は話題のあるものが静かに話す程度であり，何の話題とあまり一定していない。

話はさかのぼるが，C．の座席順のことについての現在を書き忘れたので述べる。現在は座席は別に決まっていない。けれども妻・嫁はどうしても最後まで料理でばたばたするので調理場に近い方になってしまう。

調査者　No. 284(m)	調査日　昭和58年 8 月30日(火曜日)
被調査者　N.H.　　性別　f	出生年　明治32年(84歳)(第 1 子)
出生地　滋賀県彦根市K町	
生家の職業　さし物屋	
現住所　滋賀県神埼郡N町	
住所の変更とその年度　昭和17年に現住所となる	
最終学歴　H技芸女学校	結婚　大正13年(24歳)
被調査者との関係　祖母	

1．お膳（箱膳など）の時代

A．食事の形式と家庭環境について

うちでは，この時代，「箱膳」というものを使っており，お膳には，図238のような配置で，各器(うつわ)が置かれていた。この時代は，おばあさんが嫁に来た大正末期以前からであり，昭和 3，4 年ごろまで続いたそうだ。当時の家族構成は，本人であるおばあちゃん，その夫であるおじいちゃん，そして弟子（うちは禅寺であるから）が 2 人いた。ひとりは大正の終りごろ，もうひとりは，昭和の最初にうちに来た。

当時の住所は，滋賀県神埼郡H村と言い，完全に農村だった。先に述べたように，禅宗寺院であったから，当然，戸主であるおじいちゃんは僧侶であった。

食事の形式が変化した理由は，簡単にするためであったと考えられる。まわりの家も変化していたためもあるようだ。

B．食事をする部屋について

当時食事をしていた部屋は，今でも古いままの形で残っていて，「台所」と呼んでいたし，今でもそうだ。玄関をはいると，大きなたたきの庭があり，その正面の部屋がそうだ。「台所」と呼ぶが，普通の八畳間だ。そのとなりには，“おくどさん”と呼ぶかまどがあって，ここが本当の台所であった。食事をしていたこの“台所”には，箱火鉢があったそうだ。調度といっても，戸棚が二つあり，片方には，湯飲み茶碗（客用）や，お盆等がしまってあり，もうひとつは，韋駄天神様を祭ってある下にあり，そこに，箱膳はしまった。檀家の人が来たりすると，この部屋にあがらせて，話したりしたそうである。

C．どのような座り方で食べたか

座席順は図239のようになっていた。おじいちゃんが，夜，お参りに出かけている時以外は，みんなそろって食べたそうだ。食べる場所は，畳の上に上敷(うわしき)が敷いてあり，全員，座ぶとんを

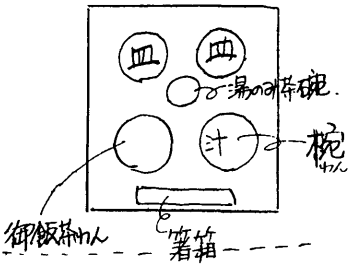


図238

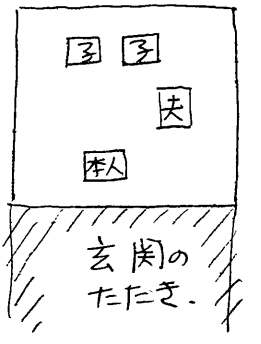


図239

ひいていた。

D．ご飯の他には，何を食べ，何を飲んでいたか

朝食は，みそ汁とおかず（無い時もある）と，お漬物とお茶で，昼は，子供たちは学校へ行っているし，おじいちゃんもいないことが多かったので，おばあちゃんひとりだけということもあってか，おかず（無い時もある）と，お漬物にお茶だった。御飯は，朝に供えた，“おぶくさん”（＝御仏飯がなまったと思われる）を食べた。

夕食は，おかずに野菜物が多く，時折，魚などを食べる時もあった。当然，お茶も飲む。

三食とも質素だったそうで，だれか特別にちがったものを食べるということはなかった。

E．食事の時の御飯の給仕について

御飯は，本人であるおばあちゃんが給仕をして，順序は，夫，子供，自分の順だった。先に述べたように，仏様へのお供えは，朝食前に供えて，昼に食べ，また，はつものの野菜や，めずらしいものは供えた。晩しゃくは，誰もしなかった。

F．食事のあとかたずけについて

食後，おじいちゃんは僧堂時代の習慣で，茶碗などを茶でゆすいだ。他は，おばあちゃんや子供がさげて，洗った。洗った後，箱膳に入れて前出の戸棚にしまった。

G．食器の共用について

おかず用の皿は，だれの皿とは決まっていなかった。箸箱は，お膳時代から，飯台時代の中ごろまで使った。特に，おじいちゃんは最後まで使っていた。

H．食事中してはならないことについて

箸から箸へわたすことはだめであった（現在もそうである）。食べる順序については，みそ汁が一番，そして御飯，おかずという順序であった。また，三黙堂（食堂・浴室・禅堂では，沈黙を保つこと）のひとつとして，食事中は，いっさい話してはならなかった。そして，食事は正座して行い，姿勢をくずしてはならなかった。

I．食事中のあいさつについて

食べはじめは，合掌して「いただきます」，食べおわったら，合掌して「ごちそうさま」。

J．食事中の話題について

先にも述べたように，食事中は話さない。食後は，みんなで，今日あったことなどの，世間話をした。

2．ちゃぶ台（しっぽく台，飯台など）の時期

A．この時代の場合は，二つに分けられる。食事をする場所が移動したためである。そのことは後で述べる。食卓のようすは図240のようである。「飯台」と呼ばれていたテーブルの上で食事をした。中央の盛り鉢には，おかずがよそってあり，各自が皿にとって食べた。この時期は，昭和の初めから，昭和50年ごろまで続いた。家族は，おばあちゃんにおじいちゃん，そして，箱膳の時期にいた養子はひとり家を出ていて，別にもうひとり養子にやってきていた（僕の父）。それから，この時期の間に，あとひとりの養子も別の寺の住職となり，父は結婚して，僕たちが生まれた。従って，僕たちの小さい頃は，まだ飯台を使って食事をしていた。住所は，神埼郡N町となったが場所は同じである。戸主は，おじいちゃんから父に変わったが，僧侶だった。ただし，父はH大学教員も兼ねた。食事形式が変化したのは，テレビが普及して，家族談らんの

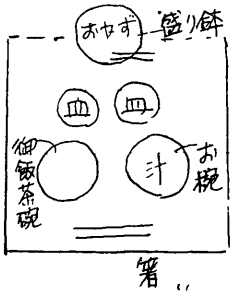


図240

部屋が変化したのと，後にテーブルの時期に変わったのは，かまどがなくなり，そこに新しく台所ができたためである。

B．食事する部屋は先に述べたとおり，この時期に，“台所”から，別の部屋に移った。この部屋を何と呼ぶかは定まっていなかったが，「御飯の部屋」とか，最近では，「テレビの部屋」とか呼んでいる。この部屋は六畳間で，戸棚二つと本棚と押し入れだんすがあり，この時期の最後の頃には，テレビやステレオが置かれた。

C．座席は図241のとおりであり，おじいちゃんが亡くなってからは，図242となった。食事は，おじいちゃんが法事に出かけていたり，父が遅い時があったが，たいてい朝食と夕食はそろって食べたそうだ。部屋は畳で，座ぶとんは全員あった。

D．この頃は，1の時期とさほど変わりないが，孫ができてからは，肉とかも食べるようになったという。

E．母が嫁にきてからは，母が給仕をした。普通よそう順は，おじいちゃん，父，おばあちゃん，母の順だが，僕たちが生まれてからは，孫が一番だったそうだ。仏様へのお供えは，1の時期と何の変化もない。晩しゃくもなし。

F．おじいちゃんは亡くなるまで，お茶で，茶碗等をゆすいでいたそうだが，その後で，他のといっしょに，洗い直すようになった。食事が終わるとすぐ，母やおばあちゃんが，あとかたづけをして，洗った。洗った食器は戸棚にしまった。

G．共用の食器は，皿と，おかずのよそってある盛り鉢ぐらいである。それには，野菜料理や，魚などが盛られた。箸箱は，おじいちゃんのみが使用して，後は，箸たてにたてられた。

H．箸から箸へ食べ物をわたすことは，だめで，食べる順序は，決められていなかった。食事中のおしゃべりも，少しずつ柔らいで，僕たちが生まれた時には，話していたそうだ。食べる時の姿勢は，やはり正座であった。その他，テレビが置かれてからは，食事中，テレビを見ることは，許されなかった。

I．食前，食後のあいさつは，1の時期と同じであった。

J．食事中のおしゃべりが許されてからは，みんな話していた。世間話が多かったようである。

3．現在（椅子式テーブル）の時期

—この時期については，2の時期と類似している所が多いので，異なる点のみ記述する。

A．この時期は，かまどが取り払われ，新しい台所ができた昭和50年からはじまる。家族構成は，おばあちゃん，父，母，僕，妹二人の6名である。住所は変化しないが，あたりは住宅地化してきた。京都・大阪のベッドタウン化してきたわけである。

B．食事する部屋は「台所」と呼び，その部屋は食事と，十時や三時の休憩に利用している。そ

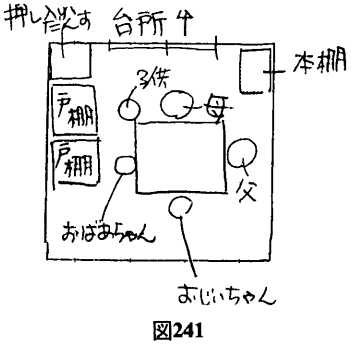


図241

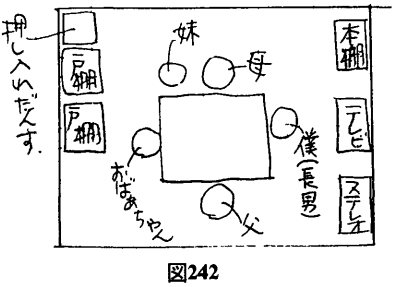


図242

の部屋には，テーブルの他に，戸棚が五つ，冷蔵庫，流し台等があり，大きさは，約八畳の長方形の部屋である。

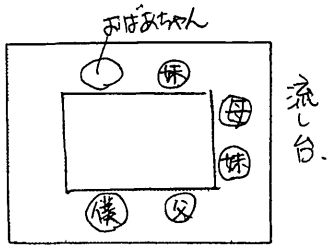


図243

C．座席は図243のとおりである。この時期になると，朝食は，ばらばらにとり，昼食も夕食も，うちにいる者は，そろって食べた。食べる場所は板の間で，冬になるとカーペットを敷く。

D．たいてい同じだが，夕食はだいぶ豪華になった。朝食は，僕や妹はパンと牛乳ですませるようになった。

E．給仕は母がして，順序は，父，僕，下の妹，おばあちゃん，上の妹，母の順である。晩しゃくは，父が毎晩する。

F．食後，茶碗等を茶でゆすぐことは，しなくなった。母や，妹が後かたずけをして，洗うのは，特に母がしている。洗った食器は戸棚へしまった。

G．2の時期と変化なし。箸箱はもうだれも使わない。

H．食事中の姿勢は，椅子にこしかけているが，ひどい姿勢は許されない。おばあちゃんや，父は，椅子の上で座る場合もある。

I．食前，食後のあいさつは，だいぶ怠慢になった。

J．みんな，いろいろなことを食事中に話す。世間話（学校の話も含む）や，父の説教じみた話も時々ある。